

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
商学原理特殊研究	4 単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
出家健治 (でいえ けんじ)	通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
これまでの商業理論の研究成果を踏まえながら、商業論の原理研究、とくに森下理論をベースに理論的に整理し、現代の流通における商業理論研究の見直しを目的とする。つまり、この講義を通して近年軽視されがちな商業に視点をおいて、いまだなお流通において重要な位置を占めている商業の役割を理論レベルで再認識することができるようになることを到達目標とする。	
<b>授業の概要</b>	
現代流通における商業の理論的なあり方を、森下理論をベースに再考察するという視点にたち、一般的な商業理論、歴史的な商業理論、そして現代の小売主導型流通システムを支えている商業の理論を考察する。	
<b>授業計画</b>	
春学期	秋学期
<b>0.はじめに—流通と商業について考える</b>	<b>第III編 商業の歴史的理論その(1)一商業の売買の集中の原理の歴史的な形成について考える</b>
第1回 講義のガイダンス—流通と商業とマーケティングの違い、商流・物流・情報流通について考える。	第16回 資本主義以前の商業とその理論的な特徴について考える。
<b>第I編 商業の一般的理論—商業の売買の集中の原理の形成について考える</b>	第17回 産業革命と資本主義の確立による前資本主義商業の産業資本への転化について考える。
第2回 流通における売買の困難性・偶然性について考える。	第18回 資本主義と自由競争市場(見えざる手)のメカニズム(価格競争/低価格競争)について考える。
第3回 生産物と商品の違い、商品のもつ使用価値・競争的使用価値・文化的性格について考える。	第19回 商業資本の自立化の形成過程(1)—流通時間と流通費用を考える。
第4回 商品の価値・交換価値、労働の2重性、そして市場について考える。	第20回 商業資本の自立化の形成過程(2)—流通時間と流通費用の一般的利潤率を考える。
第5回 もっとも古い交換(物々交換)について考える。	第21回 商業資本の自立化の形成過程(3)—商業資本の自立化過程を考える。
第6回 貨幣とは何かについて考える。	第22回 商業資本の自立化の条と生産者と商業者の分業関係の確立について考える。
第7回 貨幣を媒介とした流通と商品流通の形成について考える。	第23回 商業資本の階層分化(商業資本間競争)について考える。
第8回 販売と購買の形成、販売の困難性について考える。	第24回 商業資本の段階分化(伝統的流通システム)について考える。
第9回 商業の形成と売買の集中の原理について考える。	<b>第IV編 商業の歴史的理論その(2)一商業の売買の集中の原理の制限・否定について考える</b>
第10回 商業利潤と消費者価格について考える。	第25回 自由競争から独占的市場(見える手)への転化について考える。
第11回 売買の集中の原理から業種と商店街について考える。	第26回 市場問題と販売の重要性と、独占的市場の形成と独占価格について考える。
第12回 売買の手中の原理から業態について考える。	第27回 独占的製造企業の水平的競争による垂直的組織化について考える。
<b>第II編 生産と消費について考える</b>	第28回 独占的企業の垂直的組織化とマーケティングについて考える。
第13回 生産と資本主義的商品生産について考える。	<b>第V編 現代商業の理論的特徴—商業の売買の集中の復活を考える</b>
第14回 産業利潤の形成について考える。	第29回 商業独占(独占的な大規模商業の形成)について考える。
第15回 消費(生産的消費と個人的消費)について考える。	第30回 小売主導型流通システムの形成と延期と投機の理論について考える。

## 事前事後学習

前もって講義内容を示し、事後は講義内容の振り返りをおこないまとめを報告する。

## テキスト

とくに使用しない。配布資料でおこなう。

## 参考文献

- 森下二次也(1950)『商業経済論』三笠書房  
森下二次也編(1959)『商業経済論体系』文人書房  
森下二次也(1960)『現代商業経済論』有斐閣  
森下二次也(1974)『現代の流通機構』世界思想社  
森下二次也編(1977)『商業概論』有斐閣  
森下二次也(1993)『商業経済論の体系と展開』千倉書房  
森下二次也(1995)『流通組織の動態』千倉書房  
森下二次也(1993)『マーケティングの方法と体系』千倉書房  
石原武政(1982)『マーケティング競争の構造』  
石原武政・小西一彦編(2015)『流通論パラダイム 風呂勉の世界』碩学舎  
石原武政・石井淳蔵編(1996)『製販統合』日本経済新聞社  
石原武政編(1989)『商業学』有斐閣  
石原武政(2000)『商業組織の内部編成』  
石原武政先生還暦記念論文集(2003)『流通論の透視力』千倉書房  
石原武政・竹村正明編(2008)『1からの流通』碩学舎  
石原武政ほか編(2013)『商学への招待』有斐閣  
石井淳蔵(1996)『商人家族と市場社会』有斐閣  
田村正紀(1971)『マーケティング行動体系論』千倉書房  
田村正紀編(1980)『商業論』有斐閣  
田村正紀(2001)『流通原理』千倉書房  
田村正紀(1996)『マーケティング力 ー大量集中から機動集中へー』千倉書房  
高嶋克義(2002)『現代商業学』有斐閣  
日経流通新聞編(1993)『流通現代史』日本経済新聞社  
原田英生ほか編(2002)『ベーシック流通と商業』有斐閣  
風呂勉(1968)『マーケティングチャネル行動論』千倉書房  
風呂勉先生還暦記念(1991)『現代流通の動態分析』千倉書房  
矢作敏之(1996)『現代流通』有斐閣  
渡辺達朗ほか編(2008)『流通論をつかむ』有斐閣  
渡辺達朗ほか編(2011)『流通チャネル論』有斐閣

## 成績評価

レポート・振り返りノートなどによる総合評価。

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
商学原理特殊研究演習	2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
出家健治（でいえけんじ）	通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
まちづくりと商店街が急務になっている。今日、こうした動きに対応できるような理論的知識を身につけることを目的とする。	
<b>授業の概要</b>	
この特殊研究の演習は、商業の抽象的な理論から現実の具体的理論を把握するために、中間理論の必要性を提唱している石原武政氏の一連の著作を通して研究をする。二年目は、その商業論をベースにまちづくりの理論的研究を行う。	
このテキストを通して、一年次では業種、業態の理論的理解、さらに業種店ゆえに商店街が業種によって形成されること、さらに商店街の論理的理理解から、革新的小売業者が形成され、革新的な業態が形成されることを理解し、二年次ではこれをベースに小売業者の店舗という目線から、内的視線と外的視線にたって、まちづくり・商店街問題を考える。	
<b>授業計画</b>	
1年次	
大阪市立大学商学部編『流通』（有斐閣）を手がかりにまず現実の流通構造の理論的な研究をする。そして石原武政『商業組織の内部編成』（千倉書房）で、商業の現実的な形態を念頭においた中間理論を検討し、現実的な商業の理論的なあり方を指導する。	
これと平行して、修士論文の指導を始める。とりあえずテーマ設定、問題意識の設定、関係論文の検索を行わせ、関係論文を読ませる作業を行う。	
テキストについていえば、	
<春学期>	
大阪市立大学商学部編『流通』（有斐閣）で現実の流通構造の理論的な研究。	
<秋学期>	
石原武政『商業組織の内部編成』（千倉書房）で、業種、商店街、業態の理論的理解をおこなう。	
2年次	
一年次の研究を前提に、引き続き石原武政『小売業の外部性とまちづくり』（有斐閣）を題材にして、商業の理論とまちづくりの理論の接点を研究する。	
<春学期>	
石原武政『小売業の外部性とまちづくり』（有斐閣）を読み、商業の理論とまちづくりの理論研究を行い、事例研究や実態調査を行う。	
<秋学期>	
まちづくりや商店街活性化の事例研究を行い、修士論文の仕上げ指導を行う。	
<b>事前事後学習</b>	
事前に関連文献を読んでおくこと。事後、問題点などの整理をすること。	
<b>テキスト</b>	
大阪市立大学商学部編『流通』有斐閣 2,835円	
石原武政『商業組織の内部編成』千倉書房 3,360円	
石原武政『小売業の外部性とまちづくり』有斐閣 3,780円	
石原武政・西村幸夫編『まちづくりを学ぶ—地域再生の見取り図』有斐閣 2,300円+税	
<b>参考文献</b>	
演習の時に指定する。	
<b>成績評価</b>	
レポートによる総合評価。	

<b>授業科目名</b> マーケティング論特殊研究	<b>単位数</b> <b>4 単位</b>
<b>担当教員名</b> 吉村純一 (よしむら じゅんいち)	<b>開講期間</b> <b>通年</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
マーケティング論において、新しい消費研究の方法と目されている消費文化理論（CCT）の方法について体系的に学び、実践的なマーケティングと消費の分析に用いるための枠組みを獲得することを目標とする。わが国における数少ない CCT 分析にも焦点を当てることにしたい。	
<b>授業の概要</b>	
授業前半では、わが国における消費文化理論（CCT）の先行研究として松井剛氏の文献を読む。授業後半では、消費文化理論に関わる消費分析のためのツールを最新のテキストで学ぶ。いまだわが国において定着していない消費文化理論（CCT）を、実践的に用いるための基本的な枠組みをクラス参加者で獲得することにしたい。	
<b>授業計画</b>	
第1回 解題：CCT 研究とは何か？	第16回 市場に置かれた消費者
第2回 「癒し」ブームの背景（報告と討論）	第17回 買うこと・所有すること・生きること
第3回 「癒し」ブームの背景（関連研究について）	第18回 意思決定者としての消費者
第4回 「癒し」ブームの理論（報告と討論）	第19回 態度と説得
第5回 「癒し」ブームの理論（関連研究について）	第20回 意思決定
第6回 「癒し」ブームの言説（報告と討論）	第21回 購入と処分
第7回 「癒し」ブームの言説（関連研究について）	第22回 組織・家庭における意思決定
第8回 「癒し」をめぐる行動（報告と討論）	第23回 消費者とサブカルチャー
第9回 「癒し」をめぐる行動（関連研究について）	第24回 集団とソーシャルメディア
第10回 「癒し」の意味（報告と討論）	第25回 社会階級とライフスタイル
第11回 「癒し」の意味（関連研究について）	第26回 サブカルチャー
第12回 「癒し」ブームの解釈（報告と討論）	第27回 文化
第13回 「癒し」ブームの解釈（関連研究について）	第28回 ディスカッション（CCTの方法論）
第14回 ディスカッション（「癒し」CCTの可能性）	第29回 ディスカッション（CCTによる事例分析）
第15回 ディスカッション（日本におけるCCT研究）	第30回 ディスカッション（CCTに残されたテーマ）
<b>事前事後学習</b>	
テキストを購入し、予定の回までに議論できるように準備しておく。関連文献・論文にも目を通しておく。	
<b>テキスト</b>	
①松井剛『ことばとマーケティング—「癒し」ブームの消費社会史』碩学舎、2013年 ②ソロモン『消費者行動論 [ハードカバー版]』丸善、2015年	
<b>参考文献</b>	
参加予定者には、参考文献及び論文のリストを配布する。	
<b>成績評価</b>	
報告の状況、レポート、議論への参加状況などを総合的に評価する。	

<b>授業科目名</b> マーケティング論特殊研究演習	<b>単位数</b> <b>2年間を通じて8単位</b>
<b>担当教員名</b> 吉村純一 (よしむら じゅんいち)	<b>開講期間</b> <b>通年</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
修士論文の作成を目標とする。マクロマーケティングおよびポストモダン消費研究をテーマとする。	
<b>授業の概要</b>	
<p>マーケティング主体の実践的行為が社会経済的な環境といかに相互関係するかを考察するのが、マクロマーケティングの研究である。マーケティングを取り巻く環境要因の中でももっとも重視されてきたのが消費の問題であるといえよう。演習では、マーケティングと消費の関係について総合的に検討を加えていく。より具体的には、マクロマーケティング学派およびポストモダン消費研究の業績を読み進めたうえで、より実践的な現代マーケティングの課題にアプローチする。修士論文作成にあたっては、各自の研究テーマに沿って指導するが、ブランドやインターネットマーケティング等の研究に進むことを想定している。</p>	
<b>授業計画</b>	
1年次	
マーケティング研究と消費研究の現段階についての検討	
<春学期>	
マーケティング研究の現状と課題	
<秋学期>	
消費研究の現状と課題	
2年次	
各自テーマの掘り下げと論文作成	
<春学期>	
現代マーケティングと消費に関するテーマの掘り下げと研究方法の確立	
<秋学期>	
ブランドマーケティング、インターネットマーケティング、あるいは現代消費に関連する論文の作成	
<b>事前事後学習</b>	
予定されているテーマについて議論できるように準備しておく。関連文献・論文にも目を通しておく。	
<b>テキスト</b>	
学術論文（和・洋）を用いる。参加者には使用論文のリストを配布する。図書館で複写あるいはインターネット経由でダウンロードして用いる。	
<b>参考文献</b>	
同上	
<b>成績評価</b>	
研究の進展状況、報告および質疑の内容によって総合評価する。	

<b>授業科目名</b> マーケティング・マネジメント論特殊研究	<b>単位数</b> <b>4 単位</b>
<b>担当教員名</b> 北原明彦 (きたはら あきひこ)	<b>開講期間</b> <b>通年</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>製品特性に応じた最適規模のマーケティング企業とブランド政策          マーケティングがアーカー (D.A.Aaker) の『ブランド・ポートフォリオ・マネジメント』において、マスター ブランドを中心にして、ディスクリプターやサブカテゴリなどにより戦略ポートフォリオを構築するブランド戦略を中心とした場合の企業の戦略的組織計画と従来のマーケティング戦略が市場における一貫したイメージを形成し、維持する以上のダイナミックな計画が必要となる。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>今日の日本国内市场では行政的に棚上げにしてきた、非合理的な意思決定が、グローバル基準により加速化し動態化してきた世界市場に国内産業をミスリードしているかのようである。自国製農作物に限らず、あらゆる国内産の生産物を価格競争力の一次元によって、切り捨てるある一部の業者による「意図的に持ち込まれた価格破壊」とはいかなるものかである。日本産業が機械輸出国に偏向している実態の問題点を食糧自給の問題など従来の世界戦略商品といわれた穀物等の需要の激増に対し、どのように応えてゆくのか注目される。</p>	
<b>授業計画</b>	
第1回 現代サブカルチャーのマーケティング	第16回 スタンダード・プロダクト
第2回 環境と人権のグローバル・バリューの時代	第17回 スタイル・プロダクト
第3回 社会規範志向と個人感覚志向の顧客のタイプ	第18回 ファッション・プロダクト
第4回 社会的利益と個人的利益の混在する製品	第19回 ファド・プロダクト
第5回 日本企業のソサエタル化	第20回 マスター ブランドの作り方
第6回 日本企業のソサエタル・グローバル戦略	第21回 サブブランドの拡張
第7回 ホスピタリティー志向のマーケティング	第22回 ファミリーブランド
第8回 規範的満足と感覚的満足	第23回 マルチブランド
第9回 製品ブランド戦略～製品とブランドの境界	第24回 願望マーケティング
第10回 売上の成長性と製品コンセプト	第25回 戦略的同盟志向のマーケティング
第11回 導入期の開拓製品のコア・ベネフィット	第26回 パートナーシップの顧客連携
第12回 成長期のベーシック・プロダクトの発見	第27回 参加体験型ツアーのマーケティング
第13回 成熟期の期待的プロダクト	第28回 イギリス産業社会の遺産と生活環境
第14回 飽和期の拡大的プロダクト	第29回 日本産業社会の遺産と生活環境
第15回 リバイバルする潜在プロダクト	第30回 エコロジカルな将来の実相
<b>事前事後学習</b>	
<p>事前学習として、前回指定した箇所の熟読を指導します。          事後学習として、講義を自らの研究テーマ上の意義についてまとめて下さい。</p>	
<b>テキスト</b>	
北原明彦著 『ソサエタル・マーケティング』 創成社 2008 年	
<b>参考文献</b>	
授業中の配布資料を使用	
<b>成績評価</b>	
授業中の口述試問への返答の内容とレポートの内容の水準	

<b>授業科目名</b> マーケティング・マネジメント論特殊研究演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 北原明彦（きたはら あきひこ）	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>製品特性に応じた最適規模のマーケティング企業とブランド政策 マーケティング戦略が市場における一貫したイメージを形成し、維持する以上のダイナミックな計画が必要となる日本国内市場の動態的変化の予測</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>今日の日本国内市场では行政的に棚上げにしてきた、非合理的な意思決定が、グローバル基準により加速化し動態化してきた世界市場に国内産業をミスリードしているかのようである。自国製農作物に限らず、あらゆる国内産の生産物を価格競争力の一次元によって、切り捨てるある一部の業者による「意図的に持ち込まれた価格破壊」とはいかなるものかである。日本産業が機械輸出国に偏向している実態の問題点を食糧自給の問題など従来の世界戦略商品といわれた穀物等の需要の激増に対し、どのように応えてゆくのか注目される。</p>	
<b>授業計画</b>	
1年次	
<p>&lt;春学期&gt; 現代サブカルチャー／環境と人権のグローバル・バリュー／社会規範志向と個人感覚志向の顧客／社会的利益と個人的利益の混在する製品</p>	
<p>&lt;秋学期&gt; スタンダード・プロダクト／スタイル・プロダクト／ファッショニ・プロダクト／ ファド・プロダクト／マスター・ブランドの作り方／サブ・ブランドの拡張／ファミリー・ブランド／ 日本企業のソサエタル戦略／ホスピタリティー志向のマーケティング</p>	
2年次	
<p>&lt;春学期&gt; 規範的満足と感覚的満足と願望マーケティング／製品・ブランド戦略～製品とブランドの境界について調査を実施する。</p>	
<p>&lt;秋学期&gt; 戦略的同盟志向のマーケティングの観点から論文の中間報告をし、最終的に修士論文を仕上げる。 論文をめぐり議論し、加筆修正する。清書し、製本し、期日内に提出する。</p>	
<b>事前事後学習</b>	
<p>事前学習として、テキストの指定した箇所とその他の資料（二回目以降指示）を熟読すること。 事後学習として、専門用語の復習を、ノート等に記すこと。</p>	
<b>テキスト</b>	
北原明彦著『ソサエタル・マーケティング』創成社 2008年	
<b>参考文献</b>	
授業中の配布資料を使用	
<b>成績評価</b>	
コミュニケーションの結果、適切に合意し修士論文を作成し、研究上の基本的テーマを提起する。	

<b>授業科目名</b> ブランドマーケティング論特殊研究	<b>単位数</b> <b>4 単位</b>
<b>担当教員名</b> 波積真理 (はづみ まり)	<b>開講期間</b> <b>通年</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>消費者ニーズが多様化・高度化する中で標的市場に対して明確なコンセプトを持った製品戦略が必要となっている。こうした中で、「ブランド」として消費者に認知され、競争優位な状況を築くために、ブランドとして製品戦略を含め統合的なマーケティング戦略を実行することが求められている。いまや、あらゆる分野で「ブランド化」が模索されているが、工業製品分野のみならず、サービス、農水産物の分野まで広げて、どのようにブランド化を進めていくのかを、具体的な事例を含めて検証していきます。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>この講義では、まずブランドとは何かということを理論的に学んでいきます。いまや、あらゆる商品・サービスにブランドがつけられ、企業はより強いブランド商品の開発、また企業そのものがブランドになることを目指しています。ブランドは、古代よりそうした活動がみられるにもかかわらず、理論として注目されてきたのは、90 年代になってからです。その背景として、消費の成熟化とともに、ニーズの多様化がみられ、消費者との関係を深めることが重要となってきたことがあります。企業の消費者への約束の象徴としてブランドがあり、商品レベルで企業と消費者をより密接につなごうというのがブランドの役割とされています。ここでは、理論的な考察のみならず、ブランド化の成功実例をケーススタディとして実証的に考察を行います。さらに、企業の立場からブランドの成立を考察するのみでなく、消費者にとってのブランドの意義はどのようなものであるのかもみていきます。</p>	
<b>授業計画</b>	
製品・ブランド戦略と価値創造 第1回 企業成長と価値創造 第2回 戦略的マーケティングの構図 第3回 製品開発の戦略的意義 第4回 ブランド構築の戦略的意義 新製品開発のマーケティング 第5回 なぜ新製品開発なのか 第6回 新製品開発のプロセス 第7回 コモディティ化の進展 第8回 経験価値の訴求 ブランド価値デザイン 第9回 ブランド価値 第10回 ブランドの役割 第11回 ブランドの想起 第12回 ブランドの活用 ブランド要素 第13回 ブランド要素 第14回 ブランド要素と戦略 第15回 ブランド要素の選択と統合	サービスのブランド化 第16回 サービスとブランド 第17回 顧客に対するエクスターナルマーケティング 第18回 従業員に対するインナーマーケティング 第19回 マーケティング活動の統合 ブランドと経験価値 第20回 経験価値とは 第21回 ブランドエクスペリエンスと場 第22回 エクスペリエンスとデザイン 第23回 エクスペリエンスとブランド ブランドと組織 第24回 価値をうみだす仕組み 第25回 知識創造とブランド 第26回 組織とブランド ブランドマネジメント組織の課題 第27回 米国の状況 第28回 日本の状況 第29回 ブランドマネジメント組織の課題 第30回 まとめ
<b>事前事後学習</b>	
指定された文献を事前に読んでおくこと。ケーススタディの対象として指定されたブランド製品について資料収集を行うこと。	
<b>テキスト</b>	
青木幸弘・恩藏直人 『製品・ブランド戦略』 有斐閣アルマ 1,900 円	
<b>参考文献</b>	
石井淳蔵 『ブランド』 岩波書店 735 円 小川孔輔 『ブランド戦略の実際』 日本経済新聞社 872 円 鳥居直隆 『ブランドマーケティング』 ダイヤモンド社 2,447 円 波積真理 『一次産品におけるブランド理論の本質～成立過程の理論的検討と実証的考察』 白桃書房 3,570 円	
<b>成績評価</b>	
平常点と課題（報告レジュメ）で評価します。	

<b>授業科目名</b> ブランドマーケティング論特殊研究演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 波積真理 (はづみ まり)	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
ブランドについての専門的知識を習得し、自らテーマを決めてブランド化についての事例を検証し、論文としてまとめていくことを目的とする。個別ブランド、企業ブランド、地域ブランド、サービスブランドなどブランド化の対象によって、アプローチも異なることから、テーマに沿った、理論的研究、実証研究を行うことを目標としている。	
<b>授業の概要</b>	
近代的な意味でのブランドは、マス・マーケットとともに論じられてきた。ブランドは、供給と需要においてそれを成立させる条件が整い、さらにそれをつなぐ流通の全国的な発達が必要である。日本においても、江戸という巨大都市において一部ブランドが成立していたし、江戸時代の終わりになると、一部商品に限ってではあるが、全国市場に対応してブランドが成立していた。しかし、全土的に、また消費する商品のかなりのウエイトを占める勢いでブランドが成立したのは19世紀後半のアメリカにおいてであり、マス・マーケットという大衆消費市場の成立を背景としている。本演習では、まずブランドの成立条件としてマス・マーケットの成立をとりあげ、検討していきたい。さらに近年におけるブランドは、製品戦略の一部ではなく、独立した学問領域として研究が行われている。まだ、論者によってブランド論は様々なアプローチがみられるが、代表的な論文を取り上げて検討していく。こうした論文研究の基礎を受け、具体的な事例をとりあげ、ブランドの成立条件、戦略についてまとめ、発表することを目的としたい。	
<b>授業計画</b>	
1年次 <春学期> 1. ブランドの成立条件の検討 2. ブランド論のレビュー ブランド・エクイティ・パワーブランド・ブランド・アイデンティティ <秋学期> 事例研究：工業製品のブランド・サービス分野のブランド・農水産物のブランド	
2年次 <春学期> 各自、論文を書くことも目的として演習をすすめていく。 テーマ設定 情報収集・文献整理 <秋学期> 論文作成	
<b>事前事後学習</b>	
春学期は文献を中心に演習をすすめるので指定された文献を事前に読むこと。秋学期は論文作成のための文献収集・整理などの事前・事後学習が必要。	
<b>テキスト</b>	
フィリップ・コトラー 恩賀直人監修 『マーケティング・マネジメント』 ピアソン・エデュケーション 3,700円	
<b>参考文献</b>	
テドロー, R・S. 近藤文男監修 『マス・マーケティング史』 ミネルヴァ書房 1993年 石井淳蔵 『ブランド～価値の創造』 岩波新書 1999年 アーカー, D.A. 陶山計介他訳 『ブランド・エクイティ戦略』 ダイヤモンド社 1994年 青木幸弘他 『ブランド・ビルディングの時代』 電通 1999年 波積真理 『一次産品におけるブランド理論の本質～成立過程の理論的検討と実証的考察』 白桃書房 2002年	
<b>成績評価</b>	
平常点と課題で評価します。	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
流通システム論特殊研究	4 単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
宇野史郎 (うの しろう)	通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
現代市場経済システムのダイナミックな競争過程を明らかにすることをテーマとし、流通システムの再編と情報政策のあり様についてまちづくりの視点から検討し、理解しえることを目標とする。	
<b>授業の概要</b>	
市場経済システムは、各経済主体間の競争を軸に展開される需給調整メカニズムによって秩序づけられている。しかし、現実の市場経済システムのもとでは、必ずしも生産と消費の架橋がうまくいくとはかぎらない。つまり、市場の失敗が発生することになる。そのため、市場の失敗を矯正する流通政策が必要となる。本研究では、流通の仕組や役割についての基本的理解のもとで、流通システムと流通政策との相互関係に着目し、まちづくりの視点からその相互関係を検討していく。	
<b>授業計画</b>	
第1回 市場経済システムと流通の役割・仕組み	第16回 地域商業研究の展望 (3)
第2回 " (2)	第17回 都市流通システムの研究の方法と分析枠組 (1)
第3回 " (3)	第18回 " (2)
第4回 都市の発展と地域商業 (1)	第19回 都市流通システムの形成と発展 (1)
第5回 " (2)	第20回 " (2)
第6回 大都市圏の発展と都市間競争	第21回 都市流通システムの発展と空間的競争構造 (1)
第7回 東京都市圏の拡大と商業配置	第22回 " (2)
第8回 地方都市のスプロール化と商業	第23回 都市流通システムと商店街問題 (1)
第9回 中心市街地と郊外型商業	第24回 " (2)
第10回 都市中心部における商業の魅力	第25回 都市流通システムと地域通貨 (1)
第11回 都市型商業集積の形成と町並み	第26回 " (2)
第12回 地域商業のブランド戦略	第27回 都市流通システムと流通近代化政策
第13回 地域商業と地域コミュニティ	第28回 都市流通システムと都市流通政策
第14回 地域商業研究の展望 (1)	第29回 都市流通システムと土地利用規制
第15回 " (2)	第30回 都市流通システムとまちづくり
<b>事前事後学習</b>	
テキストの予習・復習をしておくこと。	
<b>テキスト</b>	
宇野史郎 『まちづくりによる地域流通の再生』 中央経済社 3,000 円	
宇野史郎 『現代都市流通とまちづくり』 中央経済社 3,200 円	
<b>参考文献</b>	
講義中に隨時紹介する。	
<b>成績評価</b>	
テキストの各章を各自の用意したレジュメに従って発表してもらい、全体の討論をとおして内容の理解度をチェックする。以上を総合的に評価する。	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
流通システム論特殊研究演習	2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
宇野史郎（うの しろう）	通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>現代の流通システムをより消費者志向的に変革するための方向性を明らかにすることをテーマとし、流通研究への方法論的理解に立って、現代流通問題の理解を深めることを目標とする。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>現実の市場システムの優位性がそこでの競争を通じての消費者志向の確保にあるといわれながらも、実際は生産優位のものとなっていることに注目し、流通が生産に従属するものと考える理論などを検証しながら、今日の流通システムをより消費者志向的に変革するための方向性について、これまでの流通研究の3つのパラダイム「古典的配給論パラダイム」「商業資本的論パラダイム」「流通論パラダイム」の理解のもとで研究を進めていく。</p>	
<b>授業計画</b>	
1年次	
<春学期>	
<p>現代流通を貫く基本的な仕組、規則等を理解していくための準備作業として、流通研究の方法論的理解に努める。</p>	
<秋学期>	
<p>テキスト『地域再生の流通研究』についての理解を深めながら、現代流通のメカニズムの解明に努める。</p>	
2年次	
<春学期>	
<p>修士論文のテーマの選定、それに関する参考文献・資料などの探索、そして作成への指導に努める。</p>	
<秋学期>	
<p>修士論文の完成に向けて指導に努める。</p>	
<b>事前事後学習</b>	
<p>テキストの予習・復習をしておくこと。</p>	
<b>テキスト</b>	
宇野史郎他編 『地域再生の流通研究』 中央経済社 3,000円	
<b>参考文献</b>	
<p>演習の中で隨時紹介する。</p>	
<b>成績評価</b>	
<p>テキストの各章を各自の用意したレジュメに従って発表してもらい全体の討論をとおして内容の理解度をチェックすることにする。以上を総合的に評価する。</p>	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
<b>交通論特殊研究</b>	<b>4 単位</b>
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
<b>香川正俊 (かがわ まさとし)</b>	<b>通年</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>テーマは各人の修士課程における研究テーマに絡ませ、共通の事柄は設定しない（隨時、質問に応じる）。但し、前半の到達目標は、交通があらゆる人間活動に欠かせない手段であることを認識し、特に九州や熊本の交通問題を考える上で不可欠な知識を得ることに、後半は論文の書き方・資料収集及び分析能力・分析方法・質疑応答能力を高めることに置く。交通に比較的興味のない人であってもそれ自体は問題ではなく、多角的な視点から自らの研究に取り組もうとする人を歓迎する。社会人、公務員及び教師を志す人にとって有意義ではないかと思われる。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>前半では、見直し論議を含む交通事業における規制緩和問題を取り上げる。とりわけ参入・撤退の全面自由化を促進する需給調整規制の廃止と運賃の自由化に焦点をあて、九州及び熊本の経済・社会発展や地域振興に与える影響を絡め、いくつかの交通モードごとに詳細な説明を行う。その際、理論的分析よりも実態分析に重点を置き、経済的・行政的・法律的視点等をも含め、できるだけ多角的な観点から講義を行う。後半では、可能な限り各人の修士課程における研究テーマに合せ、発表・討論することに重点を置く。</p>	
<b>授業計画</b>	
第1回 規制緩和と九州の交通（規制緩和の概要）	第16回 論文の書き方・資料収集指導（書き方）
第2回 規制緩和と九州の交通（交通の特徴）	第17回 論文の書き方・資料収集指導（収集方法）
第3回 規制緩和と熊本の交通（交通の特徴）	第18回 論文の書き方・資料収集指導（実習）
第4回 規制緩和とタクシー（経済的規制）	第19回 分析方法・質疑能力の高揚（分析）
第5回 規制緩和とタクシー（社会的規制）	第20回 分析方法・質疑能力の高揚（質疑）
第6回 JR九州と規制緩和（経営戦略）	第21回 分析方法・質疑能力の高揚（実習）
第7回 JR九州と規制緩和（完全民営化）	第22回 各自の論文発表と討論（その1）
第8回 JR九州と規制緩和（異業種参入）	第23回 各自の論文発表と討論（その2）
第9回 JR貨物と環境問題（環境）	第24回 各自の論文発表と討論（その3）
第10回 JR貨物と環境問題（経営改善）	第25回 各自の論文発表と討論（その4）
第11回 規制緩和の功罪（メリット）	第26回 各自の論文発表と討論（その5）
第12回 規制緩和の功罪（デメリット）	第27回 各自の論文発表と討論（その6）
第13回 規制緩和の見直し	第28回 全体的な講評（その1）
第14回 規制緩和の論点整理（影響）	第29回 全体的な講評（その2）
第15回 規制緩和の論点整理（あり方）	第30回 全体的な講評（その3）
<b>事前事後学習</b>	
<p>交通に関する関係諸法と政治・行政の動向は、あらかじめ把握すべき必須課題であり、知識がなければ交通の現状や在り方を分析・検討することはできない。入学前から積極的に勉強して頂きたい事柄である。また、事後においては特に後半で扱った論文の書き方等を再度復習し、修士論文の執筆に活かせてもらいたい。</p>	
<b>テキスト</b>	
資料・レジュメ等を適宜配布する。	
<b>参考文献</b>	
適宜紹介する。	
<b>成績評価</b>	
<p>前半と後半に分けて評価する。前半は講義内容を充分に把握したか、不可欠な知識を多角的観点から把握しているかに重点を置く。不十分な者に対しては反復課題を課す。後半では、発表はもとより討論及び質問の活発さを重視し、レポートが到達目標に従って満足のいくものになっているかどうかで評価する。</p>	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
交通論特殊研究演習	2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
香川正俊 (かがわ まさとし)	通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>到達目標は当然、修士論文の執筆にあり、個々人の希望するテーマに則した「個別指導」を行うと共に、必要に応じ、夏休み等を利用した実態調査も実施する。但し、論文の書き方・資料収集及び分析能力・分析方法・質疑能力の向上については、「交通論特殊研究」で行うため、本演習では原則として扱わない。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>需給調整規制の廃止と運賃規制の緩和に代表される規制緩和の是非、過疎地域における移動手段の確保並びに都市交通問題、交通のグローバル化等、現代交通研究の基本となる諸問題を扱う。それを踏まえ、「地域と連携した大学院」を目指す立場から、熊本市を中心とする交通の諸課題を扱う。具体的に言えば、熊本市を中心とする交通渋滞の解消策、「都市の装置」としての LRTS 構想、九州新幹線・鹿児島ルートを巡る課題、公共交通の再生と交通のあり方等が挙げられるが、その際、交通経済のみならず都市計画及び地域振興、観光といった様々な分野と関連付けながら、都市・地域づくりと交通の役割、地域において交通が果たすべき役割を議論することとなろう。</p>	
<b>授業計画</b>	
1年次	
<春学期>	
<p>現代交通研究の基本となる諸問題の整理を行う。規制緩和が数々の矛盾を拡大する中で現在、事実上の見直しが進められており、今後ますます進行すると予想される。春学期では特に規制緩和の歴史と現状を踏まえ、見直し策に関する具体的な事例を検討する。</p>	
<秋学期>	
<p>熊本市を中心とする都市部での交通渋滞解消策と LRTS 等に関し、都心部全域におけるトランジットモール化をキーワードとして扱う。また、過疎地域での移動手段の確保も DMB やオンデマンドバスといった新しいモードが注目を浴びる一方、第 3 セクター鉄道や中小鉄軌道の経営危機が見られる。これ等に関しては、過疎地域の再生（地域づくり）の観点から取り上げる。</p>	
<p>春・秋学期を通して履修者の修士論文テーマを決定する。さらに第一次資料を収集するため、必要に応じて実態調査を行う。履修者はこの間に第一次資料等の分析を進め、レポートを作成しなければならない。</p>	
2年次	
<春学期>	
<p>九州新幹線・鹿児島ルートを巡る問題を取り上げて講義する。同問題は、熊本の将来（経済、文化、観光＝都市・地域づくり）に大きな影響を与えると共に、1年次で講義したすべての諸課題及び履修者の修士論文テーマにも直接・間接的に関係する。履修者は、併行して1年次に書いたレポートを踏まえ、修士論文の執筆にとりかかる。執筆に際しては追加的な実態調査の実施も考えられる。</p>	
<秋学期>	
<p>修士論文を完成させる。そのため適宜発表し合い、修正指導する。種学会での発表も積極的に実践する。</p>	
<b>事前事後学習</b>	
<p>交通に関する関係諸法と政治・行政の動向は、あらかじめ把握すべき必須課題である。これ等の知識がなければ交通の現状や在り方を分析・検討することはできない。入学前から積極的に勉強して頂きたい事柄である。また、事後においては修士論文を再度見直し、書けなかった重要事項について研究を深化するよう努めて頂きたい。</p>	
<b>テキスト</b>	
資料・レジュメ等を適宜配布する。	
<b>参考文献</b>	
適宜、紹介する。	
<b>成績評価</b>	
<p>修士論文の執筆については、遅くとも1年目の終わりまでにテーマを決定し、第一次資料の分析に取りかかる。1年目の評価はそのために必要な基礎知識及び不可欠な研究を行い得たか及び提出されたレポートで評価する。2年目は当然、修士論文の執筆と満足度の高い論文の完成で評価する。また、各種学会での発表も重視する。</p>	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
金融論特殊研究	4 単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
坂本 正 (さかもと ただし)	通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・銀行を中心とした金融業の展開を歴史的および理論的に把握する。</li> <li>・グローバリゼーションのもとでの金融の証券化が及ぼすサブプライム問題の構造を理解する。</li> <li>・銀行の不良債権処理の過程における株式市場などの市場の役割を理解する。</li> </ul>	
<b>授業の概要</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・金融制度の展開過程を歴史と制度の両面から考察する。中心となるのは商業銀行の流動性の変化と業務の多角化であり、それを支える中央銀行制度の発展内容をみていくこととする。</li> <li>・特に銀行と市場を中心に銀行法の制定に至る経済的背景と審議過程の議論を明らかにすることで、金融制度という法的な枠組みの意味を問う。</li> <li>・現代の金融革新とセキュリティゼーション及び銀行の不良債権問題の関係を理解する。</li> <li>・金融の証券化とサブプライム問題の関係を通じて、金融の証券化の歴史的・理論的な意味を問う。</li> </ul>	
<b>授業計画</b>	
第1回 金融システムと銀行	第16回 信託会社の発展と機能変化
第2回 商業銀行の基本的な機能	第17回 アメリカの中央銀行構想
第3回 イギリスにおける商業銀行の発展	第18回 連邦準備制度の成立過程
第4回 銀行と割引市場（イギリス）	第19回 ドース公債（1924年）をめぐる アメリカの役割
第5回 銀行と証券市場（イギリス）	第20回 アメリカの銀行と証券業務
第6回 イングランド銀行の機能と役割	第21回 転嫁流動性論の背景と意義
第7回 ドイツの兼営銀行の特徴	第22回 マクファデン法（1927年）と証券業務
第8回 兼営銀行と固定資本信用	第23回 RFCとグラス＝スティーガル法（1933年） の意義
第9回 兼営銀行と証券市場	第24回 1935年銀行法と連邦準備制度の役割
第10回 兼営銀行とセキュリティゼーション	第25回 ターム・ローンと所得期待理論
第11回 兼営銀行と自己資本	第26回 短期金融市场と金融革新
第12回 兼営銀行と産業	第27回 セキュリティゼーションの進展と金融機関 の危機
第13回 アメリカの銀行と証券市場	第28回 TARPとグラム＝リーチ＝ブライリー法 (1999年)の意義
第14回 投資銀行の機能と役割	第29回 日本の不良債権問題
第15回 投資銀行と産業	第30回 サブプライム問題の影響
<b>事前事後学習</b>	
事前に予習を行い、授業で出た問題について参考文献を参考に整理しておく。	
<b>テキスト</b>	
坂本 正 『金融革新の源流』 文眞堂 3,500 円	
<b>参考文献</b>	
西川純子・松井和夫 『アメリカ金融史』 有斐閣 2,500 円	
数阪孝志 『アメリカ商業銀行の多角的展開』 東洋経済新報社 4,000 円	
<b>成績評価</b>	
口頭試験	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
金融論特殊研究演習	2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
坂本 正 (さかもと ただし)	通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>金融の仕組みを理解し、理論と制度を歴史的な観点から位置づける方法を修得できるように努める。</p> <p>テキストの文脈を理解することを通じて、資料の収集と整理の基本を学び、理論的に論述する方法の重要性が理解できるようにする。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<ol style="list-style-type: none"> <li>ニューディールと国家市場経済というテーマのもとで1933年銀行法と1935年銀行法を中心にアメリカの現代的な中央銀行制度の機能と役割を検討する。これ以降、現代アメリカの金融制度の展開が始まるといつてよい。したがって、この時期を現代アメリカの金融制度の「源流」として把握することに努める。</li> <li>現代アメリカの金融システムの特徴をなしている金融の証券化（セキュリティゼーション）の展開過程とグローバリゼーションの関係を理解できるように努める。金融の証券化を支えた歴史的背景と公的金融機関の役割を把握し、金融破綻と政府による救済策を検討する。</li> </ol>	
<b>授業計画</b>	
1年次	
<春学期>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>① 金融の基本的な知識から修士論文を作成するのに必要な問題設定へと発展させる方法を指導する。</li> <li>② 関心のあるテーマをきめるプロセスを重視する。いくつかの問題意識や関心のある事柄からそれがどのように修得したいテーマとなるのかを相互に検討する。</li> </ul>	
<秋学期>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>① テーマ決めに伴い、先行する関連文献や学界動向のサーベイを集中的におこなう。</li> <li>② 大枠での章立てと項目ごとの学界サーベイを書き進めるように指導する。</li> </ul>	
2年次	
<春学期>	
論文としての基本的なスタイルを理解し、テーマと主張点、学界動向の理解に基づく所説の整理。論旨の展開方法を指導する。	
<秋学期>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>① 夏休み前に全体の骨格と要旨の概要、および参考文献の参照等の目途をつけるようにする。</li> <li>② 論述方法の具体的な指導と仕上げについてのアドバイスをおこなう。</li> </ul>	
<b>事前事後学習</b>	
授業内容を整理し、その時出された課題について参考文献を検索し、一定の把握をしておく。	
<b>テキスト</b>	
坂本 正 『金融革新の源流』 文眞堂 3,500 円	
<b>参考文献</b>	
数阪孝志 『アメリカ商業銀行の多角的展開』 東洋経済新報社 4,000 円	
西川純子・松井和夫 『アメリカ金融史』 有斐閣 2,500 円	
西村・深町・小林・坂本 『現代貨幣信用論』 名古屋大学出版会 2,500 円	
<b>成績評価</b>	
口頭試問、論文	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
銀行論特殊研究	4 単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
安田嘉明 (やすだ よしあき)	通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>銀行経営の視点から銀行論特殊研究を進めていく。          金融自由化の進展、新しい会計制度の導入等、銀行を巡る環境は激変し、銀行経営に大きな変化をもたらしている。その変化の過程を「金融再編」「銀行経理」「リスク管理」という三つの視点から分析し、把握していく。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>[金融再編] 金融持株会社の解禁によるフィナンシャルグループの形成、金融機関の破綻処理・早期健全化に伴う金融再編を中心に述べていく。</p> <p>[銀行経理] 税効果会計、金融商品会計、不良債権処理、自己資本比率規制を中心に述べていく。</p> <p>[リスク管理] 銀行のリスク管理の現状、銀行監督制度の現状、銀行のリスク管理の新しい展開を中心に述べていく。</p> <p>これらは、相互に影響を及ぼしながら銀行経営に大きな変化をもたらしている。授業では主として、九州の地域金融機関を対象に、経営管理状況の把握、問題点の検討を進めていく。</p>	
<b>授業計画</b>	
第1回 金融機関の種類と役割	第16回 貸倒引当金、償却、債権売却
第2回 銀行の基本的機能と経営理念	第17回 有価証券の期末評価
第3回 金融市场の仕組み	第18回 有価証券の減損処理
第4回 金融自由化の現状と課題	第19回 自己資本比率規制と不良債権処理
第5回 日本銀行の金融政策	第20回 自己資本比率規制と金融商品会計
第6回 フィナンシャル・グループ形成による 再編の加速	第21回 銀行経営におけるリスク管理の位置づけ
第7回 金融早期健全化法と金融再生法	第22回 金融自由化の進展とリスク管理
第8回 預金保険機構による資金援助	第23回 会計・開示制度の変化とリスク管理
第9回 破綻処理方法の変遷と金融再編	第24回 銀行監督制度の変化とリスク管理
第10回 金融2法に代わる新しい展開	第25回 新BIS規制とリスク管理
第11回 銀行経理の特徴（貸借対照表）	第26回 信用リスク管理の新しい展開
第12回 銀行経理の特徴（損益計算書）	第27回 市場リスク管理の新しい展開
第13回 不良債権の開示	第28回 預貸金業務におけるリスク管理の新しい展開
第14回 不良債権処理	第29回 銀行のディスクロージャーの現状と課題
第15回 自己査定	第30回 銀行経営の新しい展開
<b>事前事後学習</b>	
事前に配布する資料を読み、疑問点をまとめておくこと。事後に講義で指示する資料や文献、ネット上のデータにより講義内容を確認すること。	
<b>テキスト</b>	
各授業ごとに資料を配付する。	
<b>参考文献</b>	
銀行経理問題研究会編 『銀行経理の実務 第8版』 (社)金融財政事情研究会 日本銀行金融研究所編 『新しい日本銀行』 有斐閣 金融庁、日本銀行、預金保険機構、全国銀行協会等の統計資料 各行ディスクロージャー誌	
<b>成績評価</b>	
平常点（授業への参加態度など）および小テスト（レポートの場合もある）により総合的に判断する。	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
証券経済論特殊研究	4 単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
貞松 茂 (さだまつ しげる)	通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
ライフプランニングと証券の位置付け 証券業の状況把握	
<b>授業の概要</b>	
わが国は、金融システム改革により市場主義化を進めてきたのであるが、それを受けた証券業者の市場戦略などその動向をまず追究していく。また、リスクマネーの影響は現今、わが国の証券業者にも関連のあるサブプライムローン関連の証券化商品に如実に表れている。一方、わが国では、投資家保護を柱とする金融商品取引法が成立したが、それは証券業者のコーポレート・ガバナンスの重要性にも大きく関連している。これらの問題の追究を通じて証券業務の社会経済的役割を考究する。	
<b>授業計画</b>	
第1回 オリエンテーション（資産形成における証券の位置づけと証券業界）	第16回 リテール証券ビジネスにおける新たな変化（その1）
第2回 日米の資産形成の比較	第17回 リテール証券ビジネスにおける新たな変化（その2）
第3回 ドルコスト平均法	第18回 リテール証券ビジネスにおける新たな変化（その3）
第4回 配当利回り	第19回 インターネット証券会社の経営戦略（その1）
第5回 PER	第20回 インターネット証券会社の経営戦略（その2）
第6回 PBR	第21回 インターネット証券会社の経営戦略（その3）
第7回 ROE	第22回 投資銀行業務（その1）
第8回 PBRとROEおよび自己資本比率	第23回 投資銀行業務（その2）
第9回 PEDY	第24回 投資銀行業務（その3）
第10回 成長企業の投資指標	第25回 アセットマネジメント業務（その1）
第11回 グランビルの法則	第26回 アセットマネジメント業務（その2）
第12回 トレンドライン	第27回 アセットマネジメント業務（その3）
第13回 RSI	第28回 大手証券会社の企業再生業務（その1）
第14回 サイコロジカルライン	第29回 大手証券会社の企業再生業務（その2）
第15回 勝落レシオ	第30回 ライフプランニングと資産形成
<b>事前事後学習</b>	
準備している資料を中心に内容を聞き、理解を深めるとともに、不明なところを調べ一層理解を深める。	
<b>テキスト</b>	
資料を準備する。	
<b>参考文献</b>	
証券経営研究会『金融システム改革と証券業』日本証券経済研究所 「証研レポート」、「資本市場」などの雑誌や日本経済新聞など。	
<b>成績評価</b>	
平常点、討論、レポートなどを通じて総合評価	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
証券経済論特殊研究演習	2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
貞松 茂 (さだまつしげる)	通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
修士論文あるいはリサーチ・ペーパーの作成にあたっての視座、文献・資料収集、構成の的確性、国内外の証券市場・証券業務の現状分析と課題の追究	
<b>授業の概要</b>	
<p>本演習では、修士論文あるいはリサーチ・ペーパーの作成に向けて、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 学生とよく話すとともに、新聞、雑誌、文献等にあたらせ出来るだけ早く国内あるいは外国の証券市場・証券業務に関するテーマを見出させる。</li> <li>② 企業調査も含め情報収集・分析を行わせ小論文あるいは小リサーチ・ペーパーの作成指導。</li> <li>③ 修士論文あるいはリサーチ・ペーパーの作成指導。</li> </ul>	
<b>授業計画</b>	
1年次	
<春学期>	
証券市場・証券業務に関わる現代の問題を、国内外に視野を広げて探し、修士論文あるいはリサーチ・ペーパーのテーマを出来るだけ早く設定する。決まったら文献と資料の収集を進め、小論文あるいは小リサーチ・ペーパーの作成という形で整理していく。	
<秋学期>	
春学期に引き続いて作業を進め、さらに小論文小リサーチ・ペーパーの作成という形で整理していく。	
2年次	
<春学期>	
一年次に引き続いて作業を進め、修士論文あるいはリサーチ・ペーパーの作成を進める。	
<秋学期>	
春学期に引き続いて作業を進め、修士論文あるいはリサーチ・ペーパーを書き上げる。	
<b>事前事後学習</b>	
設定したテーマにしたがって文献と資料の収集をはかり、それに基づいて論文を書いていく。報告後、不備なところを同様に行っていき完成を目指す。	
<b>テキスト</b>	
使用せず。	
<b>参考文献</b>	
修士論文あるいはリサーチ・ペーパーのテーマに沿って多数。	
<b>成績評価</b>	
修士論文あるいはリサーチ・ペーパーの提出。	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
保険論特殊研究	4 単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
林 裕 (はやし ひろし)	通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>産業の発達による新たなリスクの出現や少子高齢化社会の伸展による医療・介護・年金問題など、現代社会におけるリスクマネジメント手法の一つとして、民間保険の果たす役割は大きなものがある。企業分野と家計分野における「リスクと保険」を学ぶことによって、企業ならびに家計の抱える課題を理解し、保険制度の必要性を論理的に説明できるようになる。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>保険は大別すると企業保険と家計保険に分類される。保険は企業保険を中心に発展した損害保険に始まり、のちに家計保険の中心となる生命保険が誕生するという歴史的展開をみせてきた。企業保険の重要性は不变であるが、今日では損害保険の分野でも自動車保険、火災保険、傷害保険といった家計保険の領域が伸展している。この講義では、家計保険を中心として、保険の保障機能と貯蓄機能、保険契約、保険の経営形態、代表的な家計保険分野の生損保商品について考察する。必要に応じて、企業保険の領域にも触れる予定である。</p>	
<b>授業計画</b>	
第1回 リスクマネジメントの体系	第16回 生命保険の基本分類
第2回 海上保険の生成	第17回 高齢社会と医療保険
第3回 火災保険の生成	第18回 高齢社会と介護保険
第4回 生命保険の生成	第19回 高齢社会と個人年金保険
第5回 保険の分類	第20回 インフレーションと変額保険
第6回 保険のしくみ	第21回 生命保険の本質
第7回 保険料の構造	第22回 わが国の保険加入状況
第8回 火災保険の補償範囲	第23回 生活設計と保険商品
第9回 家計地震保険の創設と現状	第24回 保険契約の重要事項
第10回 自動車損害賠償責任保険の意義	第25回 販売チャネルの多様化
第11回 任意の自動車保険の必要性	第26回 保険販売の新指標
第12回 傷害保険の特徴	第27回 保険契約者の保護
第13回 賠償責任保険の特殊性	第28回 企業形態としての相互会社
第14回 積立型損害保険の誕生経緯	第29回 郵政民営化とかんぽ生命
第15回 ART	第30回 共済の理念と現状
<b>事前事後学習</b>	
事前・事後にテキストの該当箇所、ならびに学内私書箱の講義資料で学習すること。	
<b>テキスト</b>	
林 裕 『家計保険論（改訂版）』 税務経理協会 2,625 円	
<b>参考文献</b>	
テーマに応じて適宜紹介する。	
<b>成績評価</b>	
平常点（60%）と課題レポート（40%）	

<b>授業科目名</b> 保険論特殊研究演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 林 裕 (はやし ひろし)	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
2年間の研究指導を通じて修士論文を作成することが目標であるので、早期にテーマを固めて、資料収集と、中間報告を数度行いながら、論文を仕上げてゆく。文献を十分検索し詳読の上、自身の論理展開に拠って、研究成果をまとめることができる。	
<b>授業の概要</b>	
保険の歴史・理論・経営・政策・現状などを考察しながら、現代保険が抱えるさまざまな課題を解明し、その中から修士論文のテーマを見いだしてゆく。企業分野における新たなリスクマネジメント手法であるARTの登場や、高齢社会の伸展による医療・介護・年金分野における公的保険と私的保険の相互関係や、自然災害の問題など、多方面から保険について考察していく予定である。	
<b>授業計画</b>	
1年次  <春学期> 近代保険の生成（海上保険・火災保険・生命保険） 保険の技術的基礎（保険の仕組み・保険料の仕組み・保険金の支払い） 保険契約の在り方（保険料支払義務・告知義務・通知義務・損害防止義務） 保険契約者の保護（保険会社の経営破綻・保険契約者保護機構）  <秋学期> 損害保険商品（火災保険・地震保険・自賠責保険・自動車保険・傷害保険・賠償責任保険） 生命保険商品（基本分類・医療保険・介護保険・個人年金保険） 保険の経営形態（株式会社・相互会社・協同組合・国営）  2年次  <春学期> 修論指導  <秋学期> 修論指導	
<b>事前事後学習</b>	
学術論文の詳読と文献収集によって考察を深める。	
<b>テキスト</b>	
そのつど学術論文を紹介する。	
<b>参考文献</b>	
修士論文のテーマに即した文献を適宜紹介する。	
<b>成績評価</b>	
平常点と修士論文の内容。	

<b>授業科目名</b> 経営財務論特殊研究	<b>単位数</b> 4 単位
<b>担当教員名</b> 池上恭子（いけがみ きょうこ）	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
基本的な財務理論を日本企業の事例研究を通して理解する。	
<b>授業の概要</b>	
<p>企業は、ヒト・モノ・カネなどの経営資源を有機的に結合させ、経営活動を行っている。財務とは、経営資源のうち「カネ」を対象としている。具体的には、資金調達、投資決定、配当政策などが主要なテーマである。これらのテーマについて、基本的な財務理論を確認するとともに、日本企業の事例研究によって理解を深める。</p> <p>後半においては、経営戦略との関係から財務を学ぶ。成長戦略、投資戦略、事業転換等において、資金調達および投資決定をどのように行うか、日本企業の事例研究を通して学ぶ。</p>	
<b>授業計画</b>	
第1回 オリエンテーション	第16回 資金調達の基本
第2回 財務の基本的概念	第17回 資金調達の新潮流（1）
第3回 資本コスト（1）～資本コストとは	第18回 資金調達の新潮流（2）～事例研究
第4回 資本コスト（2）～価値評価	第19回 配当政策
第5回 資本コスト（3）～投資決定	第20回 自社株買い
第6回 資本コスト（4）～事例研究①	第21回 株主還元策（1）～事例研究①
第7回 資本コスト（5）～事例研究②	第22回 株主還元策（2）～事例研究②
第8回 M&A（1）～M&Aとは	第23回 経営戦略とファイナンス
第9回 M&A（2）～企業評価	第24回 成長戦略とファイナンス（1）
第10回 M&A（3）～事例研究①	第25回 成長戦略とファイナンス（2）～事例研究
第11回 M&A（4）～事例研究②	第26回 海外成長戦略～事例研究
第12回 資本構成（1）～MM無関連命題	第27回 投資戦略とファイナンス（1）
第13回 資本構成（2）～MM無関連命題	第28回 投資戦略とファイナンス（2）～事例研究
第14回 資本構成（3）～事例研究①	第29回 事業転換とファイナンス～事例研究
第15回 資本構成（4）～事例研究②	第30回 まとめ
<b>事前事後学習</b>	
授業範囲を熟読し、疑問点を明確にしておくこと。	
<b>テキスト</b>	
砂川伸幸、川北英隆、杉浦秀徳『日本企業のコーポレートファイナンス』日本経済新聞出版社、2008年。	
<b>参考文献</b>	
砂川伸幸、川北英隆、杉浦秀徳、佐藤淑子『経営戦略とコーポレートファイナンス』日本経済新聞出版社、2013年。	
<b>成績評価</b>	
平常点、報告内容、ディスカッションへの参加態度などによって総合的に評価する。	

<b>授業科目名</b> 経営財務論特殊研究演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 池上恭子（いけがみ きょうこ）	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>  2年間の研究指導を通じて、修士論文を完成することが目標である。	
<b>授業の概要</b>  近年、企業の資金調達および運用の方法が多様化かつ複雑化になってきている。他方、財務に対する一般の関心も高まっている。特に、注目すべきトピックは、M&A（企業の合併・買収）、資金調達方法の多様化（ハイブリッド・ファイナンス）、財務リストラクチャリング、企業価値の評価尺度、コーポレート・ガバナンスなどである。これらのなかから修士論文のテーマを選び、理論と現状を学び、論文を作成していく。	
<b>授業計画</b>  1年次 <春学期> 修士論文のテーマ選定を念頭に置きながら、上記のような最近のトピックからいくつかを選び、文献を熟読していく。指定文献について、レジュメを作成し、報告を行う。修士論文の準備段階として、参考文献の探し方、文献の読み方などの指導も行う。 <秋学期> 修士論文のテーマを確定し、参考文献について報告を行う。  2年次 <春学期> 修士論文の構成を確定し、執筆を開始する。 <秋学期> 修士論文を完成させる。	
<b>事前事後学習</b>  事前学習として、指定文献等課題を熟読し、議論できるまで理解すること。 事後学習として、授業における指摘や議論を理解しまとめること。	
<b>テキスト</b> プリントを配布する。	
<b>参考文献</b> 適宜配布する。	
<b>成績評価</b> 課題または修士論文の完成度によって評価する。	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
会計学原理特殊研究	4 単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
佐藤信彦 (さとう のぶひこ)	通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>会計の中心的課題の一つが、適正な期間損益の計算にあるとの理解を前提に、現行会計基準における財務諸表作成の基本的考え方、つまり各財務諸表要素の認識、測定および表示・開示に関する取扱いを検討し、その基礎にある考え方を理解することを目標とする。</p> <p>到達目標： 現代経済社会に存在する会計問題を発見し、その分析を的確にでき、かつ、その解決策について議論できる。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>春学期は、現行会計基準のうち、基本的な論点に関連する会計基準を取り上げ検討する。</p> <p>秋学期は、現行会計基準のうち、応用的な論点に関連する会計基準を取り上げ検討した上で、現行会計基準の基礎にある考え方の分析を行う。</p>	
<b>授業計画</b>	
第1回 講義実施上のガイダンス	第16回 財務諸表の体系
第2回 金融商品会計(1)有価証券	第17回 自己株式会計
第3回 金融商品会計(2)金銭債権	第18回 税効果会計
第4回 金融商品会計(3)金銭債務	第19回 退職給付会計
第5回 棚卸資産会計(1)原価配分	第20回 連結会計
第6回 棚卸資産会計(2)評価損等	第21回 企業結合・事業分離会計
第7回 固定資産会計(1)取得原価	第22回 外貨換算会計(1)外貨建取引の換算
第8回 固定資産会計(2)減価償却	第23回 外貨換算会計(2)外貨表示財務諸表の換算
第9回 固定資産会計(3)無形資産	第24回 新株予約権会計
第10回 研究開発費等会計	第25回 ストックオプション等会計
第11回 繰延資産会計	第26回 金融商品会計(4)デリバティブ会計
第12回 引当金会計	第27回 固定資産会計(4)減損
第13回 収益会計(1)実現等	第28回 会計目的と利益観
第14回 収益会計(2)工事契約	第29回 財務会計の概念フレームワーク
第15回 株主資本会計	第30回 IFRS
なお、授業計画は変更されることがある。	
<b>事前事後学習</b>	
授業の前には、テキストの該当箇所を読了し、研究報告のための準備をし、授業の後は、授業で議論された論点の整理を行うこと。	
<b>テキスト</b>	
佐藤信彦著『財務諸表論の要点整理（第12版）』中央経済社	
<b>参考文献</b>	
佐藤・河崎等編著『スタンダードテキスト財務会計論I [基本論点編]・II [応用論点編]』中央経済社	
<b>成績評価</b>	
平常点（講義への参加姿勢や発言内容など）により総合的に評価する。	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>		
<b>財務会計論特殊研究</b>	<b>4 単位</b>		
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>		
<b>酒巻政章 (さかまき まさあき)</b>	<b>通年</b>		
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>			
<p>わが国の会計制度を取りまく状況は大きな転換期を迎えており、この10年程のあいだに新会計基準が陸續と登場した。他方で、会計制度や会計基準を支えるとされる会計理論については必ずしも十分な議論が尽くされているとは言い難い。講義では、これまでの会計制度の歴史を振り返って、それぞれの時代に展開された会計制度を巡る議論、さらには会計実践に言及したさまざまな会計的言説を取り上げて、各々の議論の文脈に潜む会計思考を取り出し、比較検討してみたい。こうした作業を通して、受講生には会計専門職業人としての「考える力、議論する力」を養って欲しい。</p>			
<b>授業の概要</b>			
<p>講義では次の三つの側面からそれぞれの領域で行なわれてきた「会計における議論 (argument)」に着目する。かかる作業を通して会計制度や会計実践を支えているとされる「会計の理論」を抉り出し、近年の会計基準論の検証を試みたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① アメリカ会計制度の歴史；それぞれの時代における「会計原則の正統性」を巡る議論の検証</li> <li>② ケースとしての会計実践の背後にある「会計処理の正統性」を巡る議論の検証</li> <li>③ 最近の会計基準の正統性を説く議論の検証</li> </ul>			
<b>授業計画</b>			
第1回	会計理論とは① 会計言語論から見た会計本質論	第16回	新会計基準の検証 (1) 金融商品に関する会計基準
第2回	会計理論とは② 会計理論の在り方；論証から説得へ	第17回	同 (2) 研究開発費に関する会計基準
第3回	アメリカ会計制度 前史 USスチールの情報公開をめぐって	第18回	棚卸資産の評価に関する会計基準
第4回	アメリカ会計制度 生成期 鉄道会計、減価償却、剩余金会計	第19回	固定資産の減損に係わる会計基準
第5回	アメリカ会計制度 展開期① 会計原則の制度化	第20回	資産除去債務に関する会計基準
第6回	アメリカ会計制度 展開期② 会計原則の理論をめぐって	第21回	会計実践の検証 (1) 「勘定科目と行動」を中心に
第7回	アメリカ会計制度 展開期③ 会計基準設定論争をめぐって	第22回	同 (2) 「会計における判断」を中心に
第8回	FASB の成立とその特質	第23回	同 (3) 「会計と法律」を中心に
第9回	FASB 概念フレームワークの検証① 概念フレームワークの意義	第24回	裁決事例の分析 履修者による報告と質疑応答①
第10回	FASB 概念フレームワークの検証② 会計目的論と概念論を中心	第25回	履修者による報告と質疑応答②
第11回	FASB 概念フレームワークの検証③ 測定論を中心に	第26回	履修者による報告と質疑応答③
第12回	国際会計基準の成立とその背景	第27回	履修者による報告と質疑応答④
第13回	わが国「概念フレームワーク」の特徴	第28回	履修者による報告と質疑応答⑤
第14回	二つの会計観をめぐって	第29回	会計専門職業と会計研究のあり方
第15回	まとめ—わが国会計基準の動向—	第30回	おわりに—会計イメージ再考—
<b>事前事後学習</b>			
次回の講義資料には必ず目を通し、講義内での議論・討論に積極的に参加すること。			
<b>テキスト</b>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>① 青柳文司 『アメリカ会計学』 中央経済社</li> <li>② 監査法人双研社 『会計実践』</li> <li>③ 国税不服審判所 『裁決事例集』</li> </ul>			
<b>参考文献</b>			
① 斎藤静樹・徳賀芳弘編、『企業会計の基礎概念』、中央経済社			
<b>成績評価</b>			
議論への参加とレポート内容			

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
財務会計論特殊研究演習	2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
酒巻政章 (さかまき まさあき)	通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>演習の最終目標は修士論文の作成にある。加えて、論文作成の過程で会計専門職業人として不可欠な能力である「説得力ある議論の仕方」を学ぶ。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>会計制度・会計基準全般について研究の対象とする。もちろん、外国の会計制度・基準との比較研究も含まれる。演習の指導方針として、規範的な議論ができるだけ避け、「なぜ・どうして」を探求する姿勢を堅持したい。テーマの掘り起こし段階で「論文の書き方」を扱った文献を読む。</p>	
<b>授業計画</b>	
1年次	
<春学期>	
現行の会計基準、会計理論を批判的に論じているテキストを読む。あわせて、学術論文のスタイルを学ぶ。	
<秋学期>	
テーマを絞り込んで、関連する文献を蒐集し、論点の整理を行う。	
2年次	
<春学期>	
春学期終了までに中間発表ができる程度まで、テーマの絞込み、論文内容の構成を完了する。	
<秋学期>	
論文の最終稿に向けての指導。	
<b>事前事後学習</b>	
講義中の議論を復習・整理し、次の講義もしくは報告にしっかりと反映させること。	
<b>テキスト</b>	
① 醍醐 聰、『会計学講義』、東大出版会 ② 斎藤静樹・徳賀芳弘編、『企業会計の基礎概念』、中央経済社	
<b>参考文献</b>	
① 澤田昭夫、『論文の書き方』、講談社学術文庫	
<b>成績評価</b>	
論文の内容	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
管理会計論特殊研究	4 単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
飛田 努 (とびた つとむ)	通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
管理会計の基礎理論を学ぶ。企業経営の現場における管理会計技法の有用性を検討する。	
<b>授業の概要</b>	
<p>Johnson and Kaplanによる『有用性の喪失 (Relevance Lost)』が発表されて以来、管理会計は「理論と実務の乖離」という問題を抱えてきた。それぞれの管理会計技法は企業経営の現場で生み出されてきたにもかかわらず、現在では企業、とりわけ中小企業においてはその有用性が低いと一般的に考えられている。本講義では、基本的な管理会計技法への理解を通じて、以上のような通説や常識を問い合わせし、実務に有用な管理会計技法について考える糸口を見出すことを目標とする。</p> <p>そのため、講義では教科書をもとに、基本的な管理会計技法について理解を深めていく。また、担当者によるケース・スタディや各種調査から得られたデータをもとにディスカッションを行い、企業経営の現場における管理会計実践の検討を行うことを通じて「理論と実務の融合」を目指すものとする。</p>	
<b>授業計画</b>	
第1回 ガイダンス	第16回 変貌しつつある原価計算思考 (B)
第2回 管理会計のフレームワーク (A)	第17回 製品原価計算の意義と限界 (B)
第3回 目標利益と中期経営計画 (A)	第18回 標準原価計算の問題点 (B)
第4回 戦略分析会計 (A)	第19回 ABC (活動基準原価計算) (B)
第5回 中期個別会計 (A)	第20回 戰略的コスト・マネジメント (B)
第6回 資本予算 (A)	第21回 利益管理と原価計算システム (B)
第7回 短期利益計画 (A)	第22回 品質原価計算／ライフサイクル・コスティング (B)
第8回 直接原価計算 (A)	第23回 原価企画 (B)
第9回 事業セグメント利益管理 (A)	第24回～第29回 ・事例研究、中小企業における管理会計 ・工場見学や特定産業における管理会計システムの提案 など、受講者と相談しながら進めていく。
第10回 購買管理会計 (A)	
第11回 生産管理会計 (A)	
第12回 販売管理会計 (A)	
第13回 事例研究①	第30回 講義まとめ
第14回 事例研究②	なお、進捗度・理解度に応じて変更を行う。
第15回 前期のまとめ：管理会計論概論	
<b>事前事後学習</b>	
テキスト輪読を行うので当該箇所を必ず読んでおくこと。またケース・スタディ等を出す場合があるので、講義における担当者指示に従って準備を行うこと。	
<b>テキスト</b>	
上總康行 [2014] 『ケースブック 管理会計論』新世社 (授業計画 (A) と記した内容)	
小林哲夫 [1993] 『現代原価計算論 戰略的コスト・マネジメントへのアプローチ』(同 (B))	
<b>参考文献</b>	
櫻井通晴 [2012] 『管理会計 第5版』同文館出版 など	
<b>成績評価</b>	
期末レポートを主たる評価基準とし、講義内の報告、ディスカッションへの貢献を加味する。	

<b>授業科目名</b> ビジネス特講 I	<b>単位数</b> 2 単位
<b>担当教員名</b> 池上恭子（いけがみ きょうこ）	<b>開講期間</b> 春学期
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
実務界の諸事情を理解し洞察することによって、各自の研究において視野を広め、研究対象の意義等についての認識を深める。	
<b>授業の概要</b>	
各界で活躍されている先輩方のお話を聞きし、討論を行うオムニバス形式の授業である。講師の方々には、これまでの体験談、現在取り組まれていること、将来の展望等、多岐にわたってご講演いただく予定である。	
<b>授業計画</b>	
第1回 オリエンテーション 第2回 地域活性化と企業 第3回 食品メーカーA 社代表 第4回 半導体関連会社 B 社代表 第5回 熊本のものづくり 第6回 自治体の視点から企業振興について 第7回 部品・金型メーカーC 社代表 第8回 地方からグローバル企業を 第9回 討論会 第10回 情報関連会社 D 社代表 第11回 環境関連製品メーカー 第12回 生活用品メーカー 第13回 電力事業関連会社 第14回 環境関連製品メーカー 第15回 まとめ、意見発表	
<b>事前事後学習</b>	
講師の会社概要、業界事情等を調べる。	
<b>テキスト</b>	
使用せず。	
<b>参考文献</b>	
適宜指示する。	
<b>成績評価</b>	
授業における参加態度や、レポートなどを通じて総合的に評価する。	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
コンピュータ実践	2 単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
堤 豊 (つつみ ゆたか)	秋学期
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>修士課程で必要なコンピュータを使った情報処理技術を実践を通して学びます。授業では、数値データの集計や分析でもっとも利用機会が多いと思われる表計算ソフトを使いこなせるようさまざまな角度からデータ処理を行います。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>情報処理技術のうち、文書作成やプレゼンテーションソフトについては直感的に使えることもあり、特に高度な技術とは言えなくなった。しかし、直感的に使うことが難しい、表計算ソフトは、スキルとして身につけておくことが必要で、情報の集計、分析、表現という一連の情報処理を扱えるソフトウェアである。</p> <p>またこの授業では、さらに、単にデータをグラフ化するだけでなく、統計処理も同時に学ぶ。マクロ・プログラムも勉強することで、アルゴリズムの考え方も身につくことを目標とする。</p>	
<b>授業計画</b>	
<p>第1回 イントロダクション</p> <p>第2回 情報の分析</p> <p>第3回 データの集計</p> <p>第4回 データ表示の仕方 (1)</p> <p>第5回 データ表示の仕方 (2)</p> <p>第6回 多次元の表の集計と表示</p> <p>第7回 グラフ作成 (1)</p> <p>第8回 グラフ作成 (2)</p> <p>第9回 マクロによる自動化 (1)</p> <p>第10回 マクロによる自動化 (2)</p> <p>第11回 ヒスト・グラム</p> <p>第12回 <math>\chi^2</math> 検定</p> <p>第13回 <math>t</math> 検定</p> <p>第14回 検定のまとめ</p> <p>第15回 総括</p>	
<b>事前事後学習</b>	
<p>講義時に次回予告があるので、事前学習としてインターネット等で用語等を調べておくこと。事後学習としては、講義時に渡すプリントに発展問題を用意している。</p>	
<b>テキスト</b>	
使用しない。	
<b>参考文献</b>	
適宜指示する。	
<b>成績評価</b>	
毎回の演習の貢献度と提出物により判定します。	

<b>授業科目名</b> ビジネス・リテラシー I	<b>単位数</b> <b>2 単位</b>
<b>担当教員名</b> 岩永祥三 (いわなが しょうぞう)	<b>開講期間</b> <b>春学期</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
成熟化社会への移行や財政悪化に伴う経済の縮退、消費構造の変化。グローバル化、IT化の進展による競争の激化。資源問題、世界人口増加、新産業の創出など、社会、経済の構造を変化させる要因を分析する能力を涵養し、今後の方向性を予測する基礎知識の習得を目指す。	
<b>授業の概要</b>	
本講義では、経済を取り巻く環境を俯瞰的かつ相互の関連を検証し、これまでの社会環境変化によって齎された経済、産業、業態、雇用、行政面への影響と市場環境の現状を数値的に検証する。また、地域、業態、企業の市場における個別事業体の比較優位性を検証し、その優位性について今後の変化への対応力を分析する。更に、成長産業の着眼点、新産業の動向についても、成長要因と成長度合い、幅を数値的に検証する。	
<b>授業計画</b>	
1. 社会構造変化の現状とその影響 第1回 成熟化社会への移行(人口動向・年齢別・地域別)の現状 第2回 成熟化社会への移行による経済環境の変化 第3回 財政悪化の現状と今後の動向並びに経済的影響範囲 第4回 グローバル化の進展による経済構造の変化 第5回 IT化がもたらす経済構造変化 第6回 流通環境の変化による経済構造の変化 第7回 経済構造の変化と雇用形態の変化 第8回 高度経済長と低成長経済の事業活動	
2. 新産業、成長産業の現状と成長要因 第9回 エネルギー革命・素材の発達と活用 第10回 食料生産、高齢化対応産業、観光産業	
3. 熊本県の産業別動向の変化とその変化への対応 主要産業の動向（農業・製造業・建設業・卸小売業・サービス業）と課題 第11回 県農水産業の現状と活性化対策 第12回 県工業界の産業構造変化への対応 第13回 県購買行動の変化と県外企業の進出による県内流通業の動向 第14回 県内サービス産業の構造変化とその変化への対応 第15回 県内観光産業の現状と活性化策	
<b>事前事後学習</b>	
各種統計によって社会構造変化の現状を把握 構造変化要因の検証と相互関連の確認	
<b>テキスト</b> 適宜要点をまとめた資料を配布	
<b>参考文献</b> なし	
<b>成績評価</b> 意見・レポート・受講への取り組み姿勢での評価	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
ビジネス・リテラシーⅡ	2 単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
高木奈穂 (たかき なほ)	秋学期
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>本講義では、社会人として組織に所属したり事業を起こす場面で出会う人との関わりを円滑に保つコミュニケーションとは何か、ビジネスシーンで必要なマナーとは何かを学び人間的資質を高めることができます。また、就職活動を行っている人に対しては個別に対応します。</p> <p>実際に社会に出て社交できるように体得し表現できるようになることが到達目標です。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>主な内容は、まず今朝の新聞で気になるニュースについて意見交換する事から始まりビジネスシーンでのコミュニケーションマナー（外見・行動・言葉）、ビジネス文書、ビジネス電話、ソーシャルスキル（社交術）、コミュニケーションスキルを学びます。就職活動に向けて実践的な取り組みも行います。</p>	
<b>授業計画</b>	
<p>第1回 オリエンテーション、ビジネスコミュニケーションスキルチェック</p> <p>第2回 第一印象の重要性、ビジネスシーンでのコミュニケーションマナー 外見</p> <p>第3回 ビジネスシーンでのコミュニケーションマナー 行動</p> <p>第4回 ビジネスシーンでのコミュニケーションマナー 言葉</p> <p>第5回 ビジネス電話の基本 電話の受け方、かけ方</p> <p>第6回 来客応対と訪問の流れと実際（席次、案内、応接対応、名刺対応、湯茶サービス等）</p> <p>第7回 ビジネス文書作成の基礎知識、ビジネス文書作成演習、メール対応</p> <p>第8回 ソーシャルスキル（社会人としての社交術）、冠婚葬祭と行事・儀礼（プロトコール）</p> <p>第9回 コミュニケーションスキル～自己認知と他者理解、交流分析</p> <p>第10回 コミュニケーションスキル～関係を良好に保つ聞くスキル</p> <p>第11回 コミュニケーションスキル～自己表現・話すスキル</p> <p>第12回 ソーシャルスキル（社会人としての社交術）、ビジネスシーンでの儀礼・行事</p> <p>第13回 就職活動理解、業界、企業研究</p> <p>第14回 就職活動に向けて自己理解、自分再発見、事前準備</p> <p>第15回 まとめ、就職活動に向けて面接対策、自己PR</p>	
<b>事前事後学習</b>	
新聞で気になるニュースをテーマに意見交換しますので、新聞を読んで参加してください。	
<b>テキスト</b>	
<p>～より良い人間関係を築く～M I C C S コミュニケーション 日本グラン・クール協会 高木奈穂著 1,000 円</p>	
<b>参考文献</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本放送協会編 日本語発音アクセント辞典</li> <li>・中経出版 上手な話しが面白いほど身につく本</li> <li>・主婦の友 冠婚葬祭 マナー事典</li> <li>・N E A T ビジネスマナー・テキスト</li> </ul>	
<b>成績評価</b>	
<p>授業態度や実践報告を重視。授業態度、実践報告（50%）+課題・テスト・レポート（50%）</p> <p>出席回数が6割に満たない者、課題・テスト・レポートの提出が全てなかつた者には原則として単位を与えません。</p>	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
ビジネス倫理	2 単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
貞松 茂 (さだまつ しげる)	秋学期
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>授業のテーマ：現代企業におけるビジネス倫理の実践とその課題</p> <p>授業の到達目標：ビジネス倫理に関する基本的な考え方の習得 企業におけるビジネス倫理の実践事例の研究 ビジネス・パーソンにとっての倫理と実践における問題点の考察</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>企業には、提供する商品・サービスをはじめ環境、労働・人権、地域社会などに係って社会的責任がある。それは、広くビジネス倫理に係る事柄であり、企業が経営活動を行っていくにあたって最も規範としている筈の経営理念の問題でもある。本講義では、企業が経営理念にも係るビジネス倫理についてどのような基本的な考え方を持っているか、それを企業行動のなかでどのように実践しているか、そしてそこには、当該会社および地域経済・地域社会にとってどのような意義があるのか、またどのような問題点があるのかを考察していく。</p>	
<b>授業計画</b>	
<p>第1回 ビジネス倫理とは何かー問題と背景</p> <p>第2回 A企業のビジネス倫理に関する基本的な考え方と実践状況</p> <p>第3回 A企業におけるビジネス倫理の当該会社および地域経済・地域社会にとっての意義と問題点</p> <p>第4回 B企業のビジネス倫理に関する基本的な考え方と実践状況</p> <p>第5回 B企業におけるビジネス倫理の当該会社および地域経済・地域社会にとっての意義と問題点</p> <p>第6回 C企業のビジネス倫理に関する基本的な考え方と実践状況</p> <p>第7回 C企業におけるビジネス倫理の当該会社および地域経済・地域社会にとっての意義と問題点</p> <p>第8回 D企業のビジネス倫理に関する基本的な考え方と実践状況</p> <p>第9回 D企業におけるビジネス倫理の当該会社および地域経済・地域社会にとっての意義と問題点</p> <p>第10回 E企業のビジネス倫理に関する基本的な考え方と実践状況</p> <p>第11回 E企業におけるビジネス倫理の当該会社および地域経済・地域社会にとっての意義と問題点</p> <p>第12回 F企業のビジネス倫理に関する基本的な考え方と実践状況</p> <p>第13回 F企業におけるビジネス倫理の当該会社および地域経済・地域社会にとっての意義と問題点</p> <p>第14回 レポートとディスカッションⅠ</p> <p>第15回 レポートとディスカッションⅡ</p>	
<b>事前事後学習</b>	
<p>準備されている資料を中心に内容を聞き、理解を深めるとともに、質疑応答にてさらに一層理解を深める。</p>	
<b>テキスト</b>	
使用せず。	
<b>参考文献</b>	
各企業の提示する最新の資料。	
<b>成績評価</b>	
平常点、討論、レポートなどによって総合的に評価する。	

<b>授業科目名</b> 流通論基礎特殊研究	<b>単位数</b> <b>2 単位</b>
<b>担当教員名</b> 北原明彦 (きたはら あきひこ)	<b>開講期間</b> <b>春学期</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
流通を消費者の視点からとらえ、改良点を指摘できるようになることが本講義参加者の到達目標となる。	
<b>授業の概要</b>	
生産者と消費者を結ぶ流通業とはどのような存在であるか？流通の役割、消費者との関係などの基本からの問題意識に基づき、流通の実態、出店調整・競争、流通政策とまちづくり等の政府主導の流通政策の意味、それらの消費者への影響をわかりやすく解説されたテキストを解説しながら進行させる。	
<b>授業計画</b>	
第1回 流通・マーケティングと消費者	
第2回 消費者利益・社会利益と流通の役割	
第3回 生産と消費と流通の概念	
第4回 直接流通と間接流通	
第5回 流通チャネルの役割	
第6回 流通チャネル政策	
第7回 流通と情報	
第8回 流通国際化	
第9回 卸売流通と小売流通	
第10回 流通システムとグローバリゼーション	
第11回 中小小売商保護政策	
第12回 流通近代化政策と出店調整時代	
第13回 規制緩和時代と競争の時代	
第14回 百貨店法と大店法と中小小売商業振興法	
第15回 中心市街地活性化法、改正都市計画法	
<b>事前事後学習</b>	
事前学習として、商学、流通論、マーケティングの基本的枠組みを覚えるための指導を行なう。事後学習として、さらに深く勉強するための課題を指示します。	
<b>テキスト</b>	
授業中の配布資料を使用	
<b>参考文献</b>	
授業中の配布資料を使用	
<b>成績評価</b>	
受講態度と提出物	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
会計ファイナンス基礎特殊研究	2 単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
安田嘉明 (やすだ よしあき)	春学期
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>銀行経理の視点から会計ファイナンス基礎特殊研究を進めていく。</p> <p>銀行経理は、資金仲介業務に基づく「資金取引」を中心とした営業活動や高いレベルの社会性・公共性の実現といった銀行経営の特徴を反映したものとなっている。授業ではそうした、銀行経理の特徴を踏まえながら、銀行の財務諸表や諸経営指標を読みこなし、分析する能力の修得を目指す。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>授業では、個別銀行の財務関係資料を使い研究を進めていく。主として九州の地域金融機関のディスクロージャー誌および決算短信を分析の材料として使う予定である。</p> <p>銀行経営においては、業務粗利益、コア業務純益、総資金利鞘、OHR、信用コスト、不良債権比率、自己資本比率等が注目されており、授業でもそうした指標の把握・分析が中心となる。その他、金融庁、日本銀行、預金保険機構、全国銀行協会がネット上に公開しているデータも使い、より幅広い、詳細な分析を目指す。</p>	
<b>授業計画</b>	
第1回 銀行の資産・負債・純資産構造について (資産勘定) 第2回 銀行の資産・負債・純資産構造について (負債勘定) 第3回 銀行の資産・負債・純資産構造について (純資産勘定) 第4回 銀行の利益構造について (業務粗利益、業務純益、コア業務純益) 第5回 銀行の利益構造について (経常利益、当期純利益) 第6回 銀行の経営指標について (収益性・流動性の指標) 第7回 銀行の経営指標について (健全性の指標) 第8回 個別銀行の資産・負債構造分析 (貸出金の状況、預金の状況) 第9回 個別銀行の資産・負債構造分析 (資産運用商品の状況、有価証券の状況) 第10回 個別銀行の純資産構造分析 (自己資本の状況) 第11回 個別銀行の利益構造分析 (業務粗利益、経費の状況) 第12回 個別銀行の利益構造分析 (信用コストの状況、臨時損益等及び特別損益の状況) 第13回 個別銀行の収益性・流動性指標の分析 (預貸率、預証率、経常利益率、利率、総資金利鞘) 第14回 個別銀行の健全性指標の分析 (不良債権比率、自己資本比率) 第15回 まとめ	
<b>事前事後学習</b>	
事前にテキストの該当箇所を読み、疑問点をまとめておくこと。事後に講義で指示する資料、文献、ネット上のデータにより講義内容を確認すること。	
<b>テキスト</b>	
銀行経理問題研究会編 『銀行経理の実務 第8版』 (社) 金融財政事情研究会	
<b>参考文献</b>	
全国銀行協会金融調査部編 『図説 わが国の銀行』 財経詳報社 金融庁、日本銀行、預金保険機構、全国銀行協会等の統計資料 各行ディスクロージャー誌	
<b>成績評価</b>	
平常点(授業への参加態度など) および小テスト(レポートの場合もある)により総合的に判断する。	

<b>授業科目名</b> 経営学基礎特殊研究	<b>単位数</b> 2 単位
<b>担当教員名</b> 喬 晋 建 (キヨウ シンケン)	<b>開講期間</b> 春学期
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
経営学の発展歴史を大雑把に把握でき、いくつかの重要な理論の概念と体系と応用分析法を理解できるようになります。また、本講義を受講すれば、最も重要な経営理論の内容を原著者の文章表現（日本語と英語の両方）で理解することができます。学問の輝きを見せる同時に、興味ある学生のさらなる探究に便利な手がかりを提供します。	
<b>授業の概要</b>	
大学院一年生を受講対象者とする本講義は、初心者向けの科目として、経営管理の全般に関する基礎理論について、人物・理論・原著の三位一体の形でわかりやすく解説します。具体的には、まずさまざまな重要な理論が生まれた時代的背景と偉大な先駆者たちの人物像を紹介して学生の興味を引き起します。次にはそれぞれの先駆者の経営思想の体系をできるだけ正確に、かつ丁寧に解説するように心かけます。そして、一部の重要なコンセプトについては、原著（邦訳版と英語版の両方）の文章表現を引用する形で内容の充実さと信憑性の補強を図ります。	
<b>授業計画</b>	
第1回 授業内容の紹介と注意事項	
第2回 Taylor の科学的管理法	
第3回 Fayol の管理論	
第4回 Ford のフォード・システム	
第5回 映像番組学習と宿題	
第6回 Mayo の人間関係論	
第7回 Maslow の欲求階層説	
第8回 McGregor の X 理論・Y 理論	
第9回 Herzberg の動機づけ・衛生理論	
第10回 映像番組学習と宿題	
第11回 Barnard の公式組織論（1）	
第12回 Barnard の公式組織論（2）	
第13回 Simon の意思決定論（1）	
第14回 Simon の意思決定論（2）	
第15回 映像番組学習と宿題	
<b>事前事後学習</b>	
授業前に教科書の内容を予習し、質問事項を用意しましょう。	
授業後に関連の文献を読み、理解度を深めましょう。	
また、宿題（レポート）は必ず提出しなくてはなりません。	
<b>テキスト</b>	
喬晋建(2011)『経営学の開拓者たち：その人物と思想』日本評論社	
<b>参考文献</b>	
岸田民樹・田中政光著(2009)『経営学説史』有斐閣	
渡辺峻ほか編著(2003)『マネジメントの学説と思想』ミネルヴァ書房	
<b>成績評価</b>	
授業参加、宿題、プレゼンテーションなどを合わせて総合的に評価する。	

<b>授業科目名</b> <b>情報基礎特殊研究</b>	<b>単位数</b> <b>2 単位</b>
<b>担当教員名</b> <b>米川 清 (よねかわ きよし)</b>	<b>開講期間</b> <b>春学期</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>コンピュータを利用した仕事の効率改善について考えよう、というのが目的である。</p> <p>仕事の進め方をさまざまな角度から見ることにより、システム化によってどの部分をどの程度効率化することができるのかをテーマとしたい。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>初心者のための IT を論じる。前半は、IT やソフトウェア業界の最新動向についての話題をとりあげて、話し合う。ネットワーク、コミュニティー作り、どのように知恵を総合化するかについて考えたい。後半では、IT の利用者サイドの立場から IT を活用することで、より効率的な仕事の処理を実現するための基本的な考え方について論じる。IT 利用の最大の目的は、業務の効率改善である。自分自身が担当している業務上の問題点を発見し、それを解決していくためのいくつかの手法（初級シニアドの午後試験の「仕事とコンピュータに関すること」）について学習する。</p>	
<b>授業計画</b>	
<p>第1回 IT・ソフトウェア業界の仕事</p> <p>第2回 IT・ソフトウェア業界の現在</p> <p>第3回 IT・ソフトウェア業界の成り立ち</p> <p>第4回 IT・ソフトウェア業界の職種</p> <p>第5回 IT・ソフトウェア業界の採用動向</p> <p>第6回 IT・ソフトウェア業界の注目企業</p> <p>第7回 IT・ソフトウェア企業</p> <p>第8回 経営戦略と情報戦略</p> <p>第9回 ポートフォリオ分析</p> <p>第10回 企業会計</p> <p>第11回 PDCA サイクルとオペレーションズ・リサーチ (OR)</p> <p>第12回 E-R 図と DFC モデル化</p> <p>第13回 QC と TQC</p> <p>第14回 データの整理・分析技法</p> <p>第15回 工程管理の技法</p>	
<b>事前事後学習</b>	
授業後に、箇条書きのレポートを提出すること	
<b>テキスト</b>	
前半は後日、指定する。後半は、その都度配布	
<b>参考文献</b>	
特にはない	
<b>成績評価</b>	
レポートと授業における積極的参加態度	

<b>授業科目名</b> ビジネス法基礎特殊研究	<b>単位数</b> <b>2 単位</b>
<b>担当教員名</b> 城戸善和（きど よしかず）	<b>開講期間</b> <b>春学期</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
ビジネス活動がどのような法律に関わるのか、また、それぞれの法律の基本的な考え方、法的紛争の解決方法についての理解を目標とする。	
<b>授業の概要</b>	
企業のビジネス活動は、多くの法律に関わりをもつ。そこで、ビジネス法の理解のために、最初に法制度の基本的仕組みを説明する。次に、商法や会社法の土台となる民法を契約を中心に考える。ビジネス法の中核となる商法や会社法について学ぶとともに、金融商品取引法、独占禁止法、特許法、手形法など関連する法律について視野を広げていく。また、ビジネス法に関わる時事問題を新聞報道などを利用して考え、講義の理解の助けとする。最後に、ビジネス活動によって生まれる法的紛争の解決手段を訴訟と訴訟以外のものに分け検討する。	
<b>授業計画</b>	
第1回 講義の基本方針・方法の説明	
第2回 法制度の基本	
第3回 ビジネスにおける契約	
第4回 企業の法的諸形態	
第5回 ビジネスと商法	
第6回 会社法の概要	
第7回 会社法の諸問題	
第8回 金融商品取引法の概要	
第9回 金融商品取引法の諸問題	
第10回 ビジネスと独占禁止法	
第11回 ビジネスにおける知的財産権	
第12回 決済手段としての手形・小切手	
第13回 ビジネスにおける保険の役割	
第14回 法的紛争の解決手段	
第15回 ビジネス法のまとめ	
<b>事前事後学習</b>	
事前事後にテキストの該当箇所を読む。	
<b>テキスト</b>	
山川一陽他編著『ビジネス法務の基礎知識（第2版）』弘文堂 2,268円	
<b>参考文献</b>	
適宜紹介する。	
<b>成績評価</b>	
討論等への参加態度によって評価する。	

<b>授業科目名</b> <b>経済学基礎特殊研究</b>	<b>単位数</b> <b>2 単位</b>
<b>担当教員名</b> <b>中野 元 (なかの はじめ)</b>	<b>開講期間</b> <b>秋学期</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>授業のテーマは、リーマン・ショック後世界的な不況に陥っている現代経済の基本的なシステムをまず考察することである。その際に、経済学の基礎概念をいろんな側面から検討する。特に産業組織論や立地論などをベースにしながら、現代経済の基本的運動メカニズムを考察する。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>この講義での目標は、第一は現代の経済現象を分析するために不可欠な経済学の基礎概念を理解することであり、第二はその上で現代資本主義社会における資本の運動の基本的メカニズムを考察することである。</p> <p>その場合、現代資本主義の諸現象を絶えず表象＝イメージにおきながら、経済学の基礎的な理解を深めることができれば、と考えている。また、現代資本主義の総体をグローバル化の流れのもとで概括的に把握したい。いずれにしても、経済学の基礎的な理解をベースに講義を進めながらも、諸資本の競争と独占、それをめぐる産業政策と再編について考察し、現代資本主義の歴史的段階を概観するとともに、今日の世界不況についても言及してみたい。</p>	
<b>授業計画</b>	
<p>第1回 講義の目的・概要の説明（毎回、レジュメを作成して報告・討論を行う）</p> <p>第2回 市場メカニズム（テキストの要約と討論）</p> <p>第3回 具体的な時事問題、経済現象をとり上げ、市場問題を中心に検討する</p> <p>第4回 企業の行動と経営戦略（テキストの要約と討論）</p> <p>第5回 産業構造、企業行動、市場成果について、具体的な事象をとり上げ検討する</p> <p>第6回 国の経済活動状況（テキストの要約と討論）</p> <p>第7回 国際経済における企業行動と国民経済力の関連を具体的な事象で検討する</p> <p>第8回 経済社会の発展とビジネス環境（テキストの要約と討論）</p> <p>第9回 経済のグローバル化の論理（テキストの要約と討論）</p> <p>第10回 企業のグローバル化、経済社会のグローバル化－現代的問題について検討する</p> <p>第11回 経済のローカル化の論理（テキストの要約と討論）</p> <p>第12回 立地論、地域経済の考え方をベースに、ローカル化の独自の内容を検討する</p> <p>第13回 グローカル時代の企業と経済社会（テキストの要約と討論）</p> <p>第14回 現代資本主義の歴史段階と世界不況について検討する</p> <p>第15回 まとめ－全体を通じての問題整理、授業進行などの相互討論－</p>	
<b>事前事後学習</b>	
新聞などで時事問題に興味を持つようにすること。できればノートにまとめたりして活用する。	
<b>テキスト</b>	
『エコノミスト』等雑誌や現代経済学に関する文献を適宜講義の中で指定する。	
<b>参考文献</b>	
鈴木洋太郎 『マネジメントの経済学』 ミネルヴァ書房 2,500 円、その他	
<b>成績評価</b>	
授業への参加姿勢として平常点により判断する。討論への参加、レジュメの作成など総合的に判断する。	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
会社法特殊研究	4 単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
城戸善和 (きど よしかず)	通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
会社法の概要の理解と会社法の制定および平成 26 年会社法改正がなされなければならなかった背景の理解、そして会社法の利点や問題点について自分自身の考え方をもつことを目標とする。	
<b>授業の概要</b>	
会社法は企業の法制度を大きく変化させている。会社法以前においても、商法とその周辺の法律の改正が繰り返されてきた。これらの改正には、法や定款の遵守による健全な企業経営の実現を目指すものと、会社の設立や経営の柔軟さを重視するものとがある。会社法はその両方の改正の集大成である。そして、平成 26 年に重要な改正がなされた。会社法の制定やこの改正によってもたらされた制度の変化や新設された制度が、どのような目的をもっているのか、どのような影響を企業経営に及ぼすのか、それらをどのように企業経営において活用していくべきなのかについて検討する。	
<b>授業計画</b>	
第 1 回 講義の基本方針・方法の説明	第16回 株式会社の機関構成の概要
第 2 回 法体系における会社法の位置づけ	第17回 伝統的な株式会社の機関構成
第 3 回 会社法の概要	第18回 大会社の機関構成
第 4 回 会社法の基本理念	第19回 大会社でない会社の機関構成
第 5 回 平成 26 年会社法改正の概要	第20回 指名委員会等設置会社の機関構成
第 6 回 会社法制定の背景	第21回 監査等委員会設置会社の機関構成
第 7 回 平成 26 年会社法改正の背景	第22回 株式に関わる諸制度
第 8 回 商法改正の変遷	第23回 株式会社の資金調達方法
第 9 回 会社法の利点	第24回 敵対的買収への対抗策
第 10 回 会社法の問題点	第25回 会社法に関わる時事問題
第 11 回 会社法に関わる時事問題	第26回 会社法における会社設立
第 12 回 株式会社と持分会社	第27回 会社法における組織再編
第 13 回 会社法における持分会社	第28回 国際社会と会社法
第 14 回 企業の社会的責任	第29回 会社法に関わる時事問題
第 15 回 会社法に関わる時事問題	第30回 会社法のまとめ
<b>事前事後学習</b>	
事前事後にテキストの該当箇所を読む。	
<b>テキスト</b>	
宍戸善一 『ベーシック会社法入門（第 7 版）』日本経済新聞出版社 1,080 円	
<b>参考文献</b>	
江頭憲治郎 『株式会社法 第 6 版』 有斐閣 6,048 円 坂本三郎編著 『一問一答 平成 26 年改正会社法（第 2 版）』 商事法務 3,888 円	
<b>成績評価</b>	
討論等への参加態度によって評価する。	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
<b>労働法特殊研究</b>	<b>4 単位</b>
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
<b>遠藤隆久</b> (えんどう たかひさ)	<b>通年</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>今、世界は資本主義は果たして人びとを幸福にする体制であるのかという根本的な疑いが芽生えている。グローバルに広がる資本主義競争によって貪欲な資本の動きに歯止めが掛からなくなっているからである。今日の労働問題で生じている規制緩和もグローバルな競争を無視しては考えられない。ではその結果、何が生じたかといえば、世界的な規模でも国内でも格差社会問題である。これは競争社会がもたらした結果なのか、資本主義に帰因する出発点の問題なのか、トマ・ピケティはこの問題に挑んだ一人であり、今、世界的に注目されているフランスの経済学者である。</p> <p>この講義では、ピケティの本を手懸かりに、労働格差の問題をじっくり考えて行きたい。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>トマ・ピケティの『21世紀の資本』を丁寧に読みながら、ピケティの唱える格差社会の広がる要因をめぐる議論を考える。その間に、日本の格差拡大をめぐる問題点についても考えて行きたい。</p>	
<b>授業計画</b>	
第1回 ピケティの紹介	第16回 第10章-2
第2回 第1章	第17回 第11章-1
第3回 第2章-1	第18回 第11章-2
第4回 第2章-2	第19回 第12章-1
第5回 第I部のまとめ	第20回 第12章-2
第6回 第3章	第21回 第III部のまとめ
第7回 第4章	第22回 第13章
第8回 第5章	第23回 第14章
第9回 第6章-1	第24回 第15章
第10回 第6章-2	第25回 第16章
第11回 第II部のまとめ	第26回 第IV部のまとめ
第12回 第7章	第27回 おわりに
第13回 第8章	第28回 『21世紀資本』のまとめ
第14回 第9章	第29回 ピケティがどのように読まれているか
第15回 第10章-1	第30回 日本にとっての格差社会の現状と解題
<b>事前事後学習</b>	
<p>(事前学習) 授業の前にいつでもレジュメとして報告資料にできるよう課題をノートをとりながら、まとめてくること。</p> <p>(事後学習) 授業が終わったその日のうちに、事前学習で読み解けなかったことを確認するために再度、課題図書を読み直す習慣をつけること。</p>	
<b>テキスト</b>	
トマ・ピケティ『21世紀の資本』(みすず書房刊)他	
<b>参考文献</b>	
講義の中で適宜、紹介する。	
<b>成績評価</b>	
発表で成績評定します。	

<b>授業科目名</b> <b>会社税法特殊研究</b>	<b>単位数</b> <b>4 単位</b>
<b>担当教員名</b> <b>末永英男 (すえなが ひでお)</b>	<b>開講期間</b> <b>通年</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
法人に係わる税制を概観し、租税法原理や法人課税の特徴を理解することを目標とする。できれば、租税法律主義や租税公平主義の下での課税権行使のあり方や税負担配分の原則について考えて欲しい。	
<b>授業の概要</b>	
わが国法人税制全般について学んだ後、法人税法上の課税所得の計算構造の究明を目的として、歴史、租税法、判例、租税理論、会計理論に基づいたアプローチで検討を行う。 (1) わが国の租税制度 (2) 消費税の仕組みと問題点 (3) 相続税（贈与税）と財産評価 (4) 法人税法における課税所得計算原理の究明 上記を講義内容とするが、租税法は法であり税であるので、民法・会社法や租税理論（財政学）の基本的知識を必要とする。したがって、幅広い勉強を期待したい。 最新の条文が載っている税務六法を購入のうえ、毎回の持参が必要である。判例や通達等については、必要に応じ適宜対応する。	
<b>授業計画</b>	
第1回 現代国家と租税	第16回 法人税法 (3) 益金の額
第2回 租税法の意義と特色	第17回 " (4) 損金の額 ①減価償却
第3回 わが国租税制度の発達（戦前）	第18回 " (5) 損金の額 ②役員給与等
第4回 わが国租税制度の発達（戦後）	第19回 " (6) 損金の額 ③寄附金と交際費
第5回 租税法律主義と課税の公平（1）	第20回 " (7) 組織再編税制
第6回 租税法律主義と課税の公平（2）	第21回 " (8) 國際課税
第7回 租税法の解釈と適用	第22回 相続税法 (1) 相続税と所得税
第8回 課税要件	第23回 " (2) 財産の評価
第9回 所得税法 (1) 意義、類型、課税単位	第24回 消費税法 (1) 構造と問題点
第10回 " (2) 基本的仕組み	第25回 " (2) 税額の計算と税額控除
第11回 " (3) 紙与所得	第26回 租税の賦課と徴収 (1) 申告納税制度
第12回 " (4) 譲渡所得	第27回 " (2) 推計課税
第13回 " (5) 収入金額と必要経費	第28回 " (3) 質問検査権
第14回 法人税法 (1) 意義（統合論）	第29回 " (4) 更正決定
第15回 " (2) 企業利益と課税所得	第30回 " (5) 納付と徴収
<b>事前事後学習</b>	
テキストの該当箇所を事前に学習すること。テキスト以外のテーマについては関連する資料等を前回に指示するのでそれで事前学習する。事後学習は毎回配布するレジュメで行なう。	
<b>テキスト</b>	
末永英男 『法人税法会計論』(第7版) 中央経済社 別冊ジュリスト 『租税判例百選』(第5版) 有斐閣	
<b>参考文献</b>	
金子 宏 『租税法』 弘文堂 酒井克彦 『ステップアップ 租税法』 財経詳報社	金子 宏他 『ケースブック租税法』 有斐閣
<b>成績評価</b>	
成績評価は、平常点により判断する。講義中の討論の内容およびレポートで総合評価する。	

<b>授業科目名</b> <b>経営社会システム論特殊研究</b>	<b>単位数</b> <b>4 単位</b>
<b>担当教員名</b> <b>米川 清（よねかわ きよし）</b>	<b>開講期間</b> <b>通年</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>(1) 企業の本質は何かを理解すること。</p> <p>(2) 企業経営は経済学的にはどのように把握され、分析可能かを理解すること。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>ミクロ経済学を基礎として、企業目的、経営戦略、企業行動等について、基本文献を踏まえ経済学的分析を行う。</p>	
<b>授業計画</b>	
第1回 企業はなぜ、存在するのか (1)	第16回 取引費用経済学 (1)
第2回 企業はなぜ、存在するのか (2)	第17回 取引費用経済学 (2) : 機会主義—資産特
第3回 企業の目的：バーナードの協働システム	殊性と垂直統合
第4回 企業の構造：バーナードの公式組織と非公式組織	第18回 進化経済学：ネルソン＝ワインター、シ
第5回 企業の環境への適応	ュンペーターのイノベーション
第6回 企業戦略 (1) : 競争の戦略	第19回 マクロ経済学のミクロ的基礎
第7回 企業戦略 (2) : 行動経済学のフレーミング効果	第20回 小括
第8回 企業戦略 (3) : 製品の設計思想	第21回 企業の境界：関係的契約と組織ガバナン
第9回 小括	ス
第10回 ミクロ経済学 (1) : 新古典派の最大化仮説	第22回 意思決定：事実前提と価値前提
第11回 ミクロ経済学 (2) : ゲーム理論	第23. 24. 25回 補論 (3回)
第12回 ミクロ経済学 (3) : 限定合理性と満足化原理	第26. 27. 28回 企業と市場、企業行動、組織の
第13回 経営組織 (1) : 無関心圏とオーソリティ	意思決定過程の視点から論点
第14回 経営組織 (2) : サイモンの利他主義モデル	整理
第15回 経営組織 (3) : 内部労働システム	第29. 30回 時間的余裕があれば、組織均衡、制
	約目標と組織スラックについて
<b>事前事後学習</b>	
授業後に、箇条書きのレポートを提出すること。	
<b>テキスト</b>	
新原浩朗著『日本の優秀企業研究』、日経ビジネス文庫。	
<b>参考文献</b>	
ハーバート・A・サイモン著『新版 経営行動』、ダイヤモンド社	
<b>成績評価</b>	
レポートと授業における積極的参加態度。	

<b>授業科目名</b> 経営社会システム論特殊研究演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 米川 清 (よねかわ きよし)	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>「古い組織から新しい組織への進化」がなぜ起きるのか。これが研究目的である。</p> <p>様々なシステム論を実態としての企業社会システムに関連づけて、企業と社会システムの関係やあり方について考えてゆく。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>戦後 60 年のシステム論の発展過程を回顧すると、等結果性、最小多様度の法則、ホロン、ゆらぎ、自己言及性というような時代を輪切りにする折々のキーワードが思い浮かぶ。システム論の言葉が社会科学の中で無条件に受諾され、定着し始めたのは 1980 年代からである。組織論では「カオス」「フラクタル」「相転移」「非線形非平衡」など、自然科学の専門用語が流布した。こうした潮流は「古い組織から新しい社会組織への進化」を概念分析するためには必然であった。上記文脈からシステム論の諸概念を実体としての企業社会システムに関連づけて、企業と社会システムとの関係やあり方について考えてみたい。</p>	
<b>授業計画</b>	
<p>1年次</p> <p>&lt;春学期&gt;</p> <p>一般システム論、サイバネティックスの研究</p> <p>&lt;秋学期&gt;</p> <p>ネルソン＝ウィンターの「経済変動の進化理論」の研究</p>	
<p>2年次</p> <p>&lt;春学期&gt;</p> <p>修士論文の構成、 中間報告</p> <p>&lt;秋学期&gt;</p> <p>修士論文の執筆</p>	
<b>事前事後学習</b>	
富永健一著『行為と社会システムの理論』、東京大学出版会を一読されたい。	
<b>テキスト</b>	
適宜指示する。	
<b>参考文献</b>	
適宜指示する。	
<b>成績評価</b>	
提出論文によって評価する。	

<b>授業科目名</b> <b>労務管理論特殊研究</b>	<b>単位数</b> <b>4 単位</b>
<b>担当教員名</b> <b>今村寛治（いまむら かんじ）</b>	<b>開講期間</b> <b>通年</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
労働力の効率的利用を目標とする労務管理の展開を具体的に理解する。	
<b>授業の概要</b>	
本講義では、自動車産業を主要な舞台として労務管理の歴史的発展を考察する。その際、日本、アメリカ、ヨーロッパの三極を視野に入れ、これまで同産業の支配的な生産システムでありつづけてきたフォード・システム（アメリカ）の生成と衰退の過程を、そのオルタナティブとして注目されているいくつかの生産システム、具体的には、トヨタ・システム（日本）およびボルボ・システム（スウェーデン）との絡み合いのなかで研究する。	
<b>授業計画</b>	
第1回 ガイダンス	第16回 日本型生産システム（トヨタ・システム）
第2回 フォード・システム前夜	第17回 日本の自動車産業のグローバル化
第3回 フォード・システムの誕生	第18回 日本の自動車産業の変容
第4回 フォード・システムの内実	第19回 日本の自動車産業の課題
第5回 GMの台頭	第20回 スウェーデンにおける自動車産業の誕生
第6回 GMの戦略	第21回 スウェーデン自動車産業通史
第7回 第2次大戦後のアメリカ自動車産業	第22回 労働の人間化
第8回 アメリカ自動車産業の寡占化	第23回 ボルボ・システム
第9回 日米の自動車産業	第24回 カルマル工場
第10回 アメリカ自動車産業の変容	第25回 ウデバラ工場
第11回 日本における自動車産業の誕生	第26回 スウェーデン自動車産業のその後
第12回 トヨタ	第27回 3つの生産システム①
第13回 日産	第28回 3つの生産システム②
第14回 ホンダ	第29回 全体のまとめ①
第15回 日本の自動車産業の勃興	第30回 全体のまとめ②
<b>事前事後学習</b>	
テキストを事前に読み、授業で議論するポイントをまとめてくること。	
<b>テキスト</b>	
適宜指示する。	
<b>参考文献</b>	
適宜指示する。	
<b>成績評価</b>	
平常点や報告内容等を総合的に評価する。	

<b>授業科目名</b> 労務管理論特殊研究演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 今村寛治（いまむら かんじ）	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> 日本の労務管理とは何か、そしてそれは今後どのように変化していくのかを探る。	
<b>授業の概要</b> バブル崩壊後の不況、IT革命、グローバリゼーション、少子高齢化の進展といった環境変化によって、日本の労務管理の大々的な見直しが進んでいる。そこで本演習では、これまで内外のスタンダードの地位にあった日本の労務管理が現在どのような変化を見せているのかを、雇用形態、賃金決定の基準、労働時間の柔軟化、労使関係の変容といった点から確認する。そしてそのような変化が、企業や労働者を含む社会にいかなる影響を与えるのかを、文献サーベイや資料収集を通して考察していく。	
<b>授業計画</b> 1年次 <春学期> 日本の労務管理に関する理論的サーベイ <秋学期> 日本の労務管理に関する資料・データ収集 2年次 <春学期> 修士論文の作成準備 <秋学期> 修士論文の作成	
<b>事前事後学習</b> 授業で議論するポイントを事前にまとめてくること。	
<b>テキスト</b> 適宜指示する。	
<b>参考文献</b> 適宜指示する。	
<b>成績評価</b> 平常点や報告内容等を総合的に評価する。	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
経営組織論特殊研究	4 単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
中野裕治 (なかの ひろはる)	通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
企業不祥事があとを絶たない。組織の問題か、人の問題か、それとも経営理念の欠如の問題か。かかる問題解決へ向けて経営学はいかなる提言が可能か。その糸口を先人たちに学びたい。テキスト『経営哲学の授業』を素材に「実践科学」としての経営学を学ぶ。	
<b>授業の概要</b>	
春学期は、第一部経営哲学の「現場」を迎る、において、稻盛和夫、ジャック・ウェルチ、松下幸之助等の経営哲学を学ぶ。彼らがいかなる想いで経営にあたったのかを知ることによって、今日の経営者たちの在り方を問うことになる。秋学期は、第二部経営哲学をめぐる議論、および第三部いま、経営哲学に何ができるか、においてバーナード、ドラッカー、ウェブレン、ヴェーバー等のエッセンスと経営哲学の今後の展開について学ぶ。	
<b>授業計画</b>	
第1回 由井常彦：日本の経営者の経営哲学	第16回 いま何故経営哲学か
第2回 稲盛和夫の経営哲学	第17回 経営哲学とバーナード
第3回 サムスン：李健ヒ会長	第18回 ドラッカーの経営哲学
第4回 ジャック・ウェルチの経営哲学	第19回 ニックリッシュと経営哲学
第5回 小倉昌男の経営哲学	第20回 ハイエクの経営哲学
第6回 松下幸之助の経営哲学	第21回 ウェブルンと経営哲学
第7回 渋沢栄一と福沢諭吉	第22回 スピリチュアリティと経営
第8回 ヘンリー・フォードの経営哲学	第23回 経営理念の創造的プロセス
第9回 アンドリュー・カーネギーの経営哲学	第24回 マックス・ヴェーバー
第10回 アルフレッド・P・スローンJr.	第25回 ケイパビリティと経営
第11回 出光佐三の経営哲学	第26回 バーリ=ミーンズ現代資本主義
第12回 大塚萬丈の経営哲学	第27回 経営哲学学会の歴史
第13回 武藤山治の経営哲学	第28回 経営哲学の未来に向けて
第14回 日立：小平浪平	第29回 経営者自治統治論の「これから」
第15回 野中郁次郎が語る	第30回 ステークホルダー論「これから」
<b>事前事後学習</b>	
テキストの予習・復習。キーワード集の作成。	
<b>テキスト</b>	
経営哲学学会編『経営哲学の授業』 PHP 研究所 ¥1,900	
<b>参考文献</b>	
①野中郁次郎『経営は哲学なり』ナカニシヤ出版 ¥2,000 ②日本経済新聞社『日本の経営者』日経文庫 ¥860	
<b>成績評価</b>	
授業における参加態度ならびにレポートの評価。	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
経営組織論特殊研究演習	2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
中野裕治 (なかの ひろはる)	通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
修士論文作成へ向けたテーマ設定、資料収集、論述方法の修得を目標とする。その際留意すべきは、理論と実際、歴史と現実を見据えた透徹したバランス感覚にあると心得る。	
<b>授業の概要</b>	
1000兆円超にもおよぶ財政赤字（地方を含む長期債務残高）をかかえた日本政府は、たとえば国立大学の独立行政法人化に見られるように、極力財政支出をおさえつつ、他方で民間活力の最大限の利用と地域の活性化に活路をもとめているようである。しかし日本経済の牽引者たるべき企業経営はどうかというと、東日本大震災の復旧・復興が儘ならぬ中、世界同時不況の影響下で厳しい状況が続いている。そんな中、依然大企業を中心にはや「従来型」の経営方式では駄目だという気運が一層高まり、取締役会のスリム化と機動性の確保、社外取締役、監査の強化はじめ、年功賃金から能力主義ないし成果主義賃金への組み換え、「非正規」労働者の大幅な導入等の試みが続いている。これらの種々の試みがいわゆる「日本型」経営といわれてきたわが国の企業組織および働く人々にいかなるインパクトを与えてきたのか、そして何処に向かおうとしているのか、更にはアベノミクスの功罪が演習のテーマとなる。前期は主として現状分析、そして後期は理論的考察をおこなう。	
<b>授業計画</b>	
1年次	
<春学期>	
・下記テキスト『日本の企業統治と雇用制度のゆくえ』を用いて著者のいう「ハイブリッド組織」とは何かを問う。併せて、10年後の日本の雇用制度について考察する。他方、修士論文につながる領域の資料収集をおこなう。	
<秋学期>	
・修士論文の具体的テーマを設定する。 ・関連する文献等資料収集をおこなう。 ・論文作成方法について指導する。	
2年次	
<春学期>	
・標題および構成を作成し、各章に分けて参考文献等資料を揃える。	
<秋学期>	
・修士論文完成へ向けて、章各に中間報告を重ねる。	
<b>事前事後学習</b>	
事前：テキストに登場する人物について、独自に下調べをしておくこと。 事後：専門用語カードを作成すること。	
<b>テキスト</b>	
宮本光晴著『日本の企業統治と雇用制度のゆくえ』 ナカニシヤ出版 2,800円	
<b>参考文献</b>	
野中郁次郎編『経営は哲学なり』 ナカニシヤ出版 2,000円	
<b>成績評価</b>	
平常点および報告を含め、総合的に評価する。	

<b>授業科目名</b> <b>経営管理論特殊研究</b>	<b>単位数</b> <b>4 単位</b>
<b>担当教員名</b> <b>喬 晋 建 (キョウ シンケン)</b>	<b>開講期間</b> <b>通年</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>近年には、地方の町に暮らす私たちの周りにもメイドインチャイナの商品が溢れ、中国ビジネスにかかる人が日増しに増えつづけ、中国ビジネスなしには暮らしが成り立たないほど日中両国間の経済的な結びつきは強まってきている。一方、「中国驚異論」、「中国脅威論」、「中国崩壊論」、「中国特需牽引論」、「中国発インフレ論」、「中国発資源危機論」といった極論は目まぐるしく日本のマスコミを賑わしてきた。その時々の時代的背景に何なりの違いはあったが、いずれにして、急速に発展してきた強大な中国とどう向き合うべきか、いや、むしろどう向き合いたいか、という日本側の主観的な姿勢が世論の形で現れている。しかし、感情的な議論に流されず、客観的な事実に基づく冷静な理解と判断が必要である。またときとしては、中国側の立場から問題を考えることも必要であろう。</p> <p>本講義の基本目標は中国ビジネスの実像を正確に捉え、中国ビジネスに関する専門知識を学び、経営学の視角から日系企業の経営管理を論じることである。授業内容は年度によって変わるが、本年度は日系企業のマーケティング戦略を中心テーマとする。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>近年には、中国を工場としてではなく、市場として捉える日系企業は急速に増えている。しかし、日系企業は欧米、韓国、台湾、香港、そして中国本土の企業と戦っていかなければならず、その競争は日増しに激しくなっている。本講義では、指定されたテキストを話題提供の副読本として利用し、教員作成のプリントをメイン教材としてマーケティング戦略の理論体系について勉強していく。そのほか、学術論文や新聞記事などの関連文献も多用し、具体的な成功事例と失敗事例を取り上げ、中国市場における日系企業のマーケティング戦略の実態を解明し、主な課題と解決する方向性などについての認識を深めて行きたい。</p>	
<b>授業計画</b>	
第1回 授業内容の紹介と注意事項	第16回 中国進出企業失敗の理由
第2回 中国市場を読み解くキーワード(1)	第17回 グローバルマーケティングの重要性
第3回 マーケティング論の基本概念	第18回 中国市場で成功するためのキーワード
第4回 中国市場を読み解くキーワード(2)	第19回 企業成長戦略としての海外進出戦略
第5回 マーケティング論のSTP(1)	第20回 映像番組学習(3)
第6回 マーケティング論のSTP(2)	第21回 中国人を知る
第7回 映像番組学習(1)	第22回 サービス業のマーケティング戦略
第8回 中国市場の特徴(1)	第23回 チャイナリスク
第9回 マーケティング論の4P(1)	第24回 ソーシャルマーケティング戦略
第10回 中国市場の特徴(2)	第25回 中国進出日系企業の事例研究
第11回 マーケティング論の4P(2)	第26回 ブランド戦略
第12回 研究資料の配布と宿題提示	第27回 研究資料の配布と宿題提示
第13回 映像番組学習(2)	第28回 映像番組学習(4)
第14回 宿題のプレゼンテーション	第29回 宿題のプレゼンテーション
第15回 宿題の提出と総括	第30回 宿題の提出と総括
<b>事前事後学習</b>	
<p>授業前に教科書の内容を予習し、質問事項を用意しよう。</p> <p>授業後に関連の文献を読み、理解度を深めよう。</p> <p>また、宿題（レポート）は必ず提出しなくてはならない。</p>	
<b>テキスト</b>	
川出圭司(2013)『中国市場の真相』商業界	
<b>参考文献</b>	
<p>大橋直子・小山諭(2008)『中国で成功するマーケティング』日本経済新聞出版社      関志雄(2009)『チャイナ・アズ・ナンバーワン』東洋経済新報社      陳晋・守政毅(2012)『中国市場ビジネス戦略』信山社      また、その他の文献は隨時に指示・配布する。</p>	
<b>成績評価</b>	
授業参加、宿題、プレゼンテーションなどを合わせて総合的に評価する。	

<b>授業科目名</b> 経営管理論特殊研究演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 喬 晋 建 (キョウ シンケン)	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>企業の経営活動を戦略論または管理論的な視角から捉え、学術的な議論と分析を展開して修士論文を作成するのは本演習の最終目標である。当然、履修者の選ぶ研究テーマに沿って本演習の内容を大幅に調整する必要はあるが、日本企業・中国に進出した日系企業・中国企業の経営活動を研究テーマに絞るのは望ましい。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>一年次は教科書を用いて経営学の一般理論と経営戦略論について勉強する。二年次では、履修生の研究テーマに関連する学問領域の文献について勉強するとともに、修士論文の作成に取り組む。きわめて少人数の授業なので、指導教員と一緒に、文献の勉強、意見の交換、レポートあるいは修士論文に関する発表などを絶えずに行っていく。一年次の授業は教員の説明と指導に従って進行するが、二年次の授業は履修生の主体的な研究発表が中心となる。</p>	
<b>授業計画</b>	
1年次	
<春学期>	
経営学理論の学習：管理論、マーケティング論、経営戦略論などの分野に対して、学部レベル以上の高度な考察を加え、理論的な基礎をしっかりと固める。	
<秋学期>	
研究方向の模索：履修生が興味を持つ分野の文献を丁寧に読むとともに、指導教員のこれまでの研究論文を簡単に触れる。これらの文献を読むことを通じて、問題意識の形成、研究論文の書き方、指導教員の指導可能範囲などについて認識を深め、履修生自身の研究テーマを模索する。	
2年次	
<春学期>	
修士論文のテーマを決め、関連文献の収集と学習を進める。	
<秋学期>	
経営学関連の理論的な枠組を用いて修士論文の内容を構築する。中間報告を頻繁に行なっているうち、指導教員の批評と助言に基づき、内容の追加と修正を積み重ねていく。修士論文の知的財産権が履修生自身に帰属するので、その完成度を高めよう。	
<b>事前事後学習</b>	
授業前に予定される内容を予習し、質問事項を用意しよう。	
授業後に関連の文献を読み、理解度を深めよう。	
また、授業内容に積極的・能動的に取り組んで行こう。	
<b>テキスト</b>	
多数の文献を適時に使用する。	
<b>参考文献</b>	
適時に指示する。	
<b>成績評価</b>	
授業参加意欲とプレゼンテーションの状況も考慮するが、修士論文の完成度を最重視する。	

<b>授業科目名</b> <b>経営科学特殊研究</b>	<b>単位数</b> <b>4 単位</b>
<b>担当教員名</b> <b>得重 仁 (とくしげ ひとし)</b>	<b>開講期間</b> <b>通年</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
与えられた条件の下で、複数の選択肢の中から設定した目的値を最大とするものを選択するという最適化を、数理的に行うための知識と手法を修得する。	
<b>授業の概要</b>	
利益を最大、コストを最小にする等、経営の分野では最適化を考える問題が少なくない。本授業では、最適化すべき問題を数学モデルに定式化して解く数理計画法を対象とし、その基礎理論と解を得るアルゴリズムの紹介を行う。また、具体例をソフトウェアで処理する演習を理解の一助とする。	
<b>授業計画</b>	
第1回 ガイダンス	第16回 演習：改訂シングルレックス法
第2回 線形計画モデル	第17回 線形計画法：双対シングルレックス法
第3回 数学準備：微分・積分	第18回 演習：双対シングルレックス法
第4回 数学準備：線形代数	第19回 整数計画問題
第5回 数学準備：確率・統計	第20回 整数計画法：緩和法
第6回 演習：数学的準備	第21回 演習：緩和法
第7回 線形計画問題	第22回 整数計画法：分割統治法
第8回 整数計画問題	第23回 演習：分割統治法
第9回 演習：線形・整数計画問題	第24回 混合整数計画問題
第10回 多目的線形計画問題	第25回 多目的線形計画問題
第11回 演習：多目的線形計画問題	第26回 多目的線形計画法：スカラー化手法
第12回 線形計画法：代数的解法	第27回 多目的線形計画法：対話型手法
第13回 線形計画法：シングルレックス法	第28回 具体的な問題への適用
第14回 演習：シングルレックス法	第29回 具体的な問題での演習
第15回 線形計画法：改訂シングルレックス法	第30回 まとめ
<b>事前事後学習</b>	
授業の事前に配布資料により内容を確認しておくこと。事後は演習に備え、授業内容の再確認すること。演習後は、独自に演習を再現し、内容を確認すること。	
<b>テキスト</b>	
必要に応じて指示する。	
<b>参考文献</b>	
必要に応じて紹介する。	
<b>成績評価</b>	
すべての講義への出席を必須とし、演習に於ける課題、レポート、期末試験により評価を行う。やむを得ない理由で欠席したことが確認できた場合は、代替の課題にて出席に代える。	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
<b>情報処理特殊研究</b>	<b>4 単位</b>
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
<b>堤 豊 (つつみ ゆたか)</b>	<b>通年</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
オブジェクト指向プログラミング言語を用いたマルチメディア・プログラミング。	
<b>授業の概要</b>	
<p>情報処理特殊研究では、情報処理技術の最先端分野としてマルチメディアとインターネットを取り上げ、議論する。この2つの技術は、ここに発展し相互に融合することで現在の情報化社会を実現した重要な要素技術である。</p> <p>文字・絵・動画・音声などのマルチメディア・データを取り扱う方法の一つとしてオブジェクト指向言語でのプログラミングを習得する。これを用いて各自のテーマに沿ってマルチメディア情報システムの構築を体験する。また、マルチメディアとインターネットを用いた情報システムについて調査・研究して視野を広げ問題発掘および問題解決能力を養成することを目標とする。</p> <p>履修にあたっては、自由に使えるパソコンを確保しておくことが望ましい。</p>	
<b>授業計画</b>	
第1回 オリエンテーション・総論	第16回 後半部オリエンテーション
第2回 情報機器操作の基礎技術	第17回 プログラミングの基礎
第3回 最新ソフトウェアの動向	第18回 オブジェクト指向とは
第4回 マルチメディアの基礎	第19回 マルチメディア・プログラミング (1)
第5回 絵と図の違い	第20回 マルチメディア・プログラミング (2)
第6回 絵	第21回 絵の取扱い
第7回 図	第22回 図の取扱い
第8回 音	第23回 音の取扱い
第9回 動画	第24回 動画の取扱い
第10回 ホームページ	第25回 インターネット・プログラミング (1)
第11回 ブログ	第26回 インターネット・プログラミング (2)
第12回 HTML 言語	第27回 3D プログラミング (1)
第13回 Java Script	第28回 3D プログラミング (2)
第14回 予備	第29回 予備
第15回 前半部まとめ	第30回 まとめ
<b>事前事後学習</b>	
テーマに沿って事前学習としてインターネット等で用語を調べておくこと。事後学習としては、講義時に渡すプリントに発展問題を用意している。	
<b>テキスト</b>	
なし (毎回プリントを用意します)	
<b>参考文献</b>	
講義時に指示する。	
<b>成績評価</b>	
毎回行う演習での貢献度と講義の理解度を提出物により判定する。	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
情報処理特殊研究演習	2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
堤 豊 (つつみ ゆたか)	通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
ソフトウェアの部品化	
<b>授業の概要</b>	
コンピュータの処理能力が飛躍的に高まるにつれ、ソフトウェアも肥大化している。したがって、これらのソフトウェア作成に当たって膨大な労力が必要とされている。また、マルチメディアやネットワークといった先端技術の寿命は非常に短く、これらの技術を利用したソフトウェアもまた短い寿命というのが宿命である。これらの欠点を補うために、ソフトウェアの部品化技術について考える。主要な機能についてソフトウェア部品を作成しておけば、プログラムを専門とする技術者でなくてもアプリケーションを作成することができるようになるはずである。また、部品を入れ替えるだけで最先端の技術にも対応できるようになる。情報処理特殊研究演習では、ソフトウェア部品の設計、実装、テストについて考察する。使用するプログラミング言語、テキストは受講生のスキルにあわせて授業中に選定する。履修にあたっては、最低1つのコンパイラ方式のプログラミング言語(C, Pascal, Fortran等)を習得していることが必要である。	
<b>授業計画</b>	
1年次	
<春学期>	従来型のプログラム言語の復習をし、その後最新のオブジェクト指向プログラム言語の動向を調査する。
<秋学期>	マルチメディア・プログラミングに適した言語をひとつ開発環境として選択し、プログラム・スキルを習得する。
2年次	
<春学期>	1年次で習得したプログラム言語において、ソフトウェア部品化技術の動向について調査し、未発表の部品について、自ら設計・実装を試みる。
<秋学期>	実装した部品についてテスト・検証を行い、情報システムの構築における問題点を考察する。その過程を論文にまとめる。
<b>事前事後学習</b>	
事前学習として各自の研究テーマに沿って進捗状況を整理しレジュメを作成しておくこと。事後学習としては演習時に指摘された項目について調べ、プログラムの設計・実装を行うこと。	
<b>テキスト</b>	
なし	
<b>参考文献</b>	
講義時に指示する。	
<b>成績評価</b>	
毎回行う演習での貢献度及び論文内容により判定する。	

<b>授業科目名</b> ミクロ経済学特殊研究	<b>単位数</b> 4 単位
<b>担当教員名</b> 慶田 收 (けいだ おさむ)	<b>開講期間</b> 春学期週2回
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
授業のテーマは「市場の分析と市場の失敗」で、目標はミクロ経済理論を学ぶことを通して現実の経済現象を理解できるような力を持つことです。	
<b>授業の概要</b>	
基礎的準備として消費者行動と生産者行動の理論を学習します。その上で経済効率性の判断基準を与える市場の分析（競争均衡、資源配分の効率性）を学びます。現実の経済現象を理解するうえで重要なのは「市場の失敗」（効率的な資源配分を達成できないケース）で、ここでは不完全競争、公共財、外部効果を扱います。	
<b>授業計画</b>	
第1回 消費集合と選好	第16回 生産経済の競争均衡2：異なる産業の場合
第2回 効用関数と予算集合	第17回 厚生経済学の基本定理
第3回 効用の最大化	第18回 独占1：利潤最大化
第4回 需要分析1：所得の変化	第19回 独占2：独占の非効率性
第5回 需要分析2：価格の変化と補償需要	第20回 寡占モデルとゲーム理論
第6回 便益と余剰	第21回 クールノー数量競争モデル
第7回 生産技術	第22回 クールノー・ナッシュ均衡と完全競争市場
第8回 利潤最大化と費用最小化	第23回 ベルトラン価格競争モデル
第9回 費用曲線の導出	第24回 独占的競争モデル
第10回 費用曲線と供給	第25回 外部性下の経済
第11回 完全競争市場と競争均衡	第26回 外部性の是正
第12回 交換経済の基本モデル	第27回 公共財とフリーライダー
第13回 交換経済の競争均衡	第28回 公共財の最適供給
第14回 資源配分の効率性	第29回 リンダールメカニズム最適供給
第15回 生産経済の競争均衡1：同一産業の場合	第30回 まとめ
<b>事前事後学習</b>	
テキストを事前に読んで問題点をチェックすること、事後学習としては復習をすること。	
<b>テキスト</b>	
林 貴志 『ミクロ経済学』 ミネルヴァ書房	
<b>参考文献</b>	
必要に応じて指定する。	
<b>成績評価</b>	
講義での発表（60%）とレポート・課題（40%）によって評価する。	

<b>授業科目名</b> ミクロ経済学特殊研究演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 慶田 收 (けいだ おさむ)	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>テーマは「population game(集団ゲーム)と進化ゲーム」です。集団に関するゲーム理論としての population game の理解とこれに動学メカニズムを組み込んだ進化ゲーム理論の習得をもとに経済・社会現象の分析とその解明を目指します。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>Population game を確認したのち、おもに進化ゲーム理論の習得とその関連分野に関する考察を進め、修士論文の完成を目指します。進化ゲーム理論の一つに集団比率の変化・進展を説明するためのリプリケーター・ダイナミクスがあります。それは、集団内のグループにおいて戦略が受け継がれる（遺伝する）とき、利得の大きな戦略をもつ個体のグループが次第に優勢になることで、集団比率が進化的に安定な状態（ESS）に至ることを説明します。本演習では、進化ゲームの基本であるリプリケーター・ダイナミクスの理解を起点に社会現象を説明しようとする学習ダイナミクスを学び、最終的には経済における集団の進化的現象に応用して修士論文を完成させます。</p>	
<b>授業計画</b>	
<p><b>1年次</b>：進化ゲームの内容を理解することに努め、2年次の修士論文の準備をします。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>春学期は、population game のなかでの進化ゲームの位置づけを確認し、その後進化ゲームについて下記のテキストを用いて学習します。「第1章 進化ゲーム理論とは何か」から「第4章 学習ダイナミクス」を読む予定です。</li> <li>秋学期には、「第5章 非対称ゲームのダイナミクス」と「第6章 進化ゲーム理論のフロンティア」を読んで理解すると同時に、修士論文のテーマを見つけ、関連する必要な参考文献を収集します。</li> </ul> <p><b>2年次</b>：修士論文の作成とその完成を目指します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>春学期には、テーマに基づいて問題意識を整理・発展させ、自らの分析を試みて中間報告に備えます。</li> <li>秋学期には、中間報告を修正・発展させて修士論文を完成させます。</li> </ul>	
<b>事前事後学習</b>	
事前学習としてテキストを読んで問題点を確認し、事後学習としては学んだ内容を再確認することです。	
<b>テキスト</b>	
大浦宏邦 『社会科学者のための進化ゲーム理論』 効率書房 3,990円	
<b>参考文献</b>	
Fernando Vega-Redondo, <i>Economics and the Theory of Games</i> , Cambridge university press, 2003 Weibull, <i>Evolutionary Game Theory</i> , MIT Press, 1996 Sandholm,W.H., <i>Population Games and Evolutionary Dynamics</i> , MIT, 2010	
<b>成績評価</b>	
修士論文により評価します。	

<b>授業科目名</b> 応用ミクロ経済学特殊研究	<b>単位数</b> <b>4 単位</b>
<b>担当教員名</b> 細江守紀 (ほそえ もりき)	<b>開講期間</b> <b>春学期週2回</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
ゲーム理論の基本的な枠組みを理解し、情報問題への応用ができるようにする。	
<b>授業の概要</b>	
<p>本講義ではゲームと情報の理論とその応用を学習する。まず、ゲーム理論と情報の経済学の基本問題を提示し、その理解を深める。そこで、標準型ゲームの構造を明らかにし、その解の概念を求める。とくに支配戦略均衡とナッシュ均衡を学習する。つぎに混合戦略の概念に関する考えを理解する。さらに展開型ゲームの構造を明らかにし、展開型の標準化を行なう。その場合、部分ゲームでの均衡の概念を明らかにする。また、クールノーゲームとシュタッケルゲームの特徴を検討し、タイミングゲームの構造を学習する。また、不完備情報ゲームの概念を明らかにし、その解概念であるベイズ均衡を理解する。つぎに逆選択、モラルハザードの経済分析を行ない、繰り返しゲームと進化ゲームなどを学習する。</p>	
<b>授業計画</b>	
第1回 ゲーム理論の基本課題	第16回 不完備情報ゲーム
第2回 情報の経済学の基本課題	第17回 ベイジアン均衡
第3回 標準型ゲームと支配戦略	第18回 シグナリングゲーム
第4回 ナッシュ均衡	第19回 メカニズムデザイン
第5回 混合戦略	第20回 逆選択の経済学
第6回 マックスミニ戦略	第21回 自己選択モデル
第7回 展開型ゲーム	第22回 モラルハザードのエージェンシ問題
第8回 展開型ゲームの標準化	第23回 モラルハザードとモニタリング
第9回 部分ゲーム均衡	第24回 繰り返しゲーム
第10回 均衡の諸概念	第25回 フォーク定理
第11回 クールノーゲーム	第26回 交渉ゲームの構造
第12回 シュタッケルゲーム	第27回 交渉ゲームの無限モデル
第13回 ゲームの対比	第28回 進化ゲームの考え方
第14回 タイミングゲーム	第29回 チープトークと効率性
第15回 不確実性下の数量戦略	第30回 まとめ
<b>事前事後学習</b>	
授業の終わりに、その授業で習ったキーワードを示すので、その確認を事後学習としてすること、また、あわせて、次回の授業の内容の概要を示し、事前学習のポイントを指示する。	
<b>テキスト</b>	
細江守紀 『ゲームと情報の経済学』 効率書房	
<b>参考文献</b>	
岡田 章 『ゲーム理論』 有斐閣	
<b>成績評価</b>	
平常点、レポート、および報告で評価する。	

<b>授業科目名</b> 応用ミクロ経済学特殊研究演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 細江守紀 (ほそえ もりき)	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
インセンティブを考慮した情報、組織、法に関連したモデル分析を理解し、自分で独自に自分のテーマに即したモデルの構築ができる目標とする。	
<b>授業の概要</b>	
応用ミクロ経済学の基礎的な研究、および各種の応用分野の分析手法・分析課題の習得をする。とくに、「インセンティブ設計の経済学」小佐野・今井編著、J. Tiroleの「Theory of Industrial Organization」、J. Tirole 「The Theory of Corporate Finance Government」、を参考としながら、情報の経済学のトピックスを理解していく。また、後期には参加者の関心分野にも関連する論文をあわせて読む。	
<b>授業計画</b>	
1年次 1年次はインセンティブ設計の基礎、契約理論、権限配分、企業組織、などのテーマに沿って授業を行い、応用ミクロ経済学の基本的な分析ツールをしっかり身につける。	
2年次 2年次は応用ミクロ経済学の基礎習得を踏まえて、いくつかの応用分野の研究課題、分析方法などを習得する。応用分野としては、環境政策、法と経済学Ⅰ、規制政策、政治経済分析等である。また、参加者の関心テーマに関連する課題について応用研究をすすめる。	
<b>事前事後学習</b>	
授業の終わりに、その授業で習ったキーワードを示すので、その確認を事後学習としてすること、また、あわせて、次の授業の内容の概要を示し、事前学習のポイントを指示する。	
<b>テキスト</b>	
とくになし。	
<b>参考文献</b>	
適宜、演習中に指示する。	
<b>成績評価</b>	
平素の授業での発表、議論の積極性、そしてレポートなどで評価する。	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
マクロ経済学特殊研究	4 単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
笹山 茂 (ささやま しげる)	秋学期週2回
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
上級マクロ経済学の基礎を理解することが到達目標となる。ラムゼイモデルから RBC モデル、ニューケインジアンモデルに至る系譜を学ぶことが主なテーマとなる。	
<b>授業の概要</b>	
マクロ経済学の基礎理論を中心に学ぶ。大学院で学ぶマクロ経済学は、学部レベルのマクロ経済学と比較すると数段レベルアップし、上級マクロ経済学となる。学部レベルのマクロ経済学を前提として、大学院生が心得ておくべき上級マクロ経済学の代表的なモデルの理論をカバーする。特徴を挙げれば、ミクロ経済学の基礎付けを備えたマクロモデル、および動学的マクロ経済モデルが主な対象となる。動学モデル分析の道具となる微分方程式や差分方程式についても補う。必要とされる数学については数式処理ソフト Mathematica を活用することにする。Mathematica が使えるコンピュータ室を使用する。	
<b>授業計画</b>	
第1回 伝統的マクロモデルの復習	第16回 ラムゼイ・モデル
第2回 マクロ経済学のミクロ的基礎付け	第17回 リアル・ビジネスサイクル(RBC)モデル
第3回 動学的一般均衡マクロモデルとは	第18回 IS-LM モデルと IS-MP-PC モデル
第4回 合理的期待	第19回 新ケインジアンモデル
第5回 時系列モデル (1)	第20回 サーチ理論とマッチングモデル
第6回 時系列モデル (2)	第21回 世代重複モデル
第7回 Mathematica の基礎 (1)	第22回 金融資産モデル
第8回 Mathematica の基礎 (2)	第23回 財政金融政策
第9回 微分方程式の解法 (1)	第24回 インフレターゲット理論モデル
第10回 微分方程式の解法 (2)	第25回 テイラールールとマッカラムルール
第11回 差分方程式の解法 (1)	第26回 伝統的経済成長理論
第12回 差分方程式の解法 (2)	第27回 内生的経済成長理論 (1)
第13回 動学的最適化の手法 (1)	第28回 内生的経済成長理論 (2)
第14回 動学的最適化の手法 (2)	第29回 回帰分析 (1)
第15回 位相図による分析	第30回 回帰分析 (2)
<b>事前事後学習</b>	
配布したプリントを事前に読み込んだ上でクラスに参加し、事後には演習問題を解き理解を深める。	
<b>テキスト</b>	
決まったテキストは使わずに、独自プリントを使用する。	
<b>参考文献</b>	
Benassy, Jean-Pascal <i>Macroeconomic Theory</i> Oxford U.P. 2011	
Romer, D. <i>Advanced Macroeconomics, 4 th ed.</i> McGraw-Hill 2012	
<b>成績評価</b>	
報告 (5割)、レポート (2割)、期末課題 (2割)、クラスでの討論 (1割) を総合的に判断して評価する。	

<b>授業科目名</b> マクロ経済学特殊研究演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 笹山 茂 (ささやま しげる)	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
修士論文を完成させることが最終的な到達目標となる。1年次に設定した論文のテーマに関連した基礎的な専門論文の収集と整理、その中から独自の研究テーマを探求することが必要となる。	
<b>授業の概要</b>	
マクロ経済学および国際マクロ経済学の理論的・実証的研究を行う。最近のマクロ経済学の新しい流れを整理・概説する。さらに、国際マクロ経済学の代表的な文献についても輪読する。	
演習の最終的な到達点は修士論文を完成させることである。履修者の修士論文のテーマに関連した基礎文献の輪読と論文報告が中心となる。	
なお、以下の授業計画は履修者が選ぶ修士論文のテーマに応じて変更されることがあることを事前に了解されたい。	
<b>授業計画</b>	
1年次 マクロ経済学と国際マクロ経済学の基礎文献の輪読と解説が主となる。その過程で修士論文のテーマ選定の指導を行う。以下のテーマを扱う。 <ul style="list-style-type: none"><li>・マクロ時系列モデル</li><li>・動学的マクロモデル</li><li>・国際マクロ経済モデル</li><li>・為替レート理論</li><li>・金融資産の統計的分析</li></ul>	
2年次 修士論文のテーマに関連した文献の輪読と履修者による報告が主となる。 <ul style="list-style-type: none"><li>・為替レートの統計的分析</li><li>・新しい国際マクロ経済モデル</li><li>・データ分析の手法</li><li>・数式処理ソフトの応用</li></ul>	
<b>事前事後学習</b>	
配布した論文を事前に精読した上でクラスに参加し、事後は各自の論文テーマに従って解釈・整理する。	
<b>テキスト</b>	
特定のテキストは使わずに、作成したプリントを配布する。	
<b>参考文献</b>	
専門論文を隨時紹介	
<b>成績評価</b>	
論文報告（6割）、課題レポート（3割）、クラスでの討論（1割）を総合的に判断して評価する。	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
計量経済学特殊研究	4 単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
田中利彦 (たなか としひこ)	秋学期週2回
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
本講義では、経済現象に関する各自の仮説に対し、計量経済学の手法によって実証分析が行える力をつけることが到達目標となる。したがって、計量経済分析の理解と実践力の養成がテーマとなる。	
<b>授業の概要</b>	
本講義では、経済理論に裏付けられた経済変数間の因果関係を、計量的に分析するのに必要な基礎知識の習熟、及び計量経済モデルを構築して構造方程式の推定、経済予測を行うのに不可欠な、モデル分析の基礎知識を習得することを目的としている。	
そこで、講義では単一の構造方程式の推定に関する問題を始めとし、連立方程式体系の推定に関する問題等について取り扱う。また、計量経済学の実践的活用を目指し、実際に計量分析ソフトを用いて計量経済モデルを推定し、各種シミュレーション分析を実施してもらう予定である。	
<b>授業計画</b>	
第1回 最小2乗法の基礎	第16回 識別問題
第2回 係数の推定値	第17回 間接最小2乗法
第3回 決定係数、標準誤差	第18回 2段階最小2乗法、操作変数法等
第4回 係数の分散の推定値、t値	第19回 計量経済モデルの基礎
第5回 ダービン・ワトソン比	第20回 モデルの組み立て方法
第6回 単回帰分析から重回帰分析へ	第21回 内生変数と外生変数の決定
第7回 係数の推定方法等	第22回 推定のための統計データ
第8回 F値等各種統計量	第23回 構造方程式の推定
第9回 多重共線性	第24回 構造方程式の検定
第10回 分散の不均一性	第25回 構造方程式の再推定
第11回 自己相関	第26回 モデルのトータルテスト
第12回 ダミー変数	第27回 モデルのファイナルテスト
第13回 Logit、Probit モデル等	第28回 モデルによる乗数分析
第14回 分布ラグモデル	第29回 モデルの外生変数の想定
第15回 連立方程式体系の推定問題	第30回 モデルによる予測
以上について受講生の理解度を見ながら、講義を進めていく。	
<b>事前事後学習</b>	
テキスト、参考文献の1番目と2番目における、毎回の授業内容に関する部分に目を通し、事前に理解を深める一方、更なる事後の学習のため、参考文献の3番目と4番目を参考にすることが必要となる。	
<b>テキスト</b>	
D. Gujarati; <i>Basic Econometrics</i> , McGraw-Hill, Inc.を用い、演習形式（各自報告）で実施。	
<b>参考文献</b>	
森棟公夫 『計量経済学』 東洋経済新報社	
蓑谷千鳳彦 『計量経済学の理論と応用』 日本評論社	
F. Hayashi; <i>Econometrics</i> , Princeton University Press	
W. H. Greene; <i>Econometric Analysis</i> , Prentice-Hall, Inc.	
<b>成績評価</b>	
授業での報告等、平常点によって評価する。	

<b>授業科目名</b> 計量経済学特殊研究演習	<b>単位数</b> <b>2年間を通じて8単位</b>
<b>担当教員名</b> 田中利彦 (たなか としひこ)	<b>開講期間</b> <b>通年</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
本特殊研究では、様々な経済問題の解決を視野に、計量経済モデル等を用いて実証分析を行うことが授業のテーマである。その研究成果として、経済学的インプリケーションのある修士論文の完成を目指す。	
<b>授業の概要</b>	
本特殊研究では、各自のテーマ及び問題意識に基づき、計量経済モデル等による分析を行い、それをもとに修士論文を作成することを目的としている。 したがって、まず計量経済モデルの構築、産業連関表を用いた計量分析に習熟するため、実際に簡単なマクロ計量モデルの構築とそれによるシミュレーション分析、簡単な産業連関モデルの作成とそれによる波及効果分析等に取り組んでもらう。 その上で、各自が希望するテーマについて参考文献の精読、統計データの収集を行い、各自の問題を解決するモデルを作成し、モデルの検証を充分に行った上で、最終的に各種のシミュレーション分析を実施し、修士論文の完成を目指す。	
<b>授業計画</b>	
1年次 (1) IS-LM マクロモデルによる計量分析 (2) 総需要総供給マクロモデルによる計量分析 (3) 地域経済、地域財政モデルによる計量分析 (4) 産業連関モデルによる経済波及効果分析	
2年次 (1) 各自のテーマに基づき、関連する書籍・論文等の精読とその評価報告 (2) 各自のテーマに基づき、統計データの収集とモデルの構築 (3) モデルの検証とシミュレーション分析等の実施 (4) 修士論文の完成へ向けての指導	
<b>事前事後学習</b>	
ゼミ形式で授業が行われるため、毎回のゼミでの報告に関連する資料に十分に目を通し理解を深めるとともに、事前に予想される質問に対し回答を常に準備しておく。また、授業で理解不足であった部分、及び質問に明確に回答できなかった部分については、事後的に指示された参考文献等を参照し、知識を補強しておくことが必要となる。	
<b>テキスト</b>	
必要に応じて指定する。	
<b>参考文献</b>	
高木・秋山・田中 『応用計量経済学Ⅰ』 多賀出版 牧・宮内・浪花・繩田 『応用計量経済学Ⅱ』 多賀出版 坂野・黒田・鈴木・蓑谷 『応用計量経済学Ⅲ』 多賀出版	
<b>成績評価</b>	
授業での報告等、平常点によって評価する。	

<b>授業科目名</b> 応用計量経済分析特殊研究	<b>単位数</b> <b>2 単位</b>
<b>担当教員名</b> 高橋青天 (たかはし はるたか)	<b>開講期間</b> <b>集中講義</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
計量経済学の基礎を直感的に理解し、経済データを使った実証分析を自ら行えるようになること。	
<b>授業の概要</b>	
<p>本講義では、最新計量ソフト EViews Ver.9 を使ったシミュレーション実験を教室で見せ、さらに学生自らシミュレーション実験を行うことにより、計量分析で用いる統計概念や分析方法を、概念的に理解するのではなく視覚に訴え直感的に理解することを目指している。特に、計量分析の初心者にとって理解が難しい標本分布の徹底的理解を目指す。</p> <p>受講者は、YouTube に予めアップロードされた講義に関する 15 分ビデオを観て予習をする。授業時間は、学生自ら EViews を使い、与えられた現実のデータを使った 6 回の実証分析課題を解くことにより実証分析を実体験的に学習する。また、各 6 回の課題に関してレポートを作成し提出する。</p> <p>このように、集中講義ではあるが、YouTube を使って基本概念や操作方法をビデオ学習で予め行うことにより、短期的・効率的に計量分析の手法を確実に学習できることがこの講義の特徴である。</p>	
<b>授業計画</b>	
第1回 EViews の基本操作入門 (1) 第2回 EViews の基本操作入門 (2) 第3回 単回帰分析入門 第4回 乱数とモンテ・カルロ実験 第5回 統計分析の導入 第6回 統計分析の導入 第7回 実証課題 1：資産価格形成理論とマドフ事件 第8回 重回帰分析入門 (ダミー変数と非線形回帰モデル) 第9回 実証課題 2：学歴と給与、実証課題 3：男女賃金格差 第10回 分散不均一性と系列相関 第11回 制約条件の検定 (構造変化の検定) 第12回 実証課題 4：マネー・ボール、実証課題 5：スーパーカーの加速性能 第13回 定式化問題と操作変数法 第14回 実証課題 6：社会制度の質と経済発展 第15回 まとめ	
<b>事前事後学習</b>	
受講生は、講義の前に、YouTube の学習ビデオを観て講義の予習を行っておくこと。	
<b>テキスト</b>	
高橋・北岡著『EViews によるデータ分析入門』(東京図書) 2,800 円	
<b>参考文献</b>	
羽森 茂之著 『ベーシック計量経済学』(中央経済社) 2,800 円	
<b>成績評価</b>	
平常点：10%、実習課題レポート点（6回実施）：90%	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>																														
数理経済学特殊研究	4 単位																														
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>																														
坂上智哉 (さかがみ ともや)	春学期週2回																														
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	経済成長モデルの修得とその応用																														
<b>授業の概要</b>	<p>この講義では、数理経済学のテーマのひとつとして、1990年代以降の経済成長理論について学習する。講義の前半では、経済成長理論の基礎として新古典派成長理論、最適成長理論、AKモデル、Uzawa = Lucasモデルを取り上げる。特に Uzawa = Lucas モデルですが、均衡経路が不決定となる現象が生じる数学的な条件についても考察する。後半では世代重複モデル(OLG モデル)を学習し、教育と出生率の関係を分析する。</p> <p>参加者には成長理論を確実に理解してもらうために、練習問題を用いた演習を随時行い、講義の最後には、参加者に成長モデルを扱ったレポートを提出してもらうことを予定している。</p>																														
<b>授業計画</b>	<table> <tbody> <tr><td>第1回 経済成長理論の歴史</td><td>第16回 二部門内生成長モデル (3)</td></tr> <tr><td>第2回 新古典派成長モデル (1)</td><td>第17回 二部門内生成長モデル (4)</td></tr> <tr><td>第3回 新古典派成長モデル (2)</td><td>第18回 均衡の安定性と不決定性 (1)</td></tr> <tr><td>第4回 新古典派成長モデル (3)</td><td>第19回 均衡の安定性と不決定性 (2)</td></tr> <tr><td>第5回 新古典派成長モデル (4)</td><td>第20回 均衡の安定性と不決定性 (3)</td></tr> <tr><td>第6回 最適成長モデル (1)</td><td>第21回 均衡の安定性と不決定性 (4)</td></tr> <tr><td>第7回 最適成長モデル (2)</td><td>第22回 世代重複モデル (1)</td></tr> <tr><td>第8回 最適成長モデル (3)</td><td>第23回 世代重複モデル (2)</td></tr> <tr><td>第9回 最適成長モデル (4)</td><td>第24回 世代重複モデル (3)</td></tr> <tr><td>第10回 一部門内生成長モデル (1)</td><td>第25回 世代重複モデル (4)</td></tr> <tr><td>第11回 一部門内生成長モデル (2)</td><td>第26回 人口成長率の内生化 (1)</td></tr> <tr><td>第12回 一部門内生成長モデル (3)</td><td>第27回 人口成長率の内生化 (2)</td></tr> <tr><td>第13回 一部門内生成長モデル (4)</td><td>第28回 人口成長率の内生化 (3)</td></tr> <tr><td>第14回 二部門内生成長モデル (1)</td><td>第29回 人口成長率の内生化 (4)</td></tr> <tr><td>第15回 二部門内生成長モデル (2)</td><td>第30回 まとめ</td></tr> </tbody> </table>	第1回 経済成長理論の歴史	第16回 二部門内生成長モデル (3)	第2回 新古典派成長モデル (1)	第17回 二部門内生成長モデル (4)	第3回 新古典派成長モデル (2)	第18回 均衡の安定性と不決定性 (1)	第4回 新古典派成長モデル (3)	第19回 均衡の安定性と不決定性 (2)	第5回 新古典派成長モデル (4)	第20回 均衡の安定性と不決定性 (3)	第6回 最適成長モデル (1)	第21回 均衡の安定性と不決定性 (4)	第7回 最適成長モデル (2)	第22回 世代重複モデル (1)	第8回 最適成長モデル (3)	第23回 世代重複モデル (2)	第9回 最適成長モデル (4)	第24回 世代重複モデル (3)	第10回 一部門内生成長モデル (1)	第25回 世代重複モデル (4)	第11回 一部門内生成長モデル (2)	第26回 人口成長率の内生化 (1)	第12回 一部門内生成長モデル (3)	第27回 人口成長率の内生化 (2)	第13回 一部門内生成長モデル (4)	第28回 人口成長率の内生化 (3)	第14回 二部門内生成長モデル (1)	第29回 人口成長率の内生化 (4)	第15回 二部門内生成長モデル (2)	第30回 まとめ
第1回 経済成長理論の歴史	第16回 二部門内生成長モデル (3)																														
第2回 新古典派成長モデル (1)	第17回 二部門内生成長モデル (4)																														
第3回 新古典派成長モデル (2)	第18回 均衡の安定性と不決定性 (1)																														
第4回 新古典派成長モデル (3)	第19回 均衡の安定性と不決定性 (2)																														
第5回 新古典派成長モデル (4)	第20回 均衡の安定性と不決定性 (3)																														
第6回 最適成長モデル (1)	第21回 均衡の安定性と不決定性 (4)																														
第7回 最適成長モデル (2)	第22回 世代重複モデル (1)																														
第8回 最適成長モデル (3)	第23回 世代重複モデル (2)																														
第9回 最適成長モデル (4)	第24回 世代重複モデル (3)																														
第10回 一部門内生成長モデル (1)	第25回 世代重複モデル (4)																														
第11回 一部門内生成長モデル (2)	第26回 人口成長率の内生化 (1)																														
第12回 一部門内生成長モデル (3)	第27回 人口成長率の内生化 (2)																														
第13回 一部門内生成長モデル (4)	第28回 人口成長率の内生化 (3)																														
第14回 二部門内生成長モデル (1)	第29回 人口成長率の内生化 (4)																														
第15回 二部門内生成長モデル (2)	第30回 まとめ																														
<b>事前事後学習</b>	事前に指定された論文を丁寧に読んでくること。特に数式の展開は詳細に検討すること。																														
<b>テキスト</b>	西村和雄・福田慎一編 『非線形均衡動学』 東京大学出版会																														
<b>参考文献</b>	大山・西村・林・吉川編 『現代経済学の潮流 1997』 東洋経済新報社、1997年 大住・坂上・伊ヶ崎 著 『エッセンシャル 経済数学』 中央経済社、2010年																														
<b>成績評価</b>	レポートにもとづいて評価を行う。																														

<b>授業科目名</b> 数理経済学特殊研究演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 坂上智哉 (さかがみ ともや)	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・経済動学モデルを修得すること。</li> <li>・独自の問題設定のもとに動学モデルを構築できるようになること。</li> <li>・そのモデルを用いて政策分析を議論できるようになること。</li> </ul>	
<b>授業の概要</b>	
<p>動学的な数理経済モデルを用いて、分権的な社会での最適な状態を達成するための政策について研究を行います。このためには、数理的な基礎付けが必要となりますので、まずは解析学や微分方程式などの知識を習得します。次に、簡単な動学モデルを理解するために、ハミルトニアン・ダイナミクスや、動的計画法、サーチモデルについて学習します。これらの基礎を学んだ上で、数理モデルの基本文献を学習します。</p>	
<b>授業計画</b>	
<p>1年次 春学期では、数学的な基礎付けとして解析学や微分方程式を学びます。秋学期にハミルトニアン・ダイナミクス等、動学分析で必要な手法を学びます。</p> <p>2年次 春学期では、数理モデルの基本文献を研究し、秋学期で修士論文を作成します。</p>	
<b>事前事後学習</b>	
テキストや論文を事前に読み、計算や証明のプロセスについては詳細に検討すること。	
<b>テキスト</b>	
<p>[1] 杉浦光夫 『解析入門 I』 東京大学出版会.</p> <p>[2] 西村和雄・福田慎一編 『非線形均衡動学』 東京大学出版会</p> <p>[3] Stokey, N., Lucas, R. and Prescott, E.; <i>Recursive Methods in Economic Dynamics</i>, Harvard University Press, Cambridge, MA, 1989.</p>	
<b>参考文献</b>	
[1] Sargent, T. and Ljungqvist, L.; <i>Recursive Macroeconomic Theory</i> , MIT Press, Cambridge, MA, 2000.	
<b>成績評価</b>	
授業での問題演習や課題報告にもとづいて評価します。	

<b>授業科目</b>	<b>単位数</b>
経済学史特殊研究	4 単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
小柳公洋 (こやなぎ きみひろ)	春学期週2回
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
経済学説の歴史的展開の全体像を理論的につかむことを目標とする。	
<b>授業の概要</b>	
<p>本研究は、古典派経済学からケインズ経済学までの経済学説の一般的通史を講義します。講義内容のエンセンスは、基本的には学部の経済学史の展開内容と異なりませんが、本研究では、それぞれの経済学説についてこれまでの研究史を中心に講義します。また、その限りでの研究文献を広く紹介します。</p> <p>主要学派の異同をパラダイムの相違・転換という視点から論じます。</p>	
<b>授業計画</b>	
第1回 経済学史方法論	第16回 (3) マルクス経済学の発展
第2回 経済学の流れの鳥瞰図	Hilferding 『金融資本論』(1910)
第3回 重商主義(1) Thomas Mun 『外国貿易による イングランドの財宝』(1664)	第17回 (4) 現代のマルクス経済学
第4回 (2) James Steuart 『経済の原理』(1767)	第18回 F.List とドイツ歴史学派の経済思想
第5回 重農主義 Francois Quesnay 『経済表』 (1758)	第19回 T.Veblen と制度派経済学
第6回 古典派経済学(1) Adam Smith ① スコットランド啓蒙	第20回 新古典派経済学 (1) 限界革命 Jevons と Menger
第7回 ② 道徳哲学『道徳感情論』(1759)	第21回 "
第8回 ③ 『国富論』(1776)	第22回 (2) L.Walras 『純粹経済学綱要』(1874~77)
第9回 (2) David Ricard ① 産業革命	第23回 (3) Alfred Marshall ① 時代の背景
第10回 ② 『経済学原理』(1817)	第24回 ② 『経済学原理』(1890)
第11回 (3) Thomas R.Malthus 『経済学原理』(1820)	第25回 (4) Arthur C.Pigou 『厚生経済学』(1920)
第12回 (4) John S.Mill ① 社会哲学とその背景	第26回 (5) John M.Keynes ① 時代的哲学的背景
第13回 ② 『経済学原理』(1848)	第27回 ② 『雇用・利子および貨幣の一般理論』 (1936)
第14回 マルクス経済学 (1)マルクス経済学の前提 唯物史観	第28回 ③ Keynes 以後
第15回 (2)マルクス経済学の確立 『資本論』(1868)	第29回 現代経済学と経済学史研究の意義
	第30回 市民社会論と経済学史
<b>事前事後学習</b>	
事前に当該経済学説の特徴とキーワードを確認しておくことは重要。後に、修士論文のテーマと関係する著書や学説をチェックすること。	
<b>テキスト</b>	
拙著のプリント	
<b>参考文献</b>	
M・ブローグ著 『新版 経済理論の歴史 1-4』 東洋経済新報社 経済学史学会編 『経済学史 課題と展望』 九州大学出版会	
<b>成績評価</b>	
平常点とレポートないし論文	

<b>授業科目名</b> 応用システム論特殊研究	<b>単位数</b> <b>4 単位</b>
<b>担当教員名</b> 境 章 (さかい あきら)	<b>開講期間</b> <b>秋学期週2回</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
ビジネスにおける IT 戦略やマネージメントの重要性を欧米の事例から学ぶ。	
<b>授業の概要</b>	
<p>現代のビジネス環境において、IT や情報システムの存在は、多くの業種で欠かせないものになっている。IT 戦略は、経営戦略に沿って適切な IT 投資を行い、効果的に IT を活用するための指針となる。</p> <p>講義では、James D McKeen 、Heather A Smith の「IT Strategy: Issues and Practices (3rd Edition)」を使用する。本書は、IT 戦略における問題と実践をテーマとするものであり、IT がビジネス価値を伝えるために如何に IT をマネージメントするかを問い合わせ、IT 戦略の問題を展望するものである。テキストを読む際には、内容の把握と同時に事例の前後関係を理解しなければならない。また、受講生自身も関連分野に関する事例を準備する必要がある。</p>	
<b>授業計画</b>	
第1回 What is IT Value?	第16回 Linking IT to Business Metrics
第2回 Where is IT value?	第17回 Business Measurement
第3回 Who Delivers IT value?	第18回 Key Business Metrics For IT
第4回 When is IT Value Realized?	第19回 Designing Business Metrics For IT
第5回 Identification of Potential Value	第20回 Advice to Managers
第6回 Effective Conversion	第21回 Conclusion
第7回 Realizing Value	第22回 Building a Strong Relationship with
第8回 Conclusion	第23回 Nature of Business-IT Relationship
第9回 Business and IT Strategies	第24回 Foundation of Strong Business-IT 1
第10回 Developing IT Strategy	第25回 Foundation of Strong Business-IT 2
第11回 Four Critical Success Factors	第26回 Conclusion
第12回 Challenges For CIOs	第27回 Communicating with Business Managers
第13回 The Many Dimensions of IT Strategy	第28回 Communication in Business-IT Relationship
第14回 Toward IT Strategy-Development Process	第29回 What is “GOOD” Communication?
第15回 Conclusion	第30回 Conclusion
<b>事前事後学習</b>	
テキストを確り読み解き、テーマごとの要約が必要です。	
<b>テキスト</b>	
James D. McKeen、Heather A. Smith IT Strategy: Issues and Practices (3rd Edition)	
<b>参考文献</b>	
その他は講義開始後に適宜指示します。	
<b>成績評価</b>	
平常点 (60%) およびレポート (40%) により評価します。	

<b>授業科目名</b> 応用システム論特殊研究演習	<b>単位数</b> <b>2年間を通じて8単位</b>
<b>担当教員名</b> 境 章 (さかい あきら)	<b>開講期間</b> <b>通年</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>情報通信技術は急速に進歩するので、最新の話題をテーマにして研究を進める。情報技術が現場で如何に活用されているか、又、どのように活用するべきかを考察することは重要なことである。座学ばかりではなく、企業や地域情報センターを訪問するなどして、情報技術活用の実際を研究する。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>情報通信技術（ICT）の進展は、あらゆるビジネスの現場に大きな変革をもたらし、グローバルなビジネスが容易に展開できるようになりました。産業の国際競争力確保へ向けて、地域の企業を中心としてイノベーションを創出する仕組み、すなわち産業クラスターの形成が注目されています。産業クラスターでは、人的ネットワークの形成が重要とされており、この点において情報通信技術（ICT）の担うべき役割は大きい。本演習では情報通信の理論と技術、プロトコル、ネットワークの構成法と管理の実際について学びます。本年度は以下の3テーマについて取り組む予定です。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>(1) Web や SNS をはじめとする情報活用技術</li> <li>(2) 新事業の創出を促進する知識創造支援技術</li> <li>(3) 地域の強み・弱みを探る社会ネットワーク技術</li> </ul>	
<b>授業計画</b>	
<p>1年次 情報化社会についての実態・理論・政策の基礎を学ぶために、指定した文献の要約・報告を主にしながら進めます。</p> <p>2年次 報告・課題検討を繰り返し、修士論文の完成を目指します。</p>	
<b>事前事後学習</b>	
修士論文の基礎となる文献や資料を蒐集し、研究テーマについて深く議論できるよう学習する。	
<b>テキスト</b>	
講義開始後に相談の上、指定します。	
<b>参考文献</b>	
その他は講義開始後に適宜指示します。	
<b>成績評価</b>	
論文によって評価します。	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
日本経済史特殊研究	4 単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
小野 浩 (おの ひろし)	秋学期週2回
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
日本経済史の基礎を理解する。経済の発展を歴史的に考察する能力を身につける。	
<b>授業の概要</b>	
徳川時代から現代に至るまでの約400年間にわたる日本経済の展開過程を、単に一国の歴史として捉えるのではなく、各時代の東アジア圏、国際経済システムのなかに位置付けながら理解することを目標とする。	
現在の日本経済は、どのような位置にあり、いかなる課題を抱えているのか。このような問い合わせて考える際に、日本経済の歴史を理解することが役に立つ。「過去」の「事実」を「選択」し、「解釈」することを通じて、歴史的な視点から「今」を相対化することができる。我々が生きる現在の社会経済が、どのような史的展開のなかで生成、発展、変容してきたのか。その変化のプロセスを理論と実証を織り交ぜながら明らかにすることを通じて、多角的かつ立体的に社会経済の構造を洞察する力を身につけていく。	
<b>授業計画</b>	
第1回 日本経済史入門	第16回 民間産業の発展
第2回 徳川政権の成立と国際環境	第17回 日清戦後経営と金本位制の確立・条約改正
第3回 徳川時代の政治・経済システム	第18回 日露戦争と国際収支の危機
第4回 鎖国期の対外貿易	第19回 日清・日露戦後経営期の日本経済
第5回 元禄バブルから享保改革へ	第20回 第一次世界大戦と日本経済
第6回 農業生産の発展	第21回 帝国の大拡大と植民地経営
第7回 都市経済の発展	第22回 金解禁の模索と金融界の動搖
第8回 宝暦～天明期の政治と経済	第23回 井上財政から高橋財政へ
第9回 変貌する徳川経済	第24回 戦間期の貿易関係
第10回 幕末開港と居留地貿易	第25回 戦間期の民間経済
第11回 近代日本の経済と貿易	第26回 戦時経済下の日本経済
第12回 明治新政府の成立	第27回 戦後改革と経済復興
第13回 政府財政の確立と産業政策	第28回 高度成長の時代
第14回 大久保政権から明治14年政変へ	第29回 変動為替相場制下の日本経済
第15回 松方財政の展開と企業勃興	第30回 まとめ
<b>事前事後学習</b>	
事前にテキストを読み、発表用のレジュメを作成すること。疑問点、論点を整理しておくこと。	
<b>テキスト</b>	
杉山伸也『日本経済史 近世・現代』岩波書店、2012年、3,800円+税	
<b>参考文献</b>	
研究指導中に指示する。	
<b>成績評価</b>	
レポートにより評価する。	

<b>授業科目名</b> 日本経済史特殊研究演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 小野 浩（おの ひろし）	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
近現代の日本経済の歴史的展開を理解したうえで、自らの研究テーマを設定し、2年次12月までに修士論文を完成させる。	
<b>授業の概要</b>	
本演習では、19～20世紀の日本経済の歴史を研究する。歴史学の手法を学びつつ、各自の研究テーマに関連する基礎文献の輪読を進める。また、定期的に各自の論文報告と指導を実施し、修士論文の完成を目指す。	
<b>授業計画</b>	
1年次 春学期はテキスト①を輪読し、まず日本経済史の基本的な流れをつかむ。その際に、同じテーマであっても、論者によって歴史的な評価が異なることを理解する。また、長期時系列数量データの分析、一次史料の解釈等を通じて独自の歴史認識を構築する方法を学ぶ。 秋学期はテキスト②を輪読し、「対外関係」「政策」「生産」「流通」「生活・環境」を柱として、日本の社会全体を経済的側面から通観する。この過程で修士論文のテーマを設定し、関連する文献の輪読と歴史資料の涉猟を進める。	
2年次 春学期は、研究史を整理しつつ、テーマの絞り込みと位置付けおよび追加的な資料調査を行う。秋学期は修士論文の完成を目指す。	
<b>事前事後学習</b>	
テキストを精読し、発表の準備と疑問点の整理を行っておくこと。	
<b>テキスト</b>	
①浜野潔ほか『日本経済史 1600 - 2000 歴史に読む現代』慶應義塾大学出版会、2009年 ②中西聰編『日本経済の歴史 列島経済史入門』名古屋大学出版会、2013年	
<b>参考文献</b>	
演習中に紹介する。	
<b>成績評価</b>	
修士論文により評価する。	

<b>授業科目名</b>	<b>西洋経済史特殊研究</b>	<b>単位数</b>
<b>担当教員名</b>	<b>酒井重喜（さかいしげき）</b>	<b>4単位</b>
<b>開講期間</b>		<b>春学期週2回</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>		
封建制から資本主義への移行をテーマとした戦後史学においては、封建制は克服すべき対象であり、その克服が徹底的か妥協的かの類型的相違が、主要関心事であった。近世・近代の国家財政においては、封建制の克服ではなく継承のあり方が問題であった事の意義を理解する。		
<b>授業の概要</b>		
混合王政は国王の大権と臣民の特権の二つの独立的存在の緩やかな結合体であり、この互恵的二元主義は財政における二つの原則によって保証されていた。平時において臣民の財産への依存を禁じた「国王は自活すべし」が第一原則であり国王は伝統的「私財」によって統治しなければならなかった。第二原則は戦時において臣民が戦費供出の義務を果たす際の「合意なければ課税なし」であった。近世初頭の価格革命・宗教改革・行政革命による主権的国民国家と貨幣経済の進展は、国王「私財」の目減りと経常的統治経費の飛躍的膨張をもたらし、国王自活を不可能にし非経常的戦費に限られていた租税依存を経常費にまで及ぼすことになった。こうして経常・非経常の別なく全収入が租税から構成される租税国家が形成されることになった。しかし混合王政の二元主義的伝統は租税国家の進展に執拗な抵抗をした。本講義はこの「歴史と財政の撞着」のダイナミズムを明らかにした。		
<b>授業計画</b>		
第1回 絶対王政の危機①農業問題	第16回 17世紀イギリスの政治と経済①	
第2回 ②独占問題	第17回 17世紀イギリスの政治と経済②	
第3回 ③教会問題	第18回 船舶税とは①	
第4回 清教徒革命の始まり①長期議会招集	第19回 船舶税とは②	
第5回 ②長期議会による改革	第20回 チェシャーにおける船舶税	
第6回 ③長期議会の分裂	第21回 ハンプシャーにおける船舶税	
第7回 清教徒革命の進展①第1次内戦	第22回 サマセットシャーにおける船舶税	
第8回 ②長老派と独立派	第23回 サフォークシャーにおける船舶税	
第9回 ③平等派の台頭	第24回 デヴォンシャーにおける船舶税	
第10回 革命の成果①共和制の成立	第25回 船舶徴用から船舶税へ	
第11回 ②農業・土地問題	第26回 海上主権論と船舶税艦隊	
第12回 ③産業と貿易	第27回 1626年と1628年の船舶税	
第13回 ④経験論	第28回 船舶税裁判	
第14回 革命の後退と終結①護国卿制	第29回 最後の船舶税と議会	
第15回 ②王政復古	第30回 まとめ	
<b>事前事後学習</b>		
講義において指示する参考文献の事前と事後における精読		
<b>テキスト</b>		
授業において指示する。		
<b>参考文献</b>		
浜林正夫『イギリス市民革命史』 未来社 酒井重喜『チャールズ1世の船舶税』 ミネルヴァ書房		
<b>成績評価</b>		
平常点（60%）とレポート（40%）による。		

<b>授業科目名</b>	<b>西洋経済史特殊研究演習</b>	<b>単位数</b>	<b>2年間を通じて8単位</b>
<b>担当教員名</b>	<b>酒井重喜（さかいしげき）</b>	<b>開講期間</b>	<b>通年</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>			
封建制から資本主義への移行をテーマとした戦後史学においては、封建制は克服すべき対象であり、その克服が徹底的か妥協的かの類型的相違が、主要関心事であった。近世・近代の国封建制から資本主義への移行をテーマとした戦後史学においては、封建制は克服すべき対象財政においては、封建制の克服ではなく継承のあり方が問題であった事の意義を理解する。			
<b>授業の概要</b>			
近世・近代イギリス史の基本史実を押さえる。戦後史学における西洋経済史の成果を学びその正負両面の理解を深める。特に今年度は、イギリス絶対王政下における財政封建制の展開、とりわけ「大契約」およびフォレスト政策について学ぶ。			
<b>授業計画</b>			
1年次 修士論文のテーマの決定、問題の設定と仮説的解答の用意、間にに対する仮説的答についての実証に向けての作業工程の確定、基本的文献の確定と読破、基本的資史料の確定と読破、を目指す。			
2年次 問一実証一仮説的答のそれぞれの再検討と再確定、実証作業の詰め、を目指す。			
<b>事前事後学習</b>			
講義において指示する参考文献の事前と事後における精読			
<b>テキスト</b>			
酒井重喜「混合王政と租税国家」（弘文堂） 酒井重喜「近世イギリスのフォレスト政策」（ミネルヴァ書房）			
<b>参考文献</b>			
演習においてその都度指定する。			
<b>成績評価</b>			
論文によって評価（100%）			

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
社会思想史特殊研究	4 単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
村松茂美 (むらまつ しげみ)	秋学期週2回
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
経済学の歴史において、古典的位置をしめるアダム・スミスの『国富論』(1776年)の全編の読破を通して、スミス経済学の「経済学史上の意味」ではなく、「社会思想史上の意味」を考える。	
<b>授業の概要</b>	
下記「授業計画」にしたがって進める。	
<b>授業計画</b>	
第1回 スミスまでの経済思想 (1)	第16回 『国富論』第3編 (4)
第2回 スミスまでの経済思想 (2)	第17回 『国富論』第4編 (1)
第3回 道徳哲学と経済学 (1)	第18回 『国富論』第4編 (2)
第4回 道徳哲学と経済学 (2)	第19回 『国富論』第4編 (3)
第5回 『国富論』第1編 (1)	第20回 『国富論』第4編 (4)
第6回 『国富論』第1編 (2)	第21回 『国富論』第5編 (1)
第7回 『国富論』第1編 (3)	第22回 『国富論』第5編 (2)
第8回 『国富論』第1編 (4)	第23回 『国富論』第5編 (3)
第9回 『国富論』第2編 (1)	第24回 『国富論』第5編 (4)
第10回 『国富論』第2編 (2)	第25回 スミス以後の経済思想 (1)
第11回 『国富論』第2編 (3)	第26回 スミス以後の経済思想 (2)
第12回 『国富論』第2編 (4)	第27回 日本におけるスミス研究 (1)
第13回 『国富論』第3編 (1)	第28回 日本におけるスミス研究 (2)
第14回 『国富論』第3編 (2)	第29回 総括 (1)
第15回 『国富論』第3編 (3)	第30回 総括 (2)
<b>事前事後学習</b>	
受講前に、村松茂美他編著『はじめて学ぶ西洋思想』119～125頁を読んでおくこと。授業には、各回の『国富論』当該箇所を読んで出席すること。	
<b>テキスト</b>	
アダム・スミス著 (水田洋監訳・杉山忠平訳) 『国富論』全四冊、岩波文庫	
<b>参考文献</b>	
授業中に示す。	
<b>成績評価</b>	
平常点 (60%)、レポート (40%) によって評価。	

<b>授業科目名</b> 社会思想史特殊研究演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 村松茂美（むらまつしげみ）	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> ブリテン国家の形成の思想史的学習をとおして、社会思想史の基本的な学び方を修得すること。	
<b>授業の概要</b> 本演習では、17・18世紀のブリテンの社会思想の歴史を研究する。ここで「ブリテン」とは、たんにイングランドをさすのではなく、イングランドとともにスコットランド、アイルランドそして海外植民地をふくめている。このようなブリテンの構成部分は、たとえば、17世紀中葉のクロムウェルによるアイルランドおよびスコットランドの征服、1707年のイングランドとスコットランドの合邦、1776年のアメリカの独立宣言という事件にみられるように、時には融和するという複雑な関係のなかにおかれる。本演習では、このようなブリテンの構成部分の関係のなかで、当時の思想の理解を試みる。	
<b>授業計画</b> <b>1年次</b> 一年次春学期には、下記テキストによりながら、「ブリテン国家」形成に作用した種々の思想を勉強する。秋学期には、近代ブリテン思想のなかで、重要な人物をとりあげ、その原典を読む。 <b>2年次</b> 二年次春学期には、テーマをしづり、研究史を整理する。秋学期は修士論文の完成をめざす。	
<b>事前事後学習</b> 事前に演習で扱う箇所を必ず読んでくること。事後、疑問点を整理すること。	
<b>テキスト</b> アーミテージ 平田、岩井 他訳 『帝国の誕生—ブリテン帝国のイデオロギー的起源』 日本経済評論社 3,570円	
<b>参考文献</b> 演習中にしめす。	
<b>成績評価</b> 修士論文の完成(100%)。	

<b>授業科目名</b> <b>財政学特殊研究</b>	<b>単位数</b> <b>4 単位</b>
<b>担当教員名</b> <b>中村良広 (なかむら よしひろ)</b>	<b>開講期間</b> <b>春学期週2回</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
租税論の基礎の修得を目標とする。わが国の税制において論点とすべきものを発見し、分析するための基礎力を養う。	
<b>授業の概要</b>	
租税論の基礎を体系的に解説するとともに、本格的増税の時代を迎えるとしている日本税制の現状と改革課題について検討する。グローバリゼーションの影響下にある日本税制の動向を理解するためには、伝統的租税論の基礎を踏まえながらも、税制改革の国際的潮流を重視しなくてはならない。そのための一助として、欧米における最近の税制改革についても概観する。	
基本的に講義形式で授業を進める。内容としては前半では主として基礎理論について解説し、後半ではその理論を前提にして内外の租税の現状と問題、そしてそれらをめぐる改革の方向について論じる。	
<b>授業計画</b>	
第1回 租税の本質と租税根拠論	第16回 近年の税制改革 (1)
第2回 租税原則論	第17回 近年の税制改革 (2)
第3回 課税と市場経済	第18回 課税単位
第4回 租税の諸類型 (1)	第19回 給与所得課税 (1)
第5回 租税の諸類型 (2)	第20回 給与所得課税 (2)
第6回 シャウプ税制の基本構造 (1)	第21回 利子・配当所得課税
第7回 シャウプ税制の基本構造 (2)	第22回 年金課税 (1)
第8回 シャウプ税制の解体過程 (1)	第23回 年金課税 (2)
第9回 シャウプ税制の解体過程 (2)	第24回 消費課税 (1)
第10回 高度成長期の税制 (1)	第25回 消費課税 (2)
第11回 高度成長期の税制 (2)	第26回 資産課税
第12回 抜本的税制改革 (1)	第27回 アメリカの税制
第13回 抜本的税制改革 (2)	第28回 イギリスの税制
第14回 抜本的税制改革以降 (1)	第29回 フランスの税制
第15回 抜本的税制改革以降 (2)	第30回 ドイツの税制
<b>事前事後学習</b>	
テキストの当該箇所を熟読し、質問項目をまとめておく。また、参考文献の資料により現状を確認する。	
<b>テキスト</b>	
中村良広『所得税改革—日本とドイツ』税務経理協会 2,940 円	
<b>参考文献</b>	
江島一彦編著 『図説日本の税制 (平成27年度版)』 財経詳報社 2,100 円 (購入すること)	
森信茂樹 『日本の税制—何が問題か』 岩波書店 3,360 円	
林 正寿 『租税論』 有斐閣 2,700 円	
<b>成績評価</b>	
平常点 (60%) およびレポート (40%) により評価する。	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
財政学特殊研究演習	2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
中村良広（なかむら よしひろ）	通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>わが国の税制に関する理論的・実証的研究をテーマにする。</p> <p>自ら修士論文のテーマを設定し、2年次の12月までに論文を完成する。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>はじめに、租税論に関する基本的テキストを注意深く検討し、その内容についての討論を通じて租税論に関する知識の習得と深化を図る。また、近年の政府税制調査会の各種の答申を輪読し、租税論の基礎理論を踏まえて検討し、わが国税制の現状と改革方向について確認する。</p> <p>以上の研究を進めながら院生各自の研究テーマを設定し、論文作成の方向を確認する。</p> <p>研究テーマ決定後は、それぞれの分野の基本文献を批判的に検討しながら論文の内容を構想し、教授の指導の下に論文を作成する。作成した論文について院生相互間での意見交換を続けながら、最終的に論文を仕上げていく。</p>	
<b>授業計画</b>	
1年次	
<p>租税論に関する基本的テキストを注意深く検討し、その内容についての討論を通じて租税論に関する知識の習得と深化を図る。また、近年の政府税制調査会の各種の答申を輪読し、租税論の基礎理論を踏まえて検討し、わが国税制の現状と改革方向について確認する。</p> <p>以上の研究を進めながら院生各自の研究テーマを設定し、論文作成の方向を確認する。</p> <p>研究テーマ決定後は、関連文献・資料の収集・整理を行うとともに先行研究の検討を開始する。</p>	
2年次	
<p>研究テーマに関する先行研究の批判的検討を行う。その過程で、論文の内容についての構想を進め、教授の指導を受けつつ逐次執筆を進める。</p> <p>作成した論文について、院生相互間での意見交換を続けながら論文を仕上げていく。</p>	
<b>事前事後学習</b>	
事前に研究発表の準備をし、事後には演習における発表とそれを巡る議論を踏まえて論点の充実に努める。	
<b>テキスト</b>	
<p>宮島 洋 『租税論の展開と日本の税制』 日本評論社</p> <p>森信茂樹 『日本の税制—何が問題か』 岩波書店、3,360円（購入すること）</p>	
<b>参考文献</b>	
<p>持田信樹 『財政学』 東京大学出版会 2,940円（購入すること）</p> <p>木下和夫・金子 宏監修 『21世紀を支える税制の論理』（全7巻）</p> <p>福田幸弘監修 『シャウプの税制勧告』 霞出版社 12,000円</p>	
<b>成績評価</b>	
論文により評価する。	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
経済政策論特殊研究	4 単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
岡村 薫 (おかむら かおる)	春学期週2回
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
産業組織論の基礎の習得を目標とする。本講義では産業組織論の中でも特に競争政策に関して考察を深めることをテーマとする。	
<b>授業の概要</b>	
本講義では、経済政策に関するトピックスのうち特に競争政策に関連する理論、実証および政策について学ぶ。具体的には、産業組織論を基礎として企業の戦略的行動（参入阻止、差別化、広告、研究開発）を分析し、また、市場の競争状況の評価ならびに競争政策の経済学的分析などをおこなう。受講者は産業組織論における理論的・実証的成果が企業の経営戦略にどのように取り入れられているのか、あるいは競争政策や公益事業の規制緩和にどのように運用されているのかを理解し、自ら分析・検討できるようになることを目標とする。	
<b>授業計画</b>	
第1回 序論 産業組織の基本概念	第16回 過剰参入の可能性
第2回 変数とモデル、集中度	第17回 製品差別化による競争
第3回 完全競争市場均衡の最適性	第18回 製品空間における立地-線分モデル
第4回 独占による厚生の損失	第19回 品質のシグナルとしての広告
第5回 生産量決定型寡占モデル	第20回 消費者による品質の推定
第6回 企業間費用格差とマーケット・シェア	第21回 先行者の優位性
第7回 集中度と社会的厚生	第22回 技術革新
第8回 價格決定型寡占モデル	第23回 特許を巡る競争
第9回 生産能力の決定	第24回 不当な取引制限の禁止
第10回 参入阻止価格戦略	第25回 カルテルと利益率の実証研究
第11回 コンテストブル・マーケット	第26回 企業結合規制
第12回 参入障壁の要因	第27回 市場の確定
第13回 利益率格差の持続性	第28回 垂直的取引制限
第14回 コミットメント	第29回 ブランド内競争とブランド間競争
第15回 不完全情報と参入阻止戦略	第30回 まとめ
<b>事前事後学習</b>	
毎回の講義で取り扱うテキストの該当箇所を事前によく読んでくること。	
<b>テキスト</b>	
小田切宏之 『新しい産業組織論』 有斐閣 2,800 円+税	
<b>参考文献</b>	
講義中に紹介する。	
<b>成績評価</b>	
平常点 (50%) およびレポート (50%) で評価する。	

<b>授業科目名</b> 経済政策論特殊研究演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 岡村 薫 (おかむら かおる)	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>経済政策のうち産業組織論に関連する問題もしくは社会保障に関連する問題について主に実証的に考察していくことをテーマとする。</p> <p>受講生は上記に関連する課題を自ら設定し、修士論文として分析・考察をおこない、期日までに完成させ、提出することを目標とする。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>1年目は社会保障政策のなかでも特に医療政策をとりあげ、医療費を抑制するためにどのような方策がとられているのか、また医療市場がどのような状態にあるのかといった基礎知識を習得する。そのうえで、医療分野を経済学的に考察するための基礎的考え方をテキストを輪読、検討するという形で学ぶ。そのうえで具体的な分析事例（論文）をとりあげ、この分野における研究の動向を把握する。</p> <p>2年目は1年目に習得した知識や分析手法をベースに、自らの関心のある問題設定をおこない、担当教員の指導のもとに論文を作成する。作成の過程において院生相互間での意見交換を踏まえながら、論文を完成させる。</p>	
<b>授業計画</b>	
<p>1年次</p> <p>日本の医療現場がかかえる課題について経済学的に分析・考察したテキスト「日本の医療のなにが問題か」を輪読し、その内容についての討論を通じて日本の医療政策について理解を深める。次に、医療分野における経済学的アプローチの全体像を把握するために「医療経済学講義」を同じく輪読および討論をおこなう。そのうえで、この分野における研究動向を把握するために論文をサーベイし、その中から何本かの論文をとりあげ批判的検討をくわえ、自らの論文のテーマ確立に役立てる。</p> <p>2年次</p> <p>1年次後半に取り扱う論文サーベイおよび批判的検討を継続しつつ、自らの論文のテーマを設定し論文執筆にとりかかる。執筆を希望する院生は、担当教員の指導と院生相互間における意見交換をふまえつつ改善をはかりながら論文を完成させる。</p>	
<b>事前事後学習</b>	
<p>事前には課題についての報告準備をする。事後には報告の場において出されたコメントや、考察によって得られた知見をとりまとめ、次回報告や論文の改善に反映させる。</p>	
<b>テキスト</b>	
<p>吉田あつし「日本の医療のなにが問題か」NTT出版 橋本秀樹/泉田信行「医療経済学講義」東京大学出版会</p>	
<b>参考文献</b>	
演習のなかで紹介します。	
<b>成績評価</b>	
1年次は毎回の報告によって、2年次は論文によって評価する。	

<b>授業科目名</b> マクロ経済政策論特殊研究	<b>単位数</b> 4 単位
<b>担当教員名</b> 小葉武史 (こば たけし)	<b>開講期間</b> 春学期週2回
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
マクロ経済政策は一般に安定政策と成長政策に大別されている。大学院レベルのマクロ経済モデルの解のふるまいについて学習し、政策介入の根拠とその効果を分析するための方法を学ぶ。	
<b>授業の概要</b>	
授業の前半で安定政策の根拠と効果を学び、後半で成長政策の根拠と効果を学ぶ。このことは大学院レベルのマクロ経済学モデルにおける解のふるまいを検討することに他ならない。このため以下の授業計画は「マクロ経済学特殊研究」や「数理経済学」の内容と重なる部分があるが、各回の主眼がそのマクロモデルを用いた経済政策の検討にある点が異なる。	
<b>授業計画</b>	
第1回 経済学における数理モデルの役割	第16回 現代マクロ経済モデルの構造
第2回 差分方程式(1)同次方程式と非同次方程式	第17回 OLG モデル(1)
第3回 差分方程式(2)解の安定性	第18回 OLG モデル(2)
第4回 連立差分方程式(1)解法	第19回 微分方程式(1)
第5回 連立差分方程式(2)解の安定性	第20回 微分方程式(2)
第6回 差分方程式(3)高次、高階差分方程式	第21回 最適性原理[MP](1)
第7回 動学的最適制御[DP](1)	第22回 最適性原理[MP](2)
第8回 動学的最適制御[DP](2)	第23回 Solow モデル
第9回 異時点間の消費貯蓄決定(1)恒常所得仮説	第24回 Ramsey-Cass-Koopmans モデル(1)
第10回 異時点間の消費貯蓄決定(2)CAPM	第25回 Ramsey-Cass-Koopmans モデル(2)
第11回 実物的景気循環論[RBC](1)	第26回 Mankiw-Romer-Weil モデル
第12回 実物的景気循環論[RBC](2)	第27回 AK モデル
第13回 分権経済と集権経済	第28回 外部性モデル
第14回 新古典派投資理論	第29回 不完全競争モデル
第15回 價格硬直性	第30回 バラエティーモデル
<b>事前事後学習</b>	
様々なマクロモデルが議論される。モデルの基本的なフレームワークと解のふるまいを復習し、そのモデルを用いて論文が書けるようになって欲しい。	
<b>テキスト</b>	
プリントを配布する	
<b>参考文献</b>	
加藤涼「現代マクロ経済学講義」東洋経済新報社、3,888 円 廣瀬康生「DSGE モデルによるマクロ実証分析の方法」三菱経済研究所、2,268 円	
<b>成績評価</b>	
授業内で複数回のレポートを出題し、その結果により評価する。	

<b>授業科目名</b> <b>農業政策論特殊研究</b>	<b>単位数</b> <b>4 単位</b>
<b>担当教員名</b> <b>山内良一（やまうち りょういち）</b>	<b>開講期間</b> <b>秋学期週2回</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
わが国の「食料・農業・農村問題」をテーマとして、その今日的課題を検討する。さらに、新しい農村開発のあり方についても展望する。	
<b>授業の概要</b>	
<p>農業政策では、食料の安全性や食品流通の問題だけでなく、広く国土や自然環境の保全などについても考える必要がある。いま先進各国の政策は、これまでの効率主義一辺倒から転換して農業や農村のもつ多面的な役割を重視する方向へむかいつつある。いいかえれば、環境と調和した生産をめざすいわば「エコノミーとエコロジーの共存」という新しい農政のパラダイムを模索している。</p> <p>講義では、基礎理論と政策分野とにわけて進めるが、まず基礎理論として、農業をふくめてバランスのとれた国内産業構造のあり方など、古典理論に学びながら考える。</p> <p>さらに、近年のわが国の農政改革の内容を吟味する。とくにEU（ヨーロッパ連合）で導入されている条件不利地域対策とわが国の「新農政改革」（2007年4月）を比較検討し、直接支払制度や、新しい農村地域開発のあり方、さらにグリーンツーリズムなどについても考える。</p>	
<b>授業計画</b>	
第1回 農業の国際化をめぐる論点	第16回 EU・CAPにおける直接所得補償制度と新しい農村開発政策
第2回 "	第17回 "
第3回 農業・農村の基本的価値を見直す	第18回 新たな農政改革のスタート
第4回 "	第19回 "
第5回 食料・人口・経済成長をめぐる論争	第20回 「食料・農業・農村基本法」の基本理念
第6回 "	第21回 "
第7回 EU農業保護政策の基本理念の変容	第22回 日本型直接支払制度のあり方
第8回 "	第23回 "
第9回 EU・CAPにおける重層的所得補償制度 —オーストリア・ベルクバウエルン対策—	第24回 中山間地域直接支払制度の政策効果
第10回 "	第25回 "
第11回 EU・CAPにおける条件不利地域政策	第26回 わが国における新しい農村開発政策の方向性—第6次産業化論など
第12回 "	第27回 "
第13回 <受講生による個別の研究テーマについて質疑と討論>	第28回 <受講生による個別の研究テーマについて質疑と討論>
第14回 "	第29回 "
第15回 (予備日)	第30回 (予備日)
上記の内容にそって、報告分担をきめ、内容をレジュメに要約して報告する。とくにキーワードの厳密な解釈を心がける。	
<b>事前事後学習</b>	
テキストの当該箇所を熟読し、質問項目をまとめておく	
<b>テキスト</b>	
山内良一『農業保護の理論と政策』,ミネルヴァ書房, 1997	
<b>参考文献</b>	
① R.フエネル, 荘開津・柘植訳『ECの共通農業政策』大明堂, 1989	
② 是永・津谷・福士『ECの農政改革に学ぶ』,農文協, 1994 その他、随時に関連資料を配布する。	
<b>成績評価</b>	
平常の学修課題のプレゼンテーション（60%）、および学期末のレポート（40%）により評価する。	

<b>授業科目名</b> 農業政策論特殊研究演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 山内良一（やまうち りょういち）	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
講義（農業政策論特殊研究）で学んだ様々な今日的課題の中から、自らの修士論文テーマを設定し、「研究経過報告会」等を経て、2年次の12月までに論文を完成させる。	
<b>授業の概要</b>	
修士学位論文の構想段階から策定作業にいたるまで、段階をおって検討・指導を進めるが、一応の指導の方向性として、つぎのようなテーマをたてる。	
1 農業保護に関する学説史的検討 資本主義の発達過程において国内農業は産業構造のなかにどのような姿で位置づけられてきたか。海外農産物の輸入によって国内食糧を代替していくのか、あるいは自給率を高めて農業をふくめた産業の均衡的発展をめざすのか。古典派経済学のリカード・マルサス論争などを素材として考えてみる。	
2 農業保護政策の現代的動向 農業や農村のもつ多面的な役割を評価し、トータルな価値観から農業を見直す。たとえばEUの条件不利地域（LFA）対策や環境保全地域（ESA）対策にみられる直接所得補償制度を検討し、わが国の「新農政改革」や中山間地域対策に導入された「日本型直接支払制度」との比較において、その政策効果を分析する。また近年の農村開発にみられる環境政策のあり方についても考察する。	
<b>授業計画</b>	
1年次 (春学期) 学位論文のテーマを早めに構想し、そのための文献や資料の選定および収集をおこなう。できるだけ未開拓の文献・資料の収集に心がけるようにしてほしい。 (秋学期) そのつど文献・資料の内容を報告し検討を加える。その作業をとおして論文の全体像を「素描ノート（目次構成など）」として作りあげていく。	
2年次 (春学期) (1) 早い時期に具体的な執筆マニュアルを提示する。それにそって論文の策定作業（文章入力）を開始し、内容についての詳しい検討をすすめる。 (2) 9月中旬に開かれる「中間報告会」での発表にむけて、中間報告論文の策定を進める。 (秋学期) 中間報告会での批評・助言をふまえて、学位論文の完成へむけて作業を進める。	
<b>事前事後学習</b>	
早め（1年次秋学期）に論文テーマを設定し、関係文献や資料を収集する。それらの文献・資料は自主的に熟読すること。	
<b>テキスト</b>	
山内良一『農業保護の理論と政策』、ミネルヴァ書房、1997	
<b>参考文献</b>	
① <i>The Agricultural Situation in the Community</i> , Brussels. (EU 農業白書), 各年度版 ② M. Alan Cahn & R. Obrien; <i>Thinking About The Environment</i> , M. E. Sharp, 1996. その他、関連資料を配布する。	
<b>成績評価</b>	
学位論文作成過程でのプレゼンテーション（60%）、および学位論文「中間報告」の発表（40%）により評価する。	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
労働経済論特殊研究	4 単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
荒井勝彦 (あらい かつひこ)	春学期週2回
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
到達目標は現代の労働経済学を理解する。テーマは今日の雇用・失業問題に迫る。	
<b>授業の概要</b>	
<p>本特殊研究では、現代における雇用・失業の理論的分析を中心に研究する。労働経済学は、1960年代になって理論的進化を遂げ、現代の理論経済学に大きく貢献し、フロントライナーともいわれている。フィリップス曲線の誕生を契機に、研究のスタンスは急速に経済理論に立脚したアプローチへと傾斜していった。1970年代にはいって次々と誕生した労働経済学の主な理論—失業のストック・フロー分析、UV分析、ジョブ・サーチ理論、賃金の硬直性に関する理論などは、複雑に錯綜する現代の失業問題を背景にして構築されていったと考えても過言ではない。</p> <p>本特殊研究では、これら一連の理論を展望することによって、理論の整合性と位相性を確認するとともに、今日における雇用・失業問題をどこまで究明することができるかを研究するものである。</p>	
<b>授業計画</b>	
第1回 労働経済学という学問	第16回 労働特性と雇用慣行 (1)
第2回 労働需要の理論 (1)	第17回 労働特性と雇用慣行 (2)
第3回 労働需要の理論 (2)	第18回 労働特性と雇用慣行 (3)
第4回 労働需要の理論 (3)	第19回 環境変化とライフサイクル (1)
第5回 労働供給の理論 (1)	第20回 環境変化とライフサイクル (2)
第6回 労働供給の理論 (2)	第21回 環境変化とライフサイクル (3)
第7回 労働供給の理論 (3)	第22回 賃金格差の実態と理論 (1)
第8回 労働時間の理論 (1)	第23回 賃金格差の実態と理論 (2)
第9回 労働時間の理論 (2)	第24回 賃金格差の実態と理論 (3)
第10回 非正規労働の実態 (1)	第25回 賃金格差の実態と理論 (4)
第11回 非正規労働の実態 (2)	第26回 労働組合の経済学 (1)
第12回 失業と雇用調整 (1)	第27回 労働組合の経済学 (2)
第13回 失業と雇用調整 (2)	第28回 労働組合の経済学 (3)
第14回 長期雇用と短期雇用 (1)	第29回 今日の労働市場問題 (1)
第15回 長期雇用と短期雇用 (2)	第30回 今日の労働市場問題 (2)
<b>事前事後学習</b>	
<p>① 事前学習として、授業の前に講義の範囲を必読して下さい。</p> <p>② 事後学習として、キーワードを必ず復習して下さい。</p>	
<b>テキスト</b>	
樋口美雄 『労働経済学』 東洋経済新報社 2,621円+税	
<b>参考文献</b>	
授業のときに紹介する。	
<b>成績評価</b>	
成績は平常点（授業での発言等 60%）、レポート（40%）によって評価する。	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
地域経済論特殊研究	4 単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
平松 燐 (ひらまつ ともる)	春学期週2回
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
地域経済の分析手法として応用一般均衡と GIS を学び扱う。	
<b>授業の概要</b>	
テキストを参考に分析手法の解説を行います。また、実際に地域経済を分析します。	
<b>授業計画</b> 講義と演習による。授業計画は以下を参考にしてください。	
第1回 ガイダンス / GISと経済・政策分析 / 空間データの選択・入手方法	第16回 ヘドニック・モデル：地震危険度と地価
第2回 ArcMap の基礎 / 空間参照と座標系	第17回 空間統計ツール：地理空間加重回帰分析
第3回 空間データの選択・検索	第18回 まとめ
第4回 空間データの処理：ジオプロセシングツール	第19回 産業連関分析と経済統計
第5回 テーブルデータの操作・演算・結合	第20回 産業連関分析と経済統計
第6回 空間データの活用：国土数値情報	第21回 産業連関分析と経済統計
第7回 空間データの活用：e-Stat 国勢調査メッシュ統計	第22回 CGE モデルの理論と応用
第8回 空間データの活用：e-Stat 国勢調査（小地域）統計データ	第23回 CGE モデルの理論と応用
第9回 アドレスマッチング（ジオコーディング）	第24回 SCGE モデルの理論と応用
第10回 地図の作成	第25回 SCGE モデルの理論と応用
第11回 地価と都心からの距離	第26回 CUE モデルの理論と応用
第12回 空間統計ツール：空間的自己相関分析	第27回 CUE モデルの理論と応用
第13回 空間統計ツール：ホットスポット分析	第28回 まとめ
第14回 空間統計ツール：グループ分析	第29回 タームペーパー報告
第15回 空間統計ツール：地理的中心の算出	第30回 タームペーパー報告
<b>事前事後学習</b>	
地域経済学、ミクロ経済学、計量経済学の基本的な知識を前提とします。 前提とはしないが、参考文献をプログラミングの知識があれば望ましい。 事後学習として実際に講義で解説した分析を行うこと。	
<b>テキスト</b>	
上田孝行編著「Excel で学ぶ地域・都市経済分析」コロナ社 河端瑞貴「経済・政策分析のための GIS 入門-ArcGIS」古今書院	
<b>参考文献</b>	
細江宣裕・我澤賢之・橋本日出男「応用一般均衡モデリング 第2版: プログラムからシミュレーションまで」東京大学出版会 金明哲（編）「Rで学ぶデータサイエンス7 地理空間データ分析」共立出版 瀬谷創・堤盛人「空間統計学：自然科学から人文・社会科学まで」朝倉書店	
<b>成績評価</b>	
平常点（30%）とタームペーパー（70%）	

<b>授業科目名</b> <b>地域産業論特殊研究</b>	<b>単位数</b> <b>4 単位</b>
<b>担当教員名</b> <b>伊東維年（いとう つなとし）</b>	<b>開講期間</b> <b>春学期週2回</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>授業の到達目標は、グローカル時代の地域産業研究の一環として、日本における産業集積の変貌と地域産業政策について学び、研究者としての素養を高めることである。</p> <p>授業のテーマは、日本の産業集積の変貌と地域産業政策である。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>日本の産業集積を取り巻く急激な環境変化の中で、既存の産業集積にいかなる変化が生じているのか、その一方でどのような産業集積が形成されているのかを学び、その具体的な要因を探るとともに、必要とされる地域産業政策のあり方を考えることが本授業の概要である。</p>	
<b>授業計画</b>	
第1回 ガイダンス	第16回 アニメーション産業の分業関係と地域政策(1)
第2回 世界経済の変化と地域産業政策(1)	第17回 同上(2)
第3回 同上(2)	第18回 クリエイティブクラスター創生の試みと地域産業活性化(1)
第4回 世界の主要経済地域の盛衰と日本の産業地域(1)	第19回 同上(2)
第5回 同上(2)	第20回 ゲスト講義
第6回 新興集積地における自動車部品の域内調達とグローバル調達(1)	第21回 金物流通の変容と産地再編(1)
第7回 同上(2)	第22回 同上(2)
第8回 立地と集積からみた研究開発とイノベーション(1)	第23回 清酒産業の集積と今後の方向性(1)
第9回 同上(2)	第24回 同上(2)
第10回 半導体設計開発拠点の形成と半導体設計企業(1)	第25回 本格焼酎産業の集積と今後の課題(1)
第11回 同上(2)	第26回 同上(2)
第12回 同上(3)	第27回 地域産業政策の展開と課題(1)
第13回 新プログラミング言語によるソフトウェア産業振興(1)	第28回 同上(2)
第14回 同上(2)	第29回 フリートーキング：日本の産業集積を考える
第15回 産業集積と地域産業政策に係わるビデオ鑑賞	第30回 フリートーキング：日本の地域産業政策を考える
<b>事前事後学習</b>	
事前学習：テキストを読み、理解できない個所については参考文献や図書館の蔵書等で調べておくこと。	
事後学習：授業で書き取ったノートを整理し直し、与えられた学習課題について調べ、まとめること。	
<b>テキスト</b>	
伊東維年・柳井雅也編著『産業集積の変貌と地域政策』ミネルヴァ書房、2012年。	
<b>参考文献</b>	
伊東維年・山本健兒・柳井雅也編著 『グローバルプレッシャー下の日本の産業集積』日本経済評論社、2014年。 そのほかの参考文献については、授業の進捗状況に合わせて紹介する。	
<b>成績評価</b>	
出席や報告、討論への参加状況等の平常点（50%）、提出レポート（50%）によって評価する。	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
税法特殊研究	4 単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
山崎広道 (やまざき こうどう)	通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>租税法の基本原則に基づく課税要件事実の認定と税法の解釈及び適用に関する法的思考の組み立ての修得を到達目標とする（到達目標）。</p> <p>租税法の基礎理論と裁判例（テーマ）。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>現行の租税実務及び税法に関する諸問題を扱うに当たっては、税法の原理・原則について深く理解する必要がある。本講義では、租税法序説、租税実体法、租税手続法、租税救済法及び租税処罰法に分類して体系化される税法全体の構成を概観し、学説及び判例の分析を通じてそれぞれの機能と性質を理解するとともに、検討すべき問題点を抽出し、問題の解決策を探求する。この課程において、租税に関する具体的事実がどのような法律要件に該当し、どのような法律効果を生ずるか、という一連の「事実認定と法の解釈・適用」に関する法的思考の組み立てを修得することを目標とする。そのため、課題解決型授業及び双方向・多方向的授業の展開を予定している。</p>	
<b>授業計画</b>	
第1回 授業の進め方の説明	第16回 租税回避
第2回 租税法の意義と範囲	第17回 信義誠実の原則
第3回 租税法律関係	第18回 租税法の適用
第4回 租税法規の特色	第19回 租税確定手続（1）
第5回 租税法と隣接諸科学	第20回 租税確定手続（2）
第6回 租税法律主義の意義と機能	第21回 租税救済手続（1）
第7回 課税要件法定主義	第22回 租税救済手續（2）
第8回 課税要件明確主義	第23回 税務調査手続
第9回 租税公平主義の意義	第24回 租税徴収手続
第10回 立法との関係	第25回 租税処罰手続
第11回 執行との関係	第26回 所得税法重要判例の検討
第12回 租税法の法源	第27回 法人税法重要判例の検討
第13回 租税法の解釈	第28回 相続税法重要判例の検討
第14回 租税法と私法（1）	第29回 消費税法重要判例の検討
第15回 租税法と私法（2）	第30回 まとめ
<b>事前事後学習</b>	
<p>毎回、次回授業の範囲を指示しますので、テキストを読むとともに引用されている文献・裁判例にも目を通して下さい。授業中で理解できなかったこと、理解が浅かったことなどについて抽出し、復習を心掛けて下さい。</p>	
<b>テキスト</b>	
金子宏「租税法（最新版）」弘文堂	
水野忠恒他編「租税判例百選（第5版）」有斐閣	
<b>参考文献</b>	
隨時紹介します。	
<b>成績評価</b>	
授業での質問や意見等の発言、報告内容及び課題レポート等を総合的に評価します。	

<b>授業科目名</b>  行政法特殊研究	<b>単位数</b>  4 単位
<b>担当教員名</b>  中川義朗 (なかがわ よしろう)	<b>開講期間</b>  通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
行政法の特別法（各論）である地方自治法（あるいは地方自治行政法ともいう。）について、その主な規定・実態および判例を自ら調べ分析・批評しうる能力を身につけるとともに、地方自治法についての基本的・体系的知識を修得することが、この研究の目標です。	
<b>授業の概要</b>	
「地方分権」時代において、国の行政を中心とした行政法一般ではなく、地方自治体の組織・活動に焦点を当てた地方行政と法（条例）との関係・あり方についての研究、すなわち「地方自治法」あるいは「地方自治行政法」の理論的で、かつ実践に役立つ体系の構築が求められています。この研究では、このような視点から、「地方自治行政と法」との関係を共通のテーマにして、地方行政主体と法（組織法）、住民の法的地位行政活動と法、政策と法、行政活動の実効性確保、情報管理（情報公開条例等）、住民訴訟およびまちづくり行政と法について、主な判例・行政の実例を検討することを通じて、もって地方自治行政法についての体系的理解を得ることを目標とします。	
<b>授業計画</b>	
概ね次のテーマに関連する判例などをとりあげて報告・検討する予定ですが、受講生の修士論文等研究テーマとの関連で一部を変更するか、あるいは関連する法的事件・判例を取り上げる場合もあります。	
第1回 地方行政と法・条例の一般関係	第16回 行政活動と法的救済（自治体争訟法務）
第2回 法治主義と条例	第17回 //
第3回 住民の法的地位	第18回 //
第4回 地方行政主体・行政機関と法・条例	第19回 地方情報管理と法
第5回 長と委員会—執行機関	第20回 情報公開条例
第6回 地方議会の役割	第21回 個人情報保護条例
第7回 行政過程としての地方行政活動と法・条例	第22回 地方自治体のまちづくり行政と法
第8回 //	第23回 都市計画法
第9回 条例の「法律の範囲内」とは	第24回 建築基準法
第10回 //	第25回 指導要綱の法的問題
第11回 地方自治体の政策と法	第26回 環境行政と法・条例
第12回 //	第27回 住民訴訟・住民監査請求
第13回 地方行政活動の実効性確保	第28回 住民訴訟の判例
第14回 //	第29回 改正行政不服審査法
第15回 //	第30回 自治体オンブズマン制度
<b>事前事後学習</b>	
報告予定の場合はもとより、他人の報告の場合にも、予め報告テーマ・判例などについて不明の点など事前に調べ、自分だったらどのような報告をするか、ということを念頭において、この研究に参加してください。また、終了後は、当日のうちに復習することをぜひ実行してください。時間内で、十分取り上げて検討することが難しい場合もありますので、そのような個別テーマ・項目について事後学習が大事になってきます。	
<b>テキスト</b>	
『地方自治判例百選（第4版）』（別冊ジュリスト）有斐閣 2013年 中川義朗 編 『これから的地方自治を考える—法と政策の視点から』法律文化社 2010年 最新版（平成28年度）の『小六法』・『ポケット六法』（有斐閣）、又は『模範六法』（三省堂）	
<b>参考文献</b>	
手島孝・中川義朗監修 『新基本行政法学（第2版）』法律文化社 2016年3月 兼子仁著 『自治体行政法入門』 北樹出版 石川公一著 『実践・政策法務』 ぎょうせい	
<b>成績評価</b>	
授業（報告・発言など）の平常点（70%）を中心に、提出レポート（30%）を加味して総合的に評価します。	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
国際金融論特殊研究	4 単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
楊枝嗣朗 (ようじ しろう)	通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
現代金融を、国際金融とマイクロ・ファイナンスの現状から考察する。	
<b>授業の概要</b>	
<p>研究テーマは、第1部「国際的貨幣金融制度の展開」、第2部「金融と発展途上国の貧困削減」とします。</p> <p>第1部では、2008年9月のリーマン・ブラザーズの破綻による金融恐慌、さらには2010年、顕在化し、深化しつつあるユーロ金融危機の経緯を追跡し、その原因・背景を分析していく。ユーロ危機について、通貨の統合・単一化がギリシャ、アイルランドその他のユーロ周辺諸国にいかなる影響を与え、また、貨幣と国家の関係から見て、いかなる問題を秘めているかを明らかにしていく。その後、今日、ドルが国際通貨の位置を占めている理由を明らかにしていきたい。</p> <p>第2部では、開発途上国の貧困削減の有力な方法として注目されているマイクロ・ファイナンスについて、考察します。2006年にノーベル平和賞を受賞されたM.ユヌス氏のグラミン銀行の経験を詳細に追跡すると共に、その後のマイクロ・ファイナンスからモバイル・ファイナンスの展開を、ケニアのM-Pesa（モバイル・キャッシュ）を通して考察する。さらに、2011年、インドで問題になったマイクロ・ファイナンスを巡って自殺者が続出した事態を、マイクロ・ファイナンスの変質として分析し、マイクロ・ファイナンスのソーシャル・ビジネスとしての可能性と制約についても、金融の側面から考えていきたい。</p>	
<b>授業計画</b>	
第1回ー第3回 アベノミクスと金融資本主義	第16回ー第18回 M. ユヌス氏のマイクロ・ファイナンスの展開— 金融は貧困を削減できるか？ ユヌス氏の本（3冊）の紹介
第4回ー第7回 リーマン・ショックとユーロ危機 楊枝論文「欧州通貨ユーロの桎梏」の紹介	第19回ー第20回 マイクロ・ファイナンスからモバイル・ファイナンスへ アフリカにおける携帯電話の普及とマイクロファイナンスの拡大
第8回ー第10回 戦後国際金融市场の発展と変貌	第21回ー第27回 マイクロ・ファイナンスの変質とソーシャル・ビジネスの意義と限界 ディヒター、ベイトマンの見解の紹介と検討
第11回ー第13回 国際通貨ドルの展望、「なぜドル本位制は終わらないのか？」 岩野論文「ドル本位制の構造」の紹介	第28回ー第30回 金融資本主義と現代資本主義の展望
第14回ー第15回 グローバル下の世界経済におけるアメリカドルの位置	
<b>事前事後学習</b>	
私の提供する資料・論文を読んでいただく。	
<b>テキスト</b>	
岡本恵也・楊枝嗣朗編著『なぜドル本位制は終わらないのか』文眞堂 2011年	
<b>参考文献</b>	
M.ユヌス『自伝』	
<b>成績評価</b>	
講義での報告と討議に基づき評価します。	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
開発経済論特殊研究	4 単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
Maung Maung Lwin (マング・マング・ルウィン)	春学期週2回
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>本授業は今日の発展途上国における開発問題だけでなく、先進国も含めたグローバル経済全体における持続可能な開発問題に対し、解決策と戦略を探ることをテーマとしている。開発経済学の様々な分野における基本的な理論と現状分析を身に付けることが出来るように指導することが目標である。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>本特殊研究は、開発経済関連研究および様々な国における開発問題解決に役立つ人材を育てるのを目指している。よって研究者向けの授業となるために、理論と現状分析のバランスを考え、講義の内容を構成している。</p> <p>開発経済学のはじまり、開発と成長の概念と経済的・非経済的開発決定要因、「ハロッド・ドーマー成長モデル」、「ロストウの成長段階説」、「ルイスの2部門成長モデル」、「2重ギャップモデル」等の説明と議論を行う。次に、前述の様々な理論を基礎にして、高い成長を遂げているアジアの国々と、開発の波に乗り遅れた国々の現状と将来性を比較検証する。さらに、なぜ開発に乗り遅れた国々が存在するのか、その原因の把握と解決策を探ることを目的として、院生による報告と議論を行う。</p>	
<b>授業計画</b>	
(1) 開発経済学の概念、目的、誕生と関連分野	
(2) Adam Smith の国富論と開発経済学 (1)	
(3) Adam Smith の国富論と開発経済学 (2)	
(4) David Ricardo の貿易論と開発経済学 (1)	
(5) David Ricardo の貿易論と開発経済学 (2)	
(6) Karl Marx の社会主義国家と経済発展 (1)	
(7) Karl Marx の社会主義国家と経済発展 (2)	
(8) 院生レポート報告	
(9) 経済成長と開発の違い及び開発の決定要因	
(10) なぜ発展途上国は開発の道から外れたのか	
(11) 発展途上国、新興工業国と先進国の特徴	
(12) 低所得が原因で引き起こされた低開発と貧困の悪循環	
(13) 政治・宗教・文化的要因が原因で引き起こされた低開発と貧困の悪循環	
(14) 貧困問題と経済発展(HPI-1, HPI-2)	
(15) 開発レベルを測る方法 (所得)	
(16) 開発レベルを測る方法 (産業構造変化)	
(17) 院生レポート報告	
(18) 開発レベルを測る方法 (HDI)	
(19) 人間開発指数 (HDI) の算出方法	
(20) Harrod-Domar 経済成長モデル	
(21) Arthur Lewis の2部門成長モデル	
(22) Lwin の経済発展と非公式経済部門(IFS)の理論	
(23) Lwin の人口移動論と都市開発問題	
(24) Chenery & Stout の二重ギャップモデル(Two-Gap Model) と海外資本の重要性	
(25) 院生レポート報告	
(26) 開発における農業部門発展の重要性と課題	
(27) 開発における工業化・国際貿易の重要性と課題	
(28) Rostow の成長段階論( Stages of Economic Growth Theory) とアジア諸国	
(29) 院生レポート報告	
(30) 開発経済学の展望とまとめ	

## 事前事後学習

開発経済論特殊研究を受講するためには、ミクロ・マクロ経済学、国際貿易論、東南アジア経済論、国際関係論、国際農業論関連の知識を事前に高めることが必要であり、毎週授業で配布した学術論文と資料を授業後に読むことが必須である。

## テキスト

特になし。

## 参考文献

Ingham, B. (1995), *Economics and Development*, McGraw Hill.

Ito, T. & Krueger, A.O. (1995), *Growth Theories in Light of the East Asian Experiences*, University of Chicago Press.

Lwin M.M. (1984), An Econometric Approach to Urbanization, Age, Education and Internal Migration: A Cross-sectional Analysis, International Economic Conflict Discussion Paper, No.3, *Economic Research Center*, Faculty of Economics, Nagoya University, Japan.

Lwin M.M. (2000), Resource Mobilization for Employment Promotion through Informal Sector, *Economic Journal*, KGU, Japan.

Lwin M.M. (2000), Working Poor and Economic Transition: An Asian Experience, Research Center for University Education, Kumamoto University, Japan.

Lwin M.M. (2001), The Achievement and Outlook of ASEAN Free Trade Area: An Overview, Association for the Study of Social Relations, KGU, Japan.

Lwin M.M. and Sakuno, K. (2004), Social and Cultural Factors and Economic Development: An Overview (The Case of Confucius Culture), In Japanese, Institute of Foreign Affairs, Vol. 32, No. 1. KGU, Japan.

Lwin, M.M. (2006). Industrial Development under Colonialism: The Burmese Experience, *Economic Journal*, Vol. 13, No. 1-2, Faculty of Economics, Kumamoto Gakuen University, Japan.

Lwin, M.M. (2007), Development Management Capability of Government, *Economic Journal*, Special issues for the establishment of Department of Legal Economics, Kumamoto Gakuen University, Japan, March.

Lwin, M.M. & Aye Chan Pwint. (2010), The Condition of Poverty In Myanmar and Its Issues: An International Comparison Based on Poverty Related Indexes, In Japanese, Institute of Foreign Affairs, Vol. 37, No. 2. KGU, Japan.

Lwin, M.M. (2011), Investigating Village Socio-economic Condition and Possibility of Poverty of Reduction through Sample Survey: The Case of Rattan Handicraft Village of Siem Reap, Cambodia. Institute of Foreign Affairs, Vol. 39, No. 1. KGU, Japan.

Meier, G.M. & R.E. Baldwin. (1966), *Economic Development: Theory, History, Policy*, John Wiley & Sons, Inc. 7<sup>th</sup> Edition.

Todaro, M.P. (2000). *Economic Development*, 7<sup>th</sup> Edition, Longman.

World Bank. (1993). *East Asian Miracle: Economic Growth and Public Policy*, Oxford University Press.

Handbook of Development Economics. (2008), Vol. I, II, III, IV. Elsevier Science Publishers B.P.

\*各院生の研究と修士論文のテーマに沿って、他の参考文献を付け加える。

## 成績評価

授業中の討論（20%）、開発関連レポートの内容と発表（60%）、自発的に行った研究成果関連のプレゼンテーション（20%）を基準に評価する。

<b>授業科目名</b> <b>開発経済論特殊研究演習</b>	<b>単位数</b> <b>2年間を通じて8単位</b>
<b>担当教員名</b> <b>Maung Maung Lwin (マング・マング・ル温)</b>	<b>開講期間</b> <b>通年</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>院生の研究テーマ及び修士論文内容関連の先行研究の報告、学会参加と発表、国内外調査研究活動等により理論と現状分析能力を身に付け、2年間で学位を取得することが目標である。研究指導のテーマは院生の研究テーマ及び修士論文内容によって異なる。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>本演習は、開発経済特殊研究（講義）で学んだことを基本とし、理論と現状分析能力を高め、2年間での修士論文完成を目標に進めていく。本演習にて院生は、開発経済学の様々な分野である、貿易と開発、工業化と開発、地域・都市・農村開発、政府開発援助及び海外直接投資と開発、貧困と経済発展、人的資源と開発、社会・文化的要因と開発、持続可能な開発と環境問題、政治・民主主義と経済発展等に関連する修士論文のテーマが幅広く選択できる。今日までに本演習で完成した主な修士論文のテーマは、「ASEANと東南アジアの経済発展」、「ベトナムの経済発展と工業化」、「日本における需要の変化と経済発展」、「中国の国際貿易と経済発展」、「儒教文化と経済発展」、「ミャンマーにおける工業開発戦略」、「ミャンマーの貧困現状と課題」、「バングラデシュにおける女性エンパワーメントと開発」、「中国における貧困の現状と課題」、「中国における食料問題と対策」、「公正貿易と貧困削減」、「カンボジアにおける繊維産業の発展と企業の社会的責任」、「カンボジアにおける教育と所得の格差」、「ソシャールビジネスと貧困削減」、「島国パプアニューギニアの観光業と経済発展」、「中国の観光産業の現状と課題」、「フィリピンの貧困現状と課題」等が挙げられる。</p>	
<p>この演習では、グローバル人材育成を目指し、海外での研究所と国際機関訪問、資料の収集と調査、国際開発学会への入会が不可欠である。</p>	
<b>授業計画</b>	
<p>1年次 春学期：理論を中心とした指導。 秋学期：修士論文のテーマの決定、先行研究関連知識と分析方法の習得、国際開発学会への参加。</p>	
<p>2年次 春学期：先行研究関連知識と分析方法習得及び調査方法習得を続け、テーマによっては国内外での調査も行う。修士論文作成を開始し、論文の段階的な発表と同時に、中間報告の準備も進める。 国際開発学会の参加。 秋学期：修士論文関連の報告を続け、修士論文完成に向けての指導を行う。 ＊卒業後、博士後期課程進学を希望する学生には、それに対する指導もする。</p>	
<b>事前事後学習</b>	
<p>開発経済論特殊研究演習を受講するためには、ミクロ・マクロ経済学、国際貿易論、東南アジア経済論、国際関係論、国際農業論関連知識を事前に高めること、毎回演習で配布する学術論文と資料を読む事が必須である。</p>	
<b>テキスト</b>	
特ない。	
<b>参考文献</b>	
参考文献は各院生の研究及び修士論文テーマを中心にするので毎年異なる。	
<b>成績評価</b>	
演習中の討論（20%）、レポートと中間発表プレゼンテーション（20%）、修士論文テーマ関連研究と進行状況（60%）を基準に評価する。	

<b>授業科目名</b> 貿易論特殊研究	<b>単位数</b> 4 単位
<b>担当教員名</b> 金 栄 緑 (キム ヨンロク)	<b>開講期間</b> 春学期週2回
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
国際貿易の理論とモデルの仕組みが理解できるようになります。	
<b>授業の概要</b>	
<p>国際貿易論の基本的なテーマは、貿易の発生、貿易パターンの決定、それに貿易政策であります。Ricardo や H-O モデルから説明される国際貿易の基本的仕組は応用ミクロ経済学として、貿易政策問題などはその応用（広い意味での応用経済学）としてアプローチできます。講義は国際貿易論の全ての範囲をカバーすることより、基本的仕組みとその応用である政策、貿易協定（FTA など）に焦点を絞って行う予定であります。前半には、国際貿易の仕組みに関する理論的モデルと新貿易理論とも呼ばれている、不完全競争の貿易理論を講義します。また、応用として貿易政策の理論、経済成長と貿易、経済統合（FTA）の理論を講義します。後半には、国際貿易に関するいくつかのトピックスを選び、その理論的背景、傾向、方向性などを検討していく予定です。なお、講義内容の多くはミクロ経済学を基礎としているので、ミクロ経済学の基礎的内容の復習が必要です。講義は、全員参加の演習発表形式で行います。報告担当者を決め、テキストや論文の内容をまとめた発表と質疑、ディスカッションする形で講義を進めます。</p>	
<b>授業計画</b>	
第1回 国際貿易の範囲と方法 1	第16回 新貿易理論
第2回 国際貿易の範囲と方法 2	第17回 産業内貿易の理論
第3回 比較優位と貿易	第18回 産業内貿易の検証
第4回 リカードモデル	第19回 GATT と WTO
第5回 リカードモデルの貨幣的側面	第20回 地域貿易協定の理論（RTA）
第6回 産業構造と国際貿易（リカード）	第21回 自由貿易協定の理論（FTA）
第7回 ヘクシャー＝オリーンモデル 1	第22回 FTA の経済分析
第8回 ヘクシャー＝オリーンモデル 2	第23回 資本移動の理論 1
第9回 S-S の定理	第24回 資本移動の理論 2
第10回 リプチンスキイの定理	第25回 トピックス（EU 経済）
第11回 特殊要素モデル 1	第26回 トピックス（EU 経済）
第12回 特殊要素モデル 2	第27回 トピックス A-1
第13回 貿易政策の理論	第28回 トピックス A-2
第14回 関税政策の理論	第29回 トピックス B-1
第15回 保護貿易と産業政策	第30回 トピックス B-2
<b>事前事後学習</b>	
事前にミクロ経済学の基本的部分を学習すること。事後、疑問点を整理すること。	
<b>テキスト</b>	
伊藤元重・大山道広 『国際貿易』 岩波書店 3,204 円	
<b>参考文献</b>	
木村福成 『国際経済学入門』 日本評論社 3,200 円	
<b>成績評価</b>	
授業への参加度、発表のレベルと課題（トピックスの選定と発表）の完成度を総合的に評価	

<b>授業科目名</b> 貿易論特殊研究演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 金 栄 緑 (キム ヨンロク)	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
国際貿易の理論とモデルの仕組みが理解できるようになります。	
<b>授業の概要</b>	
国際貿易論の基礎的な研究、および応用分野の分析について研究を行います。国際間の経済取引である国際貿易の背景にある理論的メカニズムの正確な理解と、国際経済の現実問題の正しい理解・分析が本演習の目標であります。国際貿易論の理論的理解のためには、ミクロ（マクロ）経済学の基礎が必要ですので、先ずはミクロ経済学の理論的補強しながら貿易論の理解を深めます。次に、貿易政策、地域貿易協定(FTA)などの応用分析を行います。後半には、各研究テーマ（修士論文のテーマ）に焦点を絞って学習します。	
<b>授業計画</b>	
1年次 前半では、ミクロ経済学の理論的学习（主に経済主体の最適化行動）を行います。 後半には、ミクロ経済学の基礎学習を踏まえて、国際貿易論の理論的学习を行います。	
2年次 国際貿易論の応用分析、貿易政策、貿易協定(FTA)などを学習します。 演習参加者の関心テーマに関連する応用研究をしながら、修士論文を作成します。	
<b>事前事後学習</b>	
事前に演習で扱う箇所を必ず読んでくること。事後、疑問点を整理すること。	
<b>テキスト</b>	
とくになし。	
<b>参考文献</b>	
適宜、演習中に指示する。	
<b>成績評価</b>	
平素の授業での発表、修士論文などで総合的に評価します。	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
国際関係論特殊研究	4 単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
小沼 新 (こぬま あらた)	通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>世はまさにグローバル時代。国際関係は、重層的、流動性を増している。Text を使って、基本的な理論を学ばせながら、具体的な紛争や地域統合などを解析する。21世紀世界、そして、日本の将来も見通すような視点を獲得させる。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>リーマンショックからの回復もままならず、EU内の財政危機に見られるように、資本主義の終焉を語る人もいる。一昨年3・11以後の日本もまた、悲惨の一語に尽きよう。冷戦体制の崩壊以降、当然視されたアメリカの一極支配が、終わりを告げようとしている。中国・インドの急成長にみられるようにアジアの時代が、やってきた。この講義では、「国際関係論」(国際関係学)の基礎的な概念はもちろん、諸事象をとりあげ、その事象の起ころてくる背景や理由などを分析する。前半15回では、日本をとりまく国際関係論を学び、後半15回では、まず、「グローバル時代の国際関係論」と銘打ち、紛争・エネルギー・IT革命・国際移動・外国人法などの問題について考え、その後「今後の国際関係論」として、アメリカン・グローバリズムの衰退を見つめながら、これから世界を考察する。</p>	
<b>授業計画</b>	
第1回 グローバリズムという世界	第16回 民族紛争と予防外交の国際関係論 (第3部-⑩)
第2回 グローバル社会の中の日本	第17回 エネルギー資源をめぐる国際関係論 (第3部-⑪)
第3回 政治学と国際関係論の交差 (第1部-①)	第18回 ナショナリズム論
第4回 政治学の基礎一支配と被支配	第19回 IT革命の衝撃と国際関係 (第3部-⑫)
第5回 日本の国家・国民・領土 (第2部-②)	第20回 国境を越える人の移動と国際関係 (第3部-⑬)
第6回 日本の国際化と外国人 (第2部-③)	第21回 外国人法と市民社会 (第3部-⑭)
第7回 アジアからの日本留学と日本語教育(第2部-④)	第22回 アメリカニズムと近代文明 (第4部-⑮)
第8回 アジアの中の日本—日本の対アジアではない	第23回 アメリカ映画からみたアメリカの戦争観・世界観 (第4部-⑯)
第9回 日米関係と日本外交 (第2部-⑤)	第24回 紛争後の平和構築と国際関係論 (第4部-⑰)
第10回 日本国憲法と安全保障—日米安全保障条約	第25回 グローバル化する国際社会—その光と陰 (第4部-⑱)
第11回 日本の戦争責任と東アジアの国際関係論 (第2部-⑥)	第26回 冷戦体制の崩壊と湾岸戦争
第12回 日本のODAと開発援助の国際関係論 (第2部-⑦)	第27回 「9・11同時多発テロ」の真実
第13回 日本のNGOと国際平和協力 (第2部-⑧)	第28回 アフガニスタン・イラク戦争
第14回 日本の平和研究と日本国憲法9条 (第2部-⑨)	第29回 地球環境問題と「共生理論」
第15回 幻の東アジア共同体	第30回 ISによるテロと日本外交
<b>事前事後学習</b>	
<p>次の時間に学ぶ内容に関する、書物や新聞記事を与えて、予習を勧める。次の時間の「テーマ」について、ディスカッションする準備を求める。</p>	
<b>テキスト</b>	
初瀬龍平・野田岳人編『日本で学ぶ 国際関係論』・法律文化社・2,500円	
<b>参考文献</b>	
進藤栄一著『現代国際関係学』・有斐閣シリーズ・2,300円	
<b>成績評価</b>	
テーマを与え「小論文」を書かせる。	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
国際経済法特殊研究	4 単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
浪本浩志 (なみもと ひろし)	春学期週2回
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>研究を進めるために適切な方法論を理解することができる。</p> <p>実際に自らの研究テーマについて、適切な枠組み・手法を用いて研究を進めることができる。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>学部の段階で、定量分析や因果分析のトレーニングを行わなかった学生が、大学院で定性的な論文で学位を取るので、大量の「ルポタージュ学者」が養成されているとの批判がなされて久しい。本授業では、実証的な分析を進める上で理解しておくべき研究の手法を知り、実際に授業の後半でそれを実践することで、上記批判を乗り越えることを目指します。</p>	
<b>授業計画</b>	
第1回 イントロダクション	第16回 研究手法の実践
第2回 説明の枠組み(1)独立・従属変数、因果関係	第17回 研究手法の実践
第3回 説明の枠組み(2)質的研究と因果推論	第18回 研究手法の実践
第4回 反証可能性(1)	第19回 研究手法の実践
第5回 反証可能性(2)	第20回 研究手法の実践
第6回 観察、説明、理論	第21回 研究手法の実践
第7回 推論としての記述	第22回 研究手法の実践
第8回 共変関係	第23回 研究手法の実践
第9回 因果関係の向き	第24回 研究手法の実践
第10回 変数の統制	第25回 研究手法の実践
第11回 分析の単位、選択のバイアス	第26回 研究手法の実践
第12回 観察のユニバース	第27回 研究手法の実践
第13回 比較事例研究-定量的研究と質的研究(1)	第28回 研究手法の実践
第14回 比較事例研究-定量的研究と質的研究(2)	第29回 研究手法の実践
第15回 単一事例研究の用い方	第30回 まとめ、振返り
<b>事前事後学習</b>	
指定されたテキストを事前に読み、担当者がレジュメにまとめてくること。	
<b>テキスト</b>	
久米郁男『原因を推論する』(有斐閣、2013)(1,800円)	
<b>参考文献</b>	
授業の中で指示します。	
<b>成績評価</b>	
研究への取組・平常点(50%) およびレジュメの作成・報告(50%)	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
外国文献特殊研究 A	4 単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
小野 浩 (おの ひろし)	通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
1920 年代のアメリカにおける事業部制組織の成立について論じた古典的名著の輪読を通じて、経営史学の基礎知識を学びつつ、外国文献の読解能力を高めることを目標とする。	
<b>授業の概要</b>	
アルフレッド・D・チャンドラーJr は経営史学の発展に貢献した人物の 1 人である。教材としてチャンドラーの『STRATEGY AND STRUCTRE』を読む。文献の内容に関する発表と議論を通じて、歴史分析の手法、組織と戦略との間の相互関係、トップ・マネジメントの重要性等についての理解を深めつつ、外国文献を読み解く能力を高めていく。	
<b>授業計画</b>	
第1回 ガイダンス	第16回 Standard Oil Company 4
第2回 Strategy and Structure	第17回 Sears, Roebuck and Company 1
第3回 Historical Setting 1	第18回 Sears, Roebuck and Company 2
第4回 Historical Setting 2	第19回 Sears, Roebuck and Company 3
第5回 Du Pont 1	第20回 Sears, Roebuck and Company 4
第6回 Du Pont 2	第21回 Organizational Innovation 1
第7回 Du Pont 3	第22回 Organizational Innovation 2
第8回 Du Pont 4	第23回 Organizational Innovation 3
第9回 General Motors 1	第24回 The spread of Multidivisional Structure 1
第10回 General Motors 2	第25回 The spread of Multidivisional Structure 2
第11回 General Motors 3	第26回 The spread of Multidivisional Structure 3
第12回 General Motors 4	第27回 The spread of Multidivisional Structure 4
第13回 Standard Oil Company 1	第28回 Chapters in the History of the Great Industrial Enterprise 1
第14回 Standard Oil Company 2	第29回 Chapters in the History of the Great Industrial Enterprise 2
第15回 Standard Oil Company 3	第30回 まとめ
<b>事前事後学習</b>	
事前にテキストを読解し、専門用語や疑問点等を整理しておく。	
<b>テキスト</b>	
Alfred D. Chandler, Jr. "STRATEGY AND STRUCTRE"(1962)	
<b>参考文献</b>	
適宜、紹介する。	
<b>成績評価</b>	
発表内容等を総合的に評価する。	

<b>授業科目名</b> 外国文献特殊研究B	<b>単位数</b> 4 単位																																																												
<b>担当教員名</b> 笹山 茂 (ささやま しげる)	<b>開講期間</b> 通年																																																												
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> 経済学の専門文献を英語で読み理解する力を持つことを目標とする。																																																													
<b>授業の概要</b> Sanjay K. Chugh, <i>Modern Macroeconomics</i> , MIT Press, 2015.を主たるテキストとして使用し、その他関連するマクロ経済学の英語文献を輪読していく。この文献はミクロ経済学の基礎づけに基づく新しいタイプのマクロ経済学のテキストである。なお、授業計画の進度は前後することがありうるので、了解をお願いする。 授業は毎回報告とディスカッションを中心に運営していく予定である。																																																													
<b>授業計画</b> <table> <tbody> <tr><td>第 1 回</td><td>Microeconomics of Consumer Theory</td><td>第 16 回</td><td>Monetary-Fiscal Interactions</td></tr> <tr><td>第 2 回</td><td>Static Consumption-Labor Framework</td><td>第 17 回</td><td>Optimal Monetary Policy</td></tr> <tr><td>第 3 回</td><td>Dynamic Consumption-Savings Framework</td><td>第 18 回</td><td>Economic Efficiency</td></tr> <tr><td>第 4 回</td><td>Inflation and Interest Rates</td><td>第 19 回</td><td>Optimal Fiscal Policy</td></tr> <tr><td>第 5 回</td><td>Dynamic Consumption-Labor Framework</td><td>第 20 回</td><td>Optimal Fiscal and Monetary Policy</td></tr> <tr><td>第 6 回</td><td>Firms</td><td>第 21 回</td><td>Financial Accelerator</td></tr> <tr><td>第 7 回</td><td>Intertemporal Fiscal Policy</td><td>第 22 回</td><td>Monopolistic Competition</td></tr> <tr><td>第 8 回</td><td>Infinite-Period Framework</td><td>第 23 回</td><td>A New Keynesian View of Sticky Prices</td></tr> <tr><td>第 9 回</td><td>Shocks</td><td>第 24 回</td><td>Optimal Monetary Policy with Sticky Price</td></tr> <tr><td>第 10 回</td><td>History of Macroeconomics</td><td>第 25 回</td><td>Solow Growth Framework</td></tr> <tr><td>第 11 回</td><td>History of Macroeconomics</td><td>第 26 回</td><td>Neoclassical Growth</td></tr> <tr><td>第 12 回</td><td>The Phillips Curve</td><td>第 27 回</td><td>Search and Unemployment</td></tr> <tr><td>第 13 回</td><td>New Keynesian Economics</td><td>第 28 回</td><td>Matching Equilibrium</td></tr> <tr><td>第 14 回</td><td>Real Business Cycle Theory</td><td>第 29 回</td><td>Open-Economy Trade</td></tr> <tr><td>第 15 回</td><td>Monetary Policy in the Intertemporal Framework</td><td>第 30 回</td><td>Fiscal Theory of Exchange Rates</td></tr> </tbody> </table>		第 1 回	Microeconomics of Consumer Theory	第 16 回	Monetary-Fiscal Interactions	第 2 回	Static Consumption-Labor Framework	第 17 回	Optimal Monetary Policy	第 3 回	Dynamic Consumption-Savings Framework	第 18 回	Economic Efficiency	第 4 回	Inflation and Interest Rates	第 19 回	Optimal Fiscal Policy	第 5 回	Dynamic Consumption-Labor Framework	第 20 回	Optimal Fiscal and Monetary Policy	第 6 回	Firms	第 21 回	Financial Accelerator	第 7 回	Intertemporal Fiscal Policy	第 22 回	Monopolistic Competition	第 8 回	Infinite-Period Framework	第 23 回	A New Keynesian View of Sticky Prices	第 9 回	Shocks	第 24 回	Optimal Monetary Policy with Sticky Price	第 10 回	History of Macroeconomics	第 25 回	Solow Growth Framework	第 11 回	History of Macroeconomics	第 26 回	Neoclassical Growth	第 12 回	The Phillips Curve	第 27 回	Search and Unemployment	第 13 回	New Keynesian Economics	第 28 回	Matching Equilibrium	第 14 回	Real Business Cycle Theory	第 29 回	Open-Economy Trade	第 15 回	Monetary Policy in the Intertemporal Framework	第 30 回	Fiscal Theory of Exchange Rates
第 1 回	Microeconomics of Consumer Theory	第 16 回	Monetary-Fiscal Interactions																																																										
第 2 回	Static Consumption-Labor Framework	第 17 回	Optimal Monetary Policy																																																										
第 3 回	Dynamic Consumption-Savings Framework	第 18 回	Economic Efficiency																																																										
第 4 回	Inflation and Interest Rates	第 19 回	Optimal Fiscal Policy																																																										
第 5 回	Dynamic Consumption-Labor Framework	第 20 回	Optimal Fiscal and Monetary Policy																																																										
第 6 回	Firms	第 21 回	Financial Accelerator																																																										
第 7 回	Intertemporal Fiscal Policy	第 22 回	Monopolistic Competition																																																										
第 8 回	Infinite-Period Framework	第 23 回	A New Keynesian View of Sticky Prices																																																										
第 9 回	Shocks	第 24 回	Optimal Monetary Policy with Sticky Price																																																										
第 10 回	History of Macroeconomics	第 25 回	Solow Growth Framework																																																										
第 11 回	History of Macroeconomics	第 26 回	Neoclassical Growth																																																										
第 12 回	The Phillips Curve	第 27 回	Search and Unemployment																																																										
第 13 回	New Keynesian Economics	第 28 回	Matching Equilibrium																																																										
第 14 回	Real Business Cycle Theory	第 29 回	Open-Economy Trade																																																										
第 15 回	Monetary Policy in the Intertemporal Framework	第 30 回	Fiscal Theory of Exchange Rates																																																										
<b>事前事後学習</b> 事前に予定された Chapter を読み内容要約を行う。 事後には関連文献について経済学の基礎を固める。																																																													
<b>テキスト</b> Sanjay K. Chugh, <i>Modern Macroeconomics</i> , MIT Press, 2015.																																																													
<b>参考文献</b> テキストに関連したプリントを配布																																																													
<b>成績評価</b> 授業での発表（7割）と期末のレポート（3割）で評価する																																																													

<b>授業科目名</b> 現代社会問題特殊研究Ⅰ（租税論）	<b>単位数</b> <b>2単位</b>
<b>担当教員名</b> 赤石孝次（あかいし たかつぐ）	<b>開講期間</b> <b>集中講義</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
租税に関する理論と制度を中心に学習し、租税論に関する基礎的素養を身に付けることを目標とします。	
<b>授業の概要</b>	
<p>平成29年4月の消費税引き上げ時の軽減税率導入をめぐる議論もあり、租税政策に対する関心は一層高まっている。近年の税制改革論議を振り返ると、消費税の増税だけに关心が偏っているが、税制改革の課題は消費税のみならず、所得税、法人税、資産税にも横たわっている。しかし、これらの税は複雑な仕組みを有しており、どこに問題があるのかが極めて理解しづらくなっている。そこで、制度、理論、改革の課題の切り口からわが国の税制を分析したテキストに依拠してわが国的主要な課税制度を包括的かつ体系的に議論することで、問題点と改革の方向性を自分なりに考えるセンスを身につけることを目的とする。</p> <p>具体的には、租税制度全体の現状、租税の基礎理論、税制改革の議論を包括的に見たうえで、個別の租税について制度、理論、改革の課題の切り口から議論をすすめていく。そこでの体系的な理解の後に、わが国の租税政策の再検討を行い、中長期的にみた税制のあり方を受講者とともに考える。</p>	
(講義の方法)	
テキストをもとに受講者が作成したレジュメを使って講義をすすめる。	
<b>授業計画</b>	
第1回 日本の租税政策の現状	
第2回 税制改革の基礎理論（1）	
第3回 税制改革の基礎理論（2）	
第4回 所得課税制度と所得課税の理論（1）	
第5回 所得課税の理論（2）	
第6回 所得税改革の課題	
第7回 消費課税制度と消費課税の理論（1）	
第8回 消費課税の理論（2）	
第9回 消費税改革の課題	
第10回 法人課税制度と法人課税の理論（1）	
第11回 法人課税の理論（2）	
第12回 法人課税改革の課題	
第13回 資産課税制度と資産課税の理論（1）	
第14回 資産課税の理論（2）	
第15回 資産課税改革の課題	
<b>事前事後学習</b>	
知識の定着を図るためにには、ミクロ経済学の復習と修論のテーマに関する文献の踏査が重要です。	
<b>テキスト</b>	
橋本恭之・鈴木善充（2012）『租税政策論』（清文社）	
<b>参考文献</b>	
『平成28年度版 図説日本の税制』（財経詳報社、平成28年7月発売予定）	
財務省HP（ <a href="http://www.mof.go.jp">http://www.mof.go.jp</a> ）	
<b>成績評価</b>	
レジュメにもとづく報告、議論への参加と貢献を勘案して総合的に評価します。	

<b>授業科目名</b> 現代社会問題特殊研究Ⅱ（統計学）	<b>単位数</b> <b>2単位</b>
<b>担当教員名</b> 林田 実（はやしだみのる）	<b>開講期間</b> <b>集中講義</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
経済現象を分析するため統計的手法をテーマとする。具体的な到達目標は、回帰モデルを用いて経済の実証分析ができるようになることである。	
<b>授業の概要</b>	
経済現象を数量的に分析するためには経済学の理論とともに統計学の知識が必要不可欠である。本講義の前半では統計学の基本的な考え方（推定、検定）を様々な例題をもとに、詳しく解説していく。後半では、経済の分析に特化して発展してきた計量経済学の中から、回帰モデル、分散不均一と系列相関のあるモデル、パネル分析モデルをとりあげ、その理論と実際を講義する。また、計量経済学に特有な推定法である、操作変数法、GMM 法についても触れる。	
<b>授業計画</b>	
第1回 プロローグ 第2回 点推定と区間推定 第3回 正規確率変数 第4回 シミュレーション 第5回 割合 $p$ に関する推定 第6回 割合 $p$ に関する検定 第7回 平均 $\mu$ の推定と標本平均 第8回 標準偏差 $\sigma$ の推定と標本標準偏差 第9回 平均 $\mu$ の推定 第10回 平均 $\mu$ の検定 第11回 中心極限定期 第12回 単純回帰モデルの実際 1 第13回 単純回帰モデルの実際 2 第14回 多重回帰モデルの実際 1 第15回 多重回帰モデルの実際 2	
<b>事前事後学習</b>	
教科書の「エクセルで実験」を予習しておくこと。	
<b>テキスト</b>	
林田実（2013）『サイコロを振って、統計学』 創成社	
<b>参考文献</b>	
東京大学教養学部統計学教室編『統計学入門』東京大学出版会	
<b>成績評価</b>	
授業中に行うミニテストで評価する。	

<b>授業科目名</b> 経済問題解法特殊研究 I	<b>単位数</b> 2 単位
<b>担当教員名</b> 坂上智哉 (さかがみ ともや)	<b>開講期間</b> 秋学期
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> マクロ経済学やミクロ経済学の基礎と応用を修得する。	
<b>授業の概要</b> この講義では、経済学の基礎をなすミクロ経済学とマクロ経済学についての理解を深めることで、経済学のさまざまな問題に対する解法を研究することを目的としている。このため、授業では講義に加え、問題演習をふんだんに取り入れる。テキストとしては、癖のない標準的な問題をバランスよく選ぶという視点に立ち、国家公務員（I種およびII種）・地方公務員上級職・公認会計士2次試験などの問題を題材としている『経済学ベーシックゼミナール』（西村・八木）を使用する。講義での問題演習では、原則としてこのテキストに出てくるすべての問題を解く。	
<b>授業計画</b> 第1回 ガイダンス 第2回 ミクロ経済学：市場機構と需要・供給 第3回 ミクロ経済学：消費者行動の理論 第4回 ミクロ経済学：消費者理論の発展問題 第5回 ミクロ経済学：企業行動の理論 第6回 ミクロ経済学：不完全競争 第7回 ミクロ経済学：市場と社会厚生 第8回 ミクロ経済学：国際貿易 第9回 マクロ経済学：国民所得会計、国民所得の決定 第10回 マクロ経済学：消費関数、IS-LM 分析 第11回 マクロ経済学：貨幣需要と供給 第12回 マクロ経済学：失業とインフレーション 第13回 マクロ経済学：景気循環論 第14回 マクロ経済学：経済成長理論 第15回 マクロ経済学：国際金融	
<b>事前事後学習</b> 事前に問題を解き、考え方を理解してくること。	
<b>テキスト</b> 西村和雄・八木尚志 『経済学ベーシックゼミナール』 実務教育出版	
<b>参考文献</b> [1] 西村和雄 『ミクロ経済学』 東洋経済新報社 [2] ブランチャール 『マクロ経済学』 東洋経済新報社	
<b>成績評価</b> 授業での問題演習にもとづいて評価する。	

<b>授業科目名</b> 経済問題解法特殊研究Ⅱ	<b>単位数</b> 2 単位
<b>担当教員名</b> 笹山 茂 (ささやま しげる)	<b>開講期間</b> 春学期
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
実際の経済をマクロモデルで理解する。マクロ経済学で扱う経済モデルの構造を理解できることと、設定された経済モデルから内生変数について解くことができるようになることを目標とする。	
<b>授業の概要</b>	
財政・金融、労働経済、国際経済は現代日本経済を考える上で、政策問題が山積している分野である。これらの政策課題の経済学的問題点を整理し、政策的対応を考える際には、公務員試験に出題された政策分野の過去の問題を素材にして学習することが有益である。マクロ・ミクロ経済学のモデルの数学的解法やグラフによる解法を通して、理論と政策、理論と応用の関連を確かな知識として学ぶことができるからである。この経済問題解法特殊研究Ⅱは公務員試験の受験を志望する人、また理論と応用、マクロ・ミクロモデルの数学的解法、グラフによる解法に关心と興味を持つ人に適している。	
<b>授業計画</b>	
第1回 GDP の定義と貯蓄投資バランス	
第2回 乗数分析	
第3回 消費関数の理論	
第4回 投資関数の理論	
第5回 貨幣市場の理論	
第6回 IS-LM 分析	
第7回 財政・金融政策の分析	
第8回 AD-AS 分析と労働市場（古典派・ケインズ）	
第9回 RBC モデルと技術進歩	
第10回 賃金の硬直性とニュー・ケインジアンモデル（IS-MP-PC モデル）	
第11回 経済成長理論	
第12回 貿易理論モデル	
第13回 国際マクロ経済モデル	
第14回 為替レート決定理論	
第15回 対内均衡と対外均衡	
<b>事前事後学習</b>	
配布する演習問題を事前に解いた上でクラスに参加し、事後には経済理論とモデルの整理をする。	
<b>テキスト</b>	
特定のテキストは使わずに、演習用に作成したプリントを配布する。	
<b>参考文献</b>	
齋藤他『マクロ経済学』有斐閣、2010年	
<b>成績評価</b>	
講義での報告（6割）、レポート（2割）、課題提出（2割）を総合的に評価する。	

<b>授業科目名</b>	<b>古典文学特殊研究</b>	<b>単位数</b>
<b>担当教員名</b>	<b>尾崎 勇 (おざき いさむ)</b>	<b>4 単位</b>
<b>開講期間</b>	<b>通年</b>	
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>		
日本文学史を概観することから日本人の生きざまや伝統を探り、あわせて世界文学のなかの日本古典の位置づけをする。		
<b>授業の概要</b>		
平安時代より鎌倉時代にかけての文学史を概観した後に、個別の作品を精読する。まず、源氏物語の宇治十帖について、女の愛とその女をめぐっての男たちの愛憎のなかで板挟みになって死を決意する女の生きざまを、他の物語や日記などを視野にいれながら検討する。さらに、源氏物語の享受ということから更級物語と浜松中納言物語について分析する。つづいて、中世の軍記物語について、保元物語・平治物語の概要にふれたあとで延慶本平家物語をもとに、物語生成基盤に留意して平家一門の没落後の内容を検討していく。あわせて、比較文学的にスペイン文学のなかでも最古の成立とされている武勲詩の「我がシッドの歌」と延慶本平家物語との集団戦と個人戦と異同をめぐって考察する。		
<b>授業計画</b>		
第1回 日本文学の特質	第16回 初期軍記の概観	
第2回 上代文学（古事記・日本書紀）	第17回 平家物語の研究史	
第3回 上代文学（万葉集・歌謡）	第18回 平家物語の概観（1）	
第4回 中古文学（古今和歌集・伊勢物語）	第19回 平家物語の概観（2）	
第5回 中古文学（源氏物語）	第20回 平家物語の諸本に関する諸問題	
第6回 中古文学（更級日記・浜松中納言物語）	第21回 延慶本平家物語の特色	
第7回 中世文学（保元物語・平治物語）	第22回 延慶本平家物語と覚一本平家物語	
第8回 中世文学（平家物語）	第23回 スペイン文学の特質	
第9回 源氏物語の研究史	第24回 武勲詩「我がシッドの歌」の概観	
第10回 源氏物語の構成	第25回 延慶本平家物語の生成基盤	
第11回 源氏物語の宇治十帖の精読（1）	第26回 延慶本平家物語と「我がシッドの歌」との比較（1）	
第12回 源氏物語の宇治十帖の精読（2）	第27回 延慶本平家物語と「我がシッドの歌」との比較（2）	
第13回 源氏物語の宇治十帖の精読（3）	第28回 延慶本平家物語と「我がシッドの歌」との比較（3）	
第14回 源氏物語と更級日記	第29回 延慶本平家物語と「我がシッドの歌」との比較（4）	
第15回 源氏物語と浜松中納言物語	第30回 延慶本平家物語と「我がシッドの歌」との比較（5）	
<b>事前事後学習</b>		
日本文学史（古代、中世）を一通り概観し、個別の作品の特長を予習し、その講義についてレポートするにまとめておいて下さい。		
<b>テキスト</b>		
コピーして配布		
<b>参考文献</b>		
講義中にその都度紹介する。		
<b>成績評価</b>		
平常点と発表内容とレポートなどで総合的に判断する。		

<b>授業科目名</b> 古典文学特殊研究演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 尾崎 勇 (おざき いさむ)	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> 愚管抄の分析を通じて日本古典文学の研究姿勢を培っていく。	
<b>授業の概要</b> 愚管抄は歴史哲学の書との一般的評価がこれまであって、思想史学の方面からのアプローチが主流であった。しかし、著者の慈円は天台座主をつとめた当代きっての名僧であるばかりでなく儒学の学識もあり、愚管抄を中世学問史などの領域から検討をくわえる。先行の歴史物語・軍記物語・説話集と関連しているので、物語や説話を分析する方法を援用して内実を探る。さらに、愚管抄の文章は俗語や仮名を交えた独特のもので、日本語史からの位置づけを試みるために、慈円自身が起草した一連の願文などの資料類を手がかりに、愚管抄第二部の別帖（巻三・四・五・六）の文章を解析していく。	
<b>授業計画</b> <b>1年次</b> 愚管抄の文章が他の仮名の物語・日記・説話集・軍記物語などの文章とはたいへん相違することを確認していく。そのために愚管抄と同じ頃に成立した文学作品などを視野に入れ、比較しながら精読する。さらに愚管抄の素材となっている大鏡や水鏡・今鏡などをもとに愚管抄の文章の特色を解明しながら、日本文学を研究する態度を涵養していきたい。 <b>2年次</b> 愚管抄を著述した慈円は天台宗の学僧であり、歌人としても著名で後鳥羽院主宰の歌壇で活躍した。愚管抄以外にも天台勸学講縁起などの文書や願文などを起草し、家集の拾玉集には五千首以上の歌が載っている。それらを解読し、分析することで、慈円の思想を抽出する。そのことをもとに愚管抄の本質を研究する。そして、修士論文作成の手がかりとしたい。	
<b>事前事後学習</b> 予定の文章を通訳できるようにしておいて下さい。演習での議論をノートに整理しておいて下さい。	
<b>テキスト</b> 尾崎 勇『愚管抄とその前後』 和泉書院 13,000 円	
<b>参考文献</b> 演習中にその都度紹介する。	
<b>成績評価</b> 平常点と発表内容とレポートで総合的に判断する。	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
近代文学特殊研究Ⅰ	4単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
奥山文幸（おくやまふみゆき）	秋学期週2回
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>本講義の到達目標は、小林多喜二と芥川龍之介の主な作品を精読し、日本近代の問題点を的確に指摘できる力の育成であり、テーマは、小林多喜二と芥川龍之介の文学史的位置の考察である。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>プロレタリア作家小林多喜二（前期）と大正期を代表する作家芥川龍之介（後期）について考察する。小林多喜二是、「蟹工船」「党生活者」などの作品を発表して、日本プロレタリア文学運動を代表する作家となった。また、芥川龍之介は日本近代文学の古典として、今も読み続けられている。</p>	
<b>講義概要</b>	
第1回 1920年代における日本の思想状況	第16回 1910年代における日本の思想状況
第2回 「蟹工船」論（その1）	第17回 「羅生門」論（その1）
第3回 「蟹工船」論（その2）	第18回 「羅生門」論（その2）
第4回 「蟹工船」論（その3）	第19回 「羅生門」論（その3）
第5回 「不在地主」論（その1）	第20回 「杜子春」論（その1）
第6回 「不在地主」論（その2）	第21回 「杜子春」論（その2）
第7回 「党生活者」論（その1）	第22回 児童文学と芥川龍之介（その1）
第8回 「党生活者」論（その2）	第23回 児童文学と芥川龍之介（その2）
第9回 「防雪林」論（その1）	第24回 芥川龍之介研究の現在（その1）
第10回 「防雪林」論（その2）	第25回 芥川龍之介研究の現在（その2）
第11回 小林多喜二研究の現在（その1）	第26回 芥川龍之介研究の現在（その3）
第12回 小林多喜二研究の現在（その2）	第27回 芥川龍之介と漱石（その1）
第13回 多喜二の文学史的位置（その1）	第28回 芥川龍之介と漱石（その2）
第14回 多喜二の文学史的位置（その2）	第29回 芥川の文学史的位置（その1）
第15回 まとめ	第30回 芥川の文学史的位置（その2）
<b>事前事後学習</b>	
事前に読む必要がある作品を毎回指示するので、次週までに読んでおくこと。	
<b>テキスト</b>	
授業のはじめに指示する。	
<b>参考文献</b>	
授業のはじめに指示する。	
<b>成績評価</b>	
発表内容とレポートで総合的に評価する。	

<b>授業科目名</b> 近代文学特殊研究Ⅱ	<b>単位数</b> 4 単位
<b>担当教員名</b> 赤井恵子（あかい けいこ）	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> 日本近代小説の読解および作品論を書くこと。	
<b>授業の概要</b> 日本近代の中篇・長篇小説を、明治期に発表されたものを中心に読む。日本近代文学は「小説」を中心に展開したと言われる。例えば、「小説」という形式に繰り返し実験を試みたのが夏目漱石だったが、漱石はこの形式に何を見ようとしたのか。また、ほかの作家達はどうだったのか。 この講義のもう一つの目的は、「作品論」をきちんと書けるようになることである。ある程度の長さの作品を正面に捉えて、その作品についての自分の読みを説得性のある論理にすること——その方法を身につける。	
<b>授業計画</b>	
第1回 導入	第16回 『破戒』について その1
第2回 <作品を論じるために> その1	第17回 『破戒』について その2
第3回 <作品を論じるために> その2	第18回 『破戒』について その3
第4回 『浮雲』について その1	第19回 『蒲団』について その1
第5回 『浮雲』について その2	第20回 『蒲団』について その2
第6回 『浮雲』について その3	第21回 『アメリカ物語』について その1
第7回 『文づかひ』について その1	第22回 『アメリカ物語』について その2
第8回 『文づかひ』について その2	第23回 『アメリカ物語』について その3
第9回 『裏紫』について その1	第24回 『門』について その1
第10回 『裏紫』について その2	第25回 『門』について その2
第11回 『にごりえ』について その1	第26回 『青年』について その1
第12回 『にごりえ』について その2	第27回 『青年』について その2
第13回 『高野聖』について その1	第28回 『青年』について その3
第14回 『高野聖』について その2	第29回 <作品論を書くために> その1
第15回 『高野聖』について その3	第30回 <作品論を書くために> その2 (以上は、あくまで「予定」である)
<b>事前事後学習</b> 必ず前もって対象作品を熟読してくること。	
<b>テキスト</b> 作品を文庫本で購入してもらう。価格合計は3,000円ほどの予定である。	
<b>参考文献</b> 講義において適宜指示する。	
<b>成績評価</b> 平常点、口頭発表（複数回）、レポートに依る。	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
近代文学特殊研究Ⅱ演習	2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
赤井恵子（あかい けいこ）	通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
修士論文を完成させるための積み重ね。	
<b>授業の概要</b>	
<p>受講生が自身の研究テーマとしてとりあげた作家の全集を読破することから始めたい。たとえその作家の全作品を論じることが、受講生の最初の射程に入っていないなくても、〈全集を読むこと〉は、研究の最低の要件である（例、たとえ修士論文が数篇を対象とするものであっても、全集は読まねばならない）。全集には様々な資料（作品、書簡、ノート、断片等）が収められているわけだが、その扱い方法を考えることが次の作業となる。</p> <p>最終的には、作品についての論文の一部を毎週少しづつ書いてきてもらう作業に進みたい。</p>	
<b>授業計画</b>	
1年次	
<p>受講生が自身の研究テーマとしてとりあげた作家の全集を通読する。全集が完備していない作家の場合には、著作目録の作成→著作の収集→通読という作業をこなす必要がある。</p> <p>時間的に余裕があれば、先行論文の処理方法について学んでもらう。</p>	
2年次	
<p>修士論文でとり扱う作品（または作品群）を決定し、6、7月頃からそれらについての作品論を一週間に1200字程度書いてきてもらう。論文として不充分な箇所を指摘してゆくので、何度も書き直していくってもらう。</p>	
<b>事前事後学習</b>	
こちらの指示に従って、作品の内部分析の結果を小論文に書いてくること。	
<b>テキスト</b>	
受講生の研究課題に合うものを年度始めに考えて、指示する。	
<b>参考文献</b>	
同上	
<b>成績評価</b>	
日頃の勉学態度に依る。1年目は学年末にレポート提出を必須とする。また2年間に数回の口頭発表を必須とする。	

<b>授業科目名</b> 言語処理論特殊研究	<b>単位数</b> <b>4 単位</b>
<b>担当教員名</b> 川田亮一 (かわだ りょういち)	<b>開講期間</b> <b>通年</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
言葉を扱うことに特化して、コンピュータの使い方を修得することを目的とする。自分の行いたいことを、コンピュータを利用して効率化することができるようになることを目標とする。	
<b>授業の概要</b>	
<p>本来、コンピュータは記号を処理する機械であるため、言葉を扱うのが得意である。前半は、このコンピュータ（上のソフトウェア）が言葉を扱う仕組みを、実習を交えながら基礎から学習する。</p> <p>後半は各自の目的意識に応じて、自分のやりたいこと（テーマ）を決定し、コンピュータで実現するにはどうしたら良いかと一緒に考えていく。自分の専門にコンピュータを有効利用することを考えて欲しい。後半の具体的なテーマとしては次のようなものが考えられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ KWIC (Key Word In Context) をはじめとする各種語彙表の作成／語彙表を利用した統計処理</li> <li>・ 文法理論の検証／言語データ（テキストデータ、語彙データ、シソーラス、コーパス）の分析</li> <li>・ 各種文献や資料のデータベース化</li> </ul> <p>必要に応じて、各種ソフトウェアやプログラミング言語などを紹介する。</p>	
<b>授業計画</b>	
第1回 オリエンテーション	第16回 春学期の復習
第2回 計算機を特徴づける単位	第17回 テーマの決定
第3回 2進法・情報量・文字コード	第18回 テーマに従った実習 1
第4回 図形と文字フォント	第19回 実習 2
第5回 ファイルの構造・構造化テキスト	第20回 実習 3
第6回 コマンドライン入力	第21回 経過報告 1
第7回 テキスト処理ツールの紹介と実習	第22回 実習 4
第8回 文字列の検索と正規表現	第23回 実習 5
第9回 並べ替え	第24回 実習 6
第10回 オンラインデータの扱い	第25回 経過報告 2
第11回 エディタの利用 1	第26回 報告書作成 1
第12回 エディタの利用 2	第27回 報告書作成 2
第13回 Excel の利用 1	第28回 報告書作成 3
第14回 Excel の利用 2	第29回 報告書作成 4
第15回 Excel の利用 3	第30回 報告書作成 5
<b>事前事後学習</b>	
配付資料に事前に目を通しておくこと。	
<b>テキスト</b>	
資料を配布する。	
<b>参考文献</b>	
上田博人 『パソコンによる外国語研究（I）・（II）』 くろしお出版 各 2,200 円	
<b>成績評価</b>	
研究態度と報告書（レポート）により評価する。	

<b>授業科目名</b>	<b>日本史特殊研究</b>	<b>単位数</b>	<b>4 単位</b>
<b>担当教員名</b>	<b>小川弘和（おがわ ひろかず）</b>	<b>開講期間</b>	<b>通年</b>

### 授業の到達目標及びテーマ

本講義のテーマは「日本中世文書の読解法」である。歴史学は文書をはじめとする史料から事実の確定と評価をおこなう学問であり、そこでは文書の読解能力が不可欠となる。そこで本講義では、その能力を培うことを目標とする。

### 授業の概要

文書読解の基礎となるのは、一点一点についての様式・機能等の理解だが、文書は通常、現代にいたるまでに数度の整理・取捨選択等を経て、群として伝来している。その伝来状況そのものも、歴史的情報を内包しているといえる。そこで本講義では毎回、数点の文書を丁寧に読解しつつ、必要に応じて、その伝来の有り様などにも論を及ぼすことになろう。

### 授業計画

第1回 ガイダンス	第16回 「残った文書」からみえる世界（1）
第2回 日本中世史概説（1）	第17回 「残った文書」からみえる世界（2）
第3回 日本中世史概説（2）	第18回 「残った文書」からみえる世界（3）
第4回 日本中世史概説（3）	第19回 「残った文書」からみえる世界（4）
第5回 文書と記録－史料学の基礎－（1）	第20回 「残った文書」からみえる世界（5）
第6回 文書と記録－史料学の基礎－（2）	第21回 文字と音声（1）
第7回 文書と記録－史料学の基礎－（3）	第22回 文字と音声（2）
第8回 文書と記録－史料学の基礎－（4）	第23回 文字と音声（3）
第9回 文書と記録－史料学の基礎－（5）	第24回 文字と音声（4）
第10回 「残された文書」からみえる世界（1）	第25回 文字と音声（5）
第11回 「残された文書」からみえる世界（2）	第26回 〈中世的文書主義〉と日本の中世社会（1）
第12回 「残された文書」からみえる世界（3）	第27回 〈中世的文書主義〉と日本の中世社会（2）
第13回 「残された文書」からみえる世界（4）	第28回 〈中世的文書主義〉と日本の中世社会（3）
第14回 「残された文書」からみえる世界（5）	第29回 総括（1）
第15回 小括	第30回 総括（2）

### 事前事後学習

事前に参考文献の該当箇所を熟読するとともに、グラビアの文書写真をよく眺めておくこと。また、事後にも同様の確認をしておくこと。

### テキスト

講義に際してコピー等を配布する予定。

### 参考文献

佐藤進一 『[新版] 古文書学入門』 法政大学出版局 3,645円

### 成績評価

講義への参加状況等から総合的に評価する予定。

<b>授業科目名</b> 日本語教育特殊研究	<b>単位数</b> 4 単位
<b>担当教員名</b> 塩入すみ（しおいりすみ）	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>到達目標 ①日本語教育研究全般に関する基礎的な研究の流れを知る。      ②各自の関心のあるテーマをめぐっての基礎的な文献を講読し、問題点を見つける。      ③テーマに沿った研究方法の基礎を知る。</p> <p>テーマ 日本語教育研究全般に関するもの</p>	
<b>授業の概要</b>	
日本語教育研究全般に関する基礎的な文献を学びながら、各自の研究テーマを見つけ、それに適した研究方法の基礎を学ぶ。	
<b>授業計画</b>	
第1回 日本語教育研究の流れ	第16回 テーマの設定
第2回 日本語教育研究の近年の動向	第17回 基礎的な文献の講読
第3回 文法研究 論文紹介	第18回 基礎的な文献の講読
第4回 文法研究 論文紹介	第19回 基礎的な文献の講読
第5回 音声研究	第20回 基礎的な文献の講読
第6回 語彙研究	第21回 基礎的な文献の講読
第7回 表記研究	第22回 基礎的な文献の講読
第8回 教授法・授業実践の研究	第23回 基礎的な文献の講読
第9回 中間言語研究	第24回 基礎的な文献の講読
第10回 教材研究	第25回 基礎的な文献の講読
第11回 メンタルヘルスに関する研究	第26回 テーマの再設定と研究方法の検討
第12回 地域日本語教育	第27回 テーマの再設定と研究方法の検討
第13回 発表	第28回 発表
第14回 発表	第29回 発表
第15回 まとめ	第30回 まとめ
<b>事前事後学習</b>	
基礎的な文献講読	
<b>テキスト</b>	
授業で指示する。	
<b>参考文献</b>	
授業で指示する。	
<b>成績評価</b>	
平常 40% レポート及び発表 50% 活動 10% 授業外の実践的な活動への参加も評価する。	

<b>授業科目名</b> 東アジア（中国）言語文化特殊研究Ⅱ	<b>単位数</b> 4 単位
<b>担当教員名</b> 西 紀昭（にし のりあき）	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
これまで研究されてきた陶淵明像とは違った淵明像を探求する。	
<b>授業の概要</b>	
「陶淵明研究」	
「菊を採る東籬の下、悠然として南山を見る」の詩句で知られる陶淵明は中国文学史上最もよく知られ、又最も好まれた詩人である。	
「帰去来辞」、「桃花源記」等も4世紀から現代に至るまで日本でも中国でも非常に多くの人に愛読され続けている作品である。	
このように有名でありながら、陶淵明という詩人には不明な点が多い。不明というより謎という方が近い。その名前でさえ、陶淵明と陶潛と二説ある、又父の名も祖父の名もわからない。中国の有名な詩人としては異例のことである。	
しかし、残された作品は実に清々しいものばかりである。この謎の人生とすばらしい作品との間のギャップをどう理解すればよいのか、その作品を精読すると同時に、出来るだけ多くの歴史資料を精査して、その人生と作品の間のギャップを埋める作業を行ってみたい。	
<b>授業計画</b>	
第1回 陶淵明 伝記資料（一）	第16回 「帰園田居五首」講読（一）
第2回 陶淵明 伝記資料（二）	第17回 '' （二）
第3回 「帰去来辞」講読（一）	第18回 「乞食詩」講読
第4回 '' （二）	第19回 帰隱後の生活について
第5回 '' （三）	第20回 「飲酒二十首」講読（一）
第6回 「桃花源記」講読（一）	第21回 '' （二）
第7回 '' （二）	第22回 '' （三）
第8回 「桃花源詩」講読	第23回 '' （四）
第9回 「五柳先生伝」講読	第24回 '' （五）
第10回 陶淵明と仏教	第25回 「責子詩」講読
第11回 仏教と玄学の論争	第26回 「止酒詩」講読
第12回 慧遠対桓玄の論争	第27回 「雜詩十二首」講読（一）
第13回 慧遠対淵明の論争	第28回 '' （二）
第14回 桓玄失脚後の淵明	第29回 '' （三）
第15回 反逆者のレッテル	第30回 「自祭文」講読
<b>事前事後学習</b>	
文庫本を参考にして事前に作品を読んでおき、事後に通説との違いをまとめること	
<b>テキスト</b>	
プリントを配布する	
<b>参考文献</b>	
岩波文庫「陶淵明全集」上・下 2冊	
<b>成績評価</b>	
事前の予習及び発表の内容で評価する	

<b>授業科目名</b> <b>東アジア（中国）言語文化特殊研究Ⅲ</b>	<b>単位数</b> <b>4 単位</b>
<b>担当教員名</b> <b>石 汝 傑（セキ ジョケツ）</b>	<b>開講期間</b> <b>通年</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
中国語学と語学研究の方法論、研究論文の書き方と言語学理論の知識を融合させ、豊富な専門知識と研究方法を身につけること。	
<b>授業の概要</b>	
<p>総論において、中国語の特質と発生発展の要因、中国語学文献とその利用方法、中国語学史の特徴と流れを概観し、中国語学研究の意義と目的を考察する。各論において、中国語の音声学、音韻学、語彙学、文法学、方言学など各分野の歴史と研究現状について段階的に講義を行い、各歴史転換の時期を重点において明らかにする。</p> <p>日中言語交流に関する語学資料の紹介と研究も重要な内容の一つである。日本に漢字、漢語と漢籍において語学資料が数多く存在している。その中、特に中国の通俗文学（小説と戯曲等）に関連する資料の研究に対し、受講者に興味を持たせ、その価値を利用して研究に取り組んでいく。</p>	
<b>授業計画</b>	
第1回 音声学の基礎（1）	第16回 文法学の基礎（1）
第2回 音声学の基礎（2）	第17回 文法学の基礎（2）
第3回 音声学の基礎（3）	第18回 文法学の基礎（3）
第4回 討論	第19回 文法学の基礎（4）
第5回 音韻学の基礎（1）	第20回 中日言語比較（文法）
第6回 音韻学の基礎（2）	第21回 討論
第7回 音韻学の基礎（3）	第22回 方言学の基礎（1）
第8回 中日言語比較（音韻）	第23回 方言学の基礎（2）
第9回 討論	第24回 方言学の基礎（3）
第10回 語彙学の基礎（1）	第25回 方言学の基礎（4）
第11回 語彙学の基礎（2）	第26回 中日言語比較（方言）
第12回 語彙学の基礎（3）	第27回 討論
第13回 中国語語彙学の歴史	第28回 日中言語交流（歴史）
第14回 中日言語比較（語彙）	第29回 日中言語交流（資料）
第15回 討論	第30回 討論
<b>事前事後学習</b>	
参考文献と関連資料を収集し、閲読し、研究すること。	
<b>テキスト</b>	
プリント配布	
<b>参考文献</b>	
ピーター・ラディフォギッド『音声学概説』大修館書店 1999 年	
劉月華等『実用現代漢語語法』（増訂第二版）商務印書館 2002 年	
蔣紹愚『近代漢語研究概要』北京大学出版社 2005 年	
何華珍『日本漢字和漢字詞研究』中国社会科学出版社 2004 年	
<b>成績評価</b>	
平日の勉強成果（資料調査または読書報告）50%、期末のレポート 50%。	

<b>授業科目名</b> 東アジア（中国）言語文化特殊研究Ⅲ演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 石 汝 傑（セキ ジョケツ）	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
「中国語学特殊研究Ⅰ」（※平成20年度より「東アジア（中国）言語文化特殊研究Ⅲ」へ科目名変更）の講義を踏まえ、演習の形式で研究論文や専門著作の閲読と理解、修士論文のテーマ選択と執筆の方法について、勉強すること。	
<b>授業の概要</b>	
授業内容は、以下の通りである。	
<p>一．各受講生は二年間、中国語学に関する学術論著を10冊以上、論文を50編以上精読しなければならないので、中国語の高度な理解力が要求される。授業で各自感想や疑問を報告し、論議を深めていく。</p> <p>二．中国語学の論著の学習を通じて、文献資料の収集および研究方法、論文のまとめ方など言語学研究の基本能力を身につけていく。</p> <p>三．受講生は各自の関心に応じた修士論文のテーマを決定し、論文執筆に必要な関連資料と参考文献を収集し、研究・分析した上、論文作成へと進む。</p>	
<b>授業計画</b>	
一年次 言語学と中国語学関係の論著を精読する。音声学、文法学、方言学、言語地理学、言語教育について、中国語と日本語、英語の関係論著を読み、いろいろなテーマを中心にして議論したり、読書報告を書いたりする。この過程を通じて、研究の方法と論文の書き方などを身につけ、修士論文のテーマを決定する。	
二年次 決まった論文のテーマを中心に、先行研究の論著を調べて、資料の収集と分析に励み、論文を完成する。	
<b>事前事後学習</b>	
参考文献と関連資料を収集し、閲読し、研究すること。授業中の個人発表を準備すること。	
<b>テキスト</b>	
必要時、プリント配布	
<b>参考文献</b>	
王 力 『漢語史稿』（第二版） 中華書局 2004年 袁家驥等 『漢語方言概要』（第二版） 語文出版社 1989年・2001年 牛島徳次、香坂順一、藤堂明保〔編〕 『言語』 大修館書店 1967年	

<b>授業科目名</b> 東アジア（韓国・朝鮮）言語文化特殊研究IV	<b>単位数</b> 4 単位
<b>担当教員名</b> 柴 公也（しば こうや）	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
本講義の到達目標及びテーマは、受講者が論文を書き上げるのに充分な知識と論理を習得させることである。	
<b>授業の概要</b>	
周知のように、日本語と朝鮮語は文法面において類似している点が少なくない。しかし、詳細に検討してみると、意外に相違している点の多いことに気付かされる。 たとえば、時間の流れの中における動作・変化の過程に関する相（アスペクト）や発話者の事態に対する心的態度に関する叙法（モダリティ）などが、まさにその例と言えよう。こうした朝鮮語の相や叙法を研究する際、朝鮮語単独の考察では容易に知り得ない面も、日本語のそれらと対照することによって鮮明に浮かび上がってくることも少なくない。 この講義では、春学期に日本語と朝鮮語の相、秋学期に叙法に関する論文を読み進めていくとともに、現実の言語資料に現れた用例を検討しながら朝鮮語の相と叙法について考察していくことにする。	
<b>授業計画</b>	
第1回 日本語のアスペクトについて	第16回 日本語のモダリティについて
第2回 リ	第17回 リ
第3回 リ	第18回 リ
第4回 リ	第19回 リ
第5回 リ	第20回 リ
第6回 朝鮮語のアスペクトについて	第21回 朝鮮語のモダリティについて
第7回 リ	第22回 リ
第8回 リ	第23回 リ
第9回 リ	第24回 リ
第10回 リ	第25回 リ
第11回 日本語と朝鮮語のアスペクトの 対照研究	第26回 日本語と朝鮮語のモダリティの対照研究
第12回 リ	第27回 リ
第13回 リ	第28回 リ
第14回 リ	第29回 リ
第15回 リ	第30回 リ
<b>事前事後学習</b>	
本講義の事前学習は、テキストを熟読して関連する文献を参照し、疑問点を明らかにしておくことである。また、事後学習は、講義で明らかになった点と、まだ不明な点を整理して次回の講義に備えることである。	
<b>テキスト</b>	
プリント使用	
<b>参考文献</b>	
工藤真由美 『アスペクト・テンス体系とテクスト』 ひつじ書房 1995年 4,200円 宮崎和人 他 『新日本語文法選書4 モダリティ』 くろしお出版 2002年 3,000円	
<b>成績評価</b>	
授業とレポートの内容を勘案して評価する。	

<b>授業科目名</b> 東アジア（韓国・朝鮮）言語文化特殊研究Ⅳ演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 柴 公也（しば こうや）	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
本演習の到達目標及びテーマは、受講者が論文を書き上げるのに充分な知識と論理を習得させることである。	
<b>授業の概要</b>	
日本語と朝鮮語は周知のように語順という点では非常に類似しているが、各々の文法範疇においてまでも類似しているわけではない。 例えば、態（ヴォイス）においては両者はかなりの相違を見せていている。また、相（アスペクト）や叙法（モダリティ）においても両者の違いは意外に大きい。このように表面的には日本語に類似しているが、内面的にはかなりの相違を見せている朝鮮語を研究するに際しては、表面上の類似性に惑わされないように常に注意を払いながら進めて行く必要がある。	
この演習では、朝鮮語単独の考察では見えてこなかった部分を日本語と対照して考察することによって鮮明に浮かび上がらせる目標に、主として両者の文法論に関する論文を読んで討論していくこととする。その際、春学期は時制（テンス）と相（アスペクト）、秋学期は態（ヴォイス）と叙法（モダリティ）を扱うが、あくまでも現実の言語資料に基づいた実証的な考究を推し進めていく。	
<b>授業計画</b>	
春学期 日本語と朝鮮語のテンスとアスペクトに関する論文を読み進めながら、現実の言語資料に基づいた実証的な対照研究を推し進めていく。	
秋学期 日本語と朝鮮語のヴォイスとモダリティに関する論文を読み進めながら、現実の言語資料に基づいた実証的な対照研究を推し進めていく。	
<b>事前事後学習</b>	
本演習の事前学習は、テキストを熟読して関連する文献を参考し、疑問点を明らかにしておくことである。また、事後学習は、演習で明らかになった点と、まだ不明な点を整理して次回の演習に備えることである。	
<b>テキスト</b>	
プリント使用	
<b>参考文献</b>	
工藤真由美『アスペクト・テンス体系とテクスト』ひつじ書房 1995年 4,200円 宮崎和人他『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版 2002年 3,000円	
<b>成績評価</b>	
演習とレポートの内容を勘案して評価する。	

<b>授業科目名</b> <b>東アジア（韓国・朝鮮）言語文化特殊研究V</b>	<b>単位数</b> <b>4 単位</b>
<b>担当教員名</b> <b>矢野謙一（やの けんいち）</b>	<b>開講期間</b> <b>通年</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
朝鮮語史、その概要	
<b>授業の概要</b>	
<p>朝鮮語史の記述は15世紀の朝鮮語が基礎となる。この授業では15世紀朝鮮語の音韻論、形態論、統語論をあつかう。この分野は韓国、北朝鮮とともに独自の学説が展開されている。これらの成果を土台に講義をすすめる。まず音韻論では、文字と音価、音韻の体系、音韻現象と規則、形態論では語形成（複合語、合成語、派生語）、品詞論で品詞の分類、体言と助詞、用言と用言語尾、態、尊敬、時制、意志、待遇法を述べ、残りの品詞についても簡単に扱う。統語論は文の分割、各要素の機能、連体修飾、連用修飾などを扱う。</p> <p>なお、人数が少ないときは、希望を聞いて、受講者の専門と関連する内容も扱う。</p>	
<b>授業計画</b>	
第1回 統語論、形態論、語形成	第16回 助詞と語尾の性質
第2回 形態素と音韻	第17回 助詞のかさなり
第3回 文字	第18回 用言
第4回 音の体系	第19回 語幹と活用
第5回 単語の成立ち（派成法）	第20回 語尾の種類
第6回 単語の成立ち（合成法）	第21回 終結語尾
第7回 単語の成立ち（複合）	第22回 接続語尾
第8回 品詞分類	第23回 連体修飾と連用修飾
第9回 分類のあいまいさ	第24回 敬語
第10回 不完全名詞	第25回 時
第11回 体言とその活用	第26回 ムード
第12回 格助詞	第27回 修飾語類
第13回 補助詞	第28回 統語論の単位と結合
第14回 接続の助詞	第29回 文の成分
第15回 終結の助詞	第30回 文の種類
<b>事前事後学習</b>	
参考文献で指定されたものを読む。	
<b>テキスト</b>	
テキストはプリントしたものを配布する。	
<b>参考文献</b>	
各回ごとに紹介する。	
<b>成績評価</b>	
提出されたレポートの出来により評価する。	

<b>授業科目名</b> 東アジア（韓国・朝鮮）言語文化特殊研究V演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 矢野謙一（やの けんいち）	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> 授業概要に含む。	
<b>授業の概要</b> 朝鮮語を研究対象として修士論文を作成するための演習をおこなう。朝鮮語学の基礎を理解するための概論書をまず読んでもらい、報告をしてもらう。次に関心のある分野や論文に関する論文を読んでもらい、発表を重ね、論文作成に必要な基礎的な知識を身につける。その上で、研究対象を方言または古語かを決め、論文のテーマを定め、論文作成に向けての研究をすすめる。	
<b>授業計画</b>	
春学期 現代語の音韻論、形態論、方言学、語史の概論書を読み報告をする。それに研究上に必要な参考文献を示し、研究内容が深化するように指導する。	
秋学期 日本語の構文論を読み報告する。次に朝鮮語でかかれた文法書を読み報告する。関心のある分野を定め論文を読んでゆく。	
<b>事前事後学習</b> 参考文献で指定されたものを読む。	
<b>テキスト</b> とくに定めない。	
<b>参考文献</b> 必要に応じ指示する。	
<b>成績評価</b> 提出されたレポート、論文を評価する。	

<b>授業科目名</b> 東アジア（中国）言語文化特殊研究VI	<b>単位数</b> 4 単位
<b>担当教員名</b> 司馬公周（しばこうしゅう）（馮 蘊 澤）	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>1. 理論言語学、音声学、音韻論の基本的な考え方と、個別言語の記述および分析の指針となる理論的枠組みを理解し、研究の方法論を身につける。</p> <p>2. 中国語言語学の歴史と現在について理解を深める。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>前期は概説テキストを読み、理論言語学、音声学、音韻論の基本的な考え方と、個別言語の記述および分析の指針となる理論的枠組みを理解し、研究の方法論を身につける。後期はテキストに加えてさらに専門の研究論文を数編読み、言語学の枠組みに基づく中国語研究の各分野の実際を概観し、中国語言語学の歴史と現在について理解を深める。</p>	
<b>授業計画</b>	
第1回 言語起源論の現在	第16回 言語接触と影響
第2回 動物の伝達と人間の言語	第17回 ピジンとクレオール
第3回 言語習得についての考え方	第18回 言語系統論と比較言語学（1）
第4回 言語構造の記述について（1）	第19回 言語系統論と比較言語学（2）
第5回 言語構造の記述について（2）	第20回 世界の言語（1）
第6回 言語構造の記述について（3）	第21回 世界の言語（2）
第7回 言語構造の記述について（4）	第22回 中国語構文論（1）
第8回 音声と音韻体系の研究（1）	第23回 中国語構文論（2）
第9回 音声と音韻体系の研究（2）	第24回 中国語構文論（3）
第10回 音声と音韻体系の研究（3）	第25回 中国語構文論（4）
第11回 音声と音韻体系の研究（4）	第26回 中国語構文論（5）
第12回 発話の研究	第27回 中国語研究の現在（1）
第13回 言語と変種	第28回 中国語研究の現在（2）
第14回 社会言語学の考え方（1）	第29回 中国語研究の現在（3）
第15回 社会言語学の考え方（2）	第30回 中国語研究の現在（4）
<b>事前事後学習</b>	
事前に課題文献を熟読し、疑問点を明らかにすること。	
<b>テキスト</b>	
田中春美 他：『入門ことばの科学』大修館書店 1994 その他論文数篇（後期の始めに指示する）	
<b>参考文献</b>	
ピクトリア フロムキン・ロバート ロッドマン：『言語とは何か』京都あぽろん社 1980 服部四郎：『音声学』岩波書店 1984 馮 蘊 澤：『中国語の音声』白帝社 2007 井上和子（他）：『生成言語学入門』大修館書店 1999	
<b>成績評価</b>	
平素の報告を30%、期末レポートを70%に換算して評価する。	

<b>授業科目名</b> 東アジア（中国）言語文化特殊研究VI演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 司馬公周（しばこうしゅう）（馮蘊澤）	<b>開講期間</b> 通年

#### 授業の到達目標及びテーマ

1. 理論的枠組みについての理解を深める。
2. 研究テーマに関わる研究の現状を把握し、研究テーマを決め、問題点を絞る。
3. 資料を集め、整理と分析を行う。
4. 修士論文を作成する。

#### 授業の概要

1年次では、研究テーマに関わる理論と先行研究論文を読み、理論的枠組みを理解し、自らの研究テーマに関わる研究の現状を把握しながら、研究テーマを絞り、資料の収集と分析を行う。2年次では、引き続き理論と先行研究の勉強をしながら、修士論文を作成する。

#### 授業計画

##### 1年次

指定した課題の文献を読み、これまでの理論による中国語構文分析と記述の実際を理解すると同時に、分析と記述の問題点はなにかを考える。合わせて、テーマの設定、資料収集と分析など、修士論文作成に関する準備を進める。後期からは、レジュメによる報告を始める。

##### 2年次

従来の構文分析の理論の問題点について、現在の文法理論の枠組みのなかでどのように解決されるか、理論的考察を行う。なお、修士論文の作成に関しては、前期はレジュメを中心に、月一回のペースで中間報告し、意見交換を行う。後期は、比較的早い時期にある程度完成度のある論文原稿を提出し、より徹底した討論を行い、修士論文の完成を目指す。

#### 事前事後学習

常識の範囲で、事前、事後の学習をすること。

#### テキスト

一年次はプリント配布。二年次は不使用。

#### 参考文献

受講者の研究テーマによって、隨時指定する。

#### 成績評価

平素の報告を30%、期末レポートを70%に換算して評価する。

<b>授業科目名</b> <b>東アジア（韓国・朝鮮）言語文化特殊研究VII</b>	<b>単位数</b> <b>4 単位</b>
<b>担当教員名</b> <b>申明直（シン ミョンジク）</b>	<b>開講期間</b> <b>通年</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
新自由主義の代案として、可能な新しいコミュニティについて考察する。尚、欧米・日本・韓国（植民地期の朝鮮）における新しいコミュニティ運動と「協働論」について研究を行う。	
<b>授業の概要</b>	
近代が始まったばかりの時代、近代の問題を克服する多様な実験と文学作品を検討する。この講義では、特にオーエン・フーリエから1920～30年代の香川豊彦・内村鑑三・宮沢賢治、植民地朝鮮の裴敏洙・劉載奇・許文日に至る「農村共同体（農民コミュニティ）」論を考察する。新自由主義の「競争」ではない、これらの「協同」論が持っている現在的意味を把握する。	
<b>授業計画</b>	
第1回 ガイダンス	第16回 グルントヴィ「folkehøjskole」
第2回 R・オーエン「New Lanark」	第17回 グルントヴィ「生の啓蒙」
第3回 オーエン「Labour Note」	第18回 内村鑑三「国民高等学校」
第4回 オーエン「全国衡平労働交換所」	第19回 内村鑑三「デンマルク國の話」
第5回 オーエン「New Harmony」	第20回 宮沢賢治「羅須地人協会」
第6回 発表および討論	第21回 宮沢賢治「農民藝術論綱要」
第7回 フーリエ「Phalange」	第22回 発表および討論
第8回 フーリエ「Phalanstère」	第23回 裴敏洙「基督教社会主義」
第9回 フーリエ「情念と調和」	第24回 劉載奇「農友会」
第10回 発表および討論	第25回 劉載奇「高等農事学院」
第11回 賀川豊彦「死線を越えて」	第26回 李晟煥「朝鮮農民社」
第12回 賀川豊彦「友愛の経済学」	第27回 朝鮮農民社の「農民共生組合」
第13回 賀川豊彦「立体農業」	第28回 朝鮮農民社の「協同耕作契」
第14回 賀川豊彦「三愛主義」	第29回 許文日の小説「自主村」
第15回 前期のまとめ	第30回 後期のまとめ
<b>事前事後学習</b>	
事前に関連論文を読み、レジュメの発表を行う。その後、欧米・日本・韓国の比較を行い、関連作品を分析する。	
<b>テキスト</b>	
丸山 武志、『オウエンのユートピアと共生社会』、ミネルヴァ書房、1999 石井洋二郎、『科学から空想へ：よみかえるフーリエ』、藤原書店、2009 賀川豊彦、『死線を越えて』、PHP研究所、2009 オルタ・トレード・ジャパン、『季刊at』15号、2009年4月号 N.F.S.グルントヴィ、『生の啓蒙』、風媒社、2011 방기중, 『裴敏洙의 농촌운동과 기독교사상』, 연세대 출판부, 1999 1920～30年代植民地朝鮮の雑誌『朝鮮農民』・『農民』に入っている農民小説と言説	
<b>参考文献</b>	
テキスト以外の1920～30年代植民地朝鮮の農民小説に関する論文と理論書。授業の中で紹介する。	
<b>成績評価</b>	
レポート、発表などによる総合的評価	

<b>授業科目名</b> 東アジア（韓国・朝鮮）言語文化特殊研究Ⅶ演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 申 明 直（シン ミョンジク）	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
韓国の移住関連文学作品と映画に表れている「サバルタン」（下級主体・従属的社会集団）について考察する。	
<b>授業の概要</b>	
「東アジア（韓国・朝鮮）言語文化特殊研究Ⅶ」で考察した近代初期の協同論と共生論に基づいて、東アジアにおいての共生論の現在的意味を文化的な側面から研究する。特に①東アジア市民権 ②東アジア共生論と協同組合 ③公共圏と親密圏について注目しながら、競争と見えざる手に身を任せている新自由主義の代案を文学・文化にフォーカスを合わせて探ってみる。	
<b>授業計画</b>	
〔春学期〕 「東アジア市民権」と「東アジア共生論と協同組合」に関する論文を読んで話し合う。特に、サバルタン概念に注目しながら関連テーマに対する小論文の発表を行う。	
〔秋学期〕 「公共圏」と「親密圏」に分けて、東アジア市民としての共生の方法を考察する。特に文学・映像作品と文化現象にフォーカスを合わせて関連論文について話し合う。関連テーマに対する小論文の発表も行う。	
<b>事前事後学習</b>	
事前に関連テキスト等を読み、レジュメ発表を行う。習った理論に基づき作品の分析を行う。	
<b>テキスト</b>	
①강옥초, 「그람시와 서발턴개념」、『역사교육』 제 82 집、역사교육연구회, 2002 ②김택현, 「다시 서발턴은 누구/무엇인가?」、『역사학보』 제 200 권、역사학회, 2008 ③김택현, 『서발턴과 역사학 비판』、박종철 출판사, 2003 ④藤本一勇 外、『現代思想入門 グローバル時代の「思想地図」はこうなっている!』、PHP 研究所、2007 ⑤ラナジット・グハ／ギャーネンドラ・パーンデー／パルタ・チャタジー／ガヤトリ・スピヴァック、『サバルタンの歴史—インド史の脱構築』、岩波書店、1998 ⑥이철우, 「주권의 탈영토화·재영토화—이중국적의 논리」、『한국사회학』 제 42 집 1 호 ⑦라셀 살라자르 파레냐스、『세계화의 하인들』(문현아 역)、여성문화이론연구소, 2009 ⑧ムハマド・ユヌス、『貧困のない世界を創る』、早川書房、2008 ⑨斎藤純一、『親密圏のポリティクス』、ナカニシヤ出版、2003 ⑩斎藤純一、『公共性』、岩波書店、2000 ⑪落合恵美子 外 編、『アジア女性と親密性の労働：変容する親密圏／公共圏（2）』、京都大学学術出版会、2012	
<b>参考文献</b>	
テキスト以外の東アジアの共生とトランスナショナルに係わる韓国文学・映画作品。授業の中で紹介する。	
<b>成績評価</b>	
レポート、発表などによる総合的評価	

<b>授業科目名</b> <b>東アジア（韓国・朝鮮）地域文化特殊研究Ⅱ</b>	<b>単位数</b> <b>4 単位</b>																														
<b>担当教員名</b> <b>吉田光男（よしだ みつお）</b>	<b>開講期間</b> <b>集中講義</b>																														
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> 韓国・朝鮮近世史研究の現状と課題																															
<b>授業の概要</b> 授業は講義を中心として、講師と出席者および出席者間の討論を重視して行われる 1.1～15回は、日本と韓国における韓国・朝鮮近世史（朝鮮王朝時代史）の基本的理解 朝鮮王朝成立からその終焉までの歴史的経緯について、概要を最新の研究成果に基づいて講義する 2.16～30回は、日本と韓国における韓国・朝鮮近世社会史関係のトピック 村落、血縁、地縁、学縁を中心とする																															
<b>授業計画</b> <table> <tbody> <tr><td>第1回 韓国・朝鮮近世史の基本的理解（1）</td><td>第16回 韓国・朝鮮近世社会史研究（1）</td></tr> <tr><td>第2回 韓国・朝鮮史研究の基本的理解（2）</td><td>第17回 韓国・朝鮮近世社会史研究（2）</td></tr> <tr><td>第3回 韓国・朝鮮近世史の基本的理解（3）</td><td>第18回 韓国・朝鮮近世社会史研究（3）</td></tr> <tr><td>第4回 韓国・朝鮮近世史の基本的理解（4）</td><td>第19回 韓国・朝鮮近世社会史研究（4）</td></tr> <tr><td>第5回 韓国・朝鮮近世史の基本的理解（5）</td><td>第20回 韓国・朝鮮近世社会史研究（5）</td></tr> <tr><td>第6回 韓国・朝鮮近世史の基本的理解（6）</td><td>第21回 韓国・朝鮮近世社会史研究（6）</td></tr> <tr><td>第7回 韓国・朝鮮近世史の基本的理解（7）</td><td>第22回 韓国・朝鮮近世社会史研究（7）</td></tr> <tr><td>第8回 中間討論</td><td>第23回 中間討論</td></tr> <tr><td>第9回 韓国・朝鮮近世史の基本的理解（8）</td><td>第24回 韓国・朝鮮近世社会史研究（8）</td></tr> <tr><td>第10回 韓国・朝鮮近世史の基本的理解（9）</td><td>第25回 韓国・朝鮮近世社会史研究（9）</td></tr> <tr><td>第11回 韓国・朝鮮近世史の基本的理解（10）</td><td>第26回 韩国・朝鮮近世社会史研究（10）</td></tr> <tr><td>第12回 韓国・朝鮮近世史の基本的理解（11）</td><td>第27回 韩国・朝鮮近世社会史研究（11）</td></tr> <tr><td>第13回 韩国・朝鮮近世史の基本的理解（12）</td><td>第28回 韩国・朝鮮近世社会史研究（12）</td></tr> <tr><td>第14回 韩国・朝鮮近世史の基本的理解（13）</td><td>第29回 韩国・朝鮮近世社会史研究（13）</td></tr> <tr><td>第15回 総合討論</td><td>第30回 総合討論</td></tr> </tbody> </table>		第1回 韓国・朝鮮近世史の基本的理解（1）	第16回 韓国・朝鮮近世社会史研究（1）	第2回 韓国・朝鮮史研究の基本的理解（2）	第17回 韓国・朝鮮近世社会史研究（2）	第3回 韓国・朝鮮近世史の基本的理解（3）	第18回 韓国・朝鮮近世社会史研究（3）	第4回 韓国・朝鮮近世史の基本的理解（4）	第19回 韓国・朝鮮近世社会史研究（4）	第5回 韓国・朝鮮近世史の基本的理解（5）	第20回 韓国・朝鮮近世社会史研究（5）	第6回 韓国・朝鮮近世史の基本的理解（6）	第21回 韓国・朝鮮近世社会史研究（6）	第7回 韓国・朝鮮近世史の基本的理解（7）	第22回 韓国・朝鮮近世社会史研究（7）	第8回 中間討論	第23回 中間討論	第9回 韓国・朝鮮近世史の基本的理解（8）	第24回 韓国・朝鮮近世社会史研究（8）	第10回 韓国・朝鮮近世史の基本的理解（9）	第25回 韓国・朝鮮近世社会史研究（9）	第11回 韓国・朝鮮近世史の基本的理解（10）	第26回 韩国・朝鮮近世社会史研究（10）	第12回 韓国・朝鮮近世史の基本的理解（11）	第27回 韩国・朝鮮近世社会史研究（11）	第13回 韩国・朝鮮近世史の基本的理解（12）	第28回 韩国・朝鮮近世社会史研究（12）	第14回 韩国・朝鮮近世史の基本的理解（13）	第29回 韩国・朝鮮近世社会史研究（13）	第15回 総合討論	第30回 総合討論
第1回 韓国・朝鮮近世史の基本的理解（1）	第16回 韓国・朝鮮近世社会史研究（1）																														
第2回 韓国・朝鮮史研究の基本的理解（2）	第17回 韓国・朝鮮近世社会史研究（2）																														
第3回 韓国・朝鮮近世史の基本的理解（3）	第18回 韓国・朝鮮近世社会史研究（3）																														
第4回 韓国・朝鮮近世史の基本的理解（4）	第19回 韓国・朝鮮近世社会史研究（4）																														
第5回 韓国・朝鮮近世史の基本的理解（5）	第20回 韓国・朝鮮近世社会史研究（5）																														
第6回 韓国・朝鮮近世史の基本的理解（6）	第21回 韓国・朝鮮近世社会史研究（6）																														
第7回 韓国・朝鮮近世史の基本的理解（7）	第22回 韓国・朝鮮近世社会史研究（7）																														
第8回 中間討論	第23回 中間討論																														
第9回 韓国・朝鮮近世史の基本的理解（8）	第24回 韓国・朝鮮近世社会史研究（8）																														
第10回 韓国・朝鮮近世史の基本的理解（9）	第25回 韓国・朝鮮近世社会史研究（9）																														
第11回 韓国・朝鮮近世史の基本的理解（10）	第26回 韩国・朝鮮近世社会史研究（10）																														
第12回 韓国・朝鮮近世史の基本的理解（11）	第27回 韩国・朝鮮近世社会史研究（11）																														
第13回 韩国・朝鮮近世史の基本的理解（12）	第28回 韩国・朝鮮近世社会史研究（12）																														
第14回 韩国・朝鮮近世史の基本的理解（13）	第29回 韩国・朝鮮近世社会史研究（13）																														
第15回 総合討論	第30回 総合討論																														
<b>事前事後学習</b> 事前学習：参考文献等の韓国・朝鮮史関連著作を読んで基礎的知識を習得しておく。 事後学習：講義および配布プリント等に基づいて問題点を抽出し、最終的にレポートとしてまとめる。																															
<b>テキスト</b> なし。講義は講師が作成したプリントを用いて進められる。																															
<b>参考文献</b> 武田幸男『朝鮮史』、山川出版社（世界各国史シリーズ）、3,780円 韓永愚（吉田光男訳）『韓国社会の歴史』、明石書店、7,344円（原題 ”다시 찾는 우리 역사” 경세원, 서울）																															
<b>成績評価</b> 授業中における討論への参加と発言（50%）、レポート（50%）を総合して評価する。																															

<b>授業科目名</b> 東アジア地域言語文化総合演習	<b>単位数</b> 2 単位
<b>担当教員名</b> 石・矢野・司馬・大澤	<b>開講期間</b> 秋学期
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
討論や発表を通じて学際的な研究の視点・方法を身につけることを目指す。	
<b>授業の概要</b>	
自分の研究テーマに即して、受講生に発表してもらい、担当全教員が自分の専門研究の立場から多面的・多元的に助言をおこない、そして、教員たちも研究関係の発表をし、全員で討論をおこなう。それをして受講生が学際的な研究の視点・方法を身につけることを目指す。	
<b>授業計画</b>	
毎回の授業は「自分の研究テーマについての受講生の発表 → 担当全教員の助言 → 全員の討論 → まとめ」という形で進められる。なお、隔回に担当教員による研究発表がおこなわれる。 第1回 大学院における研究について 第2回 中国地域研究について（大澤） 第3回 学生報告 第4回 中国文学研究について（石） 第5回 学生報告 第6回 韓国語学研究について（矢野） 第7回 学生報告 第8回 中国語学について（司馬） 第9回 学生報告 第10回 中国地域研究について（大澤） 第11回 学生報告 第12回 中国文学研究について（石） 第13回 学生報告 第14回 韓国語学研究について（矢野） 第15回 学生報告	
<b>事前事後学習</b>	
参考文献と関連資料を収集し、閲読し、研究すること。個人発表を準備すること。	
<b>テキスト</b>	
毎回の報告者がプリント等で準備する。	
<b>参考文献</b>	
授業のなかで個々の学生の研究内容に即して指示する。	
<b>成績評価</b>	
平常点とレポート	

<b>授業科目名</b>	<b>イギリス文学特殊研究</b>	<b>単位数</b>	<b>4 単位</b>
<b>担当教員名</b>	<b>吉田良夫 (よしだ よしお)</b>	<b>開講期間</b>	<b>通年</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>			
英国の小説や評論を読むことにより、英文学の知見を広め、修士論文作成の基礎知識を養う。			
<b>授業の概要</b>			
基本的にはイギリスの小説や評論を読む。テキストなどは、こちらで決定するが、学生諸君と相談しながら決定することもある。以前は、『嵐が丘』を書いたエミリー・ブロンテの妹のアンの作品『アグネス・グレー』を講読しながら、イギリス文学の本質、イギリス女性文学の特質、またブロンテ姉妹について考察した。今年度は、ブロンテ姉妹の作品の中でも最も人気がある『嵐が丘』を講読したいと考えている。			
<b>授業計画</b>			
第1回 イントロダクション (イギリス女性作家について)	第16回 第11章から第12章まで講読	第17回 第13章から第14章まで講読	
第2回 ブロンテ姉妹について	第18回 第15章から第16章まで講読		
第3回 シャーロット・ブロンテ	第19回 第17章から第18章まで講読		
第4回 エミリー・ブロンテ	第20回 第19章から第20章まで講読		
第5回 アン・ブロンテ	第21回 第21章から第22章まで講読		
第6回 『嵐が丘』の背景	第22回 第23章から第24章まで講読		
第7回 『嵐が丘』の批評史	第23回 第25章から第26章まで講読		
第8回 登場人物をめぐって	第24回 秋学期研究レポートについての検討		
第9回 春学期研究レポートについての検討	第25回 第27章から第28章まで講読		
第10回 第1章から第2章まで講読	第26回 第29章から第30章まで講読		
第11回 第3章から第4章まで講読	第27回 第31章から第32章まで講読		
第12回 第5章から第6章まで講読	第28回 第33章から第34章まで講読		
第13回 第7章から第8章まで講読	第29回 1年間のまとめ		
第14回 第9章から第10章まで講読	第30回 秋学期研究レポートの発表		
第15回 春学期研究レポートの発表			
<b>事前事後学習</b>			
必ず事前にテキストを読んでくる。単に読むだけではなく行間を読むような、深い「読み」を心がける。事後としては、講義の中での議論をもとに、自分の読みに何が欠けていたかを考察し、次回に備える。			
<b>テキスト</b>			
Emily Bronte, <i>Wuthering Heights</i> , London: Shakespeare Head Press, 1989			
<b>参考文献</b>			
Terry Eagleton, <i>Myths of Power: A Marxist Study of the Brontes</i> , London: Macmillan, 1975 他			
<b>成績評価</b>			
授業への取り組み・発表、春学期・秋学期のレポートから総合的に評価する。			

<b>授業科目名</b> イギリス文学特殊研究演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 吉田良夫（よしだ よしお）	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
本演習では、修士論文作成のための指針を指導する。各年次における具体的な到達目標等は下の「授業計画」に書いてあるので、それを参照されたい。	
<b>授業の概要</b>	
まず、イギリス文学に関する論文や評論を読みながら、イギリス文学の本質、また論文や評論がどのような手順や形式で書かれているかを考察する。これらの考察を通して、イギリス文学の研究とはいかなるものであり、どのような内容を含み、またどのように研究すべきなのかを指導する。さらにその発展として、学生諸君が自己の研究テーマをどのように設定し追求してゆくか、またその過程で必要となる先行論文や資料の収集・利用の仕方、さらに、それをどのようにして具体的な論文執筆につなげてゆくかなど、修士論文作成のための指針を指導する。	
<b>授業計画</b>	
1年次 春学期に、自己の研究テーマ（修士論文のテーマになる）について検討し、テーマを決定する。その前段階として、イギリス文学の研究とはいかなるものであり、どのような内容を含み、どのように研究するのか、また、その過程において必要となる先行論文や資料の収集・利用の方法などについて、論文執筆の初期的・基本的な事柄について指導を行う。 秋学期に研究対象がおおむね決まった段階で、対象となる作家や作品をどのような角度からまたどのような方法で研究するのか、実証的な論文とするためにはいかなる方法を用いるべきなのか。また、研究をバックアップするために必要な文献や資料をいかにして収集し利用するのかなど、研究のより具体的な方法へと指導を進める。	
2年次 春学期には、修士論文の具体的な執筆に取り掛かる。論文の構成や形式、つまり論文の章分け—導入部、本論、結論、引用文献一覧などの各項目をどのように書くのか、引用の仕方はどうあるべきか、また研究対象の作家や作品にそれをどのように適用し、どのようにして具体的な論文に仕上げるかなどの指導を行う。 秋学期には、9月の修士論文中間発表会に向けて、本格的に取り組む。論文完成にむけて、毎回指導・添削を行う。論文としての形式・構成・実証性などに最終的な配慮を行う。学年末に向けて、注のつけ方、引用文献や bibliography の書き方など、論文完成への具体的な作業の最終段階の指導を行う。	
<b>事前事後学習</b>	
ほぼ毎回、指導と添削があるので、その準備をしてくること。事後には添削箇所を確認し、何が悪かったのかを考察し、次回に備える。	
<b>テキスト</b>	
個々の院生の研究テーマに従って、その都度指示する。	
<b>参考文献</b>	
個々の学生の研究分野に応じた参考文献をその都度指示する。	
<b>成績評価</b>	
1年次、2年次へと論文の進行状態の経緯を見つつ、最終的に完成された修士論文で評価する。	

<b>授業科目名</b> アメリカ文学特殊研究 I	<b>単位数</b> 4 単位
<b>担当教員名</b> 向井久美子（むかい くみこ）	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
アメリカン・ルネッサンス期の背景を理解し、作品を通してその特徴的一面を認識し考察する。	
<b>授業の概要</b>	
<p>基本的には、十九世紀の作家による小説やその映像作品、またはこの時代のアメリカを広義に映し出している小説や映画を選択し、そこに表現されているキャラクターの心理や、作者が意図するテーマ、あるいはそれらに表象されている様々な要素を、芸術的、歴史的、文化的コンテキストと照らし合わせて読み取ってゆく。先入観にとらわれずに議論を行いながら作品の解釈を深め、分析や批評をする視点を養うことをめざす。</p> <p>本年度は、Nathaniel Hawthorne の代表的な長編作品 <i>The Scarlet Letter</i> (1850) と <i>The House of the Seven Gables</i> (1851) の二作を取り上げ、それぞれの作品を熟読しながら解釈を試みる。作品に暗示されている重要なトピックに関して議論を行う。先行研究等を参考にしながら、これらの作品に共通のテーマを見出し、特に興味を持った作品を数作選び、各自がテーマを設定し、オリジナリティのある作品論をまとめることをめざす。</p>	
<b>授業計画</b>	
第1回 二作品の概観と解釈や議論の進め方などの イントロダクション	第16回 <i>The House of the Seven Gables</i> (HSG) の Preface の解釈と議論
第2回 <i>The Scarlet Letter</i> (SL) の The Custom-House の解釈と議論	第17回 HSG の第 1~2 章の解釈と議論
第3回 SL の第 1~2 章の解釈と議論	第18回 HSG の第 3~4 章の解釈と議論
第4回 SL の第 3~4 章の解釈と議論	第19回 HSG の第 5 章の解釈と議論
第5回 SL の第 5 章の解釈と議論	第20回 HSG の第 6 章の解釈と議論
第6回 SL の第 6 章の解釈と議論	第21回 HSG の第 7~8 章の解釈と議論
第7回 SL の第 9~10 章の解釈と議論	第22回 HSG の第 9 章の解釈と議論
第8回 SL の第 11~12 章の解釈と議論	第23回 HSG の第 10~11 章の解釈と議論
第9回 SL の第 13 章の解釈と議論	第24回 HSG の第 12 章の解釈と議論
第10回 SL の第 14~16 章の解釈と議論	第25回 HSG の第 13~14 章の解釈と議論
第11回 SL の第 17~19 章の解釈と議論	第26回 HSG の第 15~16 章の解釈と議論
第12回 SL の第 20~21 章の解釈と議論	第27回 HSG の第 17~18 章の解釈と議論
第13回 SL の第 22~23 章の解釈と議論	第28回 HSG の第 19~20 章の解釈と議論
第14回 SL の第 24 章の解釈と議論	第29回 HSG の第 21 章の解釈と議論
第15回 SL の分析と全体のまとめ	第30回 HSG の分析と全体のまとめ
<b>事前事後学習</b>	
授業の前には計画にそって進む範囲までの解釈し問題点や議論すべき点をあげておく。また授業の後には、自分の解釈や推論がどのようにであったかを再考し、作品全体のテーマとの関わりなども念頭に入れて、次の授業で進む範囲の解釈に取り入れる。	
<b>テキスト</b>	
Penguin 版ペーパーバックと on-line text を利用予定。授業時に指示する。	
<b>参考文献</b>	
Mellow, James R. <i>Nathaniel Hawthorne in His Times</i> . James, Henry. <i>Hawthorne</i> . Martin, Terence. <i>Nathaniel Hawthorne</i> . など。その他授業時に適宜教示する。	
<b>成績評価</b>	
作品の一般的な解釈が正しく行われているか、授業において議論が活発になされているか、先行研究にもあたり、自分の意見の位置付けを行いながら、オリジナリティのある観点や発想が含まれたテーマが設定できているか、学術論文の書式をきちんとふまえて書かれているか、などといった点を主として判断基準にしながら、小論文を中心に評価する。	

<b>授業科目名</b> アメリカ文学特殊研究Ⅰ演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 向井久美子（むかい くみこ）	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>主として、十九世紀のアメリカ小説家の研究を行い、選択した作家とその作品についての先行研究をふまえた上で、オリジナリティのある修士論文を仕上げることを目標とする。その研究を通して、アメリカ文学の特徴を認識すると共に、アメリカという国家や国民性、また文化なども理解する。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>十九世紀のアメリカ小説を選択し、先行研究をふまえ、また当時の社会的、文化的、歴史的、芸術的、宗教的、民族的、ジェンダー的背景などと照らし合わせながら、オリジナリティのあるテーマを設定し、最終的にはアカデミックな論文の完成をめざす。</p> <p>議論に際しては、作者の暗示、テーマ、象徴、比喩、深層心理、そしてアメリカン・ルネッサンス期の作家に共通の問題意識などを対象に含めながら、その作家の独自のスタイルや主張を読み解いていく。</p> <p>修士論文の執筆に関する詳細は、初回の授業時に話し合って、最良の方法を決める。</p>	
<b>授業計画</b>	
<p>1年次 まず作品の精読を行う。夏休み前までには、正式なテーマを設定する。秋学期には先行研究をカバーしながら、作品の解釈を深め、自分が設定したテーマに関する答えを探しながら議論を行う。作品に直接関係する先行研究だけでなく、テーマに関する特定のトピックや関連した批評や参考書なども読んでおく。その上で年次末までに、序論の完成をめざす。</p> <p>2年次 春学期終了までに、章分けとそれぞれの概要をまとめ、本格的に本論の執筆を始める。秋学期開始直前に行われる修士論文の中間発表は、自分のテーマがだいたい論証できており、大まかに論文が出来上がった状態で、改めて論文全体を考える機会とし、年内に本論の推敲を重ね、文献目録等も書式等をそろえ、修士論文を完成させる。</p>	
<b>事前事後学習</b>	
<p>授業前には計画として進む範囲までの解釈を行い、その中で問題点を挙げておく。また可能な限り、論文の一部をまとめておく。授業ではその解釈の妥当性を確認し、問題の解決を行う。授業の後にはその結果をふまえて、論文の完成に向けて、進んだ範囲の加筆修正を行い、さらに次の部分をまとめの準備をする。</p>	
<b>テキスト</b>	
<p><i>The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne</i> (Columbus: Ohio State UP) の予定である。</p>	
<b>参考文献</b>	
<p>Fogle, Richard Harter. <i>Hawthorne's Fiction: The Light and the Dark</i>. Levin, Harry. <i>The Power of Blackness</i>. Hawthorne, Julian. <i>Nathaniel Hawthorne and His Wife</i>. 2 vols.など。その他授業時に適宜教示する。</p>	
<b>成績評価</b>	
<p>先行研究をふまえて、オリジナリティのあるテーマが設定されているか、そのテーマが的確に論証に向かっているか、学術論文の書式に則って書かれているか、本論文が学会での発表につながる研究として認められるものであるか、などといった点を判断基準にしながら、修士論文を評価する。</p>	

<b>授業科目名</b> 英語学特殊研究Ⅰ（英語教育評価論）	<b>単位数</b> <b>4 単位</b>
<b>担当教員名</b> 神本忠光（かみもと ただみつ）	<b>開講期間</b> <b>通年</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
第二言語教育のリーディングのメカニズムを理解し、読解力の評価・指導法について学ぶ。	
<b>授業の概要</b>	
英語でのリーディング能力を扱う。まず、リーディングとはどういう構成要素と過程でできているのかを考察し、次に読解力の測定と指導方法へと発展させる。	
リーディングの過程は文字と心内辞書の相互作用からなる。黒い点や棒の集合体を文字⇒語彙⇒文と認識する方向は、常に、脳内にある心的辞書と照らし合わせることで意味解釈が成立する。その心的辞書が豊かなほど、深い理解ができる。しかし、外国語である英語の場合、その心的辞書の構造は英語母語話者のそれと比べ、小さいし、貧弱でまた母語とつながっている。その文中の語彙が心内語彙に欠落していたら、どういった読解過程あるいは推測過程を経るのであろうか。L2 読解は L1 読解とは重なる部分も異なる部分も多い。その結果、L2 読解の評価は L1 読解の評価と、必然的に異なることになる。L1 読解と同じような L2 読解ができるようになるには、どういう指導をしたら良いのかという観点もあわせて検討する。	
<b>授業計画</b>	
第1回 オリエンテーション	第16回 リスニングとの関係
第2回 読みの研究の推移	第17回 音韻処理機構と視空間イメージ処理機構
第3回 語彙力は読みにどう関係するか	第18回 ライティングとの関係
第4回 読解における語彙情報の役割	第19回 第二言語における読解ストラテジー
第5回 読みにおける未知語の処理と付随的学習	第20回 外国語の読みにおけるメタ認知と読解力
第6回 単語の音韻処理の読みへの影響	第21回 読解力をいかに測るか(1)
第7回 文をいかに知覚しているか	第22回 読解力をいかに測るか(2)
第8回 読みにおける情報単位	第23回 読解力をいかに測るか(3)
第9回 読みと記憶力	第24回 読解力をいかに測るか(4)
第10回 ワーキングメモリーとことばの理解	第25回 読みの速さを考慮した評価法
第11回 ワーキングメモリーと第二言語の読み	第26回 多読指導
第12回 読みにおける推論過程	第27回 繰り返し読みの方法
第13回 テキストの論理関係の処理	第28回 視覚言語と音声言語の同時提示
第14回 テキストの心的表象	第29回 PC 利用の読解指導
第15回 第一言語と第二言語の読み	第30回 まとめ
<b>事前事後学習</b>	
授業で扱う予定箇所を事前に読み、疑問などをメモして授業に臨む。事後学習は授業中に出てきた関連文献などを読み、理解を深める。	
<b>テキスト</b>	
門田修平ほか. (編). (2001). 『英語リーディングの認知メカニズム』. 東京: くろしお出版.	
<b>参考文献</b>	
Grabe, W. (2008). <i>Reading in a second language: Moving from theory to practice</i> Cambridge: CUP. Singleton, D. (1999) <i>Exploring the second language mental lexicon</i> . Cambridge: CUP. 卯城祐司. (編). (2009). 『英語リーディングの科学』. 東京: 研究社.	
<b>成績評価</b>	
授業中の口頭発表（50%）やレポート（50%）で評価する。	

<b>授業科目名</b> 英語学特殊研究 I （英語教育評価論）演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて 8 単位
<b>担当教員名</b> 神本忠光（かみもと ただみつ）	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
第2言語習得および評価に関するテーマで、その分野で新たな知見を持った修士論文を書き上げる。	
<b>授業の概要</b>	
<p>この演習は英語教育の諸分野のなかでも、特に評価を全般的に対象とする。英語能力の評価を例に取ろう。英語能力とは何かを考え、その習得の程度を如何に測るかを扱うことになる。学習者の能力を正確に把握していないと、どんな指導をしてよいかも判断できないはずだ。闇雲な指導は時間の効率的な使い方とは言えない。英語能力とは何か、それをどう評価するか、その実態と評価法を学ぶ。扱う英語能力の分野は、基本的には院生の興味に合わせて指導する。</p> <p>ここでは便宜上、言語能力の測定の例として、語彙力の諸相を測るとして考えてみよう。語彙は想像以上に4技能と深く関連している。語彙の知識なしでは何も伝えることができないし、また理解もできない。語彙力があるとはどんな状態のことを指すのだろうか。学習者は何語位習得したら十分なのだろうか。語彙力はどうやって測ったらよいのだろうか。テーマが語彙であれば、そんな語彙習得の分野を研究することになる。英語教育全般をはじめ、言語習得や指導法に関心を持つ学生にも適した演習である。</p>	
<b>授業計画</b>	
<p>1年次</p> <p>研究テーマを扱った論文や関連した論文のリストを作成し、批判的に読み、テーマを絞る。</p> <p>この演習は、受講生の口頭発表を中心に行う。受講生は論文の内容を要約し、その論文の優れた点および不十分な点を指摘する。特に、不十分な点に関しては具体的な改善策を提案することが要求される。</p> <p>修士論文を書くのに必要な事項（文献の探し方、整理の方法、データ収集の方法など）も、適宜指導する。</p> <p>2年次</p> <p>春学期：実験計画を立て、実験を実施する。結果や議論をまとめる。</p> <p>秋学期：修士論文を執筆する。</p>	
<b>事前事後学習</b>	
授業で扱う予定の箇所を事前に読み、疑問などをメモして授業に臨む。	
<b>テキスト</b>	
<p>院生の研究テーマを扱った論文や周辺領域の関連論文 (語彙がテーマの場合)</p> <p>Schmitt, N. (2010). <i>Researching vocabulary: A vocabulary research manual</i>. London: Palgrave Macmillan.</p>	
<b>参考文献</b>	
<p>平井明代. (編). (2012). 『教育・心理系研究のためのデータ分析入門』. 東京: 東京図書.</p> <p>寺内正典ほか. (2012). 『英語教育学の実証的研究法入門—Excelで学ぶ統計処理』. 東京: 研究社.</p>	
<b>成績評価</b>	
授業中の口頭発表及び完成した修士論文	

<b>授業科目名</b> 英語学特殊研究Ⅱ（外国語習得論）	<b>単位数</b> 4 単位
<b>担当教員名</b> 林日出男（はやし ひでお）	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
外国語習得論（second language acquisition）全般にわたる基本的な知識を得ることを、この授業の目標とする。	
<b>授業の概要</b>	
本授業では、外国語習得論の入門的概論を行う。この分野での代表的な理論、実際に学習者が犯す言語表出エラー分析から解る事、学習者個人の資質（知能、動機づけ、年齢、性格など）、学習ストラテジー、そして教授法の近年の動向などを扱う事になる。特に幼児英語教育に示唆を与える年齢の問題、および習得プロセスを支える動機づけの問題に力点を置きたい。テキストにそって進み、要所で投げ入れ的に資料を配布します。	
<b>授業計画</b>	
第1回 言語運用能力とは	第16回 知能と語学適正
第2回 言語運用能力とは	第17回 外国語習得の動機と姿勢
第3回 外国語習得理論（empiricism）	第18回 内発的／外発的動機づけ
第4回 外国語習得理論 (mentalism, sociolinguistic revolution)	第19回 目標理論と自己調整
第5回 エラー分析	第20回 good language learner とは
第6回 エラー分析	第21回 good language learner とは
第7回 エラー分析	第22回 年齢と早期英語教育
第8回 外国語習得上の諸現象	第23回 外国語学習ストラテジー
第9回 外国語習得上の諸現象	第24回 外国語教授法の変遷
第10回 外国語習得理論（input theory）	第25回 外国語教授法の変遷
第11回 外国語習得理論（acculturation theory）	第26回 言語政策
第12回 declarative vs, procedural knowledge	第27回 言語政策
第13回 automation	第28回 指導シラバス各種
第14回 春学期総括	第29回 外国語訓練の実際
第15回 予備	第30回 4技能について
<b>事前事後学習</b>	
授業前にテキストを読んでおくこと。	
<b>テキスト</b>	
Johnson, K. (2008). <i>An Introduction to Foreign Language Learning and Teaching</i> (2 <sup>nd</sup> edition). (Pearson Education)	
<b>参考文献</b>	
Lightbown, P. M. & Spada, N. (2013). <i>How Languages are learned</i> (4 <sup>th</sup> edition). (Oxford University Press).	
Ortega, L. (2009). <i>Understanding Second Language Acquisition</i> . (Hodder Education).	
白畑・若林・須田. 「英語習得の『常識』『非常識』」(大修館書店)	
<b>成績評価</b>	
発表、レポート、授業参加度による。	

<b>授業科目名</b> 英語学特殊研究Ⅱ（外国語習得論）演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 林日出男（はやし ひでお）	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> 選んだ研究分野で、修士論文を完成させることがこの授業の目標である。	
<b>授業の概要</b> 本演習では、外国語習得に関する学習者の個人要因が本演習のテーマであるが、特に、学習者の動機づけに焦点を当てたい。動機づけ理論の入門から始まり、「内発的動機づけ・外発的動機づけ」「L2動機づけ自己システム」「英語学習動機の長期的变化」「目標設定の方法」「英語学習の自己調整」「学習者の自律とは」「英語の授業での動機を高める手法」「日本人学生特有の英語学習動機パターン」などが、主なテーマとなる。テーマに沿って、最近の論文を読む。また、実際に実証研究を行うのに必要な、実験の構成法、統計処理法を学ぶことも大きな目的の一つであり、そのために、論文中の統計処理法にその都度説明を加えたり、また個々の学生の研究に方法上のガイダンスを与える事をしたい。動機づけ以外の学習者要因（年齢、学習方略、知能、適正、国民性など）を扱うことも可能である。その場合は相談に来られたい。	
<b>授業計画</b> <b>1年次</b> 春学期当初は、外国語習得上の種々の学習者要因について概説的資料を読み、動機づけ研究が外国語学習の上でどのように位置づけられているかを学ぶ。その後、外国語学習動機づけ研究の近年の動向を学び、夏休みまでに、おおよその研究分野と方向を限定してほしい。秋学期では、選んだ研究分野と方向に従い、資料を読む。資料は書籍、論文、ウェブサイトなどあるが、資料を集めて読むことはそれ以後論文完成まで続ける。12月までには読んだ資料を参考に具体的な研究テーマを決定し、秋学期終了までに質問紙法、テスト法・面接法などにより、予備調査を行なう。春休みのうちに予備調査の分析を行い、本調査を準備する。 <b>2年次</b> 春学期当初に本調査の内容決定、分析計画、仮説設定を行い、本調査（学習者に対する質問紙調査、テスト・面接など）を行う。その後パソコンソフト（主にSPSS）を用い、統計分析を行なう。数値データを用いない場合（case study、文献のみによる研究など）は、収集した資料の分析がこれに代わる。結果を考察し、結論を導く。夏休みまでに論文の全体的構成、論旨を完成させ、夏休みから執筆を始める。夏休み後半に「中間報告会」にて研究報告を行う。秋学期には進捗状況に応じ添削、推敲を繰り返し、年内に論文を完成する。動機づけ以外の内容を研究テーマにした場合も、これに準ずる。	
<b>事前事後学習</b> 事前に、所定の文献を読む、または研究に必要な作業を進めておくこと。	
<b>テキスト</b> 授業ではプリントを使用。	
<b>参考文献</b> 授業中にその都度指示する。	
<b>成績評価</b> 個々の段階での中間報告および完成した修士論文による。	

<b>授業科目名</b> 英語学特殊研究Ⅲ（文体論）	<b>単位数</b> <b>4 単位</b>
<b>担当教員名</b> 堀 正広（ほり まさひろ）	<b>開講期間</b> <b>通年</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
Charles Dickens (1812~70)の <i>Pickwick Papers</i> を題材にして、最近の新しい言語理論や分析方法によって、文体の特徴を知り、説明できるようになることを目的とする。同時に、ディスカッションを通してコミュニケーションが円滑に行えるようになることを目的とする。	
<b>授業の概要</b>	
様々な registers（言語使用域：会話、新聞、広告、小説、詩など）の言語表現を最近の新しい言語理論や分析方法を援用して、文体の特徴を明らかにする。共時的には、各 register の言語特徴だけでなく、書き手の個性や心理や考え方を、言語を通して分析し、さらには時代の思潮をも探っていく。通時的には、時代的な英語文体の変化や推移に注目していく。	
具体的には、主に <i>Pickwick Papers</i> の作品を精読しながら、語彙、コロケーション、イディオム、文構造、characterization、語り手の視点などに焦点をあてて文体の問題を議論していく。同時に、コーパス文体論の基本的な手法を学ぶ。	
<b>授業計画</b>	
第1回 英語文体論とは	第16回 コーパス文体論とは何か
第2回 Dickens の言語文体の特徴	第17回 電子的テクスト化とコンコーダンス
第3回 <i>Pickwick Papers</i> について	第18回 認知文体論
第4回 第35章の言語文体の特徴発表（1）	第19回 第38章の言語文体の特徴発表（10）
第5回 発表（2）	第20回 発表（11）
第6回 発表（3）	第21回 発表（12）
第7回 まとめ	第22回 まとめ
第8回 第36章の言語文体の特徴発表（4）	第23回 第39章の言語文体の特徴発表（13）
第9回 発表（5）	第24回 発表（14）
第10回 発表（6）	第25回 発表（15）
第11回 まとめ	第26回 まとめ
第12回 第37章の言語文体の特徴発表（7）	第27回 第40章の言語文体の特徴発表（16）
第13回 発表（8）	第28回 発表（17）
第14回 発表（9）	第29回 発表（18）
第15回 まとめ	第30回 まとめ
<b>事前事後学習</b>	
発表形式で授業は行われるので、受講者は事前に発表内容をハンドアウトにまとめておくことが必要である。また、発表内容に添って事後レポートを提出することになる。	
<b>テキスト</b>	
<i>The Pickwick Papers</i> (The Oxford Illustrate Dickens) Oxford Press.	
<b>参考文献</b>	
Hori, Masahiro (2004) <i>Investigating Dickens' Style</i> . Palgrave, Macmillan, UK. 堀 正広 (2009) 『英語コロケーション研究入門』 研究社	
<b>成績評価</b>	
発表（40%）、レポート（60%）	

<b>授業科目名</b> 英語学特殊研究Ⅲ（文体論）演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 堀 正広（ほり まさひろ）	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
2年間で修士論文を作成することを目的とする。その過程で、英語学の研究論文の書き方や研究とはどのようなものであるかを修得できるようになる。	
<b>授業の概要</b>	
<p>研究テーマに応じて議論しながら研究論文を作成する。</p> <p>英米文学作品の文体論をテーマとする場合は、まず文体論に関する基本的な分析方法やコーパス利用方法を学ぶ。その後、修士論文の対象とする作家の作品を精読する。同時に、参考文献の涉獵を行う。</p> <p>現代英語や英語教育におけるコロケーション研究の場合は、まずコーパス言語学の基本的な手法を学ぶ。次に、先行研究を涉獵した後、修士論文のテーマについての発表と議論を重ねる。</p>	
<b>授業計画</b>	
1年次	
<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 研究テーマに応じた研究計画表を夏休み前に作成する。</li> <li>2) テーマに関連した参考文献の収集。授業では、主な参考文献をまとめ、発表し、質疑応答を行う。</li> <li>3) 学年末に修士論文の大まかな梗概を作成する。</li> </ol>	
2年次	
<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 1年次に作成した研究計画表の点検と修正を行う。</li> <li>2) 休み前に全体の構成を確定する。</li> <li>3) 9月に修士論文の中間発表を行う。</li> <li>4) 章ごとに論文の修正及び書き直しを行う。</li> <li>5) 12月末の完成を目指す。</li> </ol>	
<b>事前事後学習</b>	
毎回課題が与えられるので、事前にその課題についてハンドアウトを準備する。	
<b>テキスト</b>	
特になし。	
<b>参考文献</b>	
堀正広（編）（2012）『これからのコロケーション研究』ひつじ書房	
<b>成績評価</b>	
論文による。	

<b>授業科目名</b> 英語学特殊研究IV (応用言語学)	<b>単位数</b> <b>4 単位</b>
<b>担当教員名</b> 米岡 ジュリ (よねおか ジュリ)	<b>開講期間</b> <b>通年</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
本授業を通して「世界英語」の多様性を理解し、先行研究の収集、論文の APA 形式を学習した上、学習者の研究に合わせた小論文を英語でまとめる。	
<b>授業の概要</b>	
この講義では、Kachru, Smith, Pakir, Honna などの世界レベルの応用言語学者によって広がっている World Englishes の動きを取り扱う。日本語の中に方言が社会的に重要役割を果たしていると同様、中国、韓国、シンガポール、インドなど世界中に色々な英語が存在している。それらを認識し、それぞれの英語の発音、文法、語彙、表現の違いを論文や実態調査で調べ、研究報告を通じてまとめる。また、社会言語学の視点から見たこの新英語の歴史や文化的背景も考察する。	
<b>授業計画</b>	
第1回 The Ideology of Englishes	第16回 English in Korea
第2回 Englishes vs. EIL and ELF	第17回 English in China
第3回 Phonology of Englishes	第18回 English in Southeast Asia
第4回 Semantics of Englishes	第19回 English in Southeast Asia
第5回 Syntax of Englishes	第20回 English in Western Europe
第6回 Pragmatics of Englishes	第21回 English in Western Europe
第7回 History of Spread of Englishes	第22回 English in Eastern Europe
第8回 BANA Englishes: UK	第23回 English in Eastern Europe
第9回 BANA Englishes: North America	第24回 English in South Asia
第10回 BANA Englishes: Oceania	第25回 English in South Asia
第11回 Linguistic Landscapes and EAL	第26回 English in North Africa
第12回 Linguistic Landscapes and EAL	第27回 English in South and East Africa
第13回 English as a Japanese Language	第28回 English in South America
第14回 English as a Japanese Language	第29回 English in the Pacific
第15回 English in Kumamoto	第30回 Class presentations
<b>事前事後学習</b>	
毎週テキストの課題を準備する。年二回小論文を書く。	
<b>テキスト</b>	
Yoneoka, Arimoto. <i>Englishes of the World</i> 2000 年	
<b>参考文献</b>	
Kachru, Y, Nelson, C. <i>World Englishes in Asian Contexts</i> 2006 年 本名信行 『アジアをつなぐ英語』 1999 年	
<b>成績評価</b>	
定期的な小論文、ディスカッションへの参加、論文報告などで評価されます。試験は行いません。	

<b>授業科目名</b> 英語学特殊研究IV (応用言語学) 演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 米岡 ジュリ (よねおか ジュリ)	<b>開講期間</b> 通年

#### 授業の到達目標及びテーマ

The goal of this seminar is to direct students' research by introducing and discussing readings relevant to their research interest in preparation for writing and presenting the graduate thesis. In addition to this, mechanics of writing and developing the thesis will be discussed as needed.

#### 授業の概要

This seminar will review some current issues in World Englishes, including some of the following topics: English and Technology, English and Pop Culture, Englishes and Identity, Spelling Reform, Development of English, Phonological change, Syntactic change, Semantic change, Growth of Englishes, Pidgins and creoles, Literature in Englishes, Documentation of Englishes, Non-Geographical English Varieties (IC), AAVE, London dialects: RP, Cockney and Estuary, Simplified Englishes, English and Political Correctness, Age based varieties of English, Englishes and Corpus Linguistics, Englishes and English Education, Englishes and International Language Management.

Topics covered will be chosen based on students' interests and direction of research. Students will read and report on current research within the topics.

#### 授業計画

1年次

上記の世界諸英語の分野のテーマから、修士論文に沿ったものをいくつか扱う。論文発表形式で進む。

2年次

修士論文の構成、調査、文書を進めながら、研究発表を行う。

#### 事前事後学習

Read and prepare to discuss relevant research and bring in written work weekly for review.

#### テキスト

なし

#### 参考文献

Readings from Asian Englishes, World Englishes journals and others as necessary

#### 成績評価

平常点、修士論文のための論文報告、定期的な論文提出などで評価されます。試験は行いません。

<b>授業科目名</b> 英語コミュニケーション論特殊研究	<b>単位数</b> 4 単位
<b>担当教員名</b> 佐藤勇治 (さとう ゆうじ)	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
フランクリン・ローズベルトの様々なスピーチの特徴と、演説を通じた彼のリーダーシップについて理解を深めることが到達目標である。テーマはスピーチのレトリック分析とリーダーシップである。	
<b>授業の概要</b>	
歴代のアメリカ大統領の中でも、「世界大恐慌」と「第二次世界大戦」という二つの国難を克服した、第32代大統領フランクリン・ローズベルトの功績は極めて大きい。彼は演説の名手であり、国民との効果的コミュニケーションのやり方をよく心得た政治家でもあった。また、そのために伝統的新聞という媒体に加え、当時の文明の利器であったラジオと映画をうまく活用した。この授業では、ローズベルトのコミュニケーション特性を明らかにし、何が彼を「偉大な大統領」にしたのか、その理由について考察することを目的としている。その延長上で、ローズベルトのリーダーシップについても考察する。この目的を達するために、彼が行った多くの演説の中から、いくつかの代表的なスピーチを選び、その社会的背景、目的、構成、修辞技法、結果、効果など多面的に分析を行う。	
<b>授業計画</b>	
第1回 ローズベルトの生き立ち	第16回 Fireside Chat
第2回 The First Inaugural	第17回 同上
第3回 同上	第18回 同上
第4回 同上	第19回 War Message
第5回 A New Deal	第20回 同上
第6回 同上	第21回 Campaign Speech
第7回 同上	第22回 同上
第8回 Four Freedom Speech	第23回 The Fourth Inaugural
第9回 同上	第24回 同上
第10回 同上	第25回 同上
第11回 The Second Inaugural	第26回 Strong and Active Faith
第12回 同上	第27回 同上
第13回 同上	第28回 ローズベルトのリーダーシップ
第14回 研究発表	第29回 研究発表
第15回 春学期のまとめ	第30回 秋学期のまとめ
<b>事前事後学習</b>	
授業に参加する前に、スピーチを読み、意味を確認し、どのような構造上あるいは表現技法上の特徴があるかを考えてくること。授業後は、スピーチの目的、内容、構造や表現技法、社会に与えた影響などスピーチの特徴を整理すること。	
<b>テキスト</b>	
プリント教材を授業中に配布する。	
<b>参考文献</b>	
授業の中で適宜紹介する。	
<b>成績評価</b>	
春学期・秋学期ともに一回の口頭発表とレポートにより評価する。	

<b>授業科目名</b> 英語コミュニケーション論特殊研究演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 佐藤勇治（さとう ゆうじ）	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
Woodrow Wilson と Franklin Roosevelt のスピーチをレトリック分析の手法を使って分析し、その特徴とリーダーのコミュニケーション特性を理解することが到達目標である。テーマは優れたリーダーのコミュニケーションとはどのようなものかである。	
<b>授業の概要</b>	
この演習では「リーダーのコミュニケーション特性」を、アメリカの社会と文化の文脈の中で分析することを目的とする。その素材として、アメリカの歴史上「危機の時代」に登場し、優れた知性と指導力でアメリカの国難を救った Woodrow Wilson と Franklin D. Roosevelt 大統領のコミュニケーションを取り扱う。Wilson 大統領の場合は、第一次世界大戦という人類が初めて経験した大規模な総力戦の中で、アメリカを戦勝国に導き、かつ世界史上初めての平和維持に関する国際機構である、「国際連盟」の設立に関わったという点で注目に値するし、Roosevelt 大統領の場合は世界大恐慌後の未曾有のアメリカ経済社会の大混乱を建て直し、且つ、第二次世界大戦を指導し勝利へ導く役割を果たしたという点で特筆に値する人である。この二人がアメリカ国民に対して、あるいは国際社会に対して、どのようなメッセージを発してきたかを分析することは、優れたリーダーが備えるべきコミュニケーション特性を考察する一助となると思われる。	
<b>授業計画</b>	
1年次 Wilson と Roosevelt 大統領はどのような人物であったかを知ることから始め、それぞれの政権でどのような政治課題に直面し、それらを乗り切るためにどのようなコミュニケーションを取ってきたかを、主として二人の代表的な演説を素材として扱い、背景事情、目的、構成、言葉使い、修辞技術、発表の特徴など様々な観点から分析することで、二人のリーダーとしてのコミュニケーション特性を探ることとする。春学期は Wilson 大統領に焦点をあて、秋学期は Roosevelt 大統領に焦点をあてて進める。 二人の大統領はアメリカ議会に、あるいはアメリカ国民に、また、国際社会にどのようなメッセージを發し、どのような影響を与えてきたのだろうか。演説に関する論文を中心に扱い質疑応答を通じて考察することとする。	
2年次 一年次で経験した、大統領のスピーチ分析を通じたリーダーシップ研究を発展させる。 同様の方法を用いて、他の大統領など社会のリーダーとなった人たちのメッセージを分析して、リーダーのコミュニケーション特性をさらに探求することとする。学生が関心を寄せる人物を選び、その人物のコミュニケーションを扱い分析しながら演習を進める。	
<b>事前事後学習</b>	
授業前はスピーチを読み意味を把握していくことと、特徴について自分なりの考えをまとめてくること、授業後はスピーチとリーダーとしてのコミュニケーションの特徴を整理すること。	
<b>テキスト</b>	
論文などプリント教材を適宜使用する。	
<b>参考文献</b>	
授業中に適宜紹介する。	
<b>成績評価</b>	
口頭発表とレポートの出来栄えにより評価する。	

<b>授業科目名</b> スペイン語特殊研究	<b>単位数</b> <b>4 単位</b>
<b>担当教員名</b> 岡村 一 (おかむら はじめ)	<b>開講期間</b> <b>通年</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> 中世から近代にかけてのスペイン語の変遷の総合的把握。	
<b>授業の概要</b> スペイン語は、ローマによってイベリア半島に移植された俗ラテン語から発生した。それが記された最古の文献は10世紀頃に遡るが、まとまった量の文献によって歴史的変化の跡を克明にたどることができるのは、『わがシッドの歌』の成立する1200年前後以降である。講義ではこのときから近代スペイン語に至る17世紀までのあいだのスペイン語の音韻、形態、統語、語彙、文体の歴史的変遷を、文学作品等を使いながら見ていきたい。	
<b>授業計画</b>	
第1回 俗ラテン語	第16回 同上
第2回 同上	第17回 <i>Libro de buen amor</i> 講読
第3回 中世スペイン語（音韻）	第18回 同上
第4回 同上	第19回 同上
第5回 中世スペイン語（形態）	第20回 近世スペイン語（音韻）
第6回 同上	第21回 近世スペイン語（形態）
第7回 同上	第22回 同上
第8回 中世スペイン語（統語）	第23回 近世スペイン語（統語）
第9回 同上	第24回 同上
第10回 同上	第25回 近世スペイン語（語彙、文体）
第11回 中世スペイン語（語彙、文体）	第26回 同上
第12回 同上	第27回 <i>Don Quijote</i> 講読
第13回 同上	第28回 同上
第14回 <i>Cantar de Mio Cid</i> 講読	第29回 同上
第15回 同上	第30回 まとめ
<b>事前事後学習</b> 事前に参考文献の該当箇所を熟読しておくこと。事後には講義の内容を整理し把握しておくこと。	
<b>テキスト</b> A. Montaner, ed., 他 <i>Cantar de Mio Cid, Crítica</i>	
<b>参考文献</b> Ramón Menéndez Pidal, <i>Manual de gramática histórica española</i> , Espasa-Calpe. Rafael Lapesa, <i>Historia de la lengua española</i> , Gredos. Samuel Gili Gaya, <i>Nociones de gramática histórica española</i> , Bibliograf. 他	
<b>成績評価</b> 課題ごとに提出を求めるレポート（10回程度）により行なう。	

<b>授業科目名</b> スペイン語特殊研究演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 岡村 一 (おかむら はじめ)	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
西ヨーロッパ史における個人意識の高まりと、スペイン文学におけるその具体的なあらわれを把握すること。	
<b>授業の概要</b>	
本演習では、個人への関心の高まりと文学作品の文体の関係を考察していきたい。西ヨーロッパにおいて、中世から近代に至る時間の流れは、一面、個人への関心の高まりの歴史である。例えばそのあらわれとして、初期には画一的だった人物像が、しだいに個性的な顔や体を備えるようになり、やがては完全な「個人」の姿となる。あるいは精神史においても、関心が信仰共同体全体への救いから、だんだんと人々人の内面の救いへと移っていくのが認められる。スペイン文学の文体においても、これと軌を一にした流れが観察できるが、それが具体的にどのような形であらわれ、どのような変遷の過程をたどるのかを、各時代を代表する作品群を分析しながら考察していく。	
<b>授業計画</b>	
1年次 ヨーロッパ中世・近代史を概観して、個人意識の高まる歴史的、社会的背景を考察したのち、ヨーロッパ精神史と美術史における個人意識の表われを観察する。そのうえで、スペイン中世の文学作品 <i>Cantar de Mio Cid, Milagros de Nuestra Señora, Libro de buen amor</i> を、個人意識の高まりという視点から分析する。	
2年次 引き続き個人意識の高まりという視点から、スペイン中世文学の作品 <i>Conde Lucanor, Celestina</i> 近代文学の作品 <i>Lazarillo de Tormes, Don Quijote</i> を分析。最後に全体の流れをまとめる。	
<b>事前事後学習</b>	
1年次 事前学習：毎回読んでくるべき参考文献の箇所を指定するので、熟読しておくこと。 事後学習：説明した内容を整理・把握しておくこと。	
2年次 事前学習：指定するテキストの箇所を読み、個人にかんする意識の観察できる箇所に注目し、そこに具体的にどのような意識が読み取れるか考察しておくこと。 事後学習：毎回の講義の内容、および担当者と聴講者間のディスカッションの内容を整理・把握し、かつそれを前回の内容と関連づけておくこと。	
<b>テキスト</b>	
<i>Cantar de Mio Cid, Crítica A. Montaner, ed., 他</i>	
<b>参考文献</b>	
M. ブロック 『封建社会』 岩波書店 R. W. サザーン 『中世の形成』 みすず書房 J. ビセンス・ビーベス 『スペイン』 岩波書店 拙著 『「平家物語」と「わがシッドの歌」における個人』(上) (下) 熊本学園大学文学・言語学論集 所収、他	
<b>成績評価</b>	
課題ごとに提出を求めるレポート (8回程度) と修士論文により行なう。	

<b>授業科目名</b> 言語処理論特殊研究演習	<b>単位数</b> <b>2年間を通じて8単位</b>
<b>担当教員名</b> 川田亮一（かわだ りょういち）	<b>開講期間</b> <b>通年</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>日本語を対象言語とし、コンピュータを活用して、日本語の形態論・構文論・意味論・語彙論のいずれかの分野でのテーマを扱った研究を行い、論文としてまとめることを目標とする。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>この分野は学際的であるため、まず次の3点の知識を修得することが前提となる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>(1)現代言語学の知識 (GB,PSGLFG,HPSGなど)</li> <li>(2)日本語学の知識 (全般にわたる基礎知識)</li> <li>(3)自然言語処理の知識 (データ処理を行うためのプログラミング言語修得を含む)</li> </ul>	
<b>授業計画</b>	
<p>1年次</p> <p>概要で述べた前提となる知識を習得するとともに、受講生のテーマにしたがって先行研究を調査し、研究計画を立ててもらう。さらに、研究テーマにあったプログラミング言語を最低一つは修得することが必要である。</p>	
<p>2年次</p> <p>限られた期間で何ができる、何ができないかという観点から、研究テーマを再検討し、研究計画を練り直すことから始める。夏休み前の段階で、論文の全体の構成を決定する。秋学期からは全体の構成に基づき、書き上げた分の原稿を毎回検討し、論文として相応しい形式・内容を備えているかをチェックし、最終的に修士論文として完成させる。</p>	
<b>事前事後学習</b>	
概要で述べた3点の知識の到達度をあらかじめ自分で認識しておくこと。	
<b>テキスト</b>	
必要があれば研究テーマに合わせて指示をする。	
<b>参考文献</b>	
必要があれば研究テーマに合わせて指示をする。	
<b>成績評価</b>	
提出された論文により評価する。	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
日本語教育特殊研究演習	2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
塩入すみ（しおいりすみ）	通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
日本語教育に関わる研究分野のテーマに関して修士論文を書く。	
<b>授業の概要</b>	
<p>本演習は、日本語教育に関わる研究分野のうち、特に学習者の母語との対照研究に焦点を当てて行う。対照研究の領域は、現代日本語の構文・意味等を中心とした関連領域とする。</p> <p>構文・意味の対照研究には当該の2つの言語についての基礎的な知識が不可欠であり、特に自分の母語に関する語学的な基礎知識を事前に各自で補っておく必要がある。</p>	
<b>授業計画</b>	
1年次	
各自のテーマに即して研究テーマの設定を行い、基礎的な文献を各自収集し、授業時にいくつかの論文の概要とそれに対するコメントを発表する。秋学期中に修士論文のアウトラインを作成し、発表、提出する。	
2年次	
論文の完成までに数回の中間発表とその後の修正を行い、12月までに完成させる。	
各自学会や研究会の発表に積極的に参加する。	
<b>事前事後学習</b>	
基礎的な文献講読とデータ収集	
<b>テキスト</b>	
授業で指示する。	
<b>参考文献</b>	
授業で指示する。	
<b>成績評価</b>	
論文・対外的発表	

<b>授業科目名</b> 東アジア（中国）地域文化特殊研究Ⅰ	<b>単位数</b> <b>4単位</b>
<b>担当教員名</b> 大澤武司（おおさわたけし）	<b>開講期間</b> <b>通年</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
建国初期中国の対日外交の展開とその背後にある中国共産党の外交思想を体系的に理解する。	
<b>授業の概要</b>	
まず冷戦初期の中国外交の展開を概観する。いわゆる毛沢東時代の外交政策について、概説書と関連論文を読み進めつつ、中国外交史研究の最前線を理解する。続いて発展段階として、1950・60・70年代における日中関係の具体的な歴史事象をそれぞれ事例として選び、これに関連する専門論文を精読すると同時に、関連する史料の読み解きを合わせて行うことで、歴史学的研究手法の基礎を修得する。	
<b>授業計画</b>	
第1回 開講ガイダンス	第16回 建国初期中国の対日外交概説（1）
第2回 当代中国外交概説（1）	第17回 建国初期中国の対日外交概説（2）
第3回 当代中国外交概説（2）	第18回 事例検討①「対日講和と中国」（1）
第4回 当代中国外交概説（3）	第19回 事例検討①「対日講和と中国」（2）
第5回 当代中国の外交政策決定過程	第20回 事例検討①「対日講和と中国」（3）
第6回 当代中国の対日政策決定過程	第21回 事例検討②「中国の対日戦犯処理」（1）
第7回 「向ソ一辺倒」と中国	第22回 事例検討②「中国の対日戦犯処理」（2）
第8回 朝鮮戦争と中国	第23回 事例検討②「中国の対日戦犯処理」（3）
第9回 ジュネーヴ会議と中国	第24回 事例検討③「LT貿易協定締結交渉」（1）
第10回 台湾海峡危機と中国	第25回 事例検討③「LT貿易協定締結交渉」（2）
第11回 長崎国旗事件と中国	第26回 事例検討③「LT貿易協定締結交渉」（3）
第12回 中ソ対立と中国	第27回 事例検討④「日中国交正常化」（1）
第13回 中仏国交正常化と中国	第28回 事例研究④「日中国交正常化」（2）
第14回 米中接近と中国	第29回 事例研究④「日中国交正常化」（3）
第15回 まとめ	第30回 まとめ
<b>事前事後学習</b>	
参加者全員に講義に使用する文献・史資料の事前の読み込みを求める。原則、講読形式を予定している。なお、講義の参加にあたっては、毎回、各自に簡単な「事前レポート」の提出を求める。	
<b>テキスト</b>	
講義に用いる文献・史資料については、適宜、指示を与える。	
<b>参考文献</b>	
詳細は講義の際に指示する。	
<b>成績評価</b>	
平常点（講義への参加状況・「事前レポート」・報告内容）ならびにレポートで総合的に評価する。	

<b>授業科目名</b> <b>社会福祉学・福祉環境学方法論専門研究</b>	<b>単位数</b> <b>2 単位</b>																														
<b>担当教員名</b> <b>豊田謙・宮北・花田・高林・豊田直・守弘 中地・岡部・下地・橋本・堀・仁科・横山</b>	<b>開講期間</b> <b>春学期</b>																														
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> 大学院における研究の方法の基本と実践的技法について習得する。																															
<b>授業の概要</b> この授業は、「大学院における学問への誘い」として展開されます。近年、大学院では、大学院生として学び研究することに充分な主体性を確立できず、受け身なままで院生生活を終える学生がまれではなくなります。そこで、学問することの面白さ、醍醐味を伝えたいと考えました。基本的には、担当する教員それぞれの先生方の研究の軌跡を語っていただきながら、学問への誘いをし、それを通して、大学院において研究することの意味・方法を伝えるというものです。																															
研究の方法と実践的技法についての数回の授業の後、各教員が修士課程で研究することの意味を、自分自身の経験を踏まえて語り、研究者としての修業の意味やまたそれぞれの学問の分野と方法論を語ります。																															
<b>授業計画</b> 下記の授業計画は予定であり、日程は変更される可能性があります。 授業開始日に詳細をお伝えします。																															
<table> <tr> <td>第1回 担当者全員によるイントロダクション</td> <td></td> </tr> <tr> <td>第2回 宮北隆志 大学院における研究の方法と実践的技法 (1) 情報収集・整理の基本</td> <td></td> </tr> <tr> <td>第3回 花田昌宣 大学院における研究の方法と実践的技法 (2) 図書館活用と読書ノート作成</td> <td></td> </tr> <tr> <td>第4回 豊田謙二 大学院における研究の方法と実践的技法 (3) 研究レビュー作成と論文執筆</td> <td></td> </tr> <tr> <td>第5回 高林秀明 (地域福祉論) 世界への視野を、人間へのまなざしを (聖アウグスティヌス)</td> <td></td> </tr> <tr> <td>第6回 豊田直二 (環境生命学/生物学) 生物学・環境生命学の基本と発表</td> <td></td> </tr> <tr> <td>第7回 守弘仁志 (ソーシャルワーク リサーチ) 地域社会の調査の実際 離島調査を例に</td> <td></td> </tr> <tr> <td>第8回 中地重晴 (環境化学/ 環境マネジメント論) 環境問題解決のための方法 温暖化と化学物質</td> <td></td> </tr> <tr> <td>第9回 岡部造史 (西洋史) 西洋史学からみた福祉の問題</td> <td></td> </tr> <tr> <td>第10回 下地明友 (精神保健福祉学／医療人類学) 臨床哲学：生命・主体・現実：研究方法の以前</td> <td></td> </tr> <tr> <td>第11回 橋本公雄 (運動・スポーツ心理学) ウェルネスとハイ・パフォーマンスの心理 運動・スポーツを通して</td> <td></td> </tr> <tr> <td>第12回 堀 正嗣 (障害学) 障害学の方法とは何か</td> <td></td> </tr> <tr> <td>第13回 仁科伸子 (社会福祉学) 学術論文の組み立てと研究方法論 量的研究と質的研究</td> <td></td> </tr> <tr> <td>第14回 横山孝子 (社会福祉学) 高齢者の保健福祉領域における人材養成の歩み</td> <td></td> </tr> <tr> <td>第15回 豊田謙二 まとめ</td> <td></td> </tr> </table>		第1回 担当者全員によるイントロダクション		第2回 宮北隆志 大学院における研究の方法と実践的技法 (1) 情報収集・整理の基本		第3回 花田昌宣 大学院における研究の方法と実践的技法 (2) 図書館活用と読書ノート作成		第4回 豊田謙二 大学院における研究の方法と実践的技法 (3) 研究レビュー作成と論文執筆		第5回 高林秀明 (地域福祉論) 世界への視野を、人間へのまなざしを (聖アウグスティヌス)		第6回 豊田直二 (環境生命学/生物学) 生物学・環境生命学の基本と発表		第7回 守弘仁志 (ソーシャルワーク リサーチ) 地域社会の調査の実際 離島調査を例に		第8回 中地重晴 (環境化学/ 環境マネジメント論) 環境問題解決のための方法 温暖化と化学物質		第9回 岡部造史 (西洋史) 西洋史学からみた福祉の問題		第10回 下地明友 (精神保健福祉学／医療人類学) 臨床哲学：生命・主体・現実：研究方法の以前		第11回 橋本公雄 (運動・スポーツ心理学) ウェルネスとハイ・パフォーマンスの心理 運動・スポーツを通して		第12回 堀 正嗣 (障害学) 障害学の方法とは何か		第13回 仁科伸子 (社会福祉学) 学術論文の組み立てと研究方法論 量的研究と質的研究		第14回 横山孝子 (社会福祉学) 高齢者の保健福祉領域における人材養成の歩み		第15回 豊田謙二 まとめ	
第1回 担当者全員によるイントロダクション																															
第2回 宮北隆志 大学院における研究の方法と実践的技法 (1) 情報収集・整理の基本																															
第3回 花田昌宣 大学院における研究の方法と実践的技法 (2) 図書館活用と読書ノート作成																															
第4回 豊田謙二 大学院における研究の方法と実践的技法 (3) 研究レビュー作成と論文執筆																															
第5回 高林秀明 (地域福祉論) 世界への視野を、人間へのまなざしを (聖アウグスティヌス)																															
第6回 豊田直二 (環境生命学/生物学) 生物学・環境生命学の基本と発表																															
第7回 守弘仁志 (ソーシャルワーク リサーチ) 地域社会の調査の実際 離島調査を例に																															
第8回 中地重晴 (環境化学/ 環境マネジメント論) 環境問題解決のための方法 温暖化と化学物質																															
第9回 岡部造史 (西洋史) 西洋史学からみた福祉の問題																															
第10回 下地明友 (精神保健福祉学／医療人類学) 臨床哲学：生命・主体・現実：研究方法の以前																															
第11回 橋本公雄 (運動・スポーツ心理学) ウェルネスとハイ・パフォーマンスの心理 運動・スポーツを通して																															
第12回 堀 正嗣 (障害学) 障害学の方法とは何か																															
第13回 仁科伸子 (社会福祉学) 学術論文の組み立てと研究方法論 量的研究と質的研究																															
第14回 横山孝子 (社会福祉学) 高齢者の保健福祉領域における人材養成の歩み																															
第15回 豊田謙二 まとめ																															
<b>事前事後学習</b> 自らの研究テーマに沿って講義内容を整理し、様々な課題へのアプローチの方法について考察する。																															
<b>テキスト</b> なし、 授業の際に資料を配布します。																															
<b>参考文献</b> 授業中に指示します。																															
<b>成績評価</b> 授業への参加、レポートなどを総合的に評価する。																															

<b>授業科目名</b> 社会福祉学専門研究	<b>単位数</b> 2 単位
<b>担当教員名</b> 豊田謙二 (とよた けんじ)	<b>開講期間</b> 春学期
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
認知症の人への関わりを事例として取り上げ、新しいケアとソーシャルワークの役割を修得すること。	
<b>授業の概要</b>	
テーマ：認知症ケアとソーシャルワーク 国勢調査速報は、認知症の人の増加と単身世帯の増加を伝えている。本研究においては、認知症の人が一人暮らしをすることをモデルとして捉え、その支援のあり方について、日本とドイツとの試みを検証する。	
<b>授業計画</b>	
第1回 介護保険—日本とドイツ—	
第2回 介護保険における認知症の人への支援 (日本)	
第3回 " (ドイツ)	
第4回 認知症の人を支えるネットワーク (日本)	
第5回 " (ドイツ)	
第6回 認知症のケアと新しい文化 (パーソンセンタード・ケア)	
第7回 認知症の人はどこに住むのか (日本)	
第8回 " (ドイツ)	
第9回 認知症の若い人と就労 (日本)	
第10回 認知症の人とその家族 (日本)	
第11回 " (ドイツ)	
第12回 認知症の人と後見 (日本)	
第13回 認知症の人と世話 (ドイツ)	
第14回 認知症の人と看取り (日本)	
第15回 認知症の人とホスピス (ドイツ)	
<b>事前事後学習</b>	
次回の授業テーマを指示するので準備されたい	
<b>テキスト</b>	
授業時に資料を配布する	
<b>参考文献</b>	
豊田謙二『認知症の人と創るケアの世界—日本とドイツの試みー』ナカニシヤ出版, 2015年	
<b>成績評価</b>	
授業において討論に参加し、指示されたペーパーづくりを実行すること	

<b>授業科目名</b> 社会福祉学専門研究演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 豊田謙二（とよたけんじ）	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>  個々の研究目標の進展に沿いつつ、共同的研究に関する討論を行なう。	
<b>授業の概要</b>  受講生は、それぞれの研究発表とその発表をめぐる討論の過程を通して、より高い専門水準での読む力、聞く力、話す力、そして書く力を強化し、研究における批判的な考察力を討論の過程で修得しうる。  また、より高い専門的な能力を修得しつつ、日々の生活や個々の福祉現場の現実が常に視野に収められていなければならない。とくに、福祉の領域ではウェルビーイングをめぐる問題点に焦点を合わせることが重要であり、研究と現実との交感の修練が求められる。院生は、その過程において、問題性を研究テーマへと昇華させうる能力の養成に努める。	
<b>授業計画</b>  1年次  専門的研究の入り口であり、まず研究書1冊を相談のうえで決めて輪読し、受講生は順にレジュメを作成して発表する。自分の考えをまとめてプレゼンする能力の涵養が重要である。また、討論の過程において議論に参加しつつ、新しい知見や討論者と自分との差異を発見する機会を得ることができる。共同の討論に参加しつつ、自分の修士論文のテーマが確定しうる。  2年次  修士論文の執筆が主たる課題である。定期的に、それぞれの修士論文のテーマ、章別構成、論旨の展開、参考文献などについて報告と討論を継続する。合宿を設けて集中的な論議の機会を持つことも非常に重要であり、その都度受講生と相談しつつ、修士論文の完成に向けて企画・実行したい。	
<b>事前事後学習</b>  授業時に次回の授業目標を案内するので準備されたい	
<b>テキスト</b>  演習時に指示する	
<b>参考文献</b>  豊田謙二『認知症の人と創るケアの世界－日本とドイツの試み－』ナカニシヤ出版、2015年	
<b>成績評価</b>  受講して議論に参加すること、課された研究テーマの報告	

<b>授業科目名</b> 高齢者福祉論専門研究	<b>単位数</b> 2 単位
<b>担当教員名</b> 仁科伸子 (にしな のぶこ)	<b>開講期間</b> 春学期
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
修士レベルの高齢者福祉研究に必要な基礎と研究の方法論、理論を学び、実際に研究に応用できることが目標です。	
<b>授業の概要</b>	
授業では、近年の高齢者福祉研究の動向と到達点を学ぶため、指定する文献または資料を読んで授業の参加者が報告をします。また、学会誌などに掲載されている査読付き論文を読み、実際の高齢者研究の方法論、レジュメを作成して発表する、近年の高齢者福祉関連の研究テーマについて論文を読みディスカッションするという方法を用います。受講者は、文献講読、先行研究の読み込み、研究方法の学習、データ収集と分析などの積極的な学習が必要ですので準備を行ってください。	
<b>授業計画</b>	
第1回 オリエンテーション：講義の狙いと受講者の関心領域（自己紹介、研究テーマについて各自発表）、講義のスケジュールについて	
第2回 現代社会と高齢者：社会福祉学の代表的文献における「高齢者」	
第3回 研究方法論	
第4回 アクティブ・エイジング①	
第5回 アクティブ・エイジング②	
第6回 エイジズム①	
第7回 エイジズム②	
第8回 地域と高齢者①	
第9回 地域と高齢者②	
第10回 外国文献①	
第11回 外国文献②	
第12回 国際比較① ヨーロッパの高齢者福祉	
第13回 国際比較② アジアの高齢者福祉	
第14回 研究の中の高齢者	
第15回 まとめ	
<b>事前事後学習</b>	
指示する文献、論文により発表者を決めるときには、準備をしてください。	
<b>テキスト</b>	
授業の中で文献紹介、コピーなどを渡します。	
<b>参考文献</b>	
授業の中で指示します。	
<b>成績評価</b>	
授業への参加 30%、発表準備と内容 40%、課題レポート 30%	

<b>授業科目名</b> 高齢者福祉論専門研究演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 仁科伸子（にしな のぶこ）	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
人口減少社会、高齢社会における地域社会をベースに、地域福祉、家族、労働、生活、居住、コミュニティ、コミュニティ・ケア、社会資源といった人々の生活に密着した内容について研究を進めます。最終的な目標は、各自の研究テーマにより、論文執筆の基本ルールを踏襲した修士論文を執筆することです。	
<b>授業の概要</b>	
この授業では、研究テーマを決め、これについて学問的に探求し、修士論文を執筆するように指導します。各学生の研究テーマごとに、基本書、基礎的な論文などを提示するのでこれらを精読したうえで、研究を進め、定期的に研究の進捗を発表できるよう準備をすること。ディスカッションにおいては、クリティカルシンキングのスキルを高め、自らの意見を述べられるようにします。	
<b>授業計画</b>	
1年次 授業では、各自の修士論文のテーマに従って、次のことを行います。 論文の書き方と構成 研究テーマの決定 先行研究のレビュー 研究計画の立案 調査研究の具体的な内容及びスケジュールを確立する 調査方法などを学ぶため、校外で調査に参加する場合もある（2015年度は沖縄北部3村、あるいは中山間地域）	
2年次 各自の研究テーマに従って、研究を進め、修士論文を完成させます。 修士論文目次の立案 調査研究内容の精査と実施 調査結果について発表し、毎回ディスカッションを行う 夏までに調査、研究を終え、秋以降には執筆及び授業内で考察、分析に関するディスカッションを行う	
<b>事前事後学習</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・パソコンの表計算ソフトの使い方などはマニュアルを購入しマスターしておくこと</li> <li>・研究方法論に関する専門書を読んでおくこと</li> <li>・研究論文の書き方に関する書籍を読んでおくこと</li> <li>・<u>2万字以上のレポート、論文、または卒業論文を執筆していること</u></li> </ul>	
<b>テキスト</b> 特になし	
<b>参考文献</b>	
<b>成績評価</b> 発表内容	

<b>授業科目名</b> 障害児者福祉論専門研究	<b>単位数</b> <b>2 単位</b>
<b>担当教員名</b> 東 俊裕 (ひがし としひろ)	<b>開講期間</b> <b>春学期</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
人権という観点から、障害者の置かれている立場を分析、考察する能力を高めることを目標にする。	
<b>授業の概要</b>	
<p>この授業のテーマは障害者権利条約から見た日本の現状である。この条約は、2006年12月国連で採択され、2014年1月に批准されたばかりのものであるが、障害のある人の人権に関する世界のスタンダードとしての機能を有する。この条約の基本的な考え方は、障害のある人に特別の権利を付与するものではないが、一般の人権が享受されていない現実に着目し、どうしたら平等が確保できるのかといった視点から、従来の考え方や手法では達成し得なかった限界に対して、新しい人権のコンセプトを取り入れることで平等を達成しようというものである。この世界的な物差しから、日本の福祉の現状を照射すると、様々な問題点が浮かび上がる。その問題点が何であるのか、原因がどこにあるのか、ならびに今後の方向性はと言った視点から、権利条約の条項毎にもしくはテーマ毎に講義を進めていく予定である。</p>	
<b>授業計画</b>	
第1回 障害者の権利条約の策定過程	
第2回 障害の概念	
第3回 差別の概念	
第4回 アクセシビリティ	
第5回 法的能力と後見制度	
第6回 司法へのアクセス	
第7回 強制医療と強制介入	
第8回 障害者虐待	
第9回 地域社会での自立した生活	
第10回 インクルーシブ教育	
第11回 労働と雇用	
第12回 社会保障	
第13回 文化的な生活	
第14回 モニタリング	
第15回 まとめ	
<b>事前事後学習</b>	
参考文献等の該当箇所を指示するので、事前にその箇所を学習し、授業終了後は、学習した視点から、社会の構造を見直す訓練を積むこと。	
<b>テキスト</b>	
東俊裕「国連・障害者権利委員会へ提出される第1回政府報告（案）の分析と評価（1）」 季刊福祉労働149号、2015年12月（以後、連載するので連載終了分まで購入すること）	
<b>参考文献</b>	
長瀬修・東俊裕・川島聰編『障害者の権利条約と日本－概要と展望』生活書院 増補改訂版（2012/10）	
<b>成績評価</b>	
日頃の授業での応答、問題意識、発言内容等を考慮する。	

<b>授業科目名</b> 障害児者福祉論専門研究演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 東 俊裕 (ひがし としひろ)	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>ウェルビングの観点から障害者的人権とそれを阻害する社会的障壁に関するテーマを各自設定したうえで、障害者が置かれている状況を分析し、その課題をどうすれば克服できるのかについて、各自の修士論文を完成させる。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>障害の医学モデルから社会モデルに目を転じたとき、そこに広がるのは障害者の日常生活や社会生活を送る上で欠かすことのできない人権享有を阻害する社会的障壁の存在である。こうした社会的障壁は歴史の発展とともに、障害者の存在を想定しない社会が構築してきたものである。</p> <p>かような観点から、障害者が抱える課題といったものを分析し、社会の有り様を障害者の立場から明らかにすることが共生社会の構築の前提条件となる。障害者に関する法制度のあり方も社会の有様を作る大きな要素であるので、それらを含めて社会全体の構成を見直す形で演習を行う。</p>	
<b>授業計画</b>	
<p>1年次</p> <p>まず、年度当初に、各自がテーマを設定し、そのための研究計画案を策定するところから始める。自らが、研究の枠組みを設定し、その報告をもとに指導を行っていく。内容的には、研究の焦点を明らかにすることが求められるので、集団討議を含め、各自の研究の方向性を煮詰めていく過程を大事にしたいと思っている。</p> <p>そのうえで、各自の研究に必要となる先行研究やデータを収集し、必要ならば調査を行いながら、修士論文の作成に必要な基礎を整える作業に移り、修士論文の構成とその中に盛り込むべき内容の大枠を確定できる程度のものに仕上げていく。</p> <p>2年次</p> <p>2年次においては、その進捗状況を各自が報告することで各自の課題を明らかにしつつ、完成に至るまで各自の執筆について指導する形で進めることにする。</p>	
<b>事前事後学習</b>	
<p>修士論文の完成が目標があるので、本来事前、事後と行った区分はない。授業時間は各自の進捗状況に応じて研究内容を発表することで各自の課題を発見し認識する場という位置づけで参加すること。</p>	
<b>テキスト</b>	
<p>テキストといったものはない。何が必要かは、各自のテーマとの関係で決まるので、各自が探すことを原則とするが、必要と思われるものについては、適宜指示する。</p>	
<b>参考文献</b>	
同上	
<b>成績評価</b>	
授業中の報告内容、問題意識の鋭さ、思考の柔軟さや多様性などに基づき総合的に判断する。	

<b>授業科目名</b> <b>障害学専門研究</b>	<b>単位数</b> <b>2 単位</b>
<b>担当教員名</b> <b>堀 正嗣 (ほり まさつぐ)</b>	<b>開講期間</b> <b>春学期</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
障害学の基礎理論及び研究方法を理解し、共生（インクルージョン）の観点からのディスアビリティ現象の解明を試みる。	
<b>授業の概要</b>	
<p>従来、障害の研究は、医療、リハビリテーション、社会福祉、教育等の専門分化された枠組みから専門家が主体となって行われてきた。これに対して障害学では、当事者が主体となり、社会、文化の視点から障害を研究する。そこでは障害者の差別・抑圧からの解放、人権の確立が目指される。そして、障害学の核心となる研究テーマは障害の理論化であり、この分野に関しては英米を中心に、多くの研究が蓄積されている。</p> <p>この講義では、まず障害学の学問的位置と理論視角を理解する。そのうえで、イギリス障害学の原点であるマイケル・オリバー、フィンケルシュタイン等の理論を学ぶ。さらに『共生の障害学』（堀正嗣編著）をテキストに、共生（インクルージョン）の観点からのディスアビリティ現象の解明を試みる。なお具体的な内容については受講者の障害学についての予備知識や問題意識により変更する可能性がある。</p>	
<b>授業計画</b>	
<p>第1回 障害学への招待</p> <p>第2回 障害学の学問的位置</p> <p>第3回 インペアメントとディスアビリティ</p> <p>第4回 フィンケルシュタインの障害学理論</p> <p>第5回 障害の政治—オリバーの障害学理論</p> <p>第6回 新社会モデル</p> <p>第7回 共生の障害学の視点</p> <p>第8回 自立生活の多様性を求めて</p> <p>第9回 日本における障害学の源流としての青い芝の会の思想</p> <p>第10回 障害介助にみる「社会モデル」の可能性</p> <p>第11回 「社会モデル」を採用するソーシャルワークの可能性</p> <p>第12回 精神医療・保健・福祉サービスへの精神医療ユーザー参加の可能性</p> <p>第13回 「共に生きる教育」の運動における条件整備論の陥穼</p> <p>第14回 脱能力主義、脱近代、脱主体の思想を</p> <p>第15回 共生の障害学の地平</p>	
<b>事前事後学習</b>	
事前学習としてテキストの該当箇所を読みレジュメを作成する。事後学習としては、関連論文を読み研究を深める。	
<b>テキスト</b>	
堀正嗣編著『共生の障害学』明石書店 2012年。	
<b>参考文献</b>	
授業中指示する。	
<b>成績評価</b>	
授業中の報告、授業への参加状況、レポートにより総合評価する。	

<b>授業科目名</b> 障害学専門研究演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 堀 正嗣 (ほり まさつぐ)	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> 障害学専門文献・論文講読と修士論文作成	
<b>授業の概要</b> この演習では、各自の修士論文作成に向けて研究指導を行うと共に、各自の研究テーマに関連する専門文献・専門論文を精読する。授業方法としては、各自の論文に関する報告と専門文献・専門論文に関する報告と研究討議・解説を組み合わせて行う。取り上げる文献・論文については受講者と相談の上、決定する。研究の進捗状況に応じてフィールドワークを取り入れ、障害学研究会・障害学会への参加や先進地における実践の観察等を行いたい。 大学院においては専門的な文献や論文を読み解くトレーニングが求められる。その基礎となる、障害学に関わる哲学や社会学・心理学などの専門論文を読むことも考えている。	
<b>授業計画</b> 1年次 ① 問題意識の明確化 ② 研究テーマの選定 ③ 各自の研究テーマに基づく文献・論文の収集 ④ 各自の研究テーマに基づく文献・論文のレビュー ⑤ 先行研究の整理と研究目的・研究計画の明確化 ⑥ 関連する重要文献・論文の精読 ⑦ フィールドワーク、共同調査とその分析 ⑧ 障害学研究会・障害学会への参加 2年次 ① 修士論文作成に向けての発表と研究討議 ② 修士論文作成に向けての研究指導—作業仮説と仮アウトラインの決定 ③ 修士論文に関連する重要文献・論文の講読と研究討議 ④ 論文の執筆とその指導 ⑤ フィールドワーク、共同調査とその分析 ⑥ 障害学研究会・障害学会への参加 ⑦ 障害学研究会での研究報告	
<b>事前事後学習</b> 事前学習としてレジュメを作成し疑問点を明確にする。事後学習として関連文献を読む。	
<b>テキスト</b> テキストは使用しない。	
<b>参考文献</b> 授業中指示する。	
<b>成績評価</b> 研究報告を中心に総合評価する。	

<b>授業科目名</b> <b>保育学専門研究</b>	<b>単位数</b> <b>2 単位</b>
<b>担当教員名</b> <b>伊藤良高（いとう よしたか）</b>	<b>開講期間</b> <b>秋学期</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
保育学・保育ソーシャルワーク論について最新の専門的知識を修得する。	
<b>授業の概要</b>	
<p>近年、子どもと家庭を取り巻く環境の変化のなかで、保育所・幼稚園・認定こども園等保育・教育施設における役割・機能が多様化、多岐化している。すなわち、保育士・幼稚園教諭等保育者には、入所（園）している子どもの保育のみならず、その保護者に対する支援、さらには、地域の子育て家庭に対する支援を担っていくことが求められている。こうした状況において、本研究では、保育学・保育ソーシャルワークについて、保育実践、保護者支援、地域子育て支援に関する最新の文献・資料にあたりながら、その現状と課題、展望について考察することを目的としている。保育学・保育ソーシャルワーク論の最先端（フロンティア）に触れつつ、その一步先にあるものを展望してみたい。</p>	
<b>授業計画</b>	
第1回 はじめに—子どもの幸せと親の幸せ～保育学のスタンス～	
第2回 保育ソーシャルワークの基礎理論	
第3回 保育ソーシャルワークと保育実践	
第4回 保育ソーシャルワークと保護者支援・子育て支援	
第5回 保育ソーシャルワークとカウンセリング	
第6回 保育ソーシャルワークと関係機関との連携	
第7回 保育所における保護者支援・子育て支援—事例研究—	
第8回 幼稚園・認定こども園における保護者支援・子育て支援—事例研究—	
第9回 児童福祉施設における保護者支援・子育て支援—事例研究—	
第10回 保育ソーシャルワークと保育者の資質・専門性	
第11回 保育スーパービジョンの理論と実践	
第12回 ソーシャルワーク論から保育が学ぶべきもの	
第13回 保育ソーシャルワーカーの構想と課題	
第14回 保育制度改革のなかの保育①—現状と課題—	
第15回 保育制度改革のなかの保育②—研究テーマー、おわりに	
<b>事前事後学習</b>	
日頃から、保育学・保育ソーシャルワーク論に関する文献・資料を収集し、講読しておくこと。	
<b>テキスト</b>	
日本保育ソーシャルワーク学会編『保育ソーシャルワークの世界』晃洋書房、2014年、1,800円	
<b>参考文献</b>	
伊藤良高『幼児教育行政学』晃洋書房、2015年、1,500円	
伊藤良高・伊藤美佳子『子どもの幸せと親の幸せ』晃洋書房、2012年、1,500円	
伊藤良高『保育制度改革と保育施設経営』笠間書房、2011年、7,500円	
<b>成績評価</b>	
授業への取り組み姿勢（50%）及び提出物（50%）で総合的に評価する。	

<b>授業科目名</b> <b>保育学専門研究演習</b>	<b>単位数</b> <b>2年間を通じて8単位</b>
<b>担当教員名</b> <b>伊藤良高（いとう よしたか）</b>	<b>開講期間</b> <b>通年</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
保育学専修として修士論文を作成することを目標とする。そのための基礎的な論文作成方法について修得することをめざす。	
<b>授業の概要</b>	
本研究演習では、保育学・保育ソーシャルワーク論に関する最新の文献・資料の収集、講読及びその批判的分析を試みることを目的とする。変革期にある保育（教育を含む）・子育て支援を学問研究の専攻としてアプローチしようとする者に、保育・子育て支援を科学的・実証的・臨床的に把握し、考究するための視点・方法を教授していきたい。また、そのプロセスを通して、修士論文の作成に向けた具体的な指導・援助を行っていきたい。	
<b>授業計画</b>	
1年次 ① 修士論文の作成に向けた詳細な研究計画書を作成する。 ② 保育学・保育ソーシャルワーク論についての必読文献を講読する。 ③ 論文のテーマに即した文献・資料（先行研究を含む）を収集し、講読する。	
2年次 ① 修士論文の作成に向けて、論文執筆について指導・助言する。 ② 修士論文の作成に向けて、学会・研究会発表等について指導・助言する。	
<b>事前事後学習</b>	
日頃から、論文作成に必要な文献・資料等を丁寧に収集し、分析、考察しておくこと。	
<b>テキスト</b>	
伊藤良高『幼児教育行政学』晃洋書房、2015年、1,500円 伊藤良高『保育制度改革と保育施設経営』風間書房、2011年、7,500円 伊藤良高『新時代の幼児教育と幼稚園』晃洋書房、2009年、1,300円 伊藤良高『幼児教育の明日を拓く幼稚園経営』北樹出版、2004年、2,200円 伊藤良高『〔増補版〕 現代保育所経営論』北樹出版、2002年、2,500円	
<b>参考文献</b>	
伊藤良高他編『新版 子ども家庭福祉のフロンティア』晃洋書房、2015年、1,300円 伊藤良高他編『教育と教師のフロンティア』晃洋書房、2013年、1,700円 伊藤良高他編『保育ソーシャルワークのフロンティア』晃洋書房、2011年、1,300円 伊藤良高他編『幼児教育のフロンティア』晃洋書房、2009年、1,300円 伊藤良高他編『〔改訂新版〕 現代の幼児教育を考える』北樹出版、2007年、1,500円 伊藤良高『保育所経営の基本問題』北樹出版、2002年、2,300円、その他	
<b>成績評価</b>	
研究への取り組み姿勢（50%）及び論文、発表レジメ等提出物（50%）で総合的に判断する。	

<b>授業科目名</b> 社会保障論専門研究	<b>単位数</b> 2 単位
<b>担当教員名</b> 松本勝明 (まつもと かつあき)	<b>開講期間</b> 秋学期
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
この授業は、少子高齢化をはじめとする経済社会の変化に対応した社会保障の在り方を検討のテーマとする。この授業では、社会保障の現状及び課題を把握し、社会保障の在り方について自己の見解を構成することができるようになることを到達目標とする。	
<b>授業の概要</b>	
この授業では、社会保障のなかでも、特に、医療・介護制度、年金制度及び社会保障と雇用との関係(生活保障)に焦点をあてて、その在り方を考える。 このため、これらをテーマとする文献の輪読、報告、ディスカッションを行うことにより、制度の現状、課題及び政策動向の分析・考察を行うとともに、問題解決策の検討を行う。	
<b>授業計画</b>	
第1回 授業の進め方 第2回 医療・介護① 医療の特殊性 第3回 医療・介護② 制度・構造上の問題 第4回 医療・介護③ 医療改革の課題 第5回 医療・介護④ 介護保険と改革の課題 第6回 年金① 年金制度を取り巻く状況 第7回 年金② 年金制度の現状 第8回 年金③ 年金制度の課題 第9回 年金④ 今後の年金制度の在り方 第10回 生活保障① 問題点 第11回 生活保障② 日本における生活保障 第12回 生活保障③ 國際比較 第13回 生活保障④ 生活保障の再編 第14回 生活保障⑤ 今後の在り方 第15回 まとめ	
<b>事前事後学習</b>	
各回のテーマに関する報告を割り当てるので、各回の報告者はテキストの該当部分の概要及びそれに対する自分の見解を報告できるよう準備を行うこと。その他の参加者は、テキストの該当部分を読み、疑問点を整理しておくこと。 受講後には、授業で行われた報告及びディスカッションを踏まえて、自らの理解を確認し、必要に応じて追加的な学習や質問を行うこと。	
<b>テキスト</b>	
池上直己『医療・介護問題を読み解く』日本経済新聞社、2014年 駒村康平『日本の年金』岩波書店、2014年 宮本太郎『生活保障』岩波書店、2009年	
<b>参考文献</b>	
授業のなかで紹介する。	
<b>成績評価</b>	
割り当てられた報告の内容及びディスカッションの状況をもとに評価する。	

<b>授業科目名</b> 社会保障論専門研究演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 松本勝明（まつもと かつあき）	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>院生が個別に研究テーマを決定すること、当該テーマに関する先行研究をレビューして今日の学界の到達水準をマスターすること、および最終的に修士論文を完成すること、を到達目標とする。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>院生が個別に決定した研究テーマに即して、当該テーマを多面的、総合的に考察するパースペクティブを獲得すること、当該テーマに関する今日の学界の到達水準をマスターすること、そして、できるだけ独創性ないし発展性の萌芽を内包するような修士論文を作成することを目標に、演習形式で指導する。</p>	
<b>授業計画</b>	
<p>1年次 院生と個別に話し合いのうえ、Individual research programとして年間計画を立てる。</p>	
<p>2年次 2年次も基本的に1年次と同じ。</p>	
<b>事前事後学習</b>	
<p>論文のテーマに応じて割り当てられた報告の準備を行うこと。受講後は、授業中でのディスカッションを踏まえて、必要な追加学習を行うこと。</p>	
<b>テキスト</b>	
特に指定しない。	
<b>参考文献</b>	
授業のなかで紹介する。	
<b>成績評価</b>	
最終的に提出された論文を基に審査評価する。	

<b>授業科目名</b> 日本社会福祉史専門研究	<b>単位数</b> 2 単位
<b>担当教員名</b> 山本尚友 (やまもと なおとも)	<b>開講期間</b> 秋学期
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
社会福祉事業が歴史的には社会防衛という地点から出発したということを明確に認識し、現代の福祉事業についての批判的視点をやしなう。	
<b>授業の概要</b>	
<p>人びとの生活の安定を国家・社会が保証するという意味での社会福祉の成立は、近代社会のものであるが、人びとの困難を他者が助けるという行為そのものは、社会の成立とともに認められるもので、日本では仏教用語を借りて救済（ぐさい）と呼ばれた。日本社会の特徴のひとつは、歴史的規定要因が多くの領域に強固に働きつづけることがあるが、救済の領域もそのひとつといえる。先の15年戦争まで日本の社会福祉が社会事業と呼ばれ、恩恵的な性格とともに社会防衛策としての側面を主としていたことにそれは端的にあらわれている。このため、日本の社会福祉の歴史を理解するためには、近代の動向をみるだけでは不充分で、前近代の救済史を視野にいれておくことが必要である。</p> <p>このためこの講義では、半期という短い時間ではあるが、古代から現代までの救済と社会福祉の歴史を、それぞれの時代のトピックスをとりあげる形で追っていきたいとおもっている。</p>	
<b>授業計画</b>	
第1回 演習内容の説明 第2回 古代の救済制度 第3回 中世の救済制度 第4回 近世の救済制度 第5回 前近代日本の救済の特色 第6回 幕末維新期の公的救済と慈善事業 第7回 近代的慈善事業の成立 第8回 帝国国家の形成と感化救済事業 第9回 社会事業の胎動 第10回 社会事業の制度化と組織化 第11回 15年戦争と戦時厚生事業 第12回 戦後社会と社会事業 第13回 社会福祉の定着と拡大 第14回 高齢化社会と福祉 第15回 近現代日本の福祉政策の特色	
<b>事前事後学習</b>	
参考文献を読み、自らの問題意識を鮮明にする。	
<b>テキスト</b>	
新・日本社会事業の歴史 吉田久一 効草書房 2,400円	
<b>参考文献</b>	
池田敬正 『日本社会福祉史』 法律文化社 日本社会福祉思想史 吉田久一 川島書店	
<b>成績評価</b>	
授業への取組み等を総合的に勘案する。	

<b>授業科目名</b> 日本社会福祉史専門研究演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 山本尚友 (やまもと なおとも)	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> 社会福祉史を研究するためのスキルを習得し、それをもとに社会福祉史の研究をおこなう。	
<b>授業の概要</b> 日本社会は、島国という地理的条件に多くの歴史を経てきた社会で、西欧の影響のもとに近代化をとげた現在でも、この歴史が我々の思考や社会制度に大きな影響を与えている。社会福祉は人びとの生活に最も密着したものであることから歴史からの影響は特に大きく、それが様々な日本の福祉の形を作りだしているといえる。福祉の歴史を知ることは、現在の種々の課題の解決法にいたる意外な近道なのである。  歴史を研究するには、基本的なスキルを必要とする。この演習では、歴史研究のスキルを充分には習得していない学生を対象として、そのスキルの獲得をまず目指したい。  具体的には、基本的なツールとしての年表の作成方法。文書・史料を解読する上で、最低限必要な技能の習得。歴史研究に必須の史料をいかに効率よく探すかについての基礎的知識等々について、短期間のうちに学んでいく。  この基礎的な技術・知識の習得を通じて歴史を研究するとはどういうことかを、知ることができると思う。これを、基礎にして、実際の歴史研究に入っていこうと思う。	
<b>授業計画</b> 1年次 歴史研究の基礎的なスキルをつける訓練を主におこなう。  2年次 1年次での学習をもとに、研究を実際に行っていく。	
<b>事前事後学習</b> 授業の進行に応じて適宜指示する。	
<b>テキスト</b> 授業時に配布。	
<b>参考文献</b>	
<b>成績評価</b> 研究への取組み全体を対象に評価を行う。	

<b>授業科目名</b> 西欧社会福祉史専門研究	<b>単位数</b> <b>2 単位</b>
<b>担当教員名</b> 岡部造史（おかべ ひろし）	<b>開講期間</b> <b>秋学期</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>講義テーマ：フランス社会福祉史研究（16-19世紀）</p> <p>西欧社会福祉史においては、長らくイギリスがその歴史のモデルとされてきましたが、本講義ではフランスの社会福祉の歴史を取り上げ、イギリスとは異なるその内容と特徴を、近年の歴史学の成果に学びつつ、理解してもらうことを目標とします。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>本年度の講義では、近代主権国家が成立したアンシャン・レジーム期（16-18世紀）からおおよそ19世紀末までのフランス社会福祉の歩みを、時代背景とともに検討していきます。具体的にはアンシャン・レジーム期の貧民救済、フランス革命期の国家福祉構想の成立と挫折、19世紀の都市民衆を襲った「大衆的貧困」、そしてそれに対する公・私のさまざまな福祉実践などについて論じる予定です。</p>	
<b>授業計画</b>	
<p>第1回 序論</p> <p>第2回 西欧社会福祉史と歴史学</p> <p>第3回 前提①：西欧中世における慈善</p> <p>第4回 前提②：西欧中近世の貧困観の転換</p> <p>第5回 アンシャン・レジーム期の貧民救済</p> <p>第6回 フランス革命</p> <p>第7回 フランス革命と福祉</p> <p>第8回 19世紀の諸革命と政治体制の変転</p> <p>第9回 工業化と「大衆的貧困」</p> <p>第10回 19世紀の福祉実践①</p> <p>第11回 19世紀の福祉実践②</p> <p>第12回 19世紀の福祉実践③</p> <p>第13回 19世紀の福祉実践④</p> <p>第14回 19世紀の福祉実践⑤</p> <p>第15回 結論</p>	
<b>事前事後学習</b>	
<p>毎回の講義内容をよく復習し、わからない点は積極的に質問してください。</p> <p>なお、あらかじめ西欧の歴史に関する最低限の知識を習得しておくことが望ましいです。</p>	
<b>テキスト</b>	
テキストは特に指定しません。毎回講義用のプリントを配布する予定です。	
<b>参考文献</b>	
参考文献は、講義の中で適宜紹介します。	
<b>成績評価</b>	
レポート提出と平常点（出席状況・受講態度などを考慮）から評価する予定です。	

<b>授業科目名</b> 地域社会専門研究	<b>単位数</b> 2 単位
<b>担当教員名</b> 高木 亨 (たかぎ あきら)	<b>開講期間</b> 秋学期
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> 様々な災害・公害などから、地域がどのように復興していくのかを検討する。	
<b>授業の概要</b> 東日本大震災は広域的に多様な被害をもたらした。とくに福島県においては、地震・津波・土砂災害に加え、東京電力福島第一原子力発電所事故による放射能汚染という「原子力災害」が発生した。こうした「複合災害」から地域が復興するためにはどのようなプロセスが必要なのか。過去の災害・公害から学び、その復興プロセスを、受講生全員で検討していく。	
<b>授業計画</b> 第1回 様々な災害 第2回 災害の空間的整理 第3回 被害の地域差を考える 第4回 被災地との距離を考える 第5回 過去の災害復興（その1） 第6回 過去の災害復興（その2） 第7回 過去の災害復興（その3） 第8回 復旧と復興 第9回 東日本大震災とは 第10回 福島県の東日本大震災（その1） 第11回 福島県の東日本大震災（その2） 第12回 福島県の東日本大震災（その3） 第13回 公害と自然災害 第14回 災害からの復興と観光 第15回 復興プロセスのまとめ	
<b>事前事後学習</b> 東日本大震災や過去に発生した災害（例：雲仙普賢岳噴火災害など）・公害（例：水俣病事件など）など興味のある災害・公害について、被害概要や復興状況について調べておくこと。	
<b>テキスト</b> 授業内容に応じて紹介・適宜プリントを配付する。	
<b>参考文献</b> 福島大学 FURE 編『福島大学の支援知をもとにしたテキスト災害復興支援学』八朔社（2,160円）	
<b>成績評価</b> レポートおよび発表内容について総合的に評価する。	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
現代人権政策論専門研究	2 単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講期間</b>
大江正昭（おおえまさあき）	春学期
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
ジェンダーの視点から、女性の人権の歴史、結婚、セクハラ、DV、ポルノグラフィー、女性兵士問題、司法のジェンダー・バイアス等につき検討することによって、諸々の法現象、法律学及び我々自身に潜むジェンダー・バイアスを理解するとともに、今後の研究において、ジェンダー視点を生かすことができるようになることを目的とする。	
<b>授業の概要</b>	
現代人権論は、内外を問わず、解決を迫られている多様な問題に直面しており、それに対処するには、新たな視点に立った分析とそれに基づく人権政策論が求められているといえよう。	
例えば、国内では、性別役割分業意識に縛られる女性、正規・非正規に分断される労働者、多様な差別の下に置かれる外国人(特別永住者、研修生・実習生など)、アイヌの人々、しうがい者、ホームレス 等々、社会的弱者・マイノリティへの差別などの問題がある。	
世界レベルでは、国際的人権保障と一国的人権保障や国家主権との関係、その歴史的背景たる植民地支配・南北問題との関係なども、視野に入れるべき問題である。	
この授業では、ジェンダーの視点からいくつかの事項を取り上げ、そこでの人権保障の現状を明らかにするとともに、その改善・克服の体系的・計画的・継続の方策を探る。	
<b>授業計画</b>	
第1回	ガイダンス
第2回	ジェンダーとは何か フェミニズム論の歴史的展開の説明をした上で、ジェンダー概念が形成された意図と理論の現段階を確認する。
第3回	女性の人権の歴史・女性差別撤廃条約 近・現代の人権保障における女性の法的位置付けを概観した上で、女性差別撤廃条約の内容を確認する。
第4回	家族(婚姻・離婚)とジェンダー 欧米における家族のあり方の変化と対比しつつ、日本の家族における女性の状態を確認する。
第5回	同性婚 世界における同性婚の法制化の展開を確認しつつ、日本の今後を展望する。
第6回	軍隊とジェンダー：女性兵士問題 ジェンダー論最大の難題とされる女性兵士問題の世界的動向を踏まえ、自衛隊の現状を検討する。
第7回	政治とジェンダー 世界諸国における女性の政治参画政策を確認し、低参画度の日本の原因を探り、採るべき方策を考える。
第8回	司法とジェンダー・バイアス 法曹関係者のジェンダー・バイアスを、強姦罪の判決を中心に検討する。
第9回	セクシュアル・ハラスメント セクハラ概念形成の意義を確認の上、セクハラ防止対策のあり方を考える。
第10回	リプロダクティヴ・ヘルス/ライフ 人工妊娠中絶をめぐる考え方の違いを日本とドイツを中心に検討し、その自己決定権を考える。
第11回	ポルノグラフィー ポルノグラフィーを、女性への暴力とする立場を、表現の自由との関係を視野に入れつつ、考察する。
第12回	ドメスティック・バイオレンス(DV)問題 DVは親密圏での暴力であるが、恋人間を規制外とし、DV行為を処罰しない防止法の問題性を考える。
第13回	雇用とジェンダー 従前の結婚退職制などを踏まえた上で、その連続線上のものとしての賃金・昇進等の差別を考える。
第14回	男女共同参画とは何か、いまなぜ男女共同参画か 21世紀最重要の課題とされる男女共同参画だが、なぜ今その社会の実現が必要とされるのかを考える。
第15回	積極的改善措置及びワーク・ライフ・バランス(WLB) 男女共同参画政策の重要な方策とされる積極的改善措置、政策の究極の目的をしてのWLBを考える。

## **事前事後学習**

教科書の該当箇所又はレジュメ（事前配布）を必ず事前に読んでくること。授業で初めて聞いて理解できると考えないことです。事後は参考書等に基づいて、自分なりに講義を整理して下さい。自分の言葉で綴って身につくものと考えましょう。

## **テキスト**

辻村みよ子『概説 ジェンダー法』信山社、2013年

※授業計画の全項目があるわけありません。ない場合はレジュメで行います。

## **参考文献**

ジェンダー法学会編『講座 ジェンダー法』（全4巻）日本加除出版、2012年

辻村みよ子監『ジェンダー法・政策研究叢書』（全12巻）東北大学出版会、2005年

## **成績評価**

一方的な講義ではなく、一緒に考えていく授業を念頭に置いていますので、過程への参加度、発言等によって評価します。

<b>授業科目名</b> 現代人権政策論専門研究演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 大江正昭（おおえまさあき）	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>1 年次では、人権関係の論文を読むことを通じて、修士論文のテーマを絞り込んでいくとともに、必要な文献、資料を収集する。</p> <p>2 年次では、引き続き、修士論文のテーマに関する文献や資料を読み、先行研究の確認をするとともに、自己の研究の独自性を追究しつつ、修士論文を完成させる。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>この演習の主たる目的は、受講者が持っている漠然とした問題意識ないし興味を鮮明にし、過去及び現在の具体的な事象や問題に沿って具体化し、最終的に修士論文としてまとめるという作業を手助けすることである。大略、次のような手順である。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>各人の問題意識について徹底的に議論をし、問題意識の鮮明化をはかるとともに、関連する内外の文献を読み、これまでの研究を確認し、各人が究明すべき具体的な課題を設定する。</li> <li>究明すべき課題の具体化、いわゆる章立てを行い、各章、節等で明らかにすることの概要を確認する。ここまでくれば、あとは、各章、節等の概要を正規の文章に仕上げるのみである。</li> </ol> <p>なお、この手順は、何度も繰り返されるとともに、ジグザクな過程であることはいうまでもない。</p>	
<b>授業計画</b>	
<p>1年次</p> <p>各人の問題意識について徹底的に議論することによって、問題意識の鮮明化を図るとともに、関連する内外の文献を読み、これまでの研究を確認し、各人が究明すべき課題を確認・設定する。</p> <p>2年次</p> <p>究明すべき課題の具体化、いわゆる章立てを行い、各章、節等で明らかにすることの概要を確認する。この確認を踏まえて、各章、節等の概要を正規の文章に仕上げる。</p>	
<b>事前事後学習</b>	
<p>全体としていえば、「授業の概要」と「授業計画」に沿って、論文作成のための日常的な研究活動を行うことである。具体的には、演習には、テーマに関する問題意識を整理して臨み、演習後には、演習で討論又は指摘された点（特に問題点）について整理し、指示された文献を必ず読み、論文へ反映させることである。</p>	
<b>テキスト</b>	
なし。	
<b>参考文献</b>	
適宜指示する。	
<b>成績評価</b>	
提出された論文で評価する。	

<b>授業科目名</b> 福祉臨床と心理学専門研究	<b>単位数</b> 2 単位
<b>担当教員名</b> 山崎史郎（やまざき しろう）	<b>開講期間</b> 秋学期
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> 現代臨床心理学と福祉臨床の焦点	
<b>授業の概要</b> 我が国の現代臨床心理学の最新テキストである、丹野義彦著『臨床心理学』（有斐閣 2015）を講読する。テキストは平易な文章で、しかも詳しく書かれている。社会福祉領域の大学院生が参考にする臨床心理学の図書として十分である。丁寧に読んでいき、その思想や背景も理解する。不明な点は、担当者が解説する。各自テキストを用意して、内容を理解しておくこと。 これらの知識を援用しながら、「福祉臨床」の概念で捉えられる諸問題の、具体的個人や家族、組織、地域に関連するトピックスを適宜取り上げて、意見交換する。	
<b>授業計画</b> 第1回 授業の進め方。「福祉臨床」という概念 第2回 臨床心理学とは何か。エビデンスに基づく臨床心理学 第3回 パーソナリティ理論。臨床の基礎学としての心理学 第4回 臨床心理面接。臨床心理学的アセスメント 第5回 精神分析パラダイム。人間性心理学パラダイム。クライエント中心療法 第6回 学習理論パラダイム、認知理論パラダイム 第7回 さまざまなパラダイム。臨床心理学の現場 第8回 臨床心理学研究法。心理士の専門性と倫理 第9回 心理的障害の見取り図。うつの理解と支援 第10回 躍の理解と支援。社交不安症の理解と支援 第11回 パニック症の理解と支援。強迫症の理解と支援 第12回 統合失調症の理解と支援。パーソナリティ障害の理解と支援 第13回 身体の不調に関連する心理的障害の理解と支援 第14回 発達に関する障害の理解と支援。認知症の理解と支援 第15回 依存・嗜癖の理解と支援。講義のまとめ	
<b>事前事後学習</b> テキストを熟読しておくこと。予め提示した話題について、自身の感想をまとめておく。	
<b>テキスト</b> 丹野義彦ら 2015 『臨床心理学』 有斐閣 3,900 円	
<b>参考文献</b> 追って指示する。	
<b>成績評価</b> 授業での発表、意見交換の際の論点、表現力など、総合点による評価とする。	

<b>授業科目名</b>	<b>単位数</b>
福祉臨床と心理学専門研究演習	2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b>	<b>開講機関</b>
山崎史郎（やまざき しろう）	通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
児童福祉臨床と臨床心理学：心理学分野での論文作成の知識と技術の獲得	
<b>授業の概要</b>	
<p>心理学分野での論文作成には、研究法、データ処理に関する知識と技術、関連する文献の講読が欠かせない。何よりも出発点である問題意識が心理学研究の系譜にしっかりと位置付き、成果が期待できるものでなければならない。心理学の研究論文を作成するのが初めてという人を想定して、各人の関心あるテーマを題材に研究の進め方の実際を学んでいく。扱う範囲は「福祉臨床」の領域で、乳幼児期から青年期までの範囲の、発達・臨床心理学的支援に関連するものとしたい。</p>	
<b>授業計画</b>	
1年次	
<p>問題意識を洗練し心理学の研究の系譜に位置付けるため、各自の関心に関連する文献の講読から始める。併せて適切な研究法に関する知識を学び、資料収集の方法を確定していく。このような基礎の上で、研究テーマを心理学の概念で明確にすることを目標とする。</p>	
2年次	
<p>資料収集の計画、実際の収集作業、資料の分析とまとめ方を学ぶ。研究のステップごとに各人の作業内容を題材として具体的に助言する。</p>	
<b>事前事後学習</b>	
<p>参考文献に目を通してくること。授業中のやりとりをメモして後から振り返ると、貴重な省察の時間になる。</p>	
<b>テキスト</b>	
使用しない。	
<b>参考文献</b>	
その都度、指示する。	
<b>成績評価</b>	
修士論文の作成過程での教師とのコミュニケーション力も合わせて、総合的に評価する。	

<b>授業科目名</b> 地域福祉論専門研究	<b>単位数</b> 2 単位
<b>担当教員名</b> 高林秀明 (たかばやし ひであき)	<b>開講期間</b> 春学期
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
地域福祉の対象課題としての生活問題および社会政策の一環としての地域福祉の位置と役割に関する認識方法を理解し、制度のフレームと人々の生活・意識との相互関係を説明できる。	
<b>授業の概要</b>	
介在する社会制度との相互作用に着目した労働・生活の質的調査を通じて、人々の個人的・集合的アイデンティティと行為のロジックがどのように形成されているのかをみていく。その上で、社会保障・地域福祉の政策・制度とその哲学・運営に関する課題を、受講生にもレポート報告してもらいながら検討したい。	
<b>授業計画</b>	
第1回 地域福祉論研究の課題	
第2回 労働・家族生活の認識視点	
第3回 生活実態とロジック・アイデンティティの認識方法	
第4回 社会制度の介在と生活のロジック・アイデンティティの変容（生活保護世帯）	
第5回 社会制度の介在と生活のロジック・アイデンティティの変容（失業保険受給）	
第6回 社会制度の介在と生活のロジック・アイデンティティの変容（筑豊・大牟田）	
第7回 地域・文化と社会保護としての社会保障（沖縄県の離島）	
第8回 制度的フレームと地域福祉（Bo Rothstein に学ぶ）	
第9回 生活問題の地域性	
第10回 生活問題の地域性とその把握方法（熊本市での調査）	
第11回 生活問題の地域性とその把握方法（水俣市での調査）	
第12回 地域福祉の概念	
第13回 地域福祉の実践体系	
第14回 社会保障および地域福祉の制度・運営の課題	
第15回 まとめ	
<b>事前事後学習</b>	
いくつかの国内外の文献を使いますので、指示された箇所の要旨をまとめてくること。	
<b>テキスト</b>	
都留民子編、高林秀明他著『「大量失業社会」の労働と家族生活—筑豊・大牟田 150 人のオーラルヒストリー』大月書店、2012 年	
<b>参考文献</b>	
Bo Rothstein 1998 <i>Just Institutions Matter: The Moral and Political Logic of the Universal Welfare State (Theories of Institutional Design)</i> Cambridge University Press	
Jean-Claude Barbier 2013 <i>The Road to Social Europe:A contemporary approach to political cultures and diversity in Europe</i> Routledge/	
<b>成績評価</b>	
授業への取り組み（レポート報告等、50%）と期末レポート（50%）	

<b>授業科目名</b> 高齢者保健福祉論専門研究	<b>単位数</b> 2 単位
<b>担当教員名</b> 横山孝子（よこやま たかこ）	<b>開講期間</b> 秋学期
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
「生活者」の観点から高齢者を捉え、高齢者の多様な生活実態を基に分析し、老年期のウェルビーイングについて、自己の見解を構成できる。	
<b>授業の概要</b>	
世界的な高齢化が進展する中、WHOは2002年に「アクティブ・エイジング」を提唱した。アクティブ・エイジング・アプローチは、高齢者的人権の尊重と、自立・参加・尊厳・ケア・自己実現に関する国際連合原則に基づいている。高齢者が生活者として年齢を重ねても、自立し活動的でいられるようにするには、どのような政策設計、ケアが求められるのか、受講生の研究領域と関連づけながら多角的に検討する。	
<b>授業計画</b>	
第1回 科目ガイダンス・進め方の検討	
第2回 誕生から死までのウェルビーイング	
第3回 超高齢未来の姿と課題	
第4回 長寿時代の理想の生き方・老い方	
第5回 生活者としての高齢者の生活課題（高齢者の住まい）	
第6回 生活者としての高齢者の生活課題（高齢者と移動）	
第7回 生活者としての高齢者の生活課題（高齢者の暮らしとお金）	
第8回 生活者としての高齢者の生活課題（高齢者の暮らしを支える資源）	
第9回 生活者としての高齢者の生活課題（認知・行動障害への対応）	
第10回 生活者としての高齢者の生活課題（人生と生命に関わる選択）	
第11回 生活者としての高齢者の生活課題（老化の理解とヘルスプロモーション）	
第12回 超高齢社会と社会保障	
第13回 高齢者と法（自己決定と本人保護）	
第14回 高齢者の生活を支援する保健・福祉人材	
第15回 まとめ	
<b>事前事後学習</b>	
高齢者に関する書籍、雑誌、新聞記事等に目を通し、関心を深めておく。	
<b>テキスト</b>	
・東京大学高齢社会総合研究機構編著『東大がつくった確かな未来視点を持つための高齢社会の教科書』 ベネッセコーポレーション、2013. 1,800 円	
<b>参考文献</b>	
・金井一薰『ケアの原形論』現代社、2011. 1,800 円 ・金井一薰『ナイチンゲール看護論・入門』現代社、2000. 1,650 円 ・広井良典『ケアを問い合わせなおす』ちくま書房、2011. 780 円	
<b>成績評価</b>	
担当レポート作成・報告への取り組み及び発表内容、討論への参加状況等を基に総合評価。	

<b>授業科目名</b> 高齢者保健福祉論専門研究演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 横山孝子（よこやま たかこ）	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>本演習では、高齢者の保健福祉に関して、多岐にわたる受講生の関心や研究テーマを題材に、関連する領域の基礎的文献や専門的文献を精読、共有することを目指したい。その上で、各自の研究テーマを確定し、文献探索の方法、研究の進め方を理解しつつ、それぞれに関連する文献等を基に研究報告及び共同討議を行う。必要時は、フィールドワークの導入も検討予定である。</p> <p>最終的には、修士論文の完成に向け研究指導を深め、研究成果の進展を図りたい。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>WHOが提唱した（2002年）「アクティブ・エイジング」の考え方に基づき、多様な視座から高齢者の生活を捉え、生活課題に応じた「ケア」の在り方を院生各自の研究課題と関連づけながら多角的に検討する。</p>	
<b>授業計画</b>	
<p>1年次</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 各自の研究課題の設定及び研究計画書を作成し、計画的に進める。</li> <li>2) 研究課題に関する基礎的文献の探索、文献講読に集中し、文献リストの作成と同時に研究領域に対する理解を深める。</li> </ol> <p>2年次</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 修士論文の作成に向けて、論文執筆に伴う指導、助言を行う。</li> <li>2) 必要に応じて、研究発表に伴う指導、助言を行う。</li> </ol>	
<b>事前事後学習</b>	
高齢者や保健福祉に関する文献、新聞記事等に関心を深め、講読する姿勢を養っておく。	
<b>テキスト</b>	
履修者状況を見て、後日指示する。	
<b>参考文献</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・東京大学高齢社会総合研究機構編著『東大がつくった確かな未来視点を持つための高齢社会の教科書』 ベネッセコーポレーション、2013. 1,800円</li> <li>・金井一薰『ケアの原形論』現代社 1,800円</li> <li>・広井良典『ケアを問い合わせなおす』ちくま書房 780円</li> </ul>	
<b>成績評価</b>	
担当レポート報告への取り組み及び発表内容、討論への参加状況を基に総合評価。	

<b>授業科目名</b> 西欧社会福祉史専門研究演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 岡部造史（おかべ ひろし）	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> 西欧社会福祉史に関する修士論文の作成を目標とする。	
<b>授業の概要</b> 西欧社会福祉史に関する修士論文作成に向けて参加者には研究発表をしてもらい、それに対して教員を中心に研究指導をおこなう。また、西欧社会福祉史、西洋史などに関する西欧語文献・日本語文献の講読や発表・討論なども随時実施する予定である。	
<b>授業計画</b> <b>1年次</b> ①修士論文作成の進め方についての指導 ②研究テーマの設定 ③西欧社会福祉史に関する基本文献・重要文献の講読 ④研究テーマに関する先行研究の整理 ⑤研究テーマに関する史料の探索 ⑥修士論文で扱う具体的なテーマと問題の設定  <b>2年次</b> ①修士論文作成の進め方についての指導 ②修士論文の具体的なテーマに関する史料・文献の理解 ③修士論文の内容についての発表 ④修士論文の執筆	
<b>事前事後学習</b> 西欧社会福祉史という性格上、西欧の言語で書かれた文献や史料を読む準備をしておくこと。また発表の際に指摘されたことは各自で十分に考えてその後の作業に生かすこと。	
<b>テキスト</b> 特に指定しない。	
<b>参考文献</b> 演習において適宜紹介する。	
<b>成績評価</b> 参加者の発表・討論を中心に総合的に評価する。	

<b>授業科目名</b> <b>社会福祉学・福祉環境学方法論専門研究</b>	<b>単位数</b> <b>2 単位</b>
<b>担当教員名</b> 豊田謙・宮北・花田・高林・豊田直・守弘 中地・岡部・下地・橋本・堀・仁科・横山	<b>開講期間</b> <b>春学期</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> 大学院における研究の方法の基本と実践的技法について習得する。	
<b>授業の概要</b> この授業は、「大学院における学問への誘い」として展開されます。近年、大学院では、大学院生として学び研究することに充分な主体性を確立できず、受け身なままで院生生活を終える学生がまれではなくなります。そこで、学問することの面白さ、醍醐味を伝えたいと考えました。基本的には、担当する教員それぞれの先生方の研究の軌跡を語っていただきながら、学問への誘いをし、それを通して、大学院において研究することの意味・方法を伝えるというものです。 研究の方法と実践的技法についての数回の授業の後、各教員が修士課程で研究することの意味を、自分自身の経験を踏まえて語り、研究者としての修業の意味やまたそれぞれの学問の分野と方法論を語ります。	
<b>授業計画</b> 下記の授業計画は予定であり、日程は変更される可能性があります。 授業開始日に詳細をお伝えします。	
第1回 担当者全員によるイントロダクション	
第2回 宮北隆志 大学院における研究の方法と実践的技法 (1) 情報収集・整理の基本	
第3回 花田昌宣 大学院における研究の方法と実践的技法 (2) 図書館活用と読書ノート作成	
第4回 豊田謙二 大学院における研究の方法と実践的技法 (3) 研究レビュー作成と論文執筆	
第5回 高林秀明 (地域福祉論) 世界への視野を、人間へのまなざしを (聖アウグスティヌス)	
第6回 豊田直二 (環境生命学/生物学) 生物学・環境生命学の基本と発表	
第7回 守弘仁志 (ソーシャルワーク リサーチ) 地域社会の調査の実際 離島調査を例に	
第8回 中地重晴 (環境化学/ 環境マネジメント論) 環境問題解決のための方法 温暖化と化学物質	
第9回 岡部造史 (西洋史) 西洋史学からみた福祉の問題	
第10回 下地朋友 (精神保健福祉学／医療人類学) 臨床哲学：生命・主体・現実：研究方法の以前	
第11回 橋本公雄 (運動・スポーツ心理学) ウェルネスとハイ・パフォーマンスの心理 運動・スポーツを通して	
第12回 堀 正嗣 (障害学) 障害学の方法とは何か	
第13回 仁科伸子 (社会福祉学) 学術論文の組み立てと研究方法論 量的研究と質的研究	
第14回 横山孝子 (社会福祉学) 高齢者の保健福祉領域における人材養成の歩み	
第15回 豊田謙二 まとめ	
<b>事前事後学習</b> 自らの研究テーマに沿って講義内容を整理し、様々な課題へのアプローチの方法について考察する。	
<b>テキスト</b> なし、 授業の際に資料を配布します。	
<b>参考文献</b> 授業中に指示します。	
<b>成績評価</b> 授業への参加、レポートなどを総合的に評価する。	

<b>授業科目名</b> ソーシャルワーク・リサーチ専門研究	<b>単位数</b> <b>2 単位</b>
<b>担当教員名</b> 守弘仁志（もりひろひとし）	<b>開講期間</b> <b>春学期</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
論文作成に必要な社会調査の各種方法とその的確なデータ解釈ができるようにする。	
<b>授業の概要</b>	
<p>本講義では社会福祉学に必要不可欠な社会調査法の知識の習得を念頭に置き、社会調査の歴史と現在の理論的状況について解説をした上で、社会調査の目的と実際に社会調査を展開する際に必要な実施手順などについても講義を行っていく。まずは各履修者の持つ問題意識から適切な調査方法の選択、調査仮説の設定、具体的な調査票の質問の構成、等を考慮しつつ、最終的に調査結果をどのように解釈するのかを考えてゆく。さらにその上で現在の社会福祉学を習得する上で欠かすことのできない、調査データを解析し理論化していく方法を学んでゆく。「社会調査論」という論的研究とともに、ソーシャルワークの実践的な現場に即した調査法研究もおこなう。大学院の研究であるのでデータ処理法などは各自で修得することとし、データ解釈などの論的研究に重きを置く予定である。また、講義のみではなく一定の時間を履修者の議論にあてて理解を深めることとする。</p>	
<b>授業計画</b>	
第1回 ソーシャルワーキングの意味 第2回 社会調査の歴史的展開 第3回 社会調査におけるデータ解釈 第4回 データからの理論化 第5回 周辺資料の収集 第6回 仮説の構成 第7回 調査票の作成における注意点 第8回 量的調査における注意点 第9回 質的調査における注意点 第10回 KJ 法と GTA 第11回 調査結果の論文化と公開 第12回 調査と現実 第13回 フィールドワークからの現実の再構成 第14回 調査の倫理 第15回 方法としてのソーシャルワーキング	
<b>事前事後学習</b>	
指定されたテキスト、資料を事前に読み議論での論点を整理しておく。講義での各自の議論を後で整理して自分の調査研究に役立てる。	
<b>テキスト</b>	
佐藤健二 山田一成編著 『社会調査論』 八千代出版 2,600 円	
<b>参考文献</b>	
原純輔 海野道朗 『社会調査演習』 東京大学出版会、その他最新の文献をその都度指示する。	
<b>成績評価</b>	
授業内での各自が行った議論での発言による講義の理解（平常点 50%）と最終レポート（50%）	

<b>授業科目名</b> <b>福祉環境学フィールドワークⅠ (水俣地域・不知火海、実地調査・ワークショップ)</b>	<b>単位数</b> <b>2単位</b>
<b>担当教員名</b> <b>宮北・花田・下地・守弘・中地</b>	<b>開講期間</b> <b>集中講義</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> 水俣学の方法をベースにおいていた社会認識から現地調査に至るまでの研究リテラシー(基礎的手法や方法)の習得を目的とする。	
<b>授業の概要</b> 授業は、水俣学および福祉環境学に関する基本的な理解を求めるためのセミナーを数回行い、その上で、水俣学の方法に従って、不知火海沿岸地域においてフィールドワークを実施する。受講生のバックグラウンド、研究テーマなどを考慮しつつ、臨地研修の詳細なプログラムは確定される。社会調査方法論専門研究と合わせて受講すること。(臨地研修の時期は、夏季休暇期間中を予定している。福祉環境学専攻の必修授業であるが、社会福祉学専攻の院生も履修可能である。)	
<b>授業計画</b> 第1回 準備セミナー (1) 第2回 準備セミナー (2) 第3回 不知火海沿岸臨地研修 第4回 不知火海沿岸臨地研修 第5回 不知火海沿岸臨地研修 第6回 不知火海沿岸臨地研修 第7回 不知火海沿岸臨地研修 第8回 不知火海沿岸臨地研修 第9回 不知火海沿岸臨地研修 第10回 不知火海沿岸臨地研修 第11回 不知火海沿岸臨地研修 第12回 不知火海沿岸臨地研修 第13回 不知火海沿岸臨地研修 第14回 まとめのセミナー (1) 第15回 まとめのセミナー (2)	
<b>事前事後学習</b> 半世紀以上にわたる水俣病事件史を、自らの視点で再構成することを意識して研修に臨む。	
<b>テキスト</b> 熊本学園大学水俣学ブックレット No.12『新版 ガイドブック 水俣を歩き、ミナマタに学ぶ』、熊本日日新聞社	
<b>参考文献</b> 『水俣学講義 第1集～第5集』、日本評論社	
<b>成績評価</b> 臨地研修への参加ならびにレポートにより評価する。	

<b>授業科目名</b> <b>生活環境論専門研究</b>	<b>単位数</b> <b>2 単位</b>
<b>担当教員名</b> <b>宮北隆志 (みやきた たかし)</b>	<b>開講期間</b> <b>春学期</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> 持続可能（サステナブル）な自然共生型の健康社会を市民／NPO・事業者・行政の協働によって実現するための基本理念と技術についての理解を深める。	
<b>授業の概要</b> 上記の基本理念と技術を、環境や保健・福祉の領域における具体的課題に適用してみるとことによって、それらの意義と限界について議論します。様々なセクターの構成員（ステークホルダー）が情報を共有し、社会的な合意形成とシナリオづくりのプロセスに参画し、新たな関係性の中で共に行動するための仕組みとしてのローカル・ガバナンスのあるべき姿を、生活者が抱える地域の課題にひきつけて考えてみたいと思います。一人ひとりの「つぶやき」や「想い」を「かたち」にできる、すべての生活者が安心して自分らしく生きることができる、そんな地域社会を実現するための地域でつくる生活福祉のあり方と、市民セクターが担う新たな公共性とは何かについて模索します。	
<b>授業計画</b> 第1回 イントロダクション 第2回 生活環境論の領域と概念モデル 第3回 めざすべき「豊かな生」とその規定要因について考える：資料・文献の紹介と解説 第4回 同・事例紹介と討論① 第5回 同・討論② 第6回 社会の「持続可能性」について考える：資料・文献の紹介と解説 第7回 同・事例紹介と討論① 第8回 同・討論② 第9回 「ガバメントからガバナンス」への転換について考える：資料・文献の紹介と解説 第10回 同・事例紹介と討論① 第11回 同・討論② 第12回 生命/生活の基盤としての「生物多様性と生態系サービス」について考える：資料・文献の紹介と解説 第13回 同・事例紹介と討論① 第14回 同・討論② 第15回 全体のまとめと討論	
<b>事前事後学習</b> 自らの研究テーマに沿って講義内容を整理し、考察すべき課題を設定する。	
<b>テキスト</b> 適宜指示する。	
<b>参考文献</b> 広井良典 (2009) 『コミュニティを問い合わせる』、宇沢弘文 (2000) 『社会的共通資本』など	
<b>成績評価</b> 授業への参加状況、発表、並びにレポートなどによって総合的に評価する。	

<b>授業科目名</b> 生活環境論専門研究演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 宮北隆志（みやきたたかし）	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>持続可能（サステナブル）な自然共生型の健康社会を市民／NPO・事業者・行政の協働によって実現するための基本理念と技術について学び、生活者の視点に基づいた研究テーマの設定、研究デザインの作成、具体的な研究方法の検討、データ収集、データの解析と考察を計画的に行い、論文としてまとめる技術を習得する。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>持続可能（サステナブル）な自然共生型の健康社会を市民／NPO・事業者・行政の協働によって実現するための基本理念と技術について学び、環境や保健・福祉の領域における具体的課題に適用してみるとよって、それらの意義と限界について議論します。様々なセクターの構成員（ステークホルダー）が情報を共有し、社会的な合意形成とシナリオづくりのプロセスに参画し、新たな関係性の中で共に行動するための仕組みとしてのローカル・ガバナンスのあるべき姿を、生活者が抱える地域の課題にひきつけて考えてみたいと思います。一人ひとりの「つぶやき」や「想い」を「かたち」にできる、すべての生活者が安心して自分らしく生きることができる、そんな地域社会を実現するための地域でつくる生活福祉のあり方と、市民セクターが担う新たな公共性とは何かについて模索します。</p>	
<b>授業計画</b>	
<p>1年次</p> <p>文献やwebでの検索を積極的に行い、我々の生活に密接に関連した環境や生態系を取り巻く問題に触れるチャンスができる限り持つようとする。机上での考察だけではなく、フィールドに出向きその現状を肌で感じ取り、当事者から直接ヒアリングをするように心がける。問題解決に向けて取り組みをしている国内や海外の環境NPO、企業、自治体などからの情報収集にも努める。</p> <p>2年次</p> <p>1年次における学習成果と現場経験をもとに、生活者の視点に基づいた研究テーマの設定、研究デザインの作成、具体的な研究方法の検討、データ収集、データの解析と考察を計画的に行い、論文としてまとめる技術を習得する。</p>	
<b>事前事後学習</b>	
<p>日刊紙（地元紙、並びに、全国紙）、研究テーマに沿った学会/学術雑誌、新刊書などを積極的に読みこなし、指導時に論点の整理と今後の議論に向けた問題提起を行う。</p>	
<b>テキスト</b>	
適宜指示する。	
<b>参考文献</b>	
適宜指示する。	
<b>成績評価</b>	
授業への参加状況、発表、並びにレポートなどによって総合的に評価する。	

<b>授業科目名</b> <b>環境マネジメント論専門研究</b>	<b>単位数</b> <b>2 単位</b>
<b>担当教員名</b> <b>中地重晴 (なかち しげはる)</b>	<b>開講期間</b> <b>春学期</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
日本の環境問題の現状を把握し、環境政策・環境マネジメントのための課題について考えます。	
<b>授業の概要</b>	
<p>21世紀も十数年が過ぎました。進行する地球環境問題の解決のためにブラジルで地球サミットが開かれてから20年が経過しました。人類は地球環境問題を解決することができたのでしょうか。2002年に南アフリカで開催されたWSSD（持続可能な発展のための世界首脳会議）では、「化学物質による人の健康と環境への悪影響を最小化する」という2020年目標が決議されました。日本の環境問題の現状を把握するとともに、2020年目標を達成するために必要な環境リスク低減のための国際的な政策、環境マネジメント技術について学びます。あわせて、予防原則、代替原則など国際的に用いられている手法を日本でも取り込むことができるのか、日本の課題について考えます。あわせて、放射性物質と化学物質と同じ手法で、環境中で管理できるのかについても考えます。</p>	
<b>授業計画</b>	
第1回 オリエンテーション 環境マネジメント論専門研究の進め方	
第2回 地球環境問題解決のための環境マネジメントと国際条約 アジェンダ21	
第3回 地球温暖化の現状と地球温暖化枠組み条約	
第4回 国際的な化学物質管理政策と国際的な制度 (GHS, PRTRなど)	
第5回 国際的な化学物質管理の現状 (EUのREACH制度、予防原則、代替原則など)	
第6回 水銀規制に関する水俣条約と日本の課題	
第7回 日本の地球温暖化の現状と課題	
第8回 日本の大気環境の現状と課題	
第9回 日本の水環境の現状と課題	
第10回 日本の土壤環境の現状と課題	
第11回 日本の廃棄物処理の現状と不法投棄、課題	
第12回 PRTR制度と環境モニタリングの現状と課題	
第13回 第4次環境基本計画とSAICM国内実施計画	
第14回 福島原発事故による放射能汚染と環境政策との関係、課題	
第15回 まとめと今後の研究への展望	
<b>事前事後学習</b>	
環境問題は刻々と変化します。普段から新聞、テレビのニュース欄で、現状を把握してください。	
<b>テキスト</b>	
平成27年度版環境・循環型社会・生物多様性白書 (ぎょうせい) (春学期の場合)	
平成28年度版環境・循環型社会・生物多様性白書 (ぎょうせい) (秋学期の場合)	
<b>参考文献</b>	
欧州環境庁他『レイト・レッスンズ14の事例から学ぶ予防原則』、七つ森書館、2005年、2,800円+税	
<b>成績評価</b>	
出席状況、意見発表、レポート等を総合的に評価する。	

<b>授業科目名</b> <b>社会政策専門研究</b>	<b>単位数</b> <b>2 単位</b>
<b>担当教員名</b> <b>花田昌宣 (はなだ まさのり)</b>	<b>開講期間</b> <b>春学期</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
社会政策学の方法的視点と分析手法を学び、社会福祉政策の現代的課題について自らの見解をもつこと。	
<b>授業の概要</b>	
<p>社会政策は伝統的に広い意味での労使関係論と社会保障論に分けられます。いずれの分野においても社会を構成する主体の生活、労働に関わる制度ならびに国家の政策を論ずるものです。本大学院では社会福祉政策学として社会政策学の応用的領域にかかる講義をしていきます。講義の主要な基調は、広い意味での福祉国家の形成と限界、およびその理論的根拠ですが、前半部分で、社会政策の基礎として、社会認識と学問のあり方をテーマに、社会科学の方法に関わる基礎を学び、後半では福祉国家とその危機の現在をテーマにして、さまざまな課題を取り上げていきます。また、障害者の労働、水俣病、開発途上国と社会福祉政策、差別の構造と歴史、社会的排除と社会的企業に関する海外調査など私の進行中の研究を、講義参加者とともに議論したいと考えております。昨年度も同様に、進めていきましたが、本年度取り上げるテキストや論者は新しくなります。受講者の関心やバックグラウンドに応じて下記の授業計画に示すテーマは変更されることがあります。</p>	
<b>授業計画</b>	
<p>第1回 社会政策学概要および本講の説明</p> <p>第2回 社会科学と社会政策</p> <p>第3回 社会政策の方法</p> <p>第4回 社会的経済とはなにか</p> <p>第5回 社会的経済と障害者の就労</p> <p>第6回 生活困窮者自立支援施策の現実と課題</p> <p>第7回 フランスにおける社会的経済（1）社会経済連帯法と生活困窮者支援施策</p> <p>第8回 フランスにおける社会的経済（2）障害者の就労と社会的企業</p> <p>第9回 社会的経済の視点から見たハンセン病：国際的視点</p> <p>第10回 差別の構造としてのハンセン病隔離施策</p> <p>第11回 社会政策学と水俣病</p> <p>第12回 福祉国家論の射程</p> <p>第13回 低開発国における社会政策</p> <p>第14回 人権保障としての社会政策学</p> <p>第15回 総括討論</p>	
<b>事前事後学習</b>	
事前に指示された文献を学習し、授業での討論に備える。授業後のフィードバックはその次の授業で行う	
<b>テキスト</b>	
なし	
<b>参考文献</b>	
講義中に文献を指示するとともにコピーを配布する。	
<b>成績評価</b>	
授業における報告、課題を通して成績評定を行う。	

<b>授業科目名</b> 社会政策専門研究演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 花田昌宣 (はなだ まさのり)	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
<p>修士論文の完成が最終の到達目標である。それに向けて各年次ごとに研究報告やレポートの発表を課する。</p> <p>テーマは社会政策学の応用分野としての障害者問題や社会保障施策、水俣学である。</p>	
<b>授業の概要</b>	
<p>【社会政策学に基礎を置く水俣学および障害学の構築】</p> <p>福祉国家の危機の中で福祉国家体制、経済・社会・政治を連関づける構造も大きく変容を遂げつつある。それは、現下の労働法制や社会保障分野における大きな改革、さらには生活困窮者自立支援策や福祉人材の確保など福祉関連法制の改革などにあらわれており、社会政策・社会福祉政策にかかわる領域における地殻変動が起きているといえよう。この転換の意味を、歴史的視点ならびに制度分析アプローチによって明らかにすることが、21世紀への社会政策の展望を開く基礎となる。そこから、水俣学や障害学などへの新たなアプローチも可能となる。</p> <p>本演習は、各人が研究主題をもって進める研究のホームグラウンドとなるのであるが、それは上記のような時代認識と体制転換への視角があつてはじめて可能になるものである。</p> <p>本講においては、これらの点に関する学問的な基礎を築くことを課題とし、学問的手法も含めた方法論ならびに社会政策学上の現代的な課題に関して演習をすすめる。その際、私のこれまでの研究の経験を受講生に伝授していきたいと考えている。</p>	
<b>授業計画</b>	
<p>1年次 年度初めに、各人の研究計画を策定し、それに基づいてすすめていきます。原則的には、演習参加者の報告をベースに、研究指導を行います。研究の進捗状況に応じて、フィールド調査を組織したり、私の研究調査に参加していただいたいります。一年次は研究技法、研究課題の設定と絞り込みなど修士論文の基礎となることを学びます。この演習では、一年次・二年次合同で行い集団的な討論を通して研究を進めています。</p> <p>2年次 二年次は修士論文の完成に向けて、研究報告、執筆指導を行います。</p> <p>演習という研究のホームグラウンドで、受講生の報告をベースに集団的な討論をしながら進めています。</p>	
<b>事前事後学習</b>	
受講生の研究発表に基づき授業が進められるので、その準備をして授業に望み、授業後はそのフィードバックを各自行い、研究ノートの作成を行う。	
<b>テキスト</b>	
使わない。必要文献は授業中に適宜指示する。	
<b>参考文献</b>	
授業中に指示する。	
<b>成績評価</b>	
授業中の報告やレポート等に基づき総合的に評価する。	

<b>授業科目名</b> 環境生命学専門研究	<b>単位数</b> 2 単位
<b>担当教員名</b> 豊田直二（とよた なおじ）	<b>開講期間</b> 秋学期
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
授業の到達目標：老化とアルツハイマー病について生命科学的に説明できる テーマ：老化と生命化学	
<b>授業の概要</b>	
<p>高齢社会となった日本では、社会福祉においても細胞生物学、分子生物学の研究が不可欠です。現在老化は体の酸化、ミトコンドリアの問題とも言われるようになりました。アルツハイマー病に関わる遺伝子も発見されています。</p> <p>また長寿遺伝子（饑餓遺伝子、サーチュイン遺伝子）も発見され、高齢者でありながら若々しく元気な生活を送ることも可能になってきました。さらにクローン技術、幹細胞、iPS 細胞もさかんに研究されています。このような技術を使った再生医療から老化に対する概念も変化することが考えられます。この講義では先端的な科学を学び、将来の福祉にどのような進歩があるのかを話し合います。</p>	
<b>授業計画</b>	
第1回 iPS 細胞とは（英文和訳） 第2回 老化とは 第3回 不老不死の夢 第4回 クローン動物とは 第5回 クローン動物の夢 第6回 人間の脳について 第7回 老化の生物学（老化なぜ起こる） 第8回 老化の生物学（寿命いかに決まる） 第9回 老化の生物学（古いの意味） 第10回 認知症とは 第11回 アルツハイマー病とは 第12回 加齢とたばこ・物質との関係は 第13回 アルツハイマー病の分子生物学 第14回 アルツハイマー病は治せるか 第15回 総合討論	
<b>事前事後学習</b>	
テキストを予習し、理解できない部分をチェックする。	
<b>テキスト</b>	
人はどうして老いるのか・田沼靖一・筑摩書房、その他適宜資料を配布	
<b>参考文献</b>	
隨時指示	
<b>成績評価</b>	
レポート、出席状況	

<b>授業科目名</b> 環境生命学専門研究演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 豊田直二（とよた なおじ）	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
授業到達目標：老化と生命化学について説明および調査ができる テーマ：将来の社会福祉	
<b>授業の概要</b>	
<p>1) この演習では日本の高齢社会、社会福祉、介護、高齢者の健康維持という立場から筋に関する生物学的な性質を追求しています。筋力は老化と共に弱まり、手足の運動に支障が出てきます。老化という理由でなくても様々な原因で筋運動に障害があり、自由に体を動かせなくなることもあります。このようなことから、当演習では筋の収縮、筋原線維形成および筋細胞の形態形成などに関し、細胞生物学的立場から追求しています。また骨格筋は様々な代謝やホルモンに関係していることが報告され、この演習でさらに深く追求します。</p> <p>2) 社会福祉においても細胞生物学、分子生物学という先端的学問が不可欠です。老化は体の酸化（サビ）とも言われるようになりました。アルツハイマー病に関わる遺伝子も発見されています。また長寿遺伝子（饑餓遺伝子、サーチュイン遺伝子）も発見され、この遺伝子を活性化することにより高齢者も若々しく元気な生活を送ることも可能になってきました。筋肉の活動も長寿遺伝子に関わっています。さらに iPS 細胞も将来、実用化されるでしょう。このような先端技術の進歩から、老化に対する概念も変化することが考えられます。この演習では先端的科学を背景とした将来の福祉に対する効果、経済効果にどのような影響があるかについて追求します。</p>	
<b>授業計画</b>	
1年次 テーマの打ち合わせ。これまでの国内外における論文の読解。テーマの決定。 研究へのアプローチまでの検討。調査および実験の開始。 研究内容の検討。方針転換も含めたこれまでの過程の再検討。 これまでの国内外における論文の調査、実験方法を調べてみる。 再調査および再実験の開始。 調査および実験結果の発表とこれからの方針の検討。	
2年次 論文作成へ向けて国内外の論文の調査。 論文作成へ向けての調査および実験。 結果の発表とこれからの方針の検討。 これまでの調査・実験の結果と論文作成への検討。 結果と国内外の論文を比較検討。新しいものはあるか。 論文作成。	
<b>事前事後学習</b>	
大学教養レベルの生物学は理解しておくこと	
<b>テキスト</b>	
東京大学生命科学教科書編集委員会「生命科学」洋土社 人はどうして老いるのか・田沼靖一・筑摩書房 人は何歳まで生きられるか・杉本正信・新書館など。	
<b>参考文献</b>	
東京大学生命科学教科書編集委員会「生命科学」洋土社 人はどうして老いるのか・田沼靖一・筑摩書房 人は何歳まで生きられるか・杉本正信・新書館など。	
<b>成績評価</b>	
論文の作成と完成および研究への態度	

<b>授業科目名</b> 精神保健福祉学専門研究	<b>単位数</b> <b>2 単位</b>
<b>担当教員名</b> 下地明友 (しもじ あきとも)	<b>開講期間</b> <b>春学期</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> 精神医療保健福祉全体にわたる視野を深め広める。病いや障害を人間の生を基礎にして理解する。	
<b>授業の概要</b> 1. 医療・福祉・保健領域を横断する多次元性、多声性、多層性を身に付けるアプローチを学ぶ。 2. 医療人類学的方法、エスノグラフィーの方法、物語論の方法を学ぶ。 3. 制度分析、統治性の研究、政治・経済と精神、社会的苦悩（ソーシャル・サファリング）、歴史と病いとの係わりの分析を極める。	
<b>授業計画</b> 第1回 病いと文化：治療文化論 第2回 制度（institution）と医療 第3回 苦悩論（1）：病いのリアリティ 第4回 苦悩論（2）：無痛文明論 第5回 場所（トポス）論（1） 第6回 場所（トポス）論（2）：リアルと幻想 第7回 身体論（1）：脳と身体 第8回 身体論（2）：身体の統治、身体の知 第9回 多元的医療システム論：病いの多元性 第10回 科学の知と臨床の知 第11回 宗教と臨床：シャーマニズム 第12回 精神医療の歴史 第13回 病跡学：病いと創造論 第14回 生と死をめぐる人類学 第15回 物語論	
<b>事前事後学習</b> 自らのテーマを広げる文献検索が重要	
<b>テキスト</b> その都度供覧	
<b>参考文献</b> その都度供覧	
<b>成績評価</b> 討議の質	

<b>授業科目名</b> 精神保健福祉学専門研究演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 下地明友（しもじあきとも）	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
研究テーマをより一層明確にする。テーマを深めるために他者との討議を繰り返すことによって、論文作成へつなげる。	
<b>授業の概要</b>	
<ol style="list-style-type: none"> <li>医療・福祉・保健領域の多次元性、多声性、多層性に視点を向ける多角的アプローチを学びつつ、テーマを言語表現することに邁進する。その言語表現は「厚い記述」を目指すことを学ぶ。</li> <li>医療人類学的方法やエスノグラフィー（民族誌）の方法、物語（ナラティヴ）の方法論を探求する。</li> <li>院生の研究テーマの深化を協働・討議で極める。</li> </ol>	
<b>授業計画</b>	
1年次	
<ol style="list-style-type: none"> <li>自らのテーマを深める</li> <li>研究ノート作成</li> <li>先行文献の探索とレビュー</li> <li>フィールドと自己との出会いを大切にする</li> </ol>	
2年次	
<ol style="list-style-type: none"> <li>論文作成</li> <li>討議の反復。テーマを更に深化させる</li> </ol>	
<b>事前事後学習</b>	
日常において常にテーマを追求し討議の場にもちこむ	
<b>テキスト</b>	
その都度提示。文献探索	
<b>参考文献</b>	
その都度提示	
<b>成績評価</b>	
討議、そしてその深化の程度。論文作成	

<b>授業科目名</b> ソーシャルワーク・リサーチ専門研究演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 守弘仁志（もりひろひとし）	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
ソーシャルワーク・リサーチの手法を自らの研究方法として習得できること。さらにそれによって自らの研究テーマに応用し、研究対象に対する理解を深めること。	
<b>授業の概要</b>	
ソーシャルワーク・リサーチの中でも、さまざまな社会調査方法について検討・研究する演習とする。統計調査の方法論、手法を検討するとともに、聞き取り調査も非指示的面接法（相手によって、状況によって、質問の順番や質問内容を変更したり、削除・追加しながら臨機応変に進める技法）、指示的面接法（全ての調査対象者に対して同じ順序で質問をする）などの方法を検討する。具体的には履修者の研究の進行に沿いながら、順次進めてゆくものとする。具体的には担当教員の実施している現地調査に同行し、インタビューを実施して質的に分析したり、量的調査を実施する際には、調査票を作成したりすること、さらにはその結果を客観性を持ったデータにし、結論を導くことから研究してゆきたい。	
<b>授業計画</b>	
1年次 まずは入学時の問題意識をもとに、修士論文作成の問題意識の確定と2年間での研究スケジュールを立てる。次に、関連文献の収集とその分析、さらに関連データの収集とその分析をおこなう。 収集した文献やデータの読解をその都度定期的に報告して見解を深める。研究の進行状況によっては予備的な調査（フィールドワーク等）を実施する。	
2年次 2年次は修士論文作成に向けた研究の進行に応じる。春学期は資料の収集、既存データの整理などをおこない、論文の仮説を確定する。 夏期休暇中に現地調査（聞き取り調査、調査票調査）をすることによって実査を行う。 このような経過をもとに秋学期は論文の作成を行う。	
<b>事前事後学習</b>	
自らの研究の進行状況を各回で報告できるように事前に準備する。報告において出された議論を事後整理して研究を深化させる。	
<b>テキスト</b>	
各自の研究上主要な文献をその都度指定する。	
<b>参考文献</b>	
その都度指示する。	
<b>成績評価</b>	
演習における研究の報告状況（40%）と最終的な研究の成果（60%）から評価する。	

<b>授業科目名</b> <b>福祉環境学フィールドワークⅢ (海外公害発生地域臨地研修)</b>	<b>単位数</b> <b>2単位</b>
<b>担当教員名</b> <b>宮北・花田・中地</b>	<b>開講期間</b> <b>集中講義</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
開發現象と環境破壊さらに健康被害と社会への影響に関して学際的なアプローチから調査研究するための手法と技術を習得する。	
<b>授業の概要</b>	
世界各地の公害発生地域を訪問し、現地の視察および調査を行う。担当教員および水俣学研究センターの研究員がメンバーに加わり、現地の NPO や研究者の協力を得て臨地研修を行うものとする。基本的な問題構成は、開發現象と環境破壊さらに健康被害と社会への影響に関して学際的なアプローチから調査研究するところにある。当然のことながらグローバル化が進んでいる現在、福祉環境学的な課題は、単に環境破壊のみならず、多国籍企業、国家および国連から地域社会および村落構造に至るまでが調査および分析の対象となる。対象地域として、今年度は韓国・亀尾地域をフィールドとし、夏期に 4泊 5 日程度の臨地研修を予定している。	
<b>授業計画</b>	
第1回 臨地研修事前準備セミナー（1）	
第2回 臨地研修事前準備セミナー（2）	
第3回 韓国・亀尾地域における臨地研修	
第4回 韓国・亀尾地域における臨地研修	
第5回 韓国・亀尾地域における臨地研修	
第6回 韓国・亀尾地域における臨地研修	
第7回 韓国・亀尾地域における臨地研修	
第8回 韓国・亀尾地域における臨地研修	
第9回 韓国・亀尾地域における臨地研修	
第10回 韓国・亀尾地域における臨地研修	
第11回 韓国・亀尾地域における臨地研修	
第12回 韓国・亀尾地域における臨地研修	
第13回 臨地研修事後検討セミナー（1）	
第14回 臨地研修事後検討セミナー（2）	
第15回 報告書作成	
<b>事前事後学習</b>	
国内における事例をもとに、環境汚染の発生から汚染サイトの修復までのプロセスを整理し、韓国・亀尾地域の事例と比較・検証する。	
<b>テキスト</b>	
なし	
<b>参考文献</b>	
準備セミナーにおいて指示する。	
<b>成績評価</b>	
研修参加ならびにレポートによる総合評価	

<b>授業科目名</b> 社会調査方法論専門研究	<b>単位数</b> 2 単位
<b>担当教員名</b> 中地・花田・宮北	<b>開講期間</b> 春学期集中
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
環境汚染、並びに、健康被害に関わる社会的困難に長年にわたり向き合ってきた地域を対象とする社会調査の技法を習得する。	
<b>授業の概要</b>	
<p>この授業は、福祉環境学フィールドワーク I（水俣・不知火海沿岸臨地研修）ないしIII（海外公害発生地域臨地研修）に参加するものを対象に開かれる。フィールドワークに参加するものは必ず受講すること。（Iだけ参加する者、IとIIIの双方に参加する者等は第一回目の授業で受講方法等を指示する。日程等詳細は追って掲示する。）</p> <p>受講生はそれぞれのフィールドワークに関して、事前学習、研修プログラムの作成過程に関与し、フィールドワーク終了後は、事後セミナー、報告書作成まで携わるものとする。</p> <p>なお、授業は、受講生および担当教員の日程を調整しつつ、土曜日午後に行う。また、それぞれのフィールドワークに関わるゲスト講義を2回程度予定している。</p>	
<b>授業計画</b>	
第1回 不知火海沿岸フィールドワーク準備講義：水俣学の方法と内容 第2回 不知火海沿岸フィールドワーク準備講義：水俣病事件史と現在の課題 第3回 不知火海沿岸フィールドワーク準備講義：不知火海沿岸地域の現状と課題 第4回 不知火海沿岸フィールドワーク準備講義：臨地研修プログラムの検討（1） 第5回 不知火海沿岸フィールドワーク準備講義：臨地研修プログラムの検討（2） 第6回 海外公害被害発生地域臨地研修準備講義：従前の研究サーベイ 第7回 同臨地研修準備講義：工場災害による環境汚染・健康被害の概要 第8回 同臨地研修準備講義：亀尾フッ化水素爆発事故による環境汚染・健康被害の原因究明過程 第9回 同臨地研修準備講義：亀尾フッ化水素爆発事故による環境汚染と地域コンフリクト 第10回 同臨地研修準備講義：亀尾フッ化水素爆発事故による環境汚染と環境修復のプロセス 第11回 同臨地研修準備講義：現地調査計画の検討（1） 第12回 同臨地研修準備講義：現地調査計画の検討（2） 第13回 フィールドワーク総括セミナー：参加者による報告 第14回 報告書作成の方法について（1） 第15回 報告書作成の方法について（2）	
<b>事前事後学習</b>	
不知火海沿岸地域、並びに、フッ化水素爆発事故について、各自テーマを設定して整理する。	
<b>テキスト</b>	
熊本学園大学水俣学ブックレット⑨『水俣からのレイトレッスン』（熊本日日新聞社）ほか、授業中に資料を配布する	
<b>参考文献</b>	
授業中に指示する。	
<b>成績評価</b>	
授業参加およびレポートにより評価する。	

<b>授業科目名</b> <b>環境生態学専門研究</b>	<b>単位数</b> <b>2 単位</b>
<b>担当教員名</b> <b>佐藤正典 (さとう まさのり)</b>	<b>開講期間</b> <b>集中講義</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
「環境問題」の生物学的な基礎について理解する。	
<b>授業の概要</b>	
<p>生物学の基礎知識や生態系における共生システムを学ぶことは、様々な「環境問題」の本質を考えるために重要である。ここでは、特に、海の生態系に焦点を当てる。まず、海洋環境の全体像について概説し、その中でひときわ高い生物生産力をもつ2つの場所（内湾・河口域とサンゴ礁）について詳しく述べる。人間を含む陸上の生態系も、これらの海の生態系と密接な関係があることを示す。特に、日本列島の沿岸海域は、生態系の豊かさにひときわ恵まれた場所であり、海の生態系がもたらす水産資源は、古代人にとて重要な食料であった。その生態系が人間の沿岸開発に急速に破壊されている現状を紹介する。また、核エネルギーの利用に伴う放射能汚染の問題を考えるための基礎的知識の習得もめざす。</p>	
<b>授業計画</b>	
内容、順番、時間配分は、受講生の状況に応じて、適宜変更される。	
1) 生物の多様性と進化の歴史 2) 海洋生態系の全体像 3) 热帯のサンゴ礁の生態系 4) 内湾・河口域の干潟の生態系 5) 干潟生態系の水質浄化作用 6) 干潟生態系と漁業の関係 7) 有明海における諫早湾干拓事業の問題 8) 干潟の底生生物の知られざる絶滅危惧種について 9) 原子力発電所が海の生態系におよぼす影響（特に温排水問題） 10) 放射線の生物への影響 11) 原子力発電所の日常運転に伴う放射能汚染の問題 12) 原子力発電所の事故に伴う放射能汚染の問題 13) チェルノブイリ原発事故の検証 14) 人間の環境侵害についての歴史からの教訓：イースター島などの文明崩壊 15) 海の生態系から見た水俣病問題	
<b>事前事後学習</b>	
参考文献から最低1冊は本を読むこと	
<b>テキスト</b>	
なし	
<b>参考文献</b>	
佐藤正典『海をよみがえらせる』 岩波ブックレット (560円) 加藤真『生命は細部に宿りたまう』 岩波書店 (1,800円) 本川達雄『サンゴとサンゴ礁のはなし』 中公新書 (840円) 石橋信義・名和行文（編）『寄生と共生』 東海大学出版会 (3,800円) （第10章：佐藤正典「海洋における共生システム：ゴカイ類を中心に」 pp.191-216） 佐藤正典『海の生物の子どもを殺し、海を温暖化する原子力発電所～川内原子力発電所3号機増設計画の問題点～』 南方ブックレット2「九電と原発」, pp.37-68. (1,000円)	
<b>成績評価</b>	
レポートによる。	

<b>授業科目名</b> ライフウェルネスと健康・スポーツ心理学専門研究	<b>単位数</b> <b>2 単位</b>
<b>担当教員名</b> 橋本公雄 (はしもと きみお)	<b>開講期間</b> <b>秋学期</b>
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
人の運動行動の心理的特性・状態および心理的過程を理解するとともに、どのようにして行動変容し、継続するか、その理論と方法について学ぶ。	
<b>授業の概要</b>	
ウェルネスプロモーションのための健康運動心理学の内容とスポーツ競技力向上に向けたスポーツ心理学の内容について講義する。健康運動心理学では、ウェルネスの概念を理解するとともに、その達成に向けた具体的方法を心理学の視点から講義する。特に、運動の継続化に向けた「快適自己ペース」という主観的な運動強度の理論と意義について論議する。スポーツ心理学では、競技パフォーマンス発揮の動機づけと、長期的運動・スポーツにおけるドラマチック体験とポジティブ特性の関係について講義する。	
<b>授業計画</b>	
第1回 履修ガイダンス 運動心理学研究とスポーツ心理学について	
第2回 ライフウェルネスとは（ウェルネスと健康の定義を提示し、ライフウェルネスの意味を理解）	
第3回 人間の欲求と成長（マズローの自己実現的欲求、チクセントミ・ハイのフローモデル）	
第4回 運動行動を説明・予測する理論・モデル	
第5回 運動継続の介入法としての運動継続化の螺旋モデル	
第6回 運動のメンタルヘルス効果とメカニズム	
第7回 感情とメンタルヘルスの測定尺度	
第8回 主観的・自己選択的運動強度としての快適自己ペース	
第9回 快適自己ペースの運動強度	
第10回 一過性運動にともなうポジティブ感情の変化	
第11回 長時間運動に伴うポジティブ感情の変化	
第12回 快適自己ペースと運動の継続	
第13回 競技パフォーマンス発揮のための動機づけ	
第14回 体験と経験（スポーツドラマチック体験とポジティブ特性）	
第15回 まとめ	
<b>事前事後学習</b>	
課題を課す。	
<b>テキスト</b>	
運動継続の心理学、橋本公雄・斎藤篤司（共著）福村出版	
<b>参考文献</b>	
身体活動の健康心理学（竹中晃二・橋本公雄監訳、大修館書店）、最新スポーツ心理学（日本スポーツ心理学会編、大修館書店）	
<b>成績評価</b>	
4回欠席は不可とする。授業態度、発表、レポートなどで総合評価する	

<b>授業科目名</b> ライフウェルネスと健康・スポーツ心理学専門研究演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 橋本公雄 (はしもと きみお)	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b> 研究課題を設定し、関連論文の文献検索、抄読、データ解析法をとおして修士論文を作成する。	
<b>授業の概要</b> ライフウェルネスやスポーツ競技パフォーマンスに関わる心理的要因、心理的特性、心理的過程を理解させるとともに、各人の研究課題に基づく調査データを用いて、データ解析法や論文作成法の指導を行う。特に、統計法に関しては SPSS プログラムパッケージが十分使えるよう基礎から多変量解析までの高度な統計法を習得させる。	
ライフウェルネスは健康・体力づくりに関わる諸問題を扱うので、健康心理学や運動心理学の視点から種々の健康行動（地域における健康づくり活動、体力向上のスポーツ活動や身体活動増強など）が如何に QOL 向上に繋がっていくのかを理解させる。また、スポーツ競技パフォーマンスに関しては、競技力向上に関わる内容をスポーツ心理学の視点から講義および指導を行う。いずれの内容においても、様々な心理的尺度を用いて実際に自己診断させながら理解を深めさせる。	
また、毎週研究会（Wellness & High Performance: WAHP）を開催し、この中で研究法に関してディスカッションしていく。	
<b>授業計画</b>	
1年次 ライフウェルネスおよびスポーツに関する研究課題を各自で設定し、関連論文を読ませるとともにパイロットスタディに着手させる。この過程の中で調査票の作成法、データの収集法、量的分析法など研究方法に関わる基本的なことを指導する。1年間で読んだ論文をまとめるために、研究課題に関する総説（レビュー）論文を執筆させる。	
2年次 1年次でのパイロットスタディの分析結果を踏まえ、研究方法を精緻化し、本調査・本実験を実施する。この過程の中で、データの処理の仕方に關して主に量的分析法など研究に関わるより高度な研究法を指導する。研究結果に関しては各種学会で発表を行うよう指導し、また、修士論文の作成に関して指導する。	
<b>事前事後学習</b> 課題を課す。	
<b>テキスト</b> 特になし、資料配布。	
<b>参考文献</b> 運動継続化の心理学（橋本公雄・斎藤篤司共著、福村出版）身体活動の健康心理学（竹中晃二・橋本公雄監訳、大修館書店）、最新スポーツ心理学（日本スポーツ心理学会編、大修館書店）	
<b>成績評価</b> 欠席 4 回は不可とする。授業態度、プレゼンテーション、レポートで評価する。	

<b>授業科目名</b> 環境マネジメント論専門研究演習	<b>単位数</b> 2年間を通じて8単位
<b>担当教員名</b> 中地重晴 (なかち しげはる)	<b>開講期間</b> 通年
<b>授業の到達目標及びテーマ</b>	
日本の環境問題の現状を把握するとともに、2020年目標を達成するために必要な環境政策、環境マネジメント技術について学びます。あわせて、予防原則、代替原則などを日本の環境政策に持ち込めるのか、日本の課題について考えます。	
<b>授業の概要</b>	
進行する地球環境問題の解決のためにブラジルの地球環境サミットから20年が経過しました。2002年に南アフリカで開催されたWSSDでは、「化学物質による人の健康と環境への悪影響を最小化する」という2020年目標が決議されました。日本の現状を把握したうえで、2020年目標を達成するために必要な環境政策、環境マネジメント技術と、予防原則、代替原則などEU等で実施されている先進的な環境政策について、日本での適合性を検討し、環境リスクの低減手法について考察します。	
<b>授業計画</b>	
1年次 代表的な環境問題解決のための事例を検討します。EU環境庁がまとめた「レイト・レッサンズ14の事例から学ぶ予防原則」とその続編を中心に輪読します。環境問題解決のために、何を教訓化すべきか議論します。地球温暖化及び化学物質管理に関する環境政策の考え方、現状、課題を文献やウェブサイト検索等から、情報収集し、検討します。 また、未解決、係争中の環境問題の現場に出かけて、関係者にヒアリングし、何が問題かを経験し、問題解決のための手法を検討します。	
2年次 1年次における学習成果と現場経験をもとに、2020年目標を達成するために必要な環境政策について、研究テーマを設定し、修士論文の作成に向けた研究報告と執筆指導を行います。 研究計画の作成、現状把握（データ収集）、課題の抽出（データ解析）、考察（解決手法の検討）を計画的に行い、論文にまとめていきます。	
<b>事前事後学習</b>	
環境問題は現在進行形で、進展しています。普段から新聞、テレビのニュース等で、各地の現状を把握してください。	
<b>テキスト</b>	
欧洲環境庁他『レイト・レッサンズ14の事例から学ぶ予防原則』、七つ森書館、2005年、2,800円+税 その他、必要文献は授業中に指示する。	
<b>参考文献</b>	
適宜指示する。	
<b>成績評価</b>	
授業への参加状況、発表やレポートなどによって総合的に評価する。	